

青いドームの向こうのウズ ベキスタン

シルクロードの記憶から2026年の変化と旅行実務まで

金京鎮 弁護士

序文

サマルカンドの夕暮れの光は、青いタイルの上で細かく分かります。遠くからは一つのドームに見えても、近くへ歩み寄れば何千もの小さな破片が見えてきます。ウズベキスタンも同じです。シルクロードという名一つだけで、この国のすべてを読み解くことはできません。

砂漠の下には金とウランが埋まっています。東の山から溶け出した雪解け水は、果樹園と綿花畑を潤します。首都の地下鉄駅には宇宙飛行士の星が輝いています。アラル海の干上がった底では、人々が塩混じりの風を防ごうと木を植えています。一つの国の過去と現在が、同じ時刻表の中で動いています。

この原稿は歴史書であり、旅行案内書でもあります。経済や技術も扱っています。ウズベキスタンを旅しようとする読者は、鉄道の切符や滞在登録について知ることができます。政策を学ぶ読者は、2026年の経済改革と世界貿易機関への加盟交渉の動向を確かめることができます。都市が好きな読者は、タシュケントの現代建築やブハラの煉瓦、ヒヴァの城壁に出会うことができます。

準備資料には豊かな物語と数多くの数値が盛り込まれていました。しかし、出典の所在がなかったり、計画をすでに完了した事柄のように記した箇所もありました。新たな原稿では、そうした文章をそのまま引き継ぐことはしませんでした。2026年2月22日から8月22日までに公開された政府、国際機関、研究機関、運営機関の資料を改めて確認しました。古い歴史に関する記述は、ユネスコや学術資料で裏付けました。

本文中の角括弧の番号は、巻末の参考文献へとつながっています。現在の政策や統計は、基準日以降に変更される可能性があります。ビザ、列車の時刻、航空手荷物、為替レートのように旅行当日に変わりうる情報は、出発前に公式画面で改めて確認する必要があります。

本書の最初の6章では、古の道を歩きます。次の6章では、改革、経済、環境、都市の現在を見つめます。最後の6章では、ブハラとヒヴァ、ヌクスとテルメズを通り、実際の旅の手すりを握ります。歴史はガラスの陳列ケースの中にとどまりません。切符を買い、道を尋ね、パンを分かち合う瞬間のたびに、再び動き出します。

この国をただ賛美するわけでも、欠点ばかりを数え上げるわけでもありません。高い成長率の傍らには物価や雇用の問題があります。新憲法の傍らには表現の自由をめぐる批判があります。観光客が増える都市には、保存と住民生活の間の緊張も生じます。明るい面と暗い面をともに並べてこそ、風景が平坦にならずにすむのです。

ウズベキスタンは海のない国です。しかし、道のない国ではありません。青いドームの下から出発した道は、砂漠や山、古い市場と新しいデータセンターを通り抜けていきます。さあ、その道を一章ずつ辿っていきます。

目次

序文

第I部 大地と歴史

第1章 中央アジアの心臓、ウズベキスタンとの出会い

第2章 シルクロード文明と国家象徴の現代的理解

第3章 古代文明の黎明と考古学的発掘

第4章 ソグド商人とアラブの到来、そしてイスラーム化

第5章 遊牧帝国の受難と融合

第6章 ティムール帝国とウズベク民族の誕生、そして近現代史

第II部 改革・経済・都市

第7章 国家改革と地政学的外交構図

第8章 革新経済と対外開放

第9章 社会の変化と韓国・ウズベキスタン協力

第10章 アラル海と気候危機、再生の試み

第11章 過去と未来が共存する首都タシュケント

第12章 青の都サマルカンド

第III部 旅と実用ガイド

第13章 千年の古都ブハラ

第14章 城壁の中の都市ヒヴァ

第15章 ヌクス・テルメズ・フェルガナと小さな町々

第16章 鉄道・航空・都市交通の利用法

第17章 通信・インターネット・両替・決済の実務

第18章 マナーと食事、安全に旅を終える方法

参考文献

第I部 大地と歴史

第1章 中央アジアの心臓、ウズベキスタンとの出会い

地図の真ん中に青い点を一つ打ってみます。東には中国があり、西にはカスピ海があります。北には広大な草原が広がり、南にはアフガニスタンの山脈が横たわっています。その点が指し示す場所こそがウズベキスタンです。海からは遠く離れていますが、交通の要衝からは決して遠くありません。遥か昔に砂漠を渡ったラクダの隊商も、今日大陸を駆ける貨物列車も、みなこの地を通りながら進路を変えていきました。

海のない国、道の多い国

ウズベキスタンはカザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタン、アフガニスタンと国境を接しています。中央アジアの他の4つの共和国すべてと国境を接する国はウズベキスタンだけです。国土面積は44万8,900平方キロメートルに達します。東西の長さは1,425キロメートル、南北の長さは930キロメートルに及びます。[A002]

この国には独特の地理学的名称がつけられています。それが二重内陸国です。自ら海に面する海岸線を持たないだけでなく、国境を接する隣国もまた、大洋に直接出られる海岸を持っていません。ウズベキスタンから大洋の港へ陸路で出るには、少なくとも二つの国の国境を越える必要があります。世界銀行はウズベキスタンとリヒテンシュタインを、世界に二つある二重内陸国として説明しています。[A001]

こうした地理的条件は、物流の過程を複雑にします。物資を輸出するには、他国の鉄道や道路を利用しなければなりません。国境を越えるたびに書類審査や通関検査が続くため、輸送時間は長くなり、物流コストも膨らみます。コンピューターのデータが複数のサーバーを経由する際に伝送遅延が生じる現象と似ています。経由地が増えるほど、従うべき接続ルールもまた増えていくのです。

しかし、同じ地図を別の視点から眺めると、新たな意味が浮かび上がってきます。中央アジアの南北と東西を結ぶあらゆる要衝が、ウズベキスタンで交差するからです。外の大洋の港へ向かう道は遠いものの、周辺の都市へと伸びる分岐路は縦横に開かれ

ています。孤立と接続という二つの性質が、同じ場所で同時に生まれたと言えます。ウズベキスタンの歴史は、このような地理的矛盾を道へと変えてきた記録なのです。

地図の上で国境線は細い一本の線にすぎませんが、足を踏み入れる実際の土地では、砂漠や川、山や村へと続いています。旅人が北の国境に立てば、カザフスタンと接する乾燥した広大な平地と対峙することになります。キルギスやタジキスタンを望む東へと足を向ければ、険しい山々と深い溪谷が続きます。南端の都市テルメズでは、滔々と流れるアムダリヤ川の向こうにアフガニスタンの風景が見渡せます。西へ伸びる道は、トルクメニスタンやホラズム、カラカルパクスタン地域を順に結んでいます。国境の方角ごとに、出会う風景と生活圏はそれぞれ異なっています。[A002]

砂漠と雪山が一望できる地

ウズベキスタンの地形は、西から東へ進むにつれてはっきりとした傾斜を描きます。国土の約5分の4は平原です。国土の中央部と北部にはキジルクム砂漠が広大に広がっています。一方、東部と北東部には天山山脈の連なりがそびえ立ち、南東部にはパミール・アライ山系が力強く続いています。[A002] 熱い砂原と冷たい万年雪が、一つの国の中で互いに向かい合っているかのようです。

キジルクムとはテュルク諸語で「赤い砂」を意味します。乾いた砂丘ばかりが果てしなく続くように思われ、見知らぬ道へ踏み出す者をたじろがせますが、実際の風景は幾重もの表情を持っています。なだらかな山や荒々しい砂利平原、からからに乾いた草原、白く塩分が浮き出た土地がいたるところに混ざり合っています。2025年にウズベキスタン政府が紹介した中央キジルクム国立自然公園は、面積が120万ヘクタールに達します。この公園の大部分は砂の平原と緩やかな低地で構成されています。[A007]

東部の高い山脈は、砂漠とはまったく異なる暮らしのリズムを生み出します。冬の間には積もった雪が春の日差しで解け、溪谷に沿って水流を作ります。山裾に位置する村や果樹園は、山から下りてくるこの水を待ちわびます。山並みに囲まれたフェルガナ盆地は、西側にのみ入り口を開いた大きな器のような形をしています。政府の地理資料によると、盆地の長さは約370キロメートル、幅は最も広い場所で190キロメートルと説明されています。[A002] この盆地は、ウズベキスタンと近隣諸国の国境が複雑に入り組む生活圏でもあります。

アムダリヤ川とシルダリヤ川は、この乾燥した大地を潤す2本の命綱です。二つの大河は長い歳月にわたりオアシス農業を開花させ、都市の存続を支えてきました。サマルカンドやブハラのような歴史ある都市は、十分な雨に恵まれた場所で育まれたわけではありません。人々は川や湧き水を人工の水路で引き込み、土をしっかりと固めて畑を耕しました。水の流れを読み、それを治める能力は、強固な城壁を築く技術と同じくらい重要だったのです。

2026年4月、ウズベキスタン政府は中央アジアの5カ国が水と土地を共同管理する協力事業に参加すると発表しました。政府はこの発表の中で、アムダリヤ川とシルダリヤ川の流域を、地域住民の約80パーセントが生計を依存する中核的な水源として説明しています。[A008] 川の水はいずれか一国の所有物ではないため、国境線の前で止まることはありません。上流の万年雪、中流のダム、下流の農地が、巨大なひとつの水系として結ばれています。水の問題は自然環境を理解するための学びであると同時に、国と国の間を調整する外交課題でもあるのです。

川の流れを過度に人為的に変えてしまうと、思いがけない場所で大きな過ちが生じます。かつてソ連時代に推進された大規模な灌漑事業は綿花の生産量を増やしたものの、アラル海へと流れ込むはずの水を大幅に減らしてしまいました。2026年のウズベキスタン政府の資料によると、アラル海はかつての面積の約10パーセントしか残されていません。[A008] この痛ましい悲劇については第10章で詳しく掘り下げます。第1章で心に留めておくべき事実は明白です。ウズベキスタンが享受した繁栄も、負わねばならなかった傷跡も、すべてはこの水脈から生じたということです。

砂の下に金とウラン

キジルクム砂漠がもたらす価値は、乾いた地表にとどまりません。地下には金やウランをはじめとする貴重な鉱物資源が眠っています。ナヴォイ鉱業製錬会社はムルンタウを世界有数の規模を誇る露天掘り金鉱として紹介し、確認された資源量が金1億100万オンスに達すると発表しました。[A005] 企業の発表資料であるため、埋蔵量や順位は調査基準によって異なる場合があります。それでも、ムルンタウ金鉱がウズベキスタンの産業全般において極めて重要な位置を占めているという事実は揺るぎません。

2026年4月、ナヴォイウランは2025年の1年間で7,000トンの天然ウランを生産したと発表しました。あわせて同月、キジルコク鉱床での商業生産を開始し、この鉱山の計画生産能力を年間1,200トンと提示しました。[A006] これらの数字は、砂漠を単なる空白の土地と見なしてはならないことを教えてくれます。荒涼として見える砂地の彼方に、鉱山や鉄道、送電線、そして労働者たちの都市が活気をもって続いています。

豊富な鉱物資源は国家財政に大きな収入をもたらす一方で、容易ならぬ問いも投げかけます。採掘過程で貴重な水をどれほど消費するのか、過酷な現場で働く鉱山労働者の安全をどのように守るのか、採掘が終わった後に汚染された土地を誰が責任を持って再生させるのか、といった問いです。地下資源は、地中から掘り出す技術だけで完結するものではありません。開発の初期段階から復元に至るまで、長い視野に立った細やかな設計が求められます。

こうした問題は、コンピューターシステムのリソースを管理する仕組みと似ています。メモリー容量に余裕があっても、無駄遣いをすればプログラム全体が停止してしまいます。地下資源が豊富であっても、環境や地域社会を度外視して算段を立てれば、国家の未来は損なわれてしまいます。ウズベキスタンは、目の前の黄金の経済と生命の源である清らかな水の間で、賢明な調和を図らなければなりません。

3,800万人を超える若い社会

2026年4月1日時点で、ウズベキスタンの常住人口は38,382,685人でした。これは前年の同時期に比べて68万4,900人、比率にして1.8パーセント増加した数値です。[A003] 中央アジアで人がひしめく国という説明が、漠然とした観念を超えて具体的な暮らしの規模として迫ってきます。

人口が地域ごとにどのように分布しているかも目を引きます。2026年4月時点で、サマルカンド州には約439万7,000人、フェルガナ州には約423万9,000人が暮らしていました。首都タシュケント市の人口は約319万6,000人でした。[A003] 由緒ある古都、農業の中心地、現代の首都が、それぞれ異なる形で人を引き寄せています。

年齢構成を見ても、社会全体が若く活気に満ちています。国家統計委員会が2026年6月に公開した資料によれば、就業年齢に達していない年少人口は1,230万人で全

体の32.1パーセントを占めました。生産活動を担う生産年齢人口は2,130万人で55.8パーセントに達しました。[A004] 教室や大学を増やし、現場の雇用を創出するという課題が、国家政策において大きな比重を占めざるを得ない構成です。

若い人口が多いという事実そのものが、自動的に国家成長の原動力になるわけではありません。学校の教室で学んだ知識が、着実に仕事へと結びつかなければなりません。都市の住宅供給や公共交通網を適切な時期に拡充し、病院や保育施設、電力網やインターネット網も並行して整備する必要があります。人が多いということは、輝かしい潜在力であると同時に国民に対する約束でもあります。国家は緻密な予算と堅牢な制度によって、その約束を果たしていかなければなりません。

2026年、ウズベキスタンは独立後初となる全国人口・農業センサスを実施しました。調査は1月15日から2月28日まで行われ、統計当局は6月30日に暫定結果とともにデジタル調査の手法を発表しました。[A009] かつての戸籍簿や標本調査から推測していた社会の姿を、全国規模のデータとして読み直す意義深い取り組みです。真の政策とは、人々の暮らしを無機質な数字に還元することではありません。統計の数字の背後にある、ごく普通の人々の暮らしをもれなく見つめ直すことなのです。

言葉と隣人、暮らしの小さな単位

ウズベキスタン憲法は、ウズベク語を国家語と規定しています。同時に、国内に暮らすあらゆる民族の言語や慣習、伝統を尊重し、それらが発展できる環境を整える責任を国家に課しています。[A010] 旅人が都心の通りに立てば、ウズベク語とロシア語が自然に混ざり合って聞こえ、地域によってはタジク語やカラカルパク語といった独自の言語にも出会います。この国の言語地図を単一の色だけで塗りつぶそうとすれば、実際の暮らしが持つ多彩な表情を見落としてしまいかねません。

ウズベク語はテュルク諸語に属します。現在ではラテン文字が法定表記として使われていますが、日常生活のいたるところに今なおキリル文字も色濃く残っています。一つの看板に二つの文字体系が重なり合っている光景は、歩んできた過去と今日の時間が同じ通りに並び立っている姿そのものです。文字表記の移行は、電灯のスイッチを入れるように一瞬で成し遂げられるものではありません。教科書や新聞はもちろんのこと、何世代にもわたって培われた人々の言語習慣がともに歩調を合わせる必要があります。

路地の日常でよく耳にする言葉が「マハッラ」です。マハッラは古くから受け継がれてきた近隣共同体であり、国家行政と温かな見守りが交わる接点でもあります。冠婚葬祭を執り行い、困窮する世帯を助け、地域の大小の問題を調整する役割が、すべてこの小さな単位の中で担われてきました。2026年に政府がこの年を「マハッラ発展と社会繁栄の年」と定め、9,000カ所を超えるマハッラを見守りと教育の拠点へ変革すると表明したことは、この草の根組織が今も息づいていることを雄弁に物語っています。[A011]

だからといって、マハッラを情味あふれる美風良俗としてのみ描いてしまっては、物事の半分しか見ていないことになります。身近な隣人の助けは心強い力になる一方で、密接すぎる関係が個人の自由な選択やプライバシーを圧迫することもあります。若い女性の就学機会や障害者の移動の権利、家庭内暴力の問題のように、家庭の外にある公的制度が介入すべき領域も存在します。共同体の長所を生かしつつ、個人の権利は法で守るという、バランスの取れた制度設計が求められます。

北西部の自治共和国

ウズベキスタンの行政地図を広げると、北西部にカラカルパクスタン共和国が目に見え飛び込んできます。ウズベキスタン憲法は、カラカルパクスタンを主権を有する共和国と規定し、独自の憲法を認めています。同時に、両共和国の関係はウズベキスタン憲法および条約に基づいて定めるよう明記しています。[A010]

この法律の条項には、中央政府の下にある一地域を説明する言葉以上に複雑な事情が込められています。ここはカラカルパク語、ウズベク語、カザフ語がともに飛び交う生活圏を形成しており、アラル海の干上がった悲劇がもたらした生態学的災害によって、住民の健康と暮らしは長年にわたり揺るがされてきました。首都のヌクスは、固有のカラカルパク文化とともに、貴重なロシア前衛美術のコレクションでも広く知られています。

法律に記された自治という名が、住民が実感する生活の自治と常に一致するわけではありません。地方財政や言語教育、貴重な土地や水の利用、地域の代表性の保障において、住民の意思がどれほど反映されているかを注意深く見極める必要があります。2022年の憲法改正案に盛り込まれた地位変更の文言をめぐる、ヌクスでは大規模なデモと流血の衝突が発生しました。後にその文言は撤回されました。この事件は、

国家の統合を図る際には地域の声を置き去りにしてはならないという教訓を残しました。

オアシスは自然と技術の共同作品

砂漠のただ中に瑞々しい緑の都市が現れると、自然がもたらした奇跡のように思えがちです。オアシスが長い歳月にわたって命を育むには、湧き出る泉や流れる川の水も欠かせませんが、それを守り育てる人々のたゆまぬ労苦があってこそ成り立ちます。水路の底に堆積する土砂をかき出し、堤防が崩れていないかを見守らなければなりません。どの畑に先に水を送るかを村人たちが知恵を出し合って合意し、水を盗んだり独占したりできないよう厳格な規則も定めておく必要があります。

小さな水路が一つ詰まっただけでも、その下流にあるいくつもの畑が一気に干からびてしまいます。こうした構造は、緊密につながり合ったコンピュータ・プログラムの依存関係にも似ています。前の段階で生じた些細なエラーがプログラム全体へと広がっていくように、水路の詰まりは村全体を脅かします。それゆえ、中央アジアの都市が歩んできた歴史は、華やかな王や征服戦争の記録だけで説明し尽くせるものではありません。歴史に名を残さなかった水路の管理人や農民による賢明な判断が、都市を黙々と支え育ててきたのです。

灌漑は乾いた土地に豊かさをもたらしますが、同時に厄介な塩害の問題も生み出します。乾燥した土地にむやみに大量の水を引くと、強い日差しによって水分が急速に蒸発し、塩分が地表に白く残ってしまいます。排水設備が不十分であれば土壌が塩分で傷み、作物が育ちにくくなります。水を潤沢に注ぎ込むことだけが常に良い農業であるとは限りません。土壌の塩分濃度や地下水位を細やかに測りながら、水量を調節しなければならないのです。

世界的な気候変動は、この古くからの水管理体系に新たな圧力を加えています。雪や氷河の融解時期が変化し、猛暑の期間が延びて干ばつが頻発するようになれば、過去の水配分基準はもはや通用しなくなる恐れがあります。国境を越えて流れる川では、周辺諸国の水資源需要が衝突することもあります。観測・測定データを透明性をもって公開し、上流と下流の隣国同士が協力して利用計画を立てなければなりません。

都市と農村を切り離して見ないこと

2026年1月1日の人口統計データを見ると、ウズベキスタンの都市人口は約1,947万人、農村人口は約1,877万人でした。[A049] 二つの数値はほぼ拮抗して均衡を保っています。首都タシュケントにそびえ立つ高層ビルばかりを見てもいけませんし、のどかな農村の風景だけで国全体を思い描くのも適切ではありません。

都市と農村は人と物資を絶え間なくやり取りしながら、一つの流れを作り出しています。農村の果樹園や畑で育った新鮮な果物や野菜が都市の市場へと運ばれてきます。大都市の大学を卒業した若者が、故郷の村の学校や病院へ戻ることもあります。その一方で、より良い仕事を求めて首都や海外へと旅立つ人も少なくありません。家族はいくつもの都市や国に離れて暮らしながら、海外送金やスマートフォンのビデオ通話で互いの安否を確かめ合い、絆をつないでいます。

人口が急速に増加する社会では、都市に新たな住宅を急いで建設せねばならず、農村には学校や医療施設を行き届かせるように拡充していかなければなりません。きれいな水と下水道、安定した電力とインターネット回線が住民の日常に届く必要があります。建物の数だけを数えていては、暮らしの質を推し量ることはできません。子どもたちの通学時間や病院までの距離、夏の停電回数のように、日々の暮らしに直結する具体的な指標を細やかに見つめる必要があります。

数字を読む際に生じる落とし穴

人口3,800万人という数字は、調査の基準や手法によってその意味合いが異なってきます。常住人口は、一定の地域を生活の拠点としている人を数えます。海外で働く移民労働者が書類上どこに登録されているか、仕事を求めて移動する季節労働をどのように把握するかによって、実際の生活人口との間に食い違いが生じることがあります。

2026年に実施された初の全国人口センサスの意義はここにあります。世帯構成や居住形態、教育水準、農業生産の実態を新たに確認することで、長年使われてきた推計値を正すことができます。[A009] 今回の調査結果は、今後学校をどこに配置し、地域予算をどのように配分し、災害避難計画をどのように策定するかを決定する基礎

となります。統計から数え漏れた人々は、政策の恩恵からも取り残されてしまう恐れがあるのです。

あらゆる統計には明確な日付を付さなければなりません。人口は日々の出生や死亡、移動によって絶えず変化しているからです。2026年1月の数値と4月の数値をうっかり混同すると、約15万人もの差が生じてしまいます。[A003][A049] 本書に基準日を細かく明記している理由は、読者が後から数値を再確認し、比較できるようにするためです。

季節が変わる一日

ウズベキスタンの夏と冬とでは、生活の営み方が全く異なります。砂漠や平原地帯は夏には灼熱となり、冬には気温が著しく下がります。住民たちは日中の照りつける日差しを避けて予定をやりくりし、家の陰や中庭で過ごします。古くから築かれてきた厚い土壁は、昼間の熱気が室内へと入り込む速度を遅らせてくれます。

東部の山地や盆地では、標高によって気候が変わります。旅行者がうららかな春の日に軽装でタシュケントを出発しても、山道に入ると予期せぬ白い雪に出くわして足止めを食らうことさえあります。果樹の開花時期や晩霜は、その年の農家の収入を左右します。自然環境は絵はがきの背景にとどまらず、住民の一年の暦や一日の労働時間を決める暮らしの条件そのものなのです。

都市における水の使用も季節の移ろいに左右されます。厳しい暑さの夏が来ると、家庭や公園、周辺の農業用水の需要が一斉に高まります。老朽化した水道管からの漏水を減らし、使用量を精密に計測することは、巨大なダムを新設することと同じくらい重要になり得ます。目を引くような大規模工事よりも、静かで地道な維持管理こそが、都市の日常を長く支え続けるのです。

道路も天候の影響を大きく受けます。山道の雪や深い霧、砂漠の砂嵐は移動時間を大幅に引き延ばします。物流網を設計する際、地図上に引かれた距離だけを機械的に計算しては思わぬ落とし穴にはまります。季節ごとの所要時間や迂回路、峠の休憩所における水や通信の状況まで考慮に入れなければなりません。地理は固定された座標ですが、人が往来できる移動の可能性は季節ごとに変わるのです。

国家の顔を一文に要約してしまわないこと

ウズベキスタンを紹介する際、青いドーム屋根、シルクロードのラクダ、白い綿花畑がよく引き合いに出されます。どれも偽りのないありのままの風景です。しかし、この三つの情景だけで一国を語り尽くすことはできません。タシュケントの地下鉄に乗る大学生、キジルクムの鉱山技術者、フェルガナの農民、アラル海の干上がった底に木を植える作業員は、それぞれ異なる今を生きています。

世界銀行は2026年のウズベキスタンを、3,800万人を超える人口を抱える中央アジアの中低所得国と位置づけています。2026年4月1日時点で世界銀行の現地事業は27件、純約定額は56億ドルでした。[A001] この数値は、同国が改革と基本的なインフラ整備の拡張の途上にあることを示しています。ただし、国際機関による経済の分類は、人々の誇りや文化の深さを測る物差しではありません。経済の一断面を読み解くための参考ツールにすぎないのです。

国をありのままに理解する良い方法は、一枚の大きな地図と、名もなき一人の生活を交互に見つめ直すことにあります。地図の上では、ウズベキスタンはユーラシア大陸の真ん中に位置しています。日々の暮らしの中では、きれいな水や仕事、親しみ慣れた言葉や隣人が一日の中心にあります。大陸という雄大な位置と、素朴なささやかな一日が交差するとき、はじめて国家の真の顔が鮮明に浮かび上がってくるのです。

その顔には、悠久の歴史の刻印が刻まれています。国旗の青色、国章に描かれた伝説の鳥、紙幣に印刷された壮大な建造物には、独立国家が記憶にとどめようと選んだ価値観が込められています。その記憶の根底は、オアシスと草原が長い歳月をかけて互いに交わり育んできた文明へとつながっているのです。

第2章 シルクロード文明と国家象徴の現代的理解

サマルカンドの青いタイルの一片を間近で覗き込んでみると、青い地の中に白い線と金色の点が細やかに潜んでいます。遠くから眺めるときは一つの模様のように見えますが、一歩歩み寄ると、小さな幾何学図形が精巧に組み合わさっていることがわかります。ウズベキスタンという国のアイデンティティも、このタイルの模様によく似ています。オアシスの農民と草原の遊牧民、道を行く商人と職人、知恵を求めた学者と征服者が残した足跡が、一枚の絵の中で自然につながり合っているからです。

シルクロードは一本の道ではありませんでした

シルクロードという名を聞くと、多くの人は中国からローマへとまっすぐに伸びる一本道を思い浮かべがちです。しかし実際の絹の道は、無数の支線に分かれた巨大なネットワークでした。季節の移り変わりや戦争の勃発、オアシスの水事情や各地域の税制に応じて、人々が行き交うルートは絶えず変化しました。ユネスコは、ザラフシャン・カラクム回廊を中央アジア・シルクロードの核心的な区間として説明しています。この回廊は険しい山々や河川流域の溪谷、乾いた砂漠を横断し、866キロメートルにわたって続いています。紀元前2世紀から西暦16世紀にかけて、多様な品物や数多くの人々、宗教や科学、技術がこの道を行き交いました。[A012]

中央アジアの道は、一本の線というよりも緻密な網の目に近いものでした。現代のコンピュータ通信網で一つの経路が途切れても別の迂回路が接続を担うように、ある都市への道が閉ざされれば、近隣の都市や抜け道がその役割を分担しました。サマルカンドからブハラへと伸びた道は、ブハラからさらにメルヴやホラズムへと続き、南のテルメズを経てバクトリアやインドの地へと分岐していきました。ラクダの背に積まれたのは絹だけではなくでした。丈夫な紙や透明なガラス器、俊足の馬や貴重な香料、口伝えの物語や精密な計算方法とともに運ばれ、大陸を行き交いました。

ユネスコは、シルクロードの都市群を、品物を売買し休息をとる拠点であると同時に、異なる思想が交じり合う出会いの場であったと説明しています。商人と旅人は、活気あふれる市場で品物を取引しながら、自らの故郷の技術や生活習慣、言語や思想

を分かち合いました。こうしてオアシスの都市は、遠方の学者や教師、宗教家や哲学者を惹きつけ、当時の知識の中心地としての地位を確立していきました。[A013]

この説明において中心となる言葉こそが「交換」です。人類の文明は、ある集団が他方に一方的な恩恵を施すような形で発展してきたわけではありません。市場で品物の値段を交渉し、不慣れな言葉を通訳し、異なる法律や商取引のルールを擦り合わせるといふ熾烈な過程の中で、変化し成熟していきました。時には文化的な誤解や武力衝突を経験することもありましたが、道が決して途絶えることなく再び結ばれたのは、人は独力では生きていけず、いかなる都市も隣人との交流なしに単独で繁栄を享受することはできなかったからです。

オアシスの壁と草原の車輪

オアシスに定住した人々にとって、水を確保し管理することは生き残りをかけた課題でした。川の流れから畑へと続く水路を掘り、土地の高低差を精密に測量しなければなりません。天日干しの日干しレンガを丁寧に積み上げ、頑丈な家や穀物倉庫、外敵を防ぐ城壁を築きました。オアシス都市の生活の暦は、種をまく時期や水路を順番に開閉する手順に従って絶え間なく巡っていました。一か所に長く留まる定住生活は、正確な行政記録や徴税、公正な裁判や市場の秩序を打ち立てる制度を発展させました。

広大な草原の牧畜民にとっては、時宜に応じて機敏に動く能力こそが暮らしの土台でした。季節に応じて新しく芽吹く草や涸れない泉を求め、羊や馬を率いて移動しました。丈夫な革の鞍とたくましい馬、精確な弓と車輪のついた荷車は、乾燥した平原を素早く渡る助けとなりました。季節ごとに居所を変える遊牧の暮らしには、農耕とはまったく異なる知恵が必要でした。空を流れる雲の形、風に運ばれてくる草の匂い、家畜の歩き方の変化が、そのまま彼らにとっての生きた羅針盤であり地図だったのです。

定住文明と遊牧文明という二つの世界は、互いの未知の力を警戒しながらも、絶えず相手を必要としていました。城壁に囲まれた都市の住民には機動力を高める馬や寒さを防ぐ羊毛、丈夫な革が求められ、草原の遊牧民には主食である穀物や衣服を仕立てる織物、頑丈な鉄器が不可欠でした。互いの必要性がうまく合致したとき、境界の交易市場は大いに栄えました。一方で、いずれかの勢力均衡が崩れたり凶作に見舞

われたりすると、容赦のない略奪や武力衝突が起きることもありました。中央アジアの歴史は、穏やかで平和的な結びつきだけで満たされていたわけではありません。

シルクロード商業の主役であったソグディアナの経済もまた、このように農耕と遊牧が接する境界線の上で花開きました。ザラフシャン川とカシュカダリヤ川の流域に広がる肥沃な平野には、早くからクモの巣のような人工水路が細密に張り巡らされていました。『イラン学百科事典』によると、ソグド人社会は灌漑農業を基盤としており、オアシス周辺の草原に暮らす遊牧民と家畜や畜産物、穀物を活発に交換しながら共存していました。[A026] オアシス農業の豊かさが商人たちの食糧基盤を力強く支え、草原から得た屈強な馬が隊商の行動半径をユーラシア全域へと押し広げたのです。

6世紀から7世紀にかけては、ソグド人の定住民と西突厥の遊牧支配層の間で、政略結婚や生活習慣の共有が活発に行われました。歴史学者たちはこの現象を、ソグド人階層とテュルク系支配層が一体となったエリート集団の融合であると解釈しています。[A026] これは、一方の文化が衰退して消え去り、もう一方の文化がその座を奪ったという一方的な征服の結果ではありませんでした。強力な騎馬軍事力と精巧な都市行政技術、テュルク諸語とイラン系言語、草原の遊牧のシンボルと洗練された定住美術の様式が重なり合い、独創的な文化を育んでいったのです。

こうした文化の重なり合いは、その後の歴史においてもそのまま受け継がれました。カラハン朝やモンゴル帝国、チャガタイ・ハン国、ティムール朝の支配集団は、いずれも草原の軍事的・政治的伝統を根底に抱いていました。しかし彼らもまた、サマルカンドやブハラに暮らす熟練の行政書記や建築職人、権威あるイスラム法学者たちによる実務的な協力なしには、広大な領土を統治することはできませんでした。当時の支配者の宮廷は、馬鞍に跨る武人と羽根ペンを握る行政官僚が足並みを揃えて機能する複合的な空間だったのです。

当時の威容を今に伝える壮大な建造物は、二つの世界の出会いを視覚的にくっきりと物語っています。天に向かってそびえ立つ巨大なアーチ型の門や青いドームは、帝国を統治した支配者の威勢を示しています。その一方で、建物の壁面を隙間なく埋め尽くす緻密な幾何学模様や美しいアラビア文字の書道は、長い年月をかけて受け継がれてきた職人の熟練の技を証明しています。大陸を支配する壮大な空間を築こうとした権力者の野望と、タイルの一枚一枚の角度を寸分狂わず合わせた精密な技術が、

一つの建造物の中で完全に見事に融合したと言えます。巨大な建築の骨格と繊細な仕上げの作業が噛み合っこそ、真に記念碑的な建築が誕生し得たのです。

独立国家が選んだ三つの象徴

ウズベキスタンは1991年のソビエト連邦解体に伴い独立を果たしました。新たに船出した共和国は、国号や国境線を確定する作業にとどまらず、すべての国民が心を一つにして絆を確かめ合える国の色彩や文様、国歌の歌詞を心を込めて選びました。ウズベキスタン共和国憲法第5条は、国旗、国章、国歌を法律に基づき公認された国家の公式象徴として明記しています。[A010]

国旗は1991年11月18日に正式に採択されました。旗の地は上から青、白、緑の三つの広い横縞で構成され、その間を細い赤の縁取り線が横切っています。旗面の左上にある青い地には、白い三日月と12個の星が端正に配置されています。ウズベキスタン大統領府の公式解説によると、青色は澄み渡る空と生命の源である清らかな水を、白色は聖なる平和と明るく順風満帆な道のを、緑色は肥沃な大自然と新たな生命の息吹を表しています。その間を走る赤い線は、全身を巡る活力ある生命力を象徴しています。旗面の三日月は独立を果たしたばかりの新生共和国の誕生を意味し、12個の星は悠久の歴史的・文化的伝統と、完全無欠な理想へと向かう国家の意志を宿しています。[A014]

国家の象徴を正しく理解するためには、表面に現れた図像とともに、それを定めた法律文書にも目を向けなければなりません。月や星の文様を眺めて抱く個人の情緒的な感想は自由であってよいものです。しかし、教科書や公的記録においてその象徴本来の意味を解説する際には、国の憲法機関が明文化して公布した条文を正当な基準としなければなりません。個人の主観的な感想と公的な法的定義を明確に区別する姿勢は、歴史学を正しく学ぶための基盤となります。千年の古都に立ち、古代遺跡の美しさに感嘆する心も尊いものですが、その遺跡が果たしていつ建造されたのかは、壁面に刻まれた銘文や考古学の発掘報告書、当時の信頼に足る文献史料を丹念に対照して究明すべきものだからです。

国家象徴の意味は、石板に刻まれた不変の公式のように永遠に固定されているばかりではありません。国旗の青い光彩を眺める市民たちもまた、それぞれが胸に抱く記憶に応じて異なる想いを抱くことがあります。ある人はティムール帝国時代に青い

タイルで覆われていた壮麗な都市を思い描き、別の人は憩いの場であったチャルヴァク湖の澄んだ水の色や、一点の曇りもなく晴れ渡った故郷の秋空を思い浮かべます。国家が制度的な公式見解を示したとしても、その象徴に生き生きとした息吹を吹き込み、日々の暮らしの意味を満たしていく主体は、日常を生きる国民自身なのです。

ウズベキスタンの国章は、1992年7月2日の法律によって正式に制定されました。紋章の中央には、伝説の霊鳥であるフモの鳥が銀色の翼を大きく広げて立っています。その背後の背景には、雄大な山脈から昇る太陽と国土を潤す二筋の大河、花々が咲き誇る緑の渓谷が広がっています。紋章の左右の縁は、黄金色の麦の穂と花開いた綿花の枝が丸く取り囲んでいます。国章の最上部には、イスラム伝統の八角形の意匠であるルブ・エル・ヒズブの中に、銀色の三日月と星が掲げられています。公式解説書は、翼を広げたフモの鳥を、民族の永遠の幸福と自由を渴望する崇高な精神の象徴と定めています。[A014]

この国章の中には、共同体が大切にしてきた暮らしの核心的要素が余すところなく込められています。実った麦の穂は主食であるパンと人々の穏やかな暮らしを指し示し、枝ごと束ねられた綿花は国の根幹を成してきた農業と基幹産業の歩みを想起させます。大地を貫く二つの大河は、文明の母なるアムダリヤ川とシルダリヤ川です。山の向こうから昇る朝日は独立を迎えた祖国の希望に満ちた新たな門出を照らし、空へ向かって飛び立つ鳥は地上の束縛にとらわれない自由な気概を象徴しています。小さく丸い紋章一つの中に、中央アジアの大自然と民衆の誠実な労働、そして独立国家の堂々たる主権が凝縮されているのです。

国家の象徴を真に深く理解しようとするとき、表に現れた明るく華やかな理想だけに目を奪われてはなりません。綿花は長らく農家の主要な収入源であり、国家経済を支える作物でしたが、ソ連時代に強行された大規模な単一栽培と無分別な農業用水への転用によって、深刻な水資源の枯渇を引き起こしました。これは内陸の海であったアラル海が急速に干上がってしまうという、痛ましい生態系の惨事へとつながりました。国章の片隅にあしらわれた純白の綿花の房は、経済的な豊かさの記憶とともに、未来の世代に向けた厳格な環境的責任を同時に問いかけています。国家の象徴が剥製のような図案を超えて生命力を宿すためには、このように過去の歴史的な陰りと批判的な社会の省察を静かに受け止めなければならないのです。

ウズベキスタンの国歌は、1992年12月10日の法律によって制定されました。国民的詩人アブドゥラ・オリポフが作詞を手がけ、著名な音楽家ムタル・ブルハノフが壮大な旋律を作曲しました。[A014] 歌詞には、世界を照らす燦然たる陽光、豊かな黄金の溪谷、知識の探求と創造への情熱、主権の独立と恒久平和を希求する思いが込められています。音楽の旋律と歌詞は、無味乾燥な法文よりもはるかに速く、深く人々の胸に刻まれます。学校のグラウンドや国家の記念式典で多くの群衆が一斉に同じ歌を斉唱する体験は、普段は顔も知らない隣人同士を、束の間であれ同じ呼吸とリズムの中で一つに結び合わせる力を発揮するのです。

紙幣に印刷された記憶

財布に入れて持ち歩く通貨もまた、国家の歴史と主権を証明する公の顔です。ウズベキスタンはソ連崩壊に伴う極度の混乱の中、1993年11月15日から暫定的な過渡期通貨であるスム・クーポンを発行して使用しました。翌年の1994年7月1日に正式な法定通貨であるスムを導入し、従来のスム・クーポン1,000枚を新紙幣1スムと交換しました。ウズベキスタン中央銀行は2026年に公開した公式Q&A資料を通じ、こうした通貨改革の全過程を詳細に明らかにしています。[A015]

通貨は市場において財やサービスの価値を計量する実用的な道具です。それと同時に、その通貨を誰が発行して価値を保証し、市民がその約束をどれほど信頼しているかを測る制度的な装置でもあります。独立直後に外国のルーブル流通から脱却し、独自の通貨を定着させたことは、中央銀行の金融政策と自主的な決済秩序を確立する重要な道程でした。主権国家の権威と独立の実体が、すべての国民の財布の中という日常へ確かに浸透した瞬間でした。

ウズベキスタンの紙幣の図案には、かつて栄華を誇った古代建築やシルクロードの文化遺産が主要な題材として繰り返し登場します。中央銀行は、2021年から2022年にかけて新たに発行した新紙幣の図案に、歴史あるシルクロードの交易路と主要な歴史都市の遺跡を一貫して盛り込んだと発表しています。[A016] 初期に発行された10スム紙幣の裏面を見ても、サマルカンドにそびえ立つグーリ・アミール廟の壮麗な姿が緻密に印刷されています。[A017] 手のひらほどの小さな紙幣が、人々の手から手へと渡る移動式博物館の役割をしっかりと果たしていると言えます。

紙幣に刻まれた図柄は、共同体が過去の無数の出来事の中から何を選び取って記憶するかを決定する、高度な編集行為です。限られた紙面の中に、一国の膨大な歴史とすべての構成員の暮らしをもれなく収めることはできません。国家の選んだ代表的な建築物や偉人は日常的に目に触れ、市民の記憶に刻まれますが、選ばれなかった数多くの平凡な暮らしや出来事は紙面の外にとどまることになります。したがって、通貨の図案を決めることは、視覚芸術の領域を超えて共同体の集団的記憶を再構成する政治的な選択でもあります。どのような遺跡が紙幣に採用され、いかなる歴史が除外されたのかを丹念に読み解けば、独立国家が自らのアイデンティティを世界にどう説明しようとしているのか、その志向性を読み取ることができます。

シルクロードをガラスケースに入れない

ユネスコ世界遺産リストによると、2026年時点でウズベキスタンの公式登録遺産は計8件に達します。内訳は文化遺産6件、自然遺産2件です。2026年には、首都タシュケントの独創的な20世紀近代建築遺産群が新たにユネスコのリストに登録されました。[A018] これは、悠久の中世シルクロードのオアシス古都だけがウズベキスタンの価値ある遺産であるという狭い見方を脱し、近現代の都市形成の記憶まで遺産の地平へと包摂する意義深い変化です。

ユネスコ世界遺産に正式登録されれば、世界中に都市の名声知れ渡る栄誉を得る一方で、遺産を原型のまま守り抜くという重い国際的保存責任も課されます。訪れる旅行者が増えれば、現地の宿泊業や飲食店、伝統工芸の工房が活気づき、地域経済を活性化させる契機となります。しかしその裏には、貴重な木造・石造建築の摩耗や損壊、古くからの住民が高騰する賃料に耐えかねて郊外へ追いやられるジェントリフィケーション、観光客向けの見た目だけを狙った無理な復元工事といった危険が常に潜んでいます。長い歴史を持つ古都の路地をまるで新築のようにきれいに磨き上げることだけが、正しい保存のあり方ではありません。歳月が醸し出す色あせた風合いや、古びた時間の痕跡をそのまま受け止める繊細な保存技術と哲学が求められます。

シルクロードを、はるかな砂丘の上を穏やかに行くラクダの隊商行列のようなロマンチックな風景としてのみ描くなら、その道を実際に拓き、維持してきた数多くの人々の汗と涙は視野から消え去ってしまいます。昼夜を問わず気性の荒い家畜の世話をした馬方、砂漠の真ん中で命がけで深い井戸を掘った工夫、見知らぬ異国の言葉を

一晩中通訳した仲介人、国境の要塞で厳格に税を取り立てた役人、そして過酷な旅の途中で砂嵐や病に倒れ、名もなきまま葬られた人々が存在しました。大陸を結ぶ長距離交易はめざましい富を生み出した一方で、致命的な伝染病の蔓延や容赦ない略奪の危険も同時にもたらしました。外に向かって大きく開かれた道には、常に莫大な代価と過酷な生存のリスクが影のようにつきまとっていたのです。

隊商宿は小さな都市でした

砂漠や荒野を渡るキャラバンの隊列は、日が暮れたからといって野原のどこにでも荷を下ろして休むわけにはいきませんでした。疲れた人々や家畜が口にする水と飼料が十分に必要であり、盗賊団の夜襲から貴重な商品を安全に守り抜く分厚い防壁が欠かせなかったからです。キャラバンサライと呼ばれる隊商宿は、商人や無数のラクダ、重い荷物が一堂に集まり旅の疲れを癒やす巨大な要塞型複合施設でした。広い中庭を中心に四方に宿泊部屋と堅固な貨物倉庫が配置され、夕闇が迫ると重厚な城門を固く閉ざして安全に夜を過ごしました。

キャラバンサライの内部では、国籍や言語の異なる多くの人々が衝突しないよう、厳格な生活規律が徹底して機能していました。数百頭に及ぶ家畜に水を飲ませる順番や荷物を下ろして積み上げる区画を厳密に分け、役人が発行した通行税の納付書類を確認したうえで、各国の銀貨や金貨を交換する公正な両替レートを定めなければなりません。ささいな取引上の揉め事や文化的な摩擦が生じた際には、宿に常駐する専門の通訳や公認仲介人が立ち会って円満に紛争を仲裁しました。見知らぬ砂漠の道を越えてきた旅人の命と財産は、外を取り囲む日干し煉瓦の城壁だけで守られていたわけではありません。国境を越えて互いに信頼できる公正な約束事と手続きが、その城壁の内側を隙間なく満たしていたのです。

ユネスコ世界遺産に登録されたザラフシャン＝カラクム回廊は、計34件の多彩な個別遺産によって構成されています。雪に覆われた険阻な山岳要塞や肥沃なオアシス都市、まばらな草が生えるステップ地帯、そして荒涼とした砂漠のキャラバンサライ遺跡が、一つの大きな文化的軌跡として結ばれています。[A050] これは、世界遺産の指定や評価の視座が華麗な宮殿や寺院といった単一の建造物にとどまらず、人々が物資を運び暮らしを営んだ道全体、そして有機的な生活基盤のシステムへと拡張されたことを如実に物語っています。

古代シルクロードの道を安全に維持していたシステムや技術は、今日でも姿を変えて連綿と受け継がれています。現代の大規模な鉄道駅や複合物流ターミナル、出入国税関や公認電子文書システムは、かつてキャラバンサライが担っていた防衛や検問、保管や流通の機能を分担して継承したものです。物流の移動速度は比べものにならないほど速くなりましたが、国家間の確固たる制度的信頼と互換性のある標準規格に支えられなければならないという本質的な条件は、今も昔も変わりません。隣り合う国同士で線路の軌間規格が異なっていたり、電子通関書類の書式が一致していなければ、何千トンもの貨物が国境駅で足止めされ、いつまでも待機し続けなければならないからです。

十二の星を読み解くさまざまな視点

ウズベキスタンの国旗にあしらわれた12個の星について、1年の12か月や夜空の黄道十二星座を指しているという民間の説明が広く知られています。一方で大統領府の公式文書は、この12の星が民族の崇高な精神的志向、悠久の歴史的伝統、古代東方の太陽暦体系、そして非の打ち所のない完成へ向けて絶え間なく前進する国家の意志を併せ持つと説明しています。[A014] 国家が特定の唯一の解釈だけを排他的な正解として固定していないのです。

公式の解説に残されたこのような解釈の余白は、国家の象徴が持つ固有の特性をよく表しています。国家の象徴とは、厳密な数学記号のように一つの入力値に対して常に一つの固定された結果のみを返す定型化された数式のようなものではありません。世代を超えて蓄積された無数の人々の記憶や願いを受け止める、包容力のある器なのです。ただし、後世に新たに付与された意味を、あたかも何千年も前から続いてきた不変の伝統であるかのように誇張したり創作したりする態度は、慎重に警戒しなければなりません。現在のウズベキスタン国旗は、1991年に議会の立法手続きを経て正式に採択された現代の民主共和国の象徴だからです。

国旗にある白い三日月の文様もまた、イスラム教という宗教一つのみを指すものとして狭く解釈することはできません。国家の公式解説書は、長きにわたる抑圧を乗り越えて新たに誕生した独立共和国の歴史的な旅立ちを最優先の位置づけとして説明しています。[A014] ウズベキスタンが憲法に基づく政教分離の世俗主義国家であるという法的アイデンティティと、長い年月にわたり国民の大多数がイスラムの伝統文

化の息吹の中で暮らしてきたという生活史的な事実が、この小さな三日月の象徴の中で調和を保ちながら交差しているのです。

国章の中央に描かれたフモの鳥は、生物図鑑に載っている実在の鳥類の細密画ではありません。万民の平和と幸福、何ものにも縛られない自由を祝福する伝説上の霊鳥です。神話に登場する神秘的な鳥を国家の代表的な象徴として採用した背景には、旧王朝の権威をそのまま復元しようとする過去志向の意図というよりは、新たな時代を切り拓く主権国家の希望に満ちた気概を表現しようとする意志が込められています。空に向かって力強く銀の翼を広げた躍動的な姿は、ともすれば静的に固まりがちな国章に、生き生きとした生命感と前進の気風を吹き込んでいます。

名を変えること、記憶を変えること

1991年の独立達成後、ウズベキスタンの都市空間では大通りや中心広場、地下鉄駅の看板が一新されました。かつてのソ連共産党指導者の名が記された標識を取り外し、その場所にアミール・ティムールや大詩人アリシェル・ナヴォイといった民族の歴史的人物や、自主独立を記念する名称を新たに掲げたのです。都市の地名を付け替える作業は、日常の道路標識を整備する行政実務を超え、共同体が公共の空間においてどのような歴史を共有し称えるかを新たに選び直す、集団的記憶の再編の過程でした。

官公庁が新しい名称を公布したからといって、人々の頭に刻まれた長年の記憶までが一瞬で消え去るわけではありません。その都市で何十年も暮らしてきた生え抜きの高齢者たちは、日常の会話の中で今なお慣れ親しんだ古い呼び名を自然に口にすることもあります。一つの場所が二つの名前を同時に抱えながら呼ばれる間、その街を通り過ぎていった異なる世代の交錯する暮らしと体験が水面に浮かび上がります。スマートフォンの地図画面に表示される整然とした新しい道路名と、年配のタクシー運転手があたりまえのように聞き取る昔の地名がすれ違うとき、見知らぬ都市に足を踏み入れた旅行者は、急激な歴史の転換が残したかすかな隙間を肌で感じ、戸惑いとともに妙な好奇心を抱くことになります。

14世紀の征服者アミール・ティムールを民族の中心的な英雄として称揚した政策もまた、独立後に国家が推し進めた記憶の再構築における核心的な環でした。ソ連統治期には征服戦争の過程で行われた残酷な暴力性や中世封建君主としての側面が強調

されていたのに対し、独立後はユーラシアに号令した偉大な国家建設者であり、輝かしいイスラム文化を開花させた庇護者としての側面が前面に出されました。しかし、二つの視点のうちどちらか一方のみを歴史的真相のすべてであると断定することはできません。広場にそびえる巨大なティムール像を見上げるとき、私たちは天を突くような彫像の高さにただ感嘆するだけでなく、当時の国家権力がなぜ数多くの人物の中からとりわけ彼を英雄として選び出したのか、その選択の背景を静かに問い直す必要があります。

生きた遺産と住民の権利

歴史都市の土壁の家々は、博物館のガラスケースの中に収められた剥製の展示物のようなものではありません。今日を生きる住民たちが毎朝あたたかい食事を作り、夜には子どもを腕に抱いて寝かしつける、かけがえのない生活の場です。歴史文化保存地区という厳格な規制に縛られ、伝統的な土壁の色合いを維持し、高価な天然の屋根材ばかりを用いなければならない管理指針は、そこに暮らす住民に少なからぬ経済的負担と生活上の不便をもたらしかねません。通りに外部からの観光客を当て込んだ華やかな土産物店やカフェがひしめき合うにつれ、住民の日常に欠かせない小さな自転車修理店や路地の食料品店が郊外へ追いやられる事態も生じています。

真に正しい文化遺産の保存は、古い建造物の外観や物理的な年代を守るだけにとどまりません。その歴史的な空間の中で代々暮らしてきた住民が、生活の場を失うことなく快適に暮らし続けられる条件にも目を配る必要があります。地元住民や伝統職人の生の声に耳を傾け、老朽化した住宅の修繕費用を補助し、火災を防ぐ消防設備や清潔な上下水道のインフラを整えなければなりません。曲がりくねった古い路地の凹凸ある風情を削り取り、大型観光バスが行き交う広いアスファルト道路へと造り替えてしまえば、旅行者の記念撮影は容易になるかもしれませんが、長い歳月をかけて路地に重なり合ってきた場所の記憶や趣は、あえなく失われてしまいます。

2026年にユネスコ世界遺産へ新たに登録されたタシュケントの近代建築遺産群は、遺産の価値を見つめる私たちの視野を一段と広げてくれます。[A018] 人類が保存すべき文化遺産は、中世に建てられた青いモスクのドームや堅牢な城壁の遺跡だけに限定されるものではありません。1966年の大地震による壊滅的な被害を乗り越え、タシュケントの中心部に新たに建設された住宅団地や複合文化会館、活気ある中央市場、

そして美しい地下鉄の駅舎もまた、激動の時代を生きた庶民の暮らしぶりを生き生きと物語る貴重な歴史的資産です。そう遠くない近い過去の遺産を保存するという課題は、今も市民が通勤で日常的に利用している息づく公共建築を、損なうことなくどのように修繕し維持していくかという、現実的で賢明な解決策を求めています。

博物館の展示ケースの外へ

文化遺産を完全に保全することは、名高い記念碑的建造物の割れたレンガを補修する作業にとどまりません。鮮やかな青いタイルを窯で焼き上げる職人の熟練した技術や、村の結婚式で歌われる伝統的な祝歌、こねたばかりのパンを手際よく熱いタンドール窯の内壁に貼り付ける見事な手さばきもまた、世代間の継承が途絶えてしまえば、いつでも永遠に失われかねない無形の遺産です。息づく無形の技は、博物館の記録映像や図書館の書籍を残すだけで自然に受け継がれるものではありません。その技を受け継ぐ若い後継者が正当な労働の対価を得て、誇りを持って家族を養い生計を立てられる社会的な土壌が整ってこそ、初めて生命力を保ち続けることができるのです。

大衆的な観光商品の開発は、忘れ去られつつあった伝統工芸の魅力を世に広く知らしめる契機となります。国内外の旅行者からの注文が殺到すれば、閉鎖寸前だった路地の工房が再び活気を取り戻すこともあります。しかしその一方で、安価で素早く大量生産される土産物の需要に応えるため、代々守り継いできた天然素材を化学顔料に置き換えたり、緻密な手作業の工程を省いたりするような、残念な変質が起きることもあります。もちろん、時代に伴う変化そのものを無条件にまがい物や歪曲だと非難することはできません。私たちが知る伝統もまた、数百年の歳月の中で絶えず変化し適応してきた結果だからです。こうした変化の方向性を誰が主体的に決定し、それによって生まれる経済的な果実が果たして誰の手に渡るのかが、実質的な核心の問題なのです。

博物館のガラスの向こうに置かれた遺物の解説文には、発掘された正確な出土地や制作年代、使用された鉱物や織物の原産地、学術的な考証に基づく推定の根拠が、ありのまま透明性を持って記されていなければなりません。「眩い古代の帝王の黄金の秘宝」といった華美な修飾語ばかりを前面に押し出せば、その貴重な器物を汗水流して作り上げた無名の職人や、日常生活の中で手になじませて使っていた名もなき民衆の存在は、跡形もなく消し去られてしまいます。遺物に関するデジタルアーカイブ

の資料を一般に公開する際にも、遺物原本の精密な色彩情報や実測寸法、高解像度撮影の日時や当時の物理的な保存状態を詳細に記録し、併せて提示する必要があります。

一国の国家象徴や文化遺産は、歩んできた歴史の軌跡を見渡すための透明な窓のようなものです。もしその窓枠に過度に華美な金箔や装飾を施してしまえば、肝心の窓の外に広がる真の歴史の風景を覆い隠してしまう過ちを犯しかねません。サマルカンドのモスクを彩る鮮やかな青いタイルの美しさに感嘆するだけでなく、一歩進んで、その精緻な文様を誰が焼き上げ、今この瞬間にどのような人々の汗によって守られているのかを冷静に問い直す成熟した姿勢が求められます。歴史や伝統への真の敬意とは、無批判な称賛の中で問いを止めてしまうことではなく、絶えず問いを投げかけ、そこに宿る人々の息づかいを見いだしていく旅路だからです。

だからといって、シルクロードを血生臭い征服と略奪が繰り返された戦争の通り道にすぎないと見なすこともできません。絹の道を行き交ったソグド商人たちは、言語や法律がまったく異なる異国の都市の間で、揺るぎない商業的信頼と信用制度を強固に築き上げました。腕利きの職人たちは、はるか遠方から伝わった見慣れない美術文様を自国の粘土や塗料に合わせて再解釈し、創造的に変化させました。巡礼の旅に出た宗教者たちは、聖なる経典を翻訳する過程で、異質な思想を表現するための新たな語彙や表現を精力的に探究しました。文明は別の土地へと渡る際、機械的に複製されたわけではありません。険しい国境を越えるたびに、出会った人々の手によって少しずつ新しく書き直され、磨き上げられていったのです。

ウズベキスタンがシルクロードの栄光を繰り返し強調する理由もまた、過ぎ去った過去の栄華を誇示することにとどまりません。海に出るためには少なくとも二つの国境を越えなければならない二重内陸国という地政学的な制約を乗り越え、ユーラシア大陸を貫く鉄道や道路網、航空路を四方へと途切れなく結ばなければならないという、切実な国家の生存課題がかかっているためです。数千年前の絹の道の歴史は、現代のユーラシア複合物流網を宣伝する格好の標語にもなります。しかし真に重要なのは、華やかな昔の名前ではなく、国境を現実には結ぶインフラや制度の質です。国境税関を通過する時間の短縮、すべての商人に公平に適用される透明な行政規則、現場の労働者の安全な作業環境、そして要所に暮らす地域住民にもたらされる実質的な経済的恩恵こそが、今日開拓される新たな道の品格を決定づける真の尺度なのです。

ウズベキスタンの国旗や国章、手にする通貨もまた、これとまったく同じ省察の問いの前に立っています。国旗の青色や国章のフモの鳥、紙幣に印刷された壮大な青いドームの文様が、今日を生きるすべての平凡な市民の暮らしと真に結びついているのかという問いです。国家の象徴が謳う崇高な自由が市民の具体的な日常の権利として実現されているのか、由緒ある歴史都市に流れ込む観光収益が、その地を守り続けてきた貧しい住民たちに公正に分配されているのかを問わねばなりません。目を奪う美しい視覚的イメージは、当然投げかけるべき現実の問いを遮る華美な帳であってはならず、むしろより深い真実に向けて省察の対話を開く扉となるべきなのです。

ウズベキスタンの国家象徴は、誕生したばかりの新興独立国が数千年の悠久の記憶の中から丹念に選び出し紡ぎ合わせた視覚の言語です。その象徴言語の中には、生命の源である清らかな水と青い空、民を育ててきた穀物と白い綿花、大陸を結んだシルクロードの足跡と自主独立の誇りが余すところなく込められています。こうした国家の象徴よりもはるかに遠い人類の痕跡もまた、中央アジアの地の奥深くに静かに息づいています。原始の洞窟の底で見つかった小さな骨の破片、乾いた土の中に埋もれた古代の灌漑水路、崩れた寺院の壁にかすかに残る日干しレンガの破片は、文字が生まれるはるか以前からこの地に足をつけて生きてきた名もなき人々や、忘れ去られた古代王国たちの逞しい生命力を、今を生きる私たちに静かに語りかけています。

第3章 古代文明の黎明と考古学的発掘

洞窟の床から子どもの骨が見つかりました。その傍らには野生ヤギの角が並んで置かれていました。この光景を目の当たりにした旅人は、心の中に淡い物語をまず思い浮かべがちです。誰かが亡くなった子どもを愛おしむあまり、心を込めて埋葬したのだろうと推測したくなります。しかし考古学は、そうした感情の性急な疾走を立ち止まらせる学問です。土が堆積した層位や骨の置かれた位置、石器に残る摩耗の痕跡を冷静に見定めながら、私たちがどこまでを事実として語ることができるのか、その範囲を定めるからです。

テシュク・タシュの子どもが再び語りかける

1938年、アレクセイ・オクラドニコフ率いる調査団は、ウズベキスタン南東部のバイスン・タウ山地にあるテシュク・タシュ洞窟で子どもの人骨を発見しました。この人骨は浅く掘られた穴から出土し、周囲を野生ヤギの角が囲んでいたという記録が残されています。傍らから共に出土した石器群は、中期旧石器時代のムスティエ文化に属する遺物であることが判明しました。[A019]

発掘が行われた後、学会では長きにわたる議論が続きました。その子どもが果たしてネアンデルタール人なのか、野生ヤギの角は人が意図して置いたのか、さらには死者を悼む埋葬儀礼が存在したのかが議論の中心でした。当時の現場記録は現在の厳格な基準から見れば不十分な点も少なくなく、洞窟内にはもともと野生ヤギの骨が多く存在していました。ヤギの角が置かれた状態を手厚い儀礼の痕跡と捉える解釈がある一方で、歳月の経過とともに自然に散乱して堆積した結果とみなす見解も拮抗しています。残された資料が直接語ってくれない感情を性急に付け加えてしまえば、科学はたちまち小説へと変わってしまいます。

子どもの頭蓋骨の形態を再分析した研究群は、人類分類を巡って見解が分かれる判断を下すこともありました。しかしミトコンドリアDNAを分析した研究が登場したことで、この子どもはネアンデルタール人系統として整理されました。スミソニアン人類起源プログラムでも、テシュク・タシュの人骨をネアンデルタール人化石として

分類し紹介しています。[A019] このように考古学では、過去に定着した結論であっても新たな科学技術が登場すれば、再び検証の扉が開かれることになります。

2026年8月14日に公開された新たな研究は、「テシュク・タシュ1」と名付けられたこの人骨の核DNAを精密に分析しました。骨片の標本には長い年月の間に混入した現代人のDNAが多く含まれており、古代DNAはわずかしかなかった状態でした。研究チームは外部からの汚染度と人類集団間の関係性を同時に算出する「admixslug」と呼ばれる分析手法を開発しました。計算の結果、テシュク・タシュ1はアルタイ山脈の初期ネアンデルタール人よりも西ユーラシア地域の後期ネアンデルタール人と遺伝的により近く、デニソワ人の祖先の痕跡は見出されませんでした。[A020]

研究チームは、テシュク・タシュ1の系統が西ユーラシアのネアンデルタール人系統から約8万年前から10万年前に分岐したと推定しました。[A020] この研究はまだ査読者による正式な評価を経ていないプレプリント（事前公開論文）の段階です。今後新たな標本が追加され、学会による綿密な検証を経る中で詳細な内容が変わる可能性も残されています。それでも、長い歳月を耐え抜いた小さな骨片から核ゲノムの微細な信号を分離し抽出したという事実は、意義深い前進です。

コンピュータ工学では、ノイズが激しく混ざった信号から元の原データを完全に復元する作業が基本となります。古代DNAを扱う分析もこれと変わりません。注意すべき点は、一見精密に見える計算モデルが、時には表面上もっともらしい答えを作り出してしまう危険性があるという事実です。したがって研究者は、外部汚染を除去した計算モデルや比較に用いた標本、誤差範囲を透明に明らかにしなければなりません。読者もまた、最新技術を用いたという言葉だけに依拠して性急に結論を鵜呑みにしてはなりません。技術が持つ真の信頼は、誰もがその過程を確かめられる透明な検証から生まれるのです。

テシュク・タシュ遺跡が語りかける物語は、英雄たちの武勇伝よりもはるかに穏やかで静かです。ネアンデルタール人は一般に考えられているようにヨーロッパの地だけに留まっていたわけではなく、アジア大陸中央の深い山岳地帯にまで足跡を伸ばしていました。この子どもの傍らで暮らしていた人々は、岩陰に火を焚き、石を打ち欠いて道具を整え、険しい断崖で野生ヤギを狩っていました。子どもを埋葬する際に温かな儀礼を執り行ったのかどうかは、まだ断定せずに保留にしておくのが賢明です。

確実には知り得ない事実を素直に「分からない」と記す姿勢もまた、確かな知識の一部だからです。

岩に残された身振り

ウズベキスタンの乾いた峡谷や岩山の至る所には、遠い昔の人々が刻み込んだ岩絵（ペトログリフ）が残されています。ナヴォイ州に位置するサルミシュサイ峡谷は、岩絵が密集している代表的な遺跡です。ユネスコ暫定リストの資料によれば、この岩絵は新石器時代から刻まれ始め、後期青銅器時代から初期鉄器時代に至ると、シカや野生ヤギ、ウマやラクダ、弓を構える人や馬上の狩人の姿が生き生きと描かれます。[A021]

岩に刻まれた絵は、現代の風景写真とは異なります。絵を描いた古代人が、目の前の世界をありのままの比率に合わせて写し取った精密な記録でもありません。ある動物は岩一面を埋め尽くすほど大きく描き、肝心の人間の姿は片隅に小さく刻み込むこともありました。これは狩猟の成功体験を残したものであるかもしれませんが、部族の安寧を祈る共同体の儀礼や、縄張りを知らせる境界の標識であった可能性もあります。一つの絵に込められた意味を安易に一つに決めつけるのではなく、周囲から出土した遺物や絵の上に重ねて描かれた層位を隈なく見定めてこそ、本来の意味に近づくことができます。

荒々しい岩の表面に形象を刻み込む作業には、少なからぬ時間と労力が注ぎ込まれます。硬い石で岩肌を根気強く叩き、削りながら、鮮明な線を掘り起こさなければなりません。峡谷を歩いていると、同じ岩壁に異なる時代の絵が幾重にも重なっている光景に出会います。一つの場所が数百年にわたり、幾世代もの記憶を追記していく掲示板のような役割を果たしたわけです。コンピュータ画面の共有ドキュメントに複数人の編集履歴が層をなして積み重なっていく様子と似ていますが、岩には間違いを消して元に戻すアンドゥ機能がないという点だけが異なります。

青銅器時代に入ると、一箇所に腰を据えて暮らした定住の痕跡が顕著になっていきます。ウズベキスタン南部スルハンダリヤ州のサパリテパやジャルクタンといった遺跡では、日干しレンガで建てられた建物や穀物貯蔵施設、巧みに成形された陶磁器や金属を扱った工房の跡が発掘されています。人々は季節の移り変わりに応じて移動を繰り返すだけの暮らしから脱し、豊かな水辺のほとりに居を定め、穀物を蓄えて定

住するようになりました。これに伴い、日常生活を送る住居、物を作る工房、祭祀を執り行う儀礼空間が明確に分かれ始めました。

これらの遺跡は、考古学で一般に「バクトリア・マルギアナ考古学複合体」、略してBMACと呼ばれる文化圏と密接に結びついています。研究者たちはアムダリヤ川流域を中心に繁栄した青銅器時代の定住文化を説明する際、この学術名称を用います。呼び名としては便利ですが、現代の国家のように国境線が明確な単一の国家を意味するわけではありません。砂漠の中に点在する複数のオアシス遺跡に共通して見られる生活様式や遺物の類似点をまとめ、研究するために付けられた名称です。

都市がいつ始まったのかを、土で築かれた城壁一つだけを見て断定することは困難です。集住する人口が増加し、人々が各自の役割を分担し、収穫物を保管する倉庫を管理し、遠隔地と物資をやり取りする交易網が整うといった変化が噛み合っこそ、初めて都市と呼ぶことができます。出土した陶器の粘土の成分を分析すれば、その器がどこで作られて運ばれてきたのかが分かります。墓に副葬された供え物の食糧や華やかな装身具は、当時の人々の身分や社会格差を示しています。土の中に残された炭化種子や動物の骨は、その時代の食卓の風景と周囲の気候を生々しく伝えてくれます。

アレクサンドロスが渡った川

紀元前4世紀、アレクサンドロス3世率いるマケドニア軍は、強大なアケメネス朝ペルシアを滅ぼした後、バクトリアおよびソグディアナ地域へと進軍しました。ここは現在のアフガニスタン北部とウズベキスタン南部、タジキスタンおよびウズベキスタンのザラフシャン川一帯に広がる広大な地です。遠征の道は平穏な行軍では終わりませんでした。地形に精通した現地部族の頑強な抵抗と、険しい岩山で繰り広げられる熾烈な山岳戦が長く続きました。

アレクサンドロスの死後、この地域はセレウコス朝の統治下に置かれました。やがて紀元前3世紀半ば、バクトリア総督ディオドトスが独立を宣言し、グレコ・バクトリア王国が勢力を拡大しました。大英博物館の解説によると、この王国の存続期間はおおよそ紀元前250年頃から紀元前145年頃までであり、バクトリアからソグディアナにかけて地中海文化の伝統を受け継いだヘレニズム国家でした。[A022]

グレコ・バクトリアという名に初めて触れると、西洋のギリシア人がやって来て現地の文化を一方的に塗り替えてしまった光景を思い浮かべがちです。しかし地中から出土した発掘遺物は、二つの文化が見事に調和した混交の姿を鮮明に物語っています。鑄造されたコインに刻まれた国王の肖像やギリシア文字は地中海の伝統を示していますが、建物の建築材や日常生活の道具は中央アジアの気候と環境に合わせて工夫されていました。神殿から見つかる神々の姿や彫像の衣装もまた、東西の多様な文化圏の特徴を余すところなく宿しています。

テルメズ西側のアムダリヤ川岸に位置するカンピール・テパ遺跡は、こうした文化の出会いを直に確認できる代表的な場所です。ユネスコの古代テルメズに関する資料は、カンピール・テパを中央アジア古代文明の中核的な定住地として紹介しています。川を見下ろす堅固な城塞や渡し場として機能した渡河地点が残されており、ヘレニズム時代からその後のクシャーナ朝時代に至るまで、人々が引き続いて地盤を整え生活を営んだ堆積層が発掘調査によって確認されています。[A023]

学会の一部では、カンピール・テパを古代文献に記されたオクサス川のアレクサンドリアと見なすべきだという見解が提示されました。ウズベキスタンの研究チームは、雄大な城壁や川沿いの港湾施設の痕跡、出土した貨幣や文字資料を根拠にこの主張を展開しました。しかし、すべての考古学者がこの場所こそがその伝説の都市であるとは同意しているわけではありません。カンピール・テパ遺跡を巡る探訪者であれば、城壁の前で好奇心を抱きつつも慎重な姿勢を保つことが望まれます。正確な古代都市名については今なお学術的な論争が続いていると明記したうえで、アレクサンドロスの東征期およびヘレニズム時代を支えた極めて重要な川沿いの拠点要塞であったと記述する方が確実に正確です。

地中の堀を突き止めた2026年の研究

ウズベキスタン南部に位置するイスカンドル・テパは、外見だけを見ればごく緩やかでありふれた土の丘のように見えます。2026年6月に学術誌で発表されたある研究は、磁力計や地中レーダーなどの物理探査機器と実際の発掘調査を併用し、地中に隠された人工構造を明らかにしました。磁力計は土壌が持つ磁氣的性質のわずかな差異を感知し、地中レーダーは地下へ放射した電波が埋設された構造物に当たって跳ね返ってくる時間を精密に測定することで、地下の形状を描き出します。

探査の結果、長さ約400メートルに及ぶ堀が1.2ヘクタールの空間を円形に取り囲む構造が浮かび上がりました。堀の内側からは円形の穴群や、大型の穀物貯蔵用瓶と推定される痕跡が捉えられました。その後に実施された実際の発掘調査でも、防御用の堀や生活用の水路として使われたと思われる構造が確認されました。[A024]

研究チームは、周囲を見渡せる高台の地形や防御に有利な配置、石やレンガで堅牢に建てられた恒久的な建築物が存在しない点、そして随所に埋設された大型貯蔵瓶を根拠として、ここが短期間滞在したギリシア軍の臨時駐屯地であったと解釈しました。[A024] これは動かしがたい確定的な都市名というよりは、収集された証拠資料とよく整合する説得力ある仮説です。木の柵や革のテントで建てられた仮設の宿舎は、年月が経てば跡形もなく消え去ってしまうのが常であり、石積みの壮大な城塞よりもその遺構を見つけ出すことははるかに困難です。

この調査が喜ばしいのは、きらびやかな黄金の財宝を見つけ出したからではない。土の中に埋もれて目に見えなかった日々の暮らしの構造を、科学技術によって丹念に読み解いたからである。約2,200年前、遙かな遠征の途についた兵士たちにとっても、清浄な水を確保して蓄えることは、日々直面する生存に関わる問題であった。土の中から現れた割れた甕や溝は、英雄たちの華々しい戦闘の物語よりも、静かで率直な声で軍需補給と兵站の現実を物語ってくれる。どれほど勇猛な軍隊であっても、飲み水や食糧、昼夜を分かつため警戒勤務の予定表がなければ、一步も前に踏み出すことはできない。

新たに導入された先端の探査機器は、土を一から掘り返すことなく広い地域を一目で見渡すことを可能にしてくれる。とはいえ、探査機器の画面に浮かび上がったかすかな斑点を、すぐに住居跡や墓だと断定してはならない。機械が送ってきた信号を入念に解釈したうえで、実際に小さな区画を精密に発掘し、目で確認する工程が伴わなければならないのである。探査機器のデータと現地での発掘、放射性炭素年代測定、古い文献の記録が互いを照らし合わせながら検証してこそ、初めて過去の輪郭が鮮明になる。たった一つのセンサー信号にすべての答えを委ねようとすれば、かえって大きな誤りに陥りやすい。

時間を測るさまざまな時計

地中に埋もれた遺跡の年代を解き明かす方法は、一つだけではない。土が堆積した層位の上下関係を調べれば、どの遺物が先に埋まったのかという時間の相対的な先後関係を捉えることができる。通常は下にある層ほど先に堆積した層であるが、後代の人間が穴を掘ったり動物が地中を荒らしたりすると、層位の順序が入り乱れることもある。そのため発掘者は、土の境界が曖昧な部分に至るまで細心に観察し、入念に記録を残さなければならない。

放射性炭素年代測定法は、燃えた木炭や穀物の種子、人や動物の骨のように、有機物に残された炭素同位体の比率を測定する技術である。機器が算出した測定値には常に一定の誤差範囲が伴い、これを私たちが用いる暦年代へと適切に換算する較正作業も経なければならない。考古学研究において年代を提示する際、紀元前2000年のように針の先ほどの特定の時点一つに限定せず、可能性の高い時間幅として説明する理由がここにある。

土をこねて作られた陶磁器の高台や把手の形、表面に刻まれた文様の変遷過程も、過去を示す優れたタイムテーブルの役割を果たす。形態や製作技法の変化の順序がすでに十分に解明されている標準的な遺跡の遺物と比較対照しながら、時代を推し量るのである。文字が刻まれたコインは統治者の名や発行時期を教えてくれるが、家々で代々受け継がれ長く保管されていたコインが、はるか後代の土層から出土することも珍しくない。泥水の中から一枚のコインを発見した発掘者は、束の間胸を高鳴らせながらも、そのコインが層位の絶対年代をおのずと証明してくれるわけではないという事実を思い起こし、気を引き締め直すことになる。

文字が鮮明に記された碑石や文書は、歴史を解き明かす強力な手がかりとなる。それでも、羊皮紙や木板に文字が書かれた日付と、その品が壊れて地に埋もれた時点との間には、数十年あるいは数百年の開きが生じることもある。このため考古学者は、さまざまな種類の時計を並べて広げ、互いの歯車を噛み合わせてみる。異なる測定値が衝突したとき、自分の考えに都合のよい結果だけを選び取るのではなく、食い違った誤差がなぜ生じたのか、その原因を粘り強く掘り下げていく作業こそが考古学の基本である。

人骨が語る生

発掘現場で収拾された人骨は、その人物が生きた年齢や性別、患った病気、摂取した栄養状態に関する貴重な手がかりを与えてくれる。歯の萌出段階やすり減った摩耗度、骨の継ぎ目がしっかりと癒合した度合いを丹念に観察すれば、息を引き取った当時の大まかな年齢を推定することができる。骨に残る骨折や治癒の痕跡は、不慮の事故や激しい暴力によって負った傷を物語る。歯の表面に細く窪んだ筋模様は、幼少期に食べ物が不足して経験した過酷な栄養欠乏の苦しみをありのままに物語っている。

骨に残る安定同位体を分析する手法は、古代の人々が主に何を口にし、どこへ移動したのかを追跡するために用いられる。乳歯や永久歯が生えそろう幼少期に形成される歯のエナメル質は、その子が育った故郷の土と水が持つ固有の地質学的シグナルをしっかりと抱え込んでいる。これに対し、生涯を通じて少しずつ再形成される骨組織は、人生の後半期に摂取した食事や環境の情報を反映する。歯と骨から得られた二つの成分値を比較することで、その人が生まれた故郷と生涯を終えた場所が異なっていたのか、すなわち遥かな距離を移動した移住者であったのかどうかを見分けることができる。

古代の人骨から抽出された古代DNAは、血縁関係や人類集団の大規模な移動経路を解き明かす鍵となる。テシク・タシュ洞窟の人骨研究に見られるように、長い年月を経て骨の保存状態が思わしくない場合、外部から混入する汚染を取り除くことはきわめて困難な課題として浮上する。[A020] 発掘当時、調査者が素手で人骨に触れた際に残した皮膚の角質や汗の滴さえも、分析結果に混ざり込んでしまう恐れがあるからである。そのため今日の現場では、研究者たちが防塵マスクと滅菌手袋を着用し、採取した試料がどのような経路で運ばれたのかを入念に記録に残している。

地中から見つかった人骨は、学術的な研究対象である以前に、生涯にわたり喜びや悲しみを経験しながら生きた一人の人間の尊厳ある身体であった。博物館に人骨を展示したり、写真を撮影したり、骨の破片を砕いてDNAを採取したりする過程には、常に深い倫理的配慮が伴わなければならない。遺跡が存在する地域の住民の心情や国家の法律上の規定、伝統的な宗教的情緒をあまねく尊重し、慎重に向き合う必要がある。科学的な好奇心や研究目的がいかに崇高なものであろうとも、無分別な損壊や試料採取のすべてが正当化されるわけではない。

一体の仏像に重なり合う多様な美術

クシャーナ朝の時代に花開いた仏教美術は、しばしば地中海のギリシャ彫刻芸術と南アジアのインド宗教思想が融合した結実であると説明される。仏像の身体を包む流麗な衣の襞や自然な人体描写には、ヘレニズム彫刻の深い痕跡を垣間見ることができる。その一方で、彫刻に込められた仏陀の教えや独特な手の印相、台座に刻まれた蓮の花や法輪の象徴は、南アジア固有の仏教伝統へとつながっている。

こうした説明についても、東洋と西洋という二つの文化が機械的に結合した構図としてのみ捉えてはならない。バクトリアやガンダーラ地方には、ペルシア系統のイラン系信仰や、代々受け継がれてきた現地の職人たちの技術、地中海のローマ帝国から運ばれてきた珍しい交易品が一堂に流れ込んでいた。クシャーナ朝のコインに多様な文化圏の神々がそれぞれの名と姿で刻まれている事実は、このことを如実に示している。[A025] この帝国の芸術は、各方面から押し寄せた豊かな文化的刺激をスポンジのように吸収して生み出された複合的な結晶であった。

当時の職人たちは、遠方から渡ってきた見慣れぬ意匠をただ模倣するにとどまらなかった。自らが足をつける土地の粘土や天然顔料を用い、造仏を支援する発注者の嗜好や寺院の建築空間に調和するよう、その造形を見事に磨き上げた。ある言語を別の言語に置き換える翻訳は、言葉や文字の上だけで起こるものではない。彫像の構えや身にまとった衣の裾、寺院建築の設計平面もまた、異なる文化を自然に結びつける視覚的な翻訳としての役割を十二分に果たしていたのである。

発掘の後に続く、より長い保存

土をこねて天日で乾かした日干しレンガの遺跡は、地中に埋もれているときこそ比較的安全で安定した状態を保っている。しかし、ひとたび土を取り払って外の世界へと姿を現すと、照りつける日差しや激しい風雨、昼夜の寒暖差に耐えきれず、急速に崩れ落ちていく。考古学の発掘が偉大な発見であると同時に、遺跡にとっては取り返しのつかない損傷の始まりにもなり得る理由がここにある。調査を終えたあとに再び土で覆い戻すのか、風雨を防ぐ保護屋根を架けるのか、あるいは安全な一部の区画のみを一般に公開するのかを慎重に判断しなければならない。

遺跡を訪れる旅行者の無頓着な足取りや触れる手もまた、古い土壁の表面を摩耗させていく。見学路に案内板を設け、決められた動線に沿って歩かせ、壁に触れないよう制止する措置は、見学者を不自由にするための規制ではない。後の世代の子どもたちも同じ場所に立ち、この古き壁を眺めることができるよう、貴重な時間を稼ぎ出す知恵ある配慮なのである。現地の博物館における安全な収蔵庫設備や保存の専門人材に力を注ぐことなく、人目を引く有名な遺物の展示会ばかりに固執するなら、文化遺産を支える基盤そのものが揺らぐことになる。

暗闇の中で行われる不法な盗掘や陰の遺物取引は、遺物が秘めている大切な文脈を根こそぎ消し去ってしまう。見事な黄金の装身具が骨董品市場に流出すれば、品物そのものは残るとしても、その遺物が誰の墓の、第何層の土層から、どのような祭祀具とともに出土したのかという貴重な情報は永遠に失われてしまう。考古学において遺物が持つ真の価値は、外見の華やかさよりも、周囲のものと結んでいる有機的な関係性から生まれる。出所と文脈を失った遺物は、コンピュータ上でファイル名や作成日時、保存先パスがことごとく消去された無意味なデータの断片と何ら変わらない。

住民とともに遺跡を読み解く

遠方から訪れた発掘調査チームは数週間滞在して調査を終えれば去っていくが、村の住民たちは生涯にわたって遺跡の傍らで暮らし続ける。春先に畑を耕していて割れた土器の破片を手にし、激しい雨のあとに土が洗い流された丘で埋もれていた壁の輪郭を誰よりも早く見出すのも、そこに暮らす住民たちである。代々語り継がれてきた村の地名や口承説話は、失われた遺跡の位置を突き止める優れた道標にもなる。説話の中の物語をそのまま歴史的事実として受け入れることはできないにしても、新たな調査を始める際に抱くべき貴重な問いの手がかりとするには十分である。

文化財を保護するという名目で住民たちの自由な土地利用や営農を無分別に阻めば、深い葛藤の溝が生じることになる。保護区域の境界を定める際には、適切な土地補償や住民の生活対策、日常的な通行の権利をともに議論の場に乘せ、知恵を絞らなければならない。外部から訪れた研究者が学術論文だけを持ち去り、調査記録や研究成果を現地の博物館や住民へと還元しなければ、知識の不平等はより一層深まるばかりである。

模範的な一般公開発掘調査は、調査結果とともに研究が抱える限界を分かりやすい言葉で市民に丁寧に説明してくれる。地中から何を新しく見つけ出したのかを知らせるにとどまらず、現在の知見では何がまだ明確に分かっていないのかを率直に明かすのである。イスカンダル・テパ遺跡を古代ギリシャ軍の駐屯地と推定する根拠を提示しつつも、なお解かれていない疑問符の数々を包み隠さず提示する姿勢こそが、まさにその好例である。[A024]

学校の授業や地域の歴史探訪において、こうした古代遺跡を学びの場として活用すれば、育ちゆく子どもたちは自らの足元にある故郷の村が、大きな世界史の流れとどのように結びついているかを自然と悟るようになる。ただし、自らの民族のルーツが遙か昔に遡ることを誇示したいがために、数千年前の古代遺跡に現代の民族の名を無理に当てはめてはならない。健全な誇りというものは、歪められていない正確な歴史的事実の上に立ってこそ、正しく育まれるのである。

現代の科学技術を利用したデジタル複製の作業も、遺跡研究の大きな力となる。3次元立体スキャンデータやオンラインの公開地図は、遠く離れた研究者であっても現地に直接赴くことなく遺物の形態を精密に比較分析できるようにしてくれる。だからといって、デジタルデータが風雨を耐え抜いてきた実際の遺物原本に完全にとって代われるわけではない。スキャンの精度や撮影当時の照明環境、記録から漏れた死角などをデータに漏れなく明記しておかなければ、次の研究者がデジタル資料の限界や誤差を正しく把握することはできない。

クシャーナ朝、神々が刻まれたコイン

紀元前2世紀頃、北方の遊牧民である月氏の部族集団は中央アジアの西方へと大規模な移動を開始した。その中から貴霜と呼ばれた一分派が散らばっていた勢力を一つにまとめ、強大なクシャーナ朝を打ち立てた。クシャーナ朝は紀元後1世紀から3世紀頃にかけて、中央アジアやアフガニスタン、パキスタン、北インドにまたがる長大な国際交易網を開花させた。[A025]

クشان帝国が発行したコインには、多様な言語やさまざまな宗教の神々が登場します。ギリシャ神話の神やイラン系のゾロアスター教の神、南アジアのヒンドゥー教や仏教のシンボルが、たった一枚の貨幣の中に自然に刻まれていました。これは、帝国の統治者が広大な領土に暮らす数多くの民族の多様な文化や信仰を受け入れ、治

めていたことを示す証しです。小さく重みのあるコインは、市場で商人たちの手を行き交いながら、国王の権威と帝国の威信を広く知らしめるメディアの役割を見事に果たしました。

アメリカのメトロポリタン美術館の資料は、クシャン帝国が地中海のローマ世界と紅海、アラビア海とインド、中央アジアと中国をクモの巣のように結ぶ東西交易網の中心に位置していたと説明しています。仏教はクシャン帝国の積極的な後援のもとで大いに栄え、教えを伝える僧侶や品物を売る隊商たちは、中央アジアのオアシスの道に沿って東の中国を目指し、果てしない旅を続けました。[A025]

ウズベキスタン南部のテルメズに位置するファヤズ・テパとカラ・テパの遺跡は、クシャン帝国時代に栄えた仏教の足跡を色濃く残しています。ユネスコの調査資料は、古代テルメズが仏教思想と現地の伝統、インドやイラン、ギリシャ・ローマ文化が一堂に会した輝かしい交差点であったと紹介しています。[A023] 発掘された寺院跡には、仏を祀る礼拝空間や僧侶たちが起居して修行した僧坊、雄大な仏塔とともに、華麗な壁画や繊細な彫刻像がそのまま残されていました。

仏教がインドを出発して東アジアへと渡った道を、地図の上に一本の線を引いて朝鮮半島まで一息につなげようとする、そこに込められた深い歴史の重みを見落としがちになります。神聖な経典や仏像彫刻の様式は、数百年の歳月のなかで数多くのオアシス都市を経由し、異なる言語へと幾度となく翻訳されるという困難な歩みを経てきました。テルメズは、そのはるかな交易網の中心で東西の文物をつないだ重要な中継地でした。川に置かれた飛び石の一つが川全体を一気に渡らせてくれるわけではないとしても、その石が一つ欠けてしまえば次に足を踏み出す場所を失ってしまうのと同じ道理です。

発掘は完成された過去を取り出す作業ではない

地中の遺跡を掘り起こしさえすれば、過去の姿がそのままよみがえると安易に考えがちです。しかし、考古学の発掘は一度行ってしまえば決して元に戻すことのできない作業です。土の層を取り払ったまさにその瞬間、数千年にわたって保たれてきた層位の秩序が永遠に失われてしまうからです。だからこそ発掘者は一層一層慎重に掘り進めながら、現場写真や実測図面、精密な座標や試料番号を漏れなく記録しなければなりません。現場の記録が粗雑であったり乏しかったりすれば、後に続く研究者が同じ遺跡に対して新たな問いを投げかけ、再検証する機会さえ失われてしまいます。

出土した古代遺物の国籍を、現代の国境線に合わせて性急に規定しようとする態度もまた警戒しなければなりません。グレコ・バクトリア王国やクシャン帝国が繁栄していた時代には、現在のようなウズベキスタンの国境線は存在しませんでした。一つの遺跡であっても、複数の現代国家のルーツや文化遺産に広く連なっていることがあります。様々な国の研究者が膝を突き合わせて共同で研究を行い、発掘資料を惜しみなく共有しなければならない理由がここにあります。

観光案内所や観光地は、人々の目を一目で引きつける鮮やかで刺激的な名称を好みがちです。アレクサンドロスの伝説の都市、人類最初の埋葬儀礼、砂の中に埋もれた失われた王国といった表現は、好奇心旺盛な旅人の足を向かわせるのに十分です。しかし、真理を追究する学問の歩みはそれよりもはるかに遅く、慎重です。証拠が明確でないときは、性急な終止符の代わりに率直な疑問符を残しておきます。その疑問符は何も知らないという恥ずかしい告白ではなく、事実の前に謙虚に立とうとする学問の誠実な姿なのです。

テシク・タシュ洞窟に埋葬された子どもと、イスカンドル・テパの防御用の堀、そしてテルメズの赤き仏教寺院は、互いにはるかな時間の隔たりを持って離れています。この三つの遺跡を一つにつなぐ糸は、特定の土地が持つ地理的な優位性ではありません。険しい山脈と乾いた砂漠を越えて絶えず移動と滞在を繰り返し、見知らぬ隣人の文化を自分たちの暮らしに合わせて作り変えていった人々の足跡です。続く章では、ユーラシア大陸を舞台にこうした文明交流を牽引した主役として、ソグド商人が登場します。彼らはラクダの背に貴重な絹や香料だけでなく、異なる言語や信仰を載せて駆け巡り、ユーラシア各地の都市を一つにつなぐ長大な道を切り開きました。

第4章 ソグド商人とアラブの到来、そしてイスラーム化

夜明けの市場には、あらゆる言語が入り混じっています。絹を広げる者は中国側の相場を確かめ、銀器を手にした者は西の都市の事情を伝えます。ラクダの首鈴が鳴り響く合間にも、契約条件や為替レート、砂漠の道の安全を尋ねる声が絶え間なく行き交います。見知らぬ市場に足を踏み入れた異邦人は、言葉の壁を前にして足踏みしてしまいがちです。ひとりの人間が世界のあらゆる言葉を知ることはできないため、誰かが異なる言葉と取引ルールの間をつなぐ架け橋にならなければなりません。何世紀にもわたってこの過酷な橋渡し役を一手に引き受け、シルクロードを行き交った人々こそが、ソグド商人でした。

ザラフシャン渓谷で育まれた媒介者

ソグディアナは、現在のウズベキスタンとタジキスタン一帯に広がっていた由緒ある地域です。サマルカンドとザラフシャン渓谷がその中心地でした。ソグド人は東イラン系の言語を用いながら土地を耕して農業を営み、堅固な都市を築き上げ、大陸を横断する遠隔地商業網を張り巡らせました。[A026]

ソグド人が築いた富は、絹という単一の品目だけに依存していたわけではありません。穀物や果物、馬や織物、金属製品、香辛料や宝石といった数多くの物資が道を行き交いました。商人たちは品物を運ぶかたわら、周囲の情報も熱心に集めました。どの国境が閉ざされたか、どの都市で鑄造された銀貨が信用できるか、どの統治者が新たに増税したのかを綿密に把握しなければならなかったためです。情報が少しでも遅れれば、貴重な品が倉庫の中で傷んでしまったり、砂漠の道の途中で略奪者に奪われたりするものが落ちでした。

『イラン百科事典』のソグド交易研究を見ると、6世紀にソグド商人が西突厥の支配者を説得し、新たな市場を開拓した事例が紹介されています。ササン朝ペルシアとの交易路が閉ざされると、ビザンツ帝国と直接手を結ぶために道を切り開いたので。[A027] このように、ソグド商人は権力者の命令にただ従うだけの受動的な使い

走りではありませんでした。時には国家の外交方針さえも主導的に導く、巧みな交渉人だったのです。

はるか遠く離れた共同体の間で取引の信頼を築くことは、決して容易ではありませんでした。今日私たちが利用している国際送金網や貿易保険、電子署名のような制度がなかった時代のことです。ソグド商人たちは、血を分けた親族や同郷人、同じ宗教を信じるコミュニティの緊密な人間関係のネットワークを足がかりに取引を続けました。契約に際しては傍らで証言してくれる人を立て、商人社会で築いた信用や評判を次の取引の保証としました。一度でも相手を欺けば、千里離れた都市の取引ネットワークまで次々と断ち切られてしまう恐れがあったのです。

ソグド人は貿易路の要所ごとに小さな定住共同体を築きました。中国の主要都市やタリム盆地のオアシス、遊牧民の草原や西アジアに根を下ろした彼らは、故郷と絶えず便りを交わし合いました。ラクダ便で運ばれてきた手紙には、相場や家族の安否はもちろん、国境の向こうの政治情勢の不安に至るまで事細かに記されていました。このネットワークは、中央統制機関が置かれていない分散型ネットワークに似ていました。たとえひとつの都市が戦争で崩壊したとしても、別の拠点が生き残っていれば、商人たちは迂回路をとって交易を続けることができたのです。

だからといって、ソグド社会の誰もが裕福な国際商人だったわけではありません。大半の住民は黙々と畑を耕し、水路を手入れし、陶器を焼いていました。シルクロードの輝かしい伝説の裏側には、汗を流して作物を育てた手や、重い荷を背負ったラクダに餌を与えて世話をした日常の労働が息づいていました。商人の華々しい成功も、確かな都市の手工業生産と農村による安定した食料供給の後ろ盾があってこそ可能だったのです。

壁画が物語る開かれた宮廷

サマルカンドの旧都の跡であるアフロシアブからは、7世紀に描かれた宮廷壁画が発掘されています。外国使節団の行列や狩猟、宮廷儀礼の場面が壁一面を埋め尽くしています。登場人物の身なりや髪型、手に携えた献上品をつぶさに観察すると、それぞれ遠く異なる国々から訪れた使節であることが一目で分かります。この壁画は、当時の国際秩序の中心に立とうとしたソグドの君主の、雄大な自意識を鮮明に伝えています。

壁画に描かれた人物の中には、東アジアから来訪したと解釈される使節の姿も見られます。一部の研究者は、頭にかぶった鳥羽冠（鳥の羽根を挿した冠帽）や腰に帯びた環頭大刀（柄頭に円い輪の飾りがついた大刀）を根拠として挙げ、朝鮮半島から渡ってきた使節である可能性を指摘しています。彼らを高句麗の使節と解釈する見解と、東アジアの他の勢力と見なす見解はいまだに拮抗しています。壁画の一場面だけを根拠にして、当時の公式な外交関係を性急に断定することは困難です。

歴史的事実を扱う際に求められるこうした慎重さは、絵画の価値を損なうものではありません。むしろアフロシアブの壁画が、私たちにいかに豊かな問いを投げかけているかに気づかせてくれます。あの鮮やかな鉱物顔料はどこから手に入れたのだろうか、使節団の配置順序はどのような外交儀礼の基準に従って決められたのだろうか、描かれた儀礼は実際に執り行われた行事だったのか、それとも王権が夢見た理想的な宮廷風景だったのかといった疑問が次々と湧き上がります。このように古代の宮廷美術は、美しい装飾であると同時に、当時の権力の意志を込めた生々しい政治文書でもあったのです。

ソグド社会では、火を崇めるゾロアスター教系の信仰が広く根を下ろしていました。それとともに、仏教やマニ教、景教と呼ばれた東方キリスト教も、シルクロードの交易コミュニティを舞台に自然と溶け合っていました。ソグドの商人や学者たちは、品物とともに宗教の教典や聖画を丹念に翻訳して運びました。ある言語に宿る神聖な宗教概念を別の言語へと移し替える作業は、工芸品や絹の名称を訳すことよりもはるかに困難を極めました。この過酷な翻訳作業を経て、言葉の意味が深まり、それまでになかった新たな表現が生み出されていったのです。

ソグド文字は、古代近東のアラム文字の系統から分かれて発展しました。この文字は、のちに遊牧帝国のウイグル文字やモンゴル文字が作られる際の決定的な土台となりました。人類の文字もまた貿易路に沿って大陸を行き交ったのです。文字の筆画や形状は時代の移り変わりとともに変化しましたが、人々の声と思想を正確に記録しようとする営みは、世代を超えて受け継がれていきました。

アムダリヤの彼方から現れた軍隊

7世紀、アラブ・イスラーム勢力はササン朝ペルシアを征服した後、東方のホラーサーン地方へと勢力を拡大していきました。当時の人々は、アムダリヤ川の北側に広がる肥沃なオアシス地帯を、アラビア語で『マー・ワラー・アンナフル』、すなわち『川の向こうの地』と呼びました。ヨーロッパの歴史学界でオクサス川（アムダリヤ川の旧名）の向こうを意味する『トランスオクシアナ』と呼ばれる地も、まさにこの地域を指しています。

初期の軍事進出は、一息に終わるような一過性の征服ではありませんでした。アラブ軍は670年代から川を渡って遠征を試みましたが、激しい抵抗に遭い、長く留まることができずに撤退を繰り返しました。ザラフシャン渓谷のソグド都市国家群と北方のテュルク系勢力は、複雑な同盟と競合の関係を結んでいました。都市ごとに思惑や利害関係が異なっていたため、時には結束してアラブ軍に立ち向かったかと思えば、隣り合うライバル都市を牽制するためにアラブ軍を引き入れるという危険な選択をすることもありました。

705年にホラーサーン総督として赴任したクタイバ・イブン・ムスリムは、攻勢的な征服戦を展開しました。彼は706年に商業都市パイカンドを屈服させ、709年にはブハラを掌握し、712年にはサマルカンドにアラブの駐屯軍を配置しました。[A028] 年表に記された年代の数字は軍事征服が進展した速度を示しているにすぎず、その地域の社会や住民の生活が、刃が通り過ぎたその日にすぐさま塗り替えられたことを意味するわけではありません。

ブハラ市内にアラブ占領軍が進駐し、重税が課されました。『イラン百科事典』の記述によると、都市に初期のモスクが建てられたにもかかわらず、現地住民の改宗プロセスはきわめて緩慢に進みました。8世紀を通じて占領軍に抗する反乱や抵抗運動が絶えませんでした。[A029] 軍事的な領土占領に比べ、人々の心の中に新たな宗教が根づくイスラーム化の歩みは、はるかに長い年月を必要としたのです。

パンジケントのソグド君主デーワシュティーチが残した革文書や書簡は、当時の人々が経験した決死の抗戦と不安定な同盟の爪痕を生々しく伝えています。彼は722年、ムグ山の城塞でアラブ軍に包囲されて敗北し、命を落としました。険しい山城の岩の隙間から奇跡的に発掘されたこの古文書のおかげで、歴史の敗者側の言葉と切迫

した訴えが完全に残されることになりました。[A028] 勝者が残した公式年代記を読むだけでは永遠に埋もれてしまっていたはずの、貴重な肉声です。

イスラーム勢力による征服は、武力衝突と政治的妥協、懐柔策が複雑に絡み合った多面的なプロセスでした。ムスリムと非ムスリムとの間に設けられた税負担の格差や官職登用といった現実的な恩恵が、改宗へと導く重要な契機となりました。征服者との通婚、新たな都市規範の定着、法律や学問の普及もまた、人々の宗教的選択を少しずつ変えていきました。ある朝目覚めるとすべての住民が一斉にひとつの信仰へと転向した、というような奇跡的な光景は存在しなかったのです。ひとつ屋根の下で暮らす家族の中にあっても、親の世代と子の世代とでは、変化を受け入れる速度がそれぞれ異なっていたはずです。

宗教が移り変わる速度

ブハラの初期イスラーム化の過程を扱った歴史記録には、金曜礼拝に参加した住民に銀貨を握らせたという逸話が伝えられています。[A029] この記述が事実であるならば、支配権力が新たな宗教儀礼を住民の日常に根づかせるため、経済的な動機づけを用いたことになります。逆説的ではありますが、これは住民による自発的な信仰の受け入れが、初期の段階では容易に進まなかったことを如実に物語る箇所でもあります。

新たな宗教を受け入れた内情は、人それぞれ異なっていました。教義に深く感銘を受けて心から信じた人もいれば、税の負担を軽減したり官職を得たり、あるいは家名を保つための現実的な計算から改宗を選んだ人もいたことでしょう。しかし、親の世代が熟慮の末に下した現実的な決断を、子の世代は生まれながらの自然な信仰として受け継ぐことになります。それゆえ、後世の観察者が彼らの改宗の動機を表層だけを見て軽々に推し量ることはできません。

都市にモスクが建立されたからといって、村落共同体全体の信仰が一夜にして変わるはずもありませんでした。『イラン百科事典』によれば、8世紀後半に至るまでパンジケント遺跡からはモスクの痕跡がまったく確認されておらず、サマルカンドで発掘された初期モスクのうち早いものでも770年頃になってようやく建てられたといえます。[A026] 軍事征服が起きた年と、実際の宗教的变化が定着した時期との間には、数十年に及ぶ長い時間の隔たりが存在していたことになります。

ゾロアスター教の古い神殿が取り壊された跡地にあっても、人々が代々守り続けてきた生活習慣はしぶとく生き残りました。火や水を神聖で清らかなものとして尊ぶ姿勢や、春の訪れを祝うノウルーズの祭り、先祖の墓を訪れて参拝する古くからの風習は、イスラームという新たな宗教の衣をまとって再解釈されました。人間の生活文化は、コンピューターのファイルを消去するように一瞬で消し去れるようなものではなかったのです。

アラビア語、ペルシア語、テュルク諸語の役割

アラビア語は、イスラームの聖典クルアーンや宗教法、そして帝国全域を覆う知識人社会の共通言語でした。中央アジア出身の学者がバグダードやダマスカス、カイロの知識人たちに自身の研究成果を伝えるためには、アラビア語で著述するほうがはるかに有利でした。共通の数学公式や星座の名前、医学用語を共有しながら、国境を越えて学問的対話を交わすことができたためです。

新たな形態のペルシア語（新ペルシア語）は、君主の宮廷や叙情詩、歴史編纂の現場で目覚ましい力を発揮しました。表記にはアラビア文字を借用し、語彙にもアラビア語の単語を数多く取り入れたものの、固有の文法構造や詩的な韻律の感覚は、悠久たるイラン系言語の伝統を確かに受け継いでいました。ブハラのサーマーン朝の宮廷は、ペルシア語が格調高い文学言語として成熟していくうえで決定的な揺籃の役割を果たしました。[A030]

一方でテュルク語は、北方の遊牧草原や軍事集団、日常の市場に集う生活共同体を中心に勢力を広げていきました。のちにカラハン朝の時代に至ると、テュルク語で統治者の知恵を記した文学作品や膨大な語彙辞典までもが編纂されるようになります。これら三つの言語は、勝敗を争う勝負のようにどれかひとつが他を圧倒して序列をつくったわけではありませんでした。用いられる領域や主な受け手層がそれぞれ異なっていただけなのです。

当時の知識人たちは、複数の言語を状況に応じて自在に使い分けていました。家族と交わす日常語、学術論文を執筆するための学問語、魂を揺さぶる詩を詠むための文学語がそれぞれ異なっていたのです。現代の研究者が家族とは親しみのある母国語で語らいながらも、専門的なプログラミングコードや国際学術論文は英語で読み書き

する姿と自然に重なり合います。言語を選び取る行為には、自らのアイデンティティと現実的な実用性がともに溶け込んでいたのです。

学者の出身地を国家の所有物にしないこと

預言者ムハンマドの言行録であるハディースを集大成したアル＝ブハーリーはブハラ出身であり、大学者アル＝ティルミズィーは南部都市テルメズにそのルーツを持っていました。天文学者アル＝ファルガーニーの名にはフェルガナ盆地の地名が残されており、数学者アル＝フワーリズミーはオアシス王国ホラズムで生まれました。現代のウズベキスタンは、彼らを自国の歴史を彩った偉大な学者として誇りを持って称えています。

しかし、彼らが生きた中世には、現在のような近代国民国家としてのウズベキスタンは存在していませんでした。当時の学者たちは知識を求めていくつものオアシス都市を巡礼するように渡り歩き、共通語であるアラビア語で研究成果を記録しながら、大陸規模のイスラーム知識ネットワークの中で活動していました。出身地を顕彰する現代の記念事業は十分に理解できるものの、人類共通の知的遺産を現代の国境線の内側に閉じ込め、一国の独占物としてしまうならば、大陸を行き交った輝かしい知識交流の歴史を余すところなく読み解くことは難しくなります。

アル＝フワーリズミーが確立した代数学と計算術は、インドの数字体系と古代ギリシャの幾何学、そしてアラビア語翻訳運動が育んだ豊かな学術環境が融合した結実でした。大学者イブン・シーナーの医学もまた、ヒポクラテスやガレノスによる古代ギリシャの医学書、イスラーム哲学の精緻な論理、膨大な臨床経験を創造的にまとめた知的金字塔でした。人類の偉大な学問は、ひとつの閉ざされた幹から生じるというよりは、四方に伸びた幾重もの根が大地の水脈を分け合って吸い上げ、花を咲かせるものなのです。

中世の図書館の地位を語る際、蔵書数をことさらに誇張する必要はありません。中世の年代記に記された華麗な修辞は、当時の都市の並々ならぬ名声を反映しているにすぎず、現代のような精密な統計数値とは隔たりがあるためです。それよりも本質的な事実、写本を丹念に書き写し、書物を売買・借覧し、学者たちが集って自由に議論を交わす知的インフラが強固に根づいていたという点にあります。上質な紙とイ

ンクの供給、腕利きの筆耕、そして活気あふれる書店街こそが、学問の発展を支えた実質的な土台でした。

銀貨が結んだ北と南

サーマーン朝は純度の高い銀貨を大量に鑄造し、広大なユーラシア大陸へと流通させました。中央アジアの造幣所で発行された銀貨（ディルハム）は、遙か北方のヴォルガ川流域はもちろん、バルト海沿岸やスカンディナヴィア半島一帯のヴァイキングの墓からもまとまって出土しています。高価な北方の毛皮や革、奴隷、そして南方の金属製品や織物の交易が、ユーラシア大陸の南北をひとつに結びつけていたのです。地中から出土した銀貨の移動ルートは、古い歴史書には記されなかった隠れた交易路の実態を鮮やかに物語っています。

硬貨の表面には、アラビア語の書体で当時の統治者の名や鑄造都市、イスラームの信仰告白の文句が精巧に刻まれました。手のひらに収まるほどの丸い金属円板は、経済的価値とともに君主の政治的権威を大陸の果てまで運びました。生前に一度も顔を合わせたことのない見知らぬ商人同士であっても、銀貨に含まれる銀の重量と純度を信頼することで、安心して大規模な取引を成立させることができたのです。

銀貨が大量に出土したからといって、当時のあらゆる日常取引が硬貨のみで行われていたと考えるのは早計です。農村の集落では、穀物や共同労働、生活用品を交換し合う物々交換によって決済することが一般的でした。国に納める税もまた、農産物や手工業の現物で徴収されることが常でした。現代の市場経済という尺度を中世社会の暮らしぶり全体に見境なく当てはめてしまうと、当時併存していた多彩な交換のあり方や生活の機微を見落としてしまいかねません。

ブハラが成し遂げた輝かしい繁栄は、農村における体系的な灌漑農業と、砂漠を行き交うキャラバン貿易、そして王宮での旺盛な消費が織りなした結晶でした。図書館や学校の学者たちを養う豊かな収穫物、紙の原料となる麻やコウゾ、書物を一文字ずつ書き写す筆耕たちの過酷な労働が絶え間なく支えていなければなりません。歴史に刻まれた知識の黄金期は、決して書斎の机に向かった学者たちの知恵だけで単独で築き上げられたものではなかったのです。

今日のブハラに完全な姿で残るサーマーン廟の焼成レンガ建築は、華やかだった当時の文化を静かに物語っています。廟の前に立った旅人は、一見素朴な黄土色のレンガ建築を前にして、思いがけない深い感銘を覚えることがよくあります。規格のそろったレンガを寝かせ、立て、斜めに組み合わせて積み上げることで、太陽の角度によって繊細な光と影の陰影を生み出しているためです。当時の建築職人たちは、建物の骨組みを築く構造と外観を飾る装飾とを切り離して考えてはいませんでした。堅牢な壁面が屋根を支えると同時に、それ自体が見事な幾何学模様を形づくっていたのです。実用と芸術、学問と日常が有機的にかみ合っていた文明都市の、気品ある横顔といえます。

タラスの戦いを誇張せずに見る

751年、天山山脈の北西に位置するタラス川流域で、新興のアッバース朝アラブ軍と高仙芝将軍率いる唐軍が激突しました。勝敗を分ける決定的な転換点となったのは、遊牧民カルルク勢力が戦況を一変させた瞬間でした。この戦闘は、当時の中央アジアの覇権をめぐる勢力均衡を鮮明に示す象徴的な出来事でした。しかしだからといって、この一度の戦いによって中央アジア全域が一挙にイスラームの世界へと組み込まれたと断定してしまうと、数百年をかけて幾重にも積み重ねられた歴史の厚みある時間層を消し去る誤りに陥ることになります。

唐は敗戦後も西域の諸国と外交的・商業的な関係を着実に保ち続けました。しかしそれから間もなく、唐の本土で安史の乱という大規模な内乱が勃発したことで、西域に軍を駐留させて統制力を行使する余力は失われてしまいました。一方、アラブ勢力の支配力も現地の都市国家による反発を受け、地域ごとに危うく揺れ動いていました。結局のところ、中央アジアのイスラーム化は、8世紀から9世紀を経てそれ以降に至るまで、長い歳月をかけて進んだ広範かつ漸進的な社会変動の結果だったのです。

タラスの戦いで捕らえられた唐の捕虜を通じて製紙法が一気にイスラーム世界へと伝わったというドラマチックな物語は、広く知られています。しかし、紙を漉く技術はそれ以前からシルクロードの多様なオアシスルートを通じて西方世界にすでに伝わっていた可能性が高いといえます。古代の技術伝播は、特定の戦闘が生んだ突発的な戦利品というよりも、熟練した職人や商人の移動、原料の調達と市場の形成が長い時間をかけてかみ合って生じた有機的な拡散の過程として捉えるほうが自然です。

歴史の記述は、劇的な契機や鮮やかな転換点を強調することを好みがちです。歴史の教科書もまた、特定の戦いの年月に大々的な意味を付与して記憶することを好みます。しかし、人々の実際の暮らしや文化の変容は、バージョン番号が少しずつ上がりながら改善されていくソフトウェアのアップデートに似ています。新たな社会規範や支配ルールが導入されたとしても、代々受け継がれてきた生活習慣は心の奥底に長く残り続けるものです。外の世界で生き抜くために新しい言語を学んだとしても、夕食の席で家族と静かに交わす言葉は、やはり母から受け継いだ昔ながらの故郷の言葉であったのと同じように。

イスラームを受け入れた中央アジア

中央アジアで起きたイスラーム化は、決して人々の生活全体がアラブ風に画一化される「アラブ化」と同義ではありませんでした。国家の行政や学術の分野ではアラビア語が絶大な影響力を誇ったものの、ペルシア語やテュルク諸語は生命力を失うことなく力強く生き残り続けました。現地の住民たちはイスラームという信仰を胸に抱きながらも、先祖代々受け継いできた詩や音楽、家族中心の風習、レンガを焼く伝統的な建築技術をそのまま継承しました。新たな宗教が悠久のオアシス土着文化と融合することで、他には類を見ない独創的な相貌を備えるようになったのです。

新たに整えられたモスクは、住民たちが集って神を讃える神聖な礼拝堂としての役割を果たしました。マドラサはイスラーム法学や言語学、厳密な論理学を教える高等教育機関として定着しました。バザールと呼ばれる市場では、イスラーム商法と厳格な契約慣行が複雑な商取引をしっかりと支えました。裕福な篤志家たちが寄進した慈善財団ワクフは、モスクや学校、公共の給水施設の運営費を賄い、都市福祉の支柱となりました。人々の信仰心が制度を生み、その制度がまた都市の物理的な空間を新たに塗り替えていったのです。

イスラーム神秘主義であるスーフィーの伝統は、無味乾燥になりがちな宗教教義を民衆の温かな生活感情と結びつける架け橋となりました。師と弟子の間の強い絆、琴線に触れる叙情詩や甘美な音楽、聖者の霊廟を訪れて祈願する巡礼文化が、オアシス都市ごとに独自の色彩を帯びて育ちました。厳格な文字を重んじる正統法学の規律と、魂の内面的な修練を重視するスーフィーの霊性は、時には緊張をはらんで対立し、

時には手を取り合って協調しました。現代のウズベキスタンに根づくイスラーム文化を、単一の色彩だけで描き出すことができない理由はここにあります。

『イラン百科事典』は、10世紀のサーマーン朝の統治期に至って初めて、中央アジア全域でイスラーム化が確固たるものとして定着したと解説しています。[A028]このような学術的評価もまた、それ以前の時代の多彩な土着信仰がことごとく姿を消したという意味に解釈すべきではありません。家々で執り行われる冠婚葬祭の儀礼や親しみある村の地名、口承で伝わる民話の中には、依然として古くからの痕跡が色濃く残されていました。人々は新たな信仰体系を受け入れたあとも、先祖から受け継いだ長年の生活習慣を捨てることなく胸に抱き続けたのです。

ブハラ、知識の都へ

9世紀頃、サーマーン朝はホラーサーンとトランスオクシアナの全域で強固な政治的基盤を固めました。首都ブハラは統治の中心地であるとともに、学問や芸術、文学が華やかに花開く大都市としてそびえ立ちました。サーマーン朝は由緒あるイラン系の家系出身であり、イスラーム文明圏という広大な枠組みの中でペルシア文化が新たなルネサンスを迎えるよう、物心両面から牽引しました。

米国メトロポリタン美術館の研究資料は、9世紀後半から10世紀にかけてのサーマーン朝の時代を、ペルシア文化が華麗に復活を遂げた全盛期と位置づけています。ブハラ宮廷の惜しみない庇護に支えられてペルシア文学は飛躍的な発展を遂げ、純白の陶器の表面に黒褐色の顔料で流麗なアラビア語カリグラフィーを施した名品の食器類は、当時の美術の際立った洗練を物語っています。[A030]

ひとつの陶器の上に端正に刻まれた銘文は、気品ある文字と日々の生活用具が見事に巡り合った美しい結晶でした。陶工は土や釉薬の細やかな性質を熟知していなければならず、書家は丸みを帯びた器の曲面の上で文字の調和と余白の美を完璧に描き出さなければなりませんでした。毎日目にする食卓の器でさえも、人生の知恵や祝福を願う格言を宿していたことになります。この時代の知識は、図書館の重厚な書架の中に閉じこもることなく、人々の日常の中へと生き生きとあふれ出していたのです。

サーマーン朝の時代のブハラは、大陸各地の卓越した学者や詩人たちを磁石のように引き寄せました。宮廷詩人ルーダキーは、新ペルシア語詩文学の大いなる潮流を

切り開きました。「医学の王」と称されることになる若きイブン・シーナーはブハラ近郊で生まれ育ち、君主の許可を得て王室図書館の稀覯書を読み漁ったと、のちに回想録に記しています。彼は後世、中世の東西医学と哲学の最高峰に数えられる膨大な著作を世に残しました。

一部の古い資料の中にはアル＝フワーリズミーをサーマーン朝の宮廷学者として記したものも見受けられますが、これは活動年代が合致しない誤りです。アル＝フワーリズミーは、サーマーン朝がブハラで黄金期を迎えるよりはるか前の9世紀前半、アッバース朝の首都バグダードに建てられた国立学術機関「知恵の館」で主に活躍しました。現代のコンピュータの計算手順を指す「アルゴリズム」という言葉はまさに彼の名に由来しており、数学の「代数学（Algebra）」という名称も彼が著した方程式に関する書物の題名から生まれました。彼は、中央アジア出身の傑出した碩学が大陸規模のイスラーム知識ネットワークの中枢へと進出し、人類文明に多大な足跡を残した代表的な好例として評価されるべき存在です。

このような歴史的事実の厳密な区分は、決して些細な揚げ足取りなどではありません。名高い偉人たちをひとつの黄金時代の宮廷へと無理に集めれば、一見すると歴史の物語は華々しく輝くかもしれませんが、年表の真実は損なわれてしまいます。アル＝フワーリズミー、アル＝ファルガーニー、アル＝ブハーリー、イブン・シーナーは、それぞれ異なる時代と都市、異なる君主の庇護のもとでそれぞれの道を歩みました。この偉大な学者たちをひとつに結びつけていた絆は、特定の王朝の宮廷ではなく、国境を越えたアラビア語という学術共通語と、中央アジアのオアシス都市が強固に築き上げていた体系的な教育環境だったのです。

栄華を誇ったサーマーン朝の権勢も、時の流れの前には永遠ではあり得ませんでした。王室内部の熾烈な後継者争いや財政の悪化、軍事奴隷（マムルーク）集団の政治的肥大化、北方テュルク系遊牧勢力の激しい圧迫が一挙に押し寄せました。ついに999年、テュルク系のカラハン朝が首都ブハラを陥落させ、王朝は幕を閉じました。しかし、地上の権力を握る主が替わったとしても、精緻なペルシア式官僚行政体系や深みのあるイスラーム学問、代々受け継がれてきた都市の職人たちの技術力は、次の王朝へとそのまま受け継がれました。

征服の後に残るもの

シルクロードを席卷していたソグド語は、年月の経過とともに次第にオアシス都市の中心言語の座から退いていきました。その空白をペルシア語とテュルク語が埋めていきました。イラン学百科事典の分析のように、ソグド人固有のアイデンティティはイスラム・ペルシア文化の巨大な潮流の中へと急速に融合していましたが、その同化の速度は社会階層や居住地域によってそれぞれ違いがありました。[A026]

歴史の舞台裏へと姿を消した言語だからといって、完全に口を閉ざしてしまうわけではありません。古い村の名や色あせた古文書、日常語の中に染み込んだ外来語彙や文字記録の伝統の中に、自分たちの確かな痕跡を残しておくからです。ソグド商人たちが代々築き上げてきた強固な信用ネットワークは、イスラムの商業法律と制度という新たな枠組みの中で新たな姿へと生まれ変わりました。ソグドの諸都市が培ってきた高度な水路灌漑技術と職人たちの繊細な手技は、新たにやって来た統治者にとっても国を治める上で欠かせない貴重な財産でした。

アラブ勢力の征服をもってこの地に初めて文明が始まった瞬間であるかのように一方的に描くならば、それ以前の時代を懸命に生きた数多くの先住民の歴史を丸ごと消し去ってしまう過ちを犯すことになります。反対に、切っ先に染まった征服と侵略の破壊性ばかりを声高に強調するならば、その陰で眩しく花開いた偉大な学問や文学、生活の拠点を守り抜いた現地住民の主体的な選択を見落としてしまいます。私たちはこの二つの歴史的真相を並べて直視しなければなりません。軍事的な侵攻の過程に残虐な暴力が存在したことは紛れもない事実ですが、その荒波を乗り越えてきた中央アジアの人々は、外部からもたらされたイスラム文明を、自らの固有の言語と優れた技術によって主体的に再創造したのです。

オアシスの活気あるバザールは、遠い昔と変わらず世界のありとあらゆる声を温かく包み込みました。市場の厳格な商業契約書には精緻なアラビア語の法律用語が定着し、宮廷やサロンの叙情詩の中では優雅なペルシア語が燦然と輝き、広大な遊牧草原では伸びやかなテュルク語が響き渡りました。その頃、テュルク系のカラハン朝がブハラに入城し、新たな時代の幕を開けました。のちにオアシス帝国ホラズムの台頭とモンゴル帝国の嵐のような侵略、そしてチャガタイ・ハン国が導いた長い文化的融合の渦は、ユーラシアの心臓部であるこの地の歴史の地形を、再び大きく塗り替えることになります。

第5章 遊牧帝国の受難と融合

ブハラに辿り着いた旅人は、砂漠色の煉瓦で高くそびえ立つカラーン・ミナレットを目にすることになります。塔に近づいて見上げると、層ごとに煉瓦を積んだ角度が異なっています。格別の華やかな装飾を施さずとも、同じ材料を異なる規則で積み上げることで、多彩な文様を生み出しました。11世紀以降の中央アジア社会も、この塔の構造に似ていました。テュルクの軍事伝統とペルシアの行政制度、イスラーム法とオアシス農耕技術が一つの空間で調和し、新たな秩序を築き上げたのです。

カラハン朝がブハラに入る

10世紀末、サーマーン朝の勢力が衰えると、北と東からテュルク系のカラハン勢力が台頭しました。カラハンの支配層はすでにイスラームを受け入れた後でした。彼らは992年にブハラを一時占領し、999年に再びこの都市に入ってトランスオクシアナにおけるサーマーン朝の支配を終わらせました。[A031]

この出来事を、イラン文明がテュルク文明へと完全に取って代わられた日と理解してしまうと、実際に生じた変化の機微を見落としやすくなります。統治する家系は変わったものの、都市を運営する官吏や書記、畑を耕す農民や物を作る職人は、依然として自らの場にとどまる必要がありました。ペルシア語で書かれていた文学や長年の行政慣行も途絶えることなく継承されました。新たな支配層はイスラームの正統性を掲げつつ、既存の都市制度を幅広く受け入れたのです。

カラハン朝は、一つの首都から全領土を統制する中央集権国家ではありませんでした。王族たちが各地を分割統治し、カシュガルやベラサグン、サマルカンドやブハラが各地域の権力の中心地として機能しました。王子たちの間で権力を争うことも珍しくありませんでした。地図上では一色に塗られていても、その内部に目を凝らせば、いくつもの権力の拠点が網の目のように入り組んでいたのです。

その時代、テュルク語文学は国家を治める理と知恵を盛り込む言語へと成長しました。ユースフ・ハース・ハージブが著した『クタドゥグ・ビリグ』は、統治者と臣下の関係、知識と節制の価値を対話の中で解き明かしました。マフムード・アル＝カーシュガリーの『ディーワーン・ルガート・アッ＝トゥルク』は、アラビア語を用いる

読者に向けてテュルク語の語彙や詩、各部族の分布を詳細に紹介しました。単なる言葉のリストにとどまらず、11世紀の草原と都市の生活風景を丹念に描き出した地図でもあったのです。

言語の変化は、政治権力の移行を鮮明に示しています。それまでテュルク語は主に軍隊や草原で使われる言葉とされていましたが、この頃からは書物を著し宮廷で国政を論じる言語として定着していきました。だからといってペルシア語やアラビア語が消え去ったわけではありませんでした。アラビア語は宗教と学問の言語として、ペルシア語は文学と行政の言語として、テュルク語は宮廷と日常生活の言語として、それぞれ独自の役割を分担していたのです。

カラハン時代の建築技術は、土を焼いて作った煉瓦の可能性を広げました。ブハラのカラーン・ミナレットは、12世紀の都市景観の基準点となりました。砂漠を渡ってきた隊商は、地平線の上にそびえる高い塔を眺め、都市の位置を推し量って安堵したことでしょう。この塔は、信徒たちに礼拝の時間を告げる宗教施設であると同時に、支配者の権力と卓越した建築技術を広く知らしめる象徴でもありました。

しかし、この塔が千年のあいだ創建当時の姿のまま立ち続けてきたと考えるのは早計です。その間に地震が起き、戦争を経験しながら、数多くの改修作業が重ねられてきたからです。建造物を保存するということは、時間を止めておくことではなく、歳月の中で変わった部分と本来のまま残った部分を誠実に記録することにあります。観光案内文の数字や伝説にとどまらず、精密な建築調査資料を併せて読み解くべき理由がここにあります。

テュルク化という長い変化

カラハン朝の時代からトランスオクシアナ地域では、テュルク系の人々と彼らの用いる言語が占める割合が次第に高まっていきました。草原で家畜を飼育していた遊牧集団がオアシス周辺へと生活の拠点を移し、軍人や官吏、商人たちが都市の中へと入って根を下ろしました。『イラン百科事典』は、こうした流れがソグド語やホラズム語の衰退、テュルク語圏の拡大へとつながったと説明しています。[A031]

テュルク化は、住民全体が一朝一夕にして別の人々にとって代わられた出来事と捉えることはできません。異なる集団間の通婚、軍務、市場で交わされる共通の言葉、

土地所有権の移動などが何世代にもわたって積み重なることで成立した長い過程でした。変化の速度も、山岳地帯や農村、都市ごとにそれぞれ異なっていました。ペルシア語を用いて暮らしてきた住民たちも長い歳月にわたりその場にとどまり続け、彼らの足跡は今日のタジク人共同体へと受け継がれています。

今日の民族の基準を過去の時代にそのまま当てはめると、誤解が生じやすくなります。11世紀に生きていたテュルク系の人々を、現在のウズベク国民と同じ枠組みで一括りにすることはできません。当時の人々は、自らが属する部族の名、仕える王朝、信奉する宗教、暮らす都市によってアイデンティティを見出していました。近代的な国民国家という枠組みは、それよりはるか後になって形作られたものなのです。

このような歴史的文脈を念頭に置くと、当時の文化融合がいっそう鮮明に浮かび上がってきます。その時代のある人は、家の中ではテュルク語で家族と言葉を交わし、美しい詩はペルシア語で口ずさみ、モスクでの宗教の講義はアラビア語で聴くことができました。彼らのアイデンティティは単衣の衣服ではなく、幾重もの布地が自然に重なり合った装いのようなものだったのです。

ホラズムが広げた帝国

アムダリヤ川下流域に位置するホラズムは、水脈と砂漠が交わる肥沃なオアシスでした。川の流れから伸びる水路が広大な農耕地を育み、グルガンジのような都市は北の草原とイラン、トランスオクシアナを結ぶ巨大な交易の拠点となりました。12世紀後半にセルジューク朝の勢力が衰退すると、アヌーシュテギーン家出身のホラズム・シャーが独自の勢力を拡大させました。[A032]

テキシュとアラーウッディーン・ムハンマド2世の時代に、ホラズムの領土はイランやアフガニスタン、トランスオクシアナへと拡大しました。外見上の広大な版図は強大な帝国の威容を誇っていましたが、内部を統治する力は均一ではありませんでした。新たに併合した地域の支配層や軍隊は、互いに食い違う利害関係を抱えていました。国王ムハンマド2世と、その母テルケン・ハトゥンに従う勢力の間ですら、宮廷内で権力争いが繰り広げられていたのです。

帝国の大きさが直ちに安定を意味するわけではありません。コンピュータネットワークに接続する機器が増えても、アクセス権限の管理が混乱すればシステム全体に

障害が広がるのと同じ道理です。ホラズムは急速に領土を広げたものの、辺境の国境都市と中央の宮廷、そして軍の指揮部をひとつの規律のもとに束ねて統率することは困難でした。

1218年、国境都市オトラルでモンゴルの商隊が捕らえられ、命を落としました。真相を究明すべくチンギス・カンが派遣した使節団までもが殺害されたのです。『イラン百科事典』は、この事件によって両国間の戦争が不可避になったと説明しています。[A033] 商隊の人員やラクダの規模、処刑の方法は伝えられる史料ごとにまちまちであるため、確定した数字として断定しないほうが賢明です。

チンギス・カンの西方遠征を、支配者一個人の憤怒のみに帰して説明することはできません。当時モンゴル帝国は、すでに中国北部や中央アジア東部で勢力を拡大しつつありました。シルクロードの交易路の安全、周辺勢力の服属問題、ホラズムの国境政策などが、戦争の原因として複雑に絡み合っていたのです。使節団殺害事件が火をつけた火種であったとすれば、領土拡張をめぐる衝突した二つの膨張国家の摩擦は、炎が燃え広がるための枯れ野でした。

1219年から1221年まで

モンゴル軍は部隊をいくつかに分け、オトラル、ブハラ、サマルカンド、ウルゲンチ方面を同時に攻撃しました。迅速な機動力と諜報活動、綿密な包囲戦術を巧みに組み合わせて展開したのです。中国や中央アジア各地から徴発した工兵技術者たちも、城壁を打ち破る攻城戦に動員されました。これに対してホラズム軍は結束できず、都市ごとに分散して対応した末に崩壊していきました。

都市の陥落に伴い、無数の人々が命を落とし、捕虜となりました。物作りを担っていた職人や技術者たちは他地域へと強制連行されました。城壁が突き崩され、農業の命綱である水路が破壊された場所もありました。ただし、中世の記録が伝える数十万人に達する死者数は、当時の都市規模や誇張を含む記述の慣行に照らし合わせると、額面通りに受け取ることは困難です。悲劇を誇大に見せるために、不確かな数字をあえて繰り返す必要はありません。

ユネスコ編『中央アジア文明史』は、ホラズム・シャー朝の成長と1219年のモンゴル侵攻を地域史の長い文脈の中で扱っています。[A034] 『イラン百科事典』は、

中央アジアが1219年から1221年にかけて甚大な破壊を被り、その後の支配層内部の抗争も重なって復興が遅れたと説明しています。[A035]

モンゴルの侵攻によってすべての都市文明が完全に終焉を迎えたとする記述もまた行き過ぎです。ブハラやサマルカンドは深刻な被害を受けたものの、歳月とともに再び人々が集まりました。損壊した市場や宗教施設も再建されました。比較的速やかに復興を遂げた地域があった一方で、灌漑網が破壊された地域は長期にわたり停滞しました。破壊と復興の度合いは場所によって異なっていたのです。

征服を完了したモンゴルは、徴税制度を整備し、帝国全土を結ぶ駅伝網を構築しました。駅伝は、疲れた馬を乗り換え、宿泊所や糧食を提供する中継拠点でした。この道を通してカンの命令が伝達され、官吏たちが広大な帝国を行き交いました。通行証を持つ商人たちに保護を与えることもありました。征服戦争の暴力と帝国のネットワークは、同じ歴史の表裏をなしています。一方を消し去ってしまえば、モンゴルの時代を正しく理解することはできません。

チャガタイの所領となった中央アジア

チンギス・カンが世を去った後、その一族は広大な領土と民をいくつものウルスに分割して統治しました。中央アジアの大部分は、次男のチャガタイ家へと継承されました。チャガタイは生前、チンギス・カンの法と慣習であるヤサを厳格に守った人物として知られています。[A035]

初期のチャガタイ支配層は、草原の移動生活とモンゴル固有の慣習を重んじました。その一方で、オアシスの住民にはムスリムが多くを占めていました。遊牧支配者と土地に定住する納税者の利害関係は衝突せざるを得ませんでした。モンゴル朝廷はマフムード・ヤラワチやその息子マスウード・ベグのように行政に精通した官吏を登用し、都市の徴税と経済を委ねました。

宗教の様相も多彩な色合いを帯びていました。多数を占めるイスラームの傍らで、仏教、東方キリスト教、伝統信仰が共存していました。モンゴル支配層は経済秩序を維持する範囲内で諸宗教の活動を容認しました。[A035] この寛容を今日の信教の自由と同列に論じることはできません。統治上の必要性和身分的な特権が結びついた秩序だったのです。

時間の経過とともに、モンゴル系支配層はテュルク語とイスラーム文化を受け入れていきました。定住都市で暮らし、現地の家系と婚姻を結びました。行政の実務においては、ペルシア系の書記官やムスリム法学者の助力を得ました。モンゴルの名を保持している家系であっても、日常で用いる言語や信仰は次第に移り変わっていったのです。

14世紀前半に即位したタルマシン・カンはイスラームを受け入れ、定住地域に重きを置いた統治を行いました。草原の貴族たちは、彼が遊牧の慣習を捨て去ったとして反発しました。彼の失脚は、単なるイスラームと非イスラームの宗教的対立にとどまりませんでした。移動する天幕宮廷と都市中心の統治、部族貴族の自治権と中央権力の相克が重なり合った結果だったのです。

チャガタイ・ハン国は、西のトランスオクシアナと東のモグリスタンに分裂しました。西側ではテュルク・モンゴル系の軍事家系が覇を競い、諸都市はイスラーム文化圏へ深く組み込まれていきました。東側では遊牧の政治体制が長く続きました。その境界は、地図上の固定された国境線というよりは、勢力範囲に近いものでした。

破壊の後に生まれた新たな結びつき

モンゴル帝国は、ユーラシアの遠隔地を一元的な政治秩序のもとに統合しました。交易路に沿って商人や旅人、外交使節、職人や学者が行き交いました。中国の技術、イランの行政知識、中央アジアの天文学や医学が他国の宮廷へと伝えられました。交流の道が広がった背景には、征服と強制移住という暗い影が存在していたのです。

「文化交流」という柔らかな言葉だけを用いては、見知らぬ土地への移住を強いられた人々の苦痛が消し去られてしまいます。逆に「略奪」という言葉ばかりを使っているのは、移り住んだ技術と人々が新たな社会で結実させた成果を見失ってしまいます。歴史とは、互いに相容れない不都合な二つの叙述を並べて記憶し続けなければならないものなのです。

モンゴル時代における都市の復興のあり方にも注目すべき点があります。官吏が重税を取り立てすぎると、農民は逃亡し水路は荒廃しました。統治者が安定した収入を得るためには、農業と市場を再生させなければなりませんでした。略奪によって得

られる富は一度きりにすぎませんが、活気ある都市は毎年税収をもたらしてくれます。征服者たちは試行錯誤を重ねながら、この計算を学んでいったのです。

カラ・キタイ、名の似通った別の王朝

カラハン朝とカラ・キタイは名前が似ているため、初めて触れる人が混同しやすい王朝です。カラ・キタイは、中国北部の遼が滅亡した後、西へ移動してきた契丹系の支配層が建てた国です。西遼とも呼ばれるこの王朝は、12世紀の中央アジアにおいて、カラハン朝やセルジューク勢力の上に君臨して宗主権を行使しました。

1141年、サマルカンド近郊のカトワーン平原で、カラ・キタイ軍がセルジューク朝のスルタン・サンジャルとカラハン朝の連合軍を破りました。[A051] この戦いのち、トランスオクシアナの勢力均衡が変わりました。カラ・キタイの支配層は仏教や伝統信仰を抱いていましたが、ムスリム都市の行政や宗教生活をそのまま認める場合が多くありました。

この時期の歴史は、中央アジアをイスラム世界と中国世界の間に置かれた閉ざされた仕切りとみなす見方を退けます。中国風の皇帝の伝統をもつ契丹系の王朝がムスリム都市で徴税を行いました。貨幣や官職の称号、行政には多様な伝統が自然に重なっていました。

ホラズム・シャー朝は当初、カラ・キタイに朝貢していました。軍事力が増大すると独立を図り、ついにはトランスオクシアナへと進出しました。カラ・キタイの権力の崩壊は、ホラズム帝国の拡大とモンゴル軍の西進が正面から衝突する道を開くことになりました。

都市が崩壊するさまざまな様相

戦争の被害は、焼失した建物の数だけで測ることはできません。水路を管理する人が命を落としたり離れたりすれば、翌春の農作業も崩れてしまいます。飢えに耐えかねて種籾まで食べてしまえば、収穫の連鎖が断ち切られます。職人が連れ去られれば、道具を修理する人や弟子を育てる人がいなくなります。

市場の信頼も損なわれます。翌月に支払いを約束していた商人が亡くなれば、掛け売り取引は止まります。道路が危険になれば、隊商は遠くへ迂回します。都市の復興は、崩れた城壁を建て直すことよりも、損なわれた関係や信用を築き直すことのほうにはるかに長い時間を要します。

モンゴル侵攻後の被害をあらゆる地域に一律に当てはめると、地域ごとの違いを見落としてしまいます。ホラズム下流域では、川の流れの変化と水路の破壊が重なりました。ブハラとサマルカンドは政治的中心としての地位を失ったものの、のちの時代に再び成長しました。山間の村や草原は、それぞれ異なる衝撃を経験しました。

考古学は破壊層の灰や矢じりを探し出します。同じ場所に建てられた新たな住居跡や陶器片は、都市が回復した時期を物語ってくれます。史料に都市が完全に消滅したと記されていても、発掘調査によって生活層が続いていた事実が明らかになれば、表現を改めなければなりません。文献と土が互いの隙間を埋め合いながら検証していく過程です。

駅と通行証

モンゴル帝国の駅網は広大な領土を結びました。一定の距離ごとに元気な馬や宿舎、食糧が用意されていました。官吏や使節は通行証を携えて移動しました。国家の命令伝達は迅速になり、通行証を持つ商人も保護を受けることができました。

駅を維持する費用は周辺の住民に課されました。馬や食糧を供出しなければならず、官吏の要求が過度になると、村全体が疲弊して離散しました。迅速な通信の恩恵とインフラの費用負担が、別々の人々に帰着することもあったのです。現代の高速道路やデータセンターも、似たような問いを投げかけています。

帝国内では測量や天文学、医学、地図に関する知識が活発に行き交いました。職人や学者の移動には、自発的な旅もあれば強制的な移住もありました。その結果として生じた文化交流を讃える一方で、移動のあり方にあった違いも率直に記録しなければなりません。

都市と草原が互いを変え合った証拠は、食べ物や衣服にも残されています。乳製品と肉を中心とする草原の食生活が、穀物や果物のオアシスの食卓と出会いました。

乗馬に適した細い袖の衣服と、都市の華やかな織物が混ざり合いました。政治史よりもゆっくりと進む生活文化の融合です。

法も単一の体系へとすぐに統合されたわけではありませんでした。モンゴルの慣習法であるヤサ、イスラム法、地域の慣例が状況に応じて用いられました。人々はこの裁判や官吏のもとへ赴けば有利になるかを慎重に見極めました。複数の規範が重なり合う社会では、法を知ることが力となったのです。

チャガタイ時代の貨幣改革と市場の回復

13世紀後半、マスウッド・ベクは中央アジアの諸都市で貨幣改革を推進しました。重量や品質の異なる硬貨が流通しているのは、遠隔地との取引は困難になります。一定の基準を満たす銀貨を広く流通させようとした改革は、市場の回復を後押ししました。

貨幣の基準を統一することは、今日でいう通信プロトコルを合わせる作業に似ています。価値の単位を互いに信用できてこそ、契約と信用が遠くへと広がっていきます。ただし、改革の効果は都市や時期によって異なりました。質の高い硬貨であっても、それだけで戦争や徴税の混乱を防ぐことはできませんでした。

こうした制度整備の痕跡は、モンゴル時代を単なる廃墟と宮廷闘争だけの時代として描くことを思いとどまらせてくれます。征服ののちにも統治者は税率を定め、硬貨を鑄造し、水路を修復しました。住民は新たな規則に適応し、ときにはそれを回避したり抵抗したりしました。

ひとつの名に複数の時代が重なるとき

歴史書には、ホラズム、フワーリズム、コーレズムのように、同一の地域を異なる表記で記した名称が登場します。アムダリヤ川もまた、オクサスという古代の名を持っています。ラテン語表記のトランスオクシアナやアラビア語表現のマ・ワラ・アンナフルも、川の向こうの地域をそれぞれの言語で呼んだ言葉です。

表記が異なっても同じ場所を指すことがあります。反対に、同じ名前であっても時代ごとの地理的範囲が異なることもあります。ホラズム帝国はホラズム・オア

シスから始まってはるかに広大な領土を統治しました。「チャガタイ」という名称も人物、ハン国、文学言語に使われますが、その三者の範囲は互いに一致しません。

本書は読者が迷わないよう、広く用いられている韓国語表記を前に置き、初出時には別の名称も併記しています。名前は検索の鍵だからです。綴りがひとつ違うだけでも、資料を見つけるのが難しくなることがあります。

年代についても、西暦やイスラム暦、中国の元号でそれぞれ異なって記録されています。後世の研究者はこれらを照合する過程で、数日あるいは1年の差異に直面することがあります。一見正確に見える日付にも、暦法の換算や諸写本の異同という問題が潜んでいます。

歴史において「わからない」ということは、単なる空白を意味するわけではありません。どのような史料が残り、どの部分が食い違っているのかが示されている状態です。空白の境界を知る人は、新たな遺物や文書が現れたときにどこを修正すべきかを理解できます。優れた年表は、確証の持てない項目をも率直に示してくれるものです。

チャガタイ語は、この長い融合のなかで育まれました。テュルク語の文法を基礎としながら、アラビア語やペルシア語の語彙を取り入れた文語でした。のちにアリシェール・ナヴォイーがこの言語の表現力を大きく広げました。現代のウズベク語の文学的伝統は、チャガタイ語と深く結びついています。

しかし、チャガタイ語をチャガタイ・ハン国の公式な公用語と短絡的に結びつけると誤解が生じます。言語の形成と文学的な全盛期には長い時間を要しました。王朝の名と言語の名が同じであっても、その範囲や時期が正確に重なり合うわけではないのです。

ティムールが現れる舞台

14世紀半ば、西チャガタイ地域の権力は多くの軍事家門の間で揺れ動いていました。ハンはチンギス・カンの血統という象徴的な権威を持ち、実際の軍事力はアミールたちが握っていることが多くありました。バルラス部族のティムールは、その間隙で勢力を伸ばしていきました。

ティムールはチンギス・カンの男系子孫ではありませんでした。そのためハンの代わりにアミールという称号を用い、チンギス家と婚姻を結ぶことで正統性を補いました。この選択は、かつてのモンゴルの秩序が消滅していなかったことを示しています。新たな権力も、既存の認証システムを通過しなければならなかったのです。

1370年、ティムールはサマルカンドを中心に新たな帝国を打ち立てました。彼の軍隊はモンゴル帝国の戦術とテュルク系部族の組織を受け継いでいました。宮廷はペルシア風の行政とイスラムの学問を取り入れました。カラハン朝からホラズム、チャガタイへと続いた幾重もの層が、ひとつの支配体制のもとに集約されたのです。

カラーン・ミナレットの煉瓦模様に目を戻してみましょう。同じ煉瓦が層ごとに異なる方向を向いています。カラハン朝以降の中央アジアもまた、ひとつの要素が他の要素を排除しながら発展したわけではありませんでした。戦争は無数の生を断ち切りましたが、生き残った人々は残された破片から新たな秩序を築き上げました。その後のサマルカンドにおいて、その積み重ねは巨大な青いドームと精緻な星表となるのです。

第6章 ティムール帝国とウズベク民族の誕生、そして近現代史

サマルカンドの夜が更けると、青いドームは闇の中へと沈み、空には星が輝きます。広場に佇む旅人は、夜空の星の光と巨大な建築物の輪郭が重なり合う情景を眺めながら、えも言われぬ静寂を覚えます。しかし15世紀におけるこの都市の空気は、まったく異なるものでした。征服戦争によって連行された職人たちが壁面に青いタイルを貼り、天文学者たちは巨大な観測器具で星の位置を測っていました。卓越した美しさと凄惨な暴力、綿密な計算と強大な権力が、同じ首都の中で並び息づいていたのです。ティムール時代を正しく読み解くには、この二つの顔のどちらか一方を覆い隠してはなりません。

ハーンになれなかった征服者

ティムールは1336年、ケシュ、すなわち今日のシャフリサブス近郊で生まれました。彼はテュルク・モンゴル系のバルラス部族の出身でした。当時の草原の伝統において、最高統治者の称号であるハーンはチンギス・ハーンの直系男孫にのみ許されていたため、ティムール自身がハーンの称号を用いることはできませんでした。その代わりに軍事指揮官を意味するアミールという称号を用いました。さらにチンギス家の王女と婚姻を結び、皇室の婿を意味するグルガンという名も得ました。

このような称号の組み合わせは、当時の中央アジアにおける権力構造を鮮明に示しています。軍を率いて実権を握る統治者と、法統と正統性を象徴する人物とが分かれて存在していました。ティムールは名ばかりのチャガタイ家の人物を形式的なハーンとして立て、その背後で国家のあらゆる実権を行使しました。古い権威の枠組みを壊すことなく、その上に自らの新たな権限を重ねて統治する手法でした。

1370年、ティムールはアムダリヤ川とシルダリヤ川の間に位置するトランスオクシアナ地域を掌握し、サマルカンドを帝国の首都と定めました。その後、彼は四方に兵を起し、イラン、イラク、コーカサス、ロシア南部、インド北部、シリア、アナトリアへと遠征を行いました。米国のメトロポリタン美術館の資料は、ティムールが

統治した35年間に、その支配領域が中央アジアから西アジア、インド北部へと拡大したと説明しています。[A036]

歴史地図では、勝利した側の領域が一つの色で広く塗りつぶされます。しかしその地図の外側には、灰燼に帰した都市と命を落とした住民たち、捕虜として連行された職人たちが取り残されています。ティムールの軍勢は、抵抗した都市に対して過酷な報復を加えました。おびただしい数の人々が犠牲になったという記録が伝わっていますが、中世の年代記に記された膨大な数字をそのまま確定値とみなすことは困難です。とはいえ、数字の不確かさが征服の過程で起きた暴力の事実を消し去るわけではありません。

ティムールは征服した地から高名な職人や学者たちをサマルカンドへと連れてきました。この大規模な移住は、首都の建築や技術を大きく発展させました。しかし同時に、自らの意思とは関わりなく故郷を離れざるを得なかった無数の人々が存在しました。まばゆい文化の開花を、強制移住が生み出した美談にすり替えてはなりません。青いタイルの裏側には、名を残すことのなかった人々の過酷な労働が刻まれているのです。

サマルカンドの再設計

ティムールとその後を継いだ支配者たちは、巨大なモスクや霊廟、庭園や市場を次々と築きました。壮大なビビハニム・モスクや皇室の墓所であるグーリ・アミール霊廟は、巨大な門と高いドーム、陽光に輝く彩色タイルによって都市の権力を誇示しました。この時代の建築は、礼拝や追悼の場であると同時に、帝国の力と秩序を世界に向けて告げ知らせる公式の布告文でもありました。

ユネスコは、サマルカンドが14世紀から15世紀のティムール時代に大きな発展を遂げたと評価し、レギスタン広場のマドラサやビビハニム・モスク、シャーヒ・ズィンダ廟群、グーリ・アミール、ウルグ・ベク天文台を中核的な遺産として挙げています。[A037] これらの建造物は一度に建てられたのではなく、それぞれ完成した時期が異なっていました。複数の統治者や職人たちが長い年月をかけて、この都市の貌を整えていったのです。

巨大な建造物を建てることは、精密な技術の集大成でした。日干し煉瓦を焼く窯の温度から、アーチが建物の荷重を分散する構造的な角度、釉薬の色調の調合や壁面に刻む文字の比率に至るまで、すべての条件が合致しなければなりませんでした。遠くから眺める青いドームがもたらす感動は、目に見えない緻密な計算の上に成り立っています。美を創り出す文学的な感性と工学の厳密さは、この地において互いに背を向けることはありませんでした。

ティムールが世を去った後、広大な帝国は後継者たちの間で分割されました。息子のシャー・ルフはヘラートを中心に国を治め、シャー・ルフの妻であるガウハル・シャードは建築や学術を惜しみなく後援しました。ガウハル・シャードのように際立った足跡を残した女性後援者の役割を見落とすなら、ティムール朝の文化史を数人の男性君主だけの物語へと矮小化してしまうことになります。

ヘラートで花開いた絵画と書籍製作は、卓越した水準に達しました。精巧な細密画と流麗なカリグラフィー、上質な紙と製本技術が見事に調和していました。メトロポリタン美術館は、ティムール美術の様式がアナトリアからインドに至るまで広く影響を与え、ヘラートの絵画がペルシア絵画史において高い達成を示したと説明しています。[A036]

星を測る王ウルグ・ベク

ティムールの孫であるウルグ・ベクは、サマルカンドを統治しながら天文学と数学の発展に力を注ぎました。彼が1420年代に築いた天文台には、巨大な子午線観測機器が設置されていました。今日、丘の遺構を訪れた旅人は、地中深く掘り込まれて残る2条の円弧状レールを目にすることになります。この遺跡は、天体の角度を精密に測定していた観測装置の一部です。[A038]

ウルグ・ベクと同僚の学者たちは、数多くの天体を観測して精密な星表を完成させました。ユネスコは15世紀のサマルカンドを世界の天文学における一大中心地として説明し、ウルグ・ベクの星表が16世紀以降、ヨーロッパの学者たちによっても深く研究されたと記しています。[A039] 知識は一つの文明の中にとどまることなく、翻訳や書写を経て世界へと広がっていきました。

一次資料の中には、彼が観測した星の数や1年の長さの誤差を小数点以下の数値まで記している文献もあります。ただし、こうした数値は文献の写本や計算基準によって異なる場合があります。そのため本書では、ウルグ・ベクの天文表が当時の基準として屈指の精密さを誇り、星の位置観測や暦の計算に多大な影響を与えたという範囲にとどめて記述します。

天文台で得られた成果は、君主一人の力だけで成し遂げられたものではありません。夜空を見上げて角度を測る観測者がおり、数値を照合する計算者がいました。精密な青銅製器具を加工する職人や、それを羊皮紙に書き写す書記、そして研究を支えた後援者が一堂に会していました。今日の研究室のように体系的に役割が分担されていたのです。信頼に足る観測値は、根気強い反復測定と同僚学者たちによる厳密な計算から生み出されました。

ウルグ・ベクは傑出した学者でしたが、冷酷な政治の世界では脆弱でした。1447年に父シャー・ルフが他界した後、彼は権力闘争に巻き込まれ、1449年にととう殺害されました。彼が築いた天文台もまた、ほどなくして破壊され土砂の中に埋もれてしまいました。知識の正確さが、陰しい権力の刃の前で安全を保障してくれることはなかったのです。

ナヴァーイーが築いた言語の家

アリーシール・ナヴァーイーは、15世紀のヘラートで活動した詩人であり高級官僚でした。彼はチャガタイ語で長編叙事詩や散文を著し、テュルク語が深遠な思想や格調高い文学を表現するのにいささかも不足がないことを世に証明しました。彼はペルシア語でも優れた作品を残しています。

ナヴァーイーの選択は、ある言語を別の言語より低く見ていた当時の偏見に立ち向かった勇敢な決断でした。日常で使われていた身近な生活言語が、哲学や愛、政治や神秘を表現する品格ある文学言語として定着しました。今日のウズベキスタンにおいて、都市や通り、図書館や国立劇場に彼の名を冠してその功績を称えている理由がここにあります。

だからといって、15世紀の人物である彼を近代的な意味での民族主義者と短絡的に呼ぶことはできません。その時代の人々が抱いていた言語や共同体の概念は、現代

とは大きく異なっていたからです。それでもなお、チャガタイ文学の伝統が現代のウズベク文学を支える巨大な根幹となったことは確かです。

「ウズベク」という名の移動

15世紀、北方のキプチャク草原（ダシュティ・キプチャク）には、「ウズベク」と呼ばれる多様な遊牧集団が散らばって暮らしていました。この名がどこに由来するのかについては、学界で様々な議論が続いています。14世紀にジョチ・ウルス（金帳汗国）を統治したウズベク・ハーンの名と結びつける見解が広く知られていますが、一つの集団名称が形成され拡散した過程を、特定の個人一人だけに帰することは困難です。

アブル＝ハイル・ハーンは1429年にウズベク諸集団の指導者として推戴され、勢力を結集させました。『イラン百科事典』は、彼の子孫たちが建てた王朝を「アブル＝ハイル系」と呼ぶほうが正確であると説明しています。西洋の研究において長年「シャイバーニー朝」と一括して呼ばれてきた集団の系統を、厳密に区別するためです。[A040]

アブル＝ハイル・ハーンの子孫であるムハンマド・シャイバーニー・ハーンは、1500年にサマルカンドを手中に収め、続いてブハラやトランスオクシアナの多くのオアシス都市を掌握しました。拠点を使い追われたティムール家のバーブルは、アフガニスタンを経てインドへと南下し、ムガル帝国を建国しました。中央アジアの草原で起きた権力交代が、海を越えたインドの歴史における新王朝の誕生へとつながったのです。

草原から南下したウズベク集団は、農耕が発達したオアシス地帯に定着しました。この過程で、現地のテュルク語系住民やペルシア語系住民、多様な遊牧部族や都市共同体が混ざり合いました。したがって、今日のウズベク民族のルーツを16世紀の征服者集団だけに限定して捉えることはできません。数世紀にわたる通婚と言語の変容、そして近現代国家の政策が生み出した、重層的で複合的な歴史的共同体なのです。

17世紀以降、ブハラ、ヒヴァ、コーカンドという三つの政治的中心地は、それぞれ異なる道を歩みました。歴史上ではこれらを総称して「三ハン国」と呼ぶことが多いものの、ブハラは統治者の称号に応じてエミール国と呼ばれた時期もあり、国境線

も度々変化しました。三つの国家は互いに交易を行いつつも頻繁に軍事衝突を繰り返し、ペルシア、ロシア、清朝ともそれぞれ独自の外交関係を結びました。

大航海時代以降、海上交易が繁栄した後も、シルクロードの内陸都市群が一朝一夕に衰退し機能を停止したわけではありませんでした。ユーラシア大陸を結ぶ内陸交易や地域の農業、イスラムの宗教教育は依然として息づいていました。ただ、世界貿易の主軸が海へと移行し、ハン国内部の消耗的な抗争が長期化するにつれて、北方から迫るロシア帝国の軍事的な圧力に対抗する力を結集することが困難になっていきました。

ロシア帝国の鉄道と綿花

ロシア帝国は19世紀中頃、中央アジアへと軍隊を派遣しました。1865年にタシュケントを占領したロシアは、1867年にトルキスタン総督府を設置して植民地統治を開始しました。続いて1868年にブハラを保護国化し、1873年にはヒヴァ・ハン国に対しても宗主権を行使しました。1876年にはコーカンド・ハン国を完全に併合・解体し、帝国のフェルガナ州へと編入しました。[A041]

ロシアの支配は軍事占領にとどまらず、行政機構の再編、鉄道網の敷設、スラヴ系住民の移住をもたらしました。新設された鉄道は、商品と人々を迅速に輸送しました。しかし、列車が走るまさにその線路を通じて、植民地支配のための軍隊や総督府の命令も素早く移動したのです。交通網をはじめとするインフラは、誰の目的に合わせて敷設されたかによって、住民の生活をつなぎもすれば、支配の鎖を固く締めつけもします。

この時期、中央アジア全域で綿花の栽培が急増しました。ロシア本土の繊維工業が安価な原綿を求めたためです。水を引いていた肥沃な農地は、次第に換金作物へと傾いていきました。農民たちは世界市場の相場や過酷な重税、水路の水利権に縛られることになりました。綿花は手元に入る現金収入をもたらしたものの、食糧生産と水資源が保ってきた長年の均衡を揺るがすことになったのです。

帝国の拡張とともに、ロシア式の学校や印刷技術、郵便網が都市へと導入されました。都市の新たな知識人たちはこの回路を通じて、ロシア本土のみならずオスマン帝国やエジプトの改革思想をいち早く吸収しました。植民地支配を強固にするために

敷かれたネットワークを、皮肉にも植民地統治を批判する人々が新たな学びと対話の通路として活用した形です。支配権力の通り道から、変革を望む対抗的な情報もまた流れていったのです。

新しい方式で教えようとしたジャディード

ジャディードという名は、「新しい」を意味するアラビア語の単語に由来します。ジャディードの知識人たちは、文字を無批判に暗記させていた旧来の教育方式を改め、音と文字を結びつける音声中心の読解教育や、算数、地理、科学を教えることに尽力しました。彼らは新式学校を設立し、新聞の発行や演劇、出版活動を展開しながら社会の啓蒙を図ったのです。[A042]

マフムードホジャ・ベフブディ、ムナウフル・カーリー、アブドゥラウフ・フィトラト、アブドゥラ・カディリ、チョルポンといった知識人たちがこの潮流に加わりました。彼らは単一の政党に束ねられた集団ではなかったため、宗教改革の度合いや世俗教育の比重、そして自治や独立の方向性をめぐって、それぞれ異なる考えを抱いていました。

ジャディード運動が手にした中核となる道具は、銃剣よりも教室と印刷機でした。子どもたちには文字を音と結びつけて素早く読む方法を教え、壁に世界地図を広げて自分たちが暮らす故郷の位置を示しました。舞台に上げられた演劇は、教育のない家族が経験せざるを得なかった胸の痛む悲劇を生々しく描きました。暗い劇場に集まった観客は、舞台の上の他人の物語を見つめながら、自らの社会の影を振り返ったのです。

1917年のロシア革命で帝政が崩壊した後、ジャディードと各地の勢力は力を合わせてコーカンド自治政府を樹立しました。しかし1918年、ボリシェヴィキ勢力がこれを武力で打倒しました。その後、中央アジア全域では新たなソビエト権力に立ち向かう武装抵抗が激しく続きました。ソビエトの文献は彼らを略奪者を意味する「バスマチ」運動と蔑称で呼びましたが、抵抗に立ち上がった人々の身分や目的は地域によって様々でした。

ジャディードの知識人の一部は、初期ソビエト体制の中で教育と文化の改革を着実に進めました。しかし時が流れ、権力を掌握したスターリン体制は、彼らを危険な

民族主義者や反革命分子として追い詰めました。フィトラト、カディリ、チョルポンをはじめとする数多くの知識人が、1930年代の過酷な大粛清によって命を落としました。一時代の慧眼が込められた教科書や戯曲、翻訳書は、著者の名とともに不穏文書とみなされて禁書となりました。[A042]

ソビエト・ウズベキスタンの光と影

1924年、ソビエト指導部の民族・領土境界画定政策を経てウズベク・ソビエト社会主義共和国が樹立されました。今日の中央アジアの国境線と民族分類に多大な影響を与えた決定でした。行政制度を通じて共和国の領域が定められ、民族言語の公式な枠組みが整えられましたが、重大な決定を下す最終的な権力は依然としてモスクワの共産党指導部にありました。[A041]

共和国の成立後、学校が増えて女子教育の機会も広がりました。病院や新たな産業施設が各地に整備され、タシュケントには総合大学や学術研究機関が開設されました。しかしその一方で、伝統的な宗教施設は強制的に閉鎖され、農村には集団農場が導入されて過酷な政治的弾圧が続きました。モスクワが課した綿花生産目標は、中央アジアの水と労働力を中央計画経済の枠組みに徹底的に縛りつけました。近代的な発展と体制の抑圧が、同じ制度の中で隣り合って芽生えたのです。

文字体系もまた、政治の激変と歩調を合わせるように変化しました。ウズベク語は千載近くにわたりアラビア文字を使用してきました。しかしソビエト初期の1920年代後半にラテン文字へと改められ、1940年にはキリル文字が導入されました。1991年の独立後、国は再びラテン文字を公式文字として採択しました。わずか一世紀の間に、文字体系が三度も大きく揺れ動いたのです。

文字を変えるということは、新しい教科書を印刷し、教師を再教育するという莫大な労力を意味します。上の世代が残した書物や記録を次の世代が読むことが難しくなるという、文化的な断絶が生じることもあります。コンピュータのキーボード配列や資料の検索方法、図書館の保管規則も根底から変わります。文字政策とは、紙の上に記される記号の形にとどまらず、社会全体の思考をつなぐ巨大な社会基盤なのです。

ソビエト政府の綿花増産計画は、綿花の収穫量を国家的最優先目標へと押し上げました。砂漠を貫く灌漑網が広がり、大型農業機械や研究機関が導入されました。し

かし単一の作物のみに過度に依存したことで、膨大な水使用や土壌の塩類集積、無秩序な農薬散布といった生態学的な災禍が深刻化しました。上層部から下された数値目標を満たすため、収穫量を偽って水増し報告する事件まで起こりました。帳簿上の測定値が権力の信賞必罰と直結するとき、統計データは現実を覆い隠す嘘を覚えてしまうのです。

1937年秋、ソ連政権は極東に暮らしていた高麗人約17万1,000人を中央アジアの荒野へと強制移住させました。[A043] 数多くの人々がカザフスタンやウズベキスタンの見知らぬ土地に定着しました。ウズベキスタン政府は、彼らがウズベクの住民と心を通わせて共に暮らし、農業の開墾と社会の発展に大きく寄与したと記録しています。[A044]

見知らぬ土地で現地の隣人たちが差し伸べた温かいもてなしの記憶は、実に貴重なものです。しかしその温もりある記憶が、国家権力が犯した強制移住の野蛮な暴力を覆い隠してはなりません。高麗人たちは生涯をかけて築いた財産と故郷を奪われたまま、家畜小屋のような貨物列車の中で厳しい寒さと飢えに耐え、やせた土地へと降り立たねばなりませんでした。隣人が差し出したひとかけらのパンと一室の温もりは、国家が犯した犯罪の泥沼の中で、普通の人間がもう一人の人間の息づかいを救い上げた涙ぐましい光景でした。

第二次世界大戦中、西部戦線の主要な工場や避難民、両親を失った孤児たちが安全なウズベキスタンへと大挙して移送されてきました。タシュケントは軍需物資を生産する後方基地であると同時に、避難民を受け入れる避難の中心地となりました。現地の住民たちは、食糧や住居が圧倒的に不足する困窮の中にあっても、新たな隣人たちを温かく迎え入れました。戦争の記憶を整理する際には、前線で戦った兵士だけでなく、後方で汗を流した女性労働者や避難の途についた子どもたちの過酷な生活も、等しく含められるべきです。

1966年4月26日の未明、タシュケント近郊でマグニチュード5.3の地震が発生しました。[A045] 大地が揺れて家々が崩れ落ち、驚いた家族連れは暗闇の中で路上へと飛び出しました。震源が都心に近かったうえに、伝統的な日干し煉瓦で建てられた建物が多かったため、都市が被った被害は極めて甚大でした。2026年に国際学術誌に掲載された研究は、当時公式に集計された死者を8人、入院した負傷者を約200人と記しつつも、住まいを失い路上に放り出された被災者は30万人を超えるものとして

記録しています。[A046] 災害被害の数値は資料によって差異があるため、当時の出典と文脈を丹念に照らし合わせながら読み解く必要があります。

地震直後、ソ連の各共和国から技術者や労働者たちがタシュケントへと駆けつけ、復興に腕をまくりました。広い道路がまっすぐに切り拓かれ、頑丈な新築住宅や公共建築が立ち並びました。都市再建事業は住民たちに安全な居住空間をもたらしたものの、数百年続いてきた古い路地や馴染み深い生活空間を失わせることにもなりました。2026年にタシュケントの近代建築遺産がユネスコ世界遺産に登録されたことは、震災後の都市計画が持つ歴史的価値を世界が改めて認めた成果です。[A047]

独立の後に開かれた新たな始まり

1980年代後半に入ると、ソ連体制の危機が深まりました。ウズベキスタンでは綿花生産量の増しに対する捜査や腐敗摘発の過程が、政治的対立と民族的反感を増幅させました。長く抑圧されてきた言語や歴史、環境問題を公に発言する市民が増えていきました。砂漠の只中で湖底をさらし干上がったアラル海の災禍もまた、中央計画経済の明白な失敗を露呈させました。

1991年8月31日、ウズベキスタンは国家の独立を宣言しました。翌日の9月1日を公式な独立記念日と決めました。[A048] 新生国家を象徴する国旗や国章、国歌が制定され、独自通貨であるスム（Som）が発行されました。ソビエト時代に人為的に引かれた共和国の行政境界は、いまや堂々たる主権国家の国境線となったのです。

しかし、独立宣言がそれまで絡み合っていたすべての問題を一挙に解決したわけではありませんでした。ソ連時代の緊密だった計画経済の連鎖網が断ち切られたことで、物価が高騰し雇用が揺らぎました。新たに発足した政府は、社会の安定と国家の統合を最優先に掲げました。権力が長期にわたり一極集中したことで、市民の政治参加や言論の自由は狭まらざるを得ませんでした。新生独立国の建設において成し遂げた成果とともに、市民の権利が直面せざるを得なかった現実的な限界も等しく見つめなければなりません。

2026年、ウズベキスタンは独立35周年を迎え、大々的な記念行事を準備しています。[A048] 独立した主権国家で生まれた子どもたちが、いつしか社会の中心世代へと成長した歳月です。若い市民にとってソビエト時代は、自ら体験した生活の記憶と

いうよりは歴史の教科書に出てくる昔話に近いものです。彼らは先祖が遺した青いドームやティムールの名を学びながらも、インターネットや人工知能技術を使いこなし、世界の舞台で活躍する海外での仕事を語り合っています。

盛大な記念日は、複雑な過去の歴史を一文に凝縮して見せる力を持っています。独立記念日の華やかな舞台の上には、高く掲げられた国旗や歌、英雄の名が登壇します。国中が心を一つにして喜ぶ象徴的な光景をつくり出すことは意義深いことです。しかし、その華やかな舞台の外で黙々と生きる人々の声までも偏りなく記録してこそ、歴史の記憶が薄れずに保たれるのです。

サマルカンドの広場に立つティムール像の傍らには、彼の征服遠征によって破壊された都市たちの痛ましい歴史もまた並んで置かれるべきです。ソビエトが建てた学校や近代的な工場の隣には、過酷な粛清や強制移住の悲劇、そして綿花計画が遺した被害が明確に記されていなければなりません。独立を成し遂げた輝かしい成果を語るときにも、市民の自由な権利と地域自治が経験してきた現実の苦難をともに見つめる必要があります。

2026年は、1966年のタシュケント地震から60周年を迎える年でもあります。ウズベキスタンの記録機関はその年の4月、60点余りに及ぶ写真や公式文書を展示し、破壊と復興、そして各共和国の住民たちが差し伸べた連帯の手を振り返りました。[A052] まさにその年に、震災の克服過程で建てられた近代建築遺産がユネスコ世界遺産に登録されました。[A047] 災害の痛ましい記憶が、文化遺産の保存や次世代のための安全教育へと結びついた場面です。

歴史の記憶は、書庫に文書を保管しておくだけで自然に守られるものではありません。資料を世に公開し、異なる立場から発せられた証言を突き合わせ、誤って伝えられた説明を絶えず正していかなければなりません。コンピュータのデジタル記録もファイル形式や保存媒体が変われば読み取れなくなることがあるように、一国の歴史にも不断のバックアップと徹底した検証が必要なのです。

民族の誕生をただ一つの血統にのみ求めようとすれば、豊かな歴史の文脈を見失ってしまいます。古代ソグドの貿易都市、テュルク系言語の成長、モンゴル系支配家門、シャイバーニー集団の移動、ペルシャ文化の薫り、イスラム信仰、そしてロシアやソビエトが残した制度的枠組みが幾重にも重なり合って、今日のウズベキスタンに残さ

れました。やせた土地を開墾した高麗人やタジク人、カラカルパク人、ロシア人をはじめとする多様な共同体の営みと息づかいもまた、この国の歴史を力強く支える重要な一翼です。

物語は再びサマルカンドの星明かりへと戻ります。昔の天文学者が夜空に輝く一つの星の位置を正確に測るためには、揺るぎない確固たる基準線が必要でした。一国家が歩んできた過去を誠実に読み解く作業にも、これと同じ基準線が不可欠です。栄光ある勝利のみを残せば歴史の座標は狂い、痛ましい傷跡ばかりを暴き立てれば、その時代を生きた人々が紡ぎ出した輝かしい美しさは失われてしまいます。征服戦争の暴力と知識の偉大な達成、強制移住の無残な受難と、その中で芽生えた隣人たちの温かいもてなしを一つの記録の中にありのままに位置づけてこそ、ウズベキスタンの近現代史は初めて真の調和を見出すのです。

第II部 改革・経済・都市

第7章 国家改革と地政学的外交構図

ダッシュボード上の国家

タシュケントの政府ウェブサイトアクセスすると、数百もの数字がびっしりと並んだ表が一目で飛び込んできます。幼稚園に通う子どもの割合から職業訓練を受ける人の数、海外からの送金額、節水型農業を導入した農地面積に至るまで、ありとあらゆる指標が2026年から2030年にかけて並んでいます。これこそが「ウズベキスタン2030戦略」を示す公開ダッシュボードです。国家の長期計画がキャビネットの分厚い書類ファイルの中に留まることなく、誰もが見られるコンピュータ画面上の目標管理表として提示されているのです。[B001]

表に記された数字が増えたからといって、市民の暮らしが自然と良くなるわけではありません。どの指標を選び、何を測定するかを決める過程にも、国家の苦悩や政治的な計算が働いています。何を測定し、何を統計から除外するかを見れば、その国がどこを目指しているかが分かるからです。就業者数だけを数えていては、雇用の安定性や安全性を過小評価しがちです。新設された学校の数だけを集計しても、教室での授業が子どもたちをどれほど豊かに育てているかを推し量ることは困難です。ウズベキスタンの改革を正しく読み解くには、政府が発表した目標と実際の成果、そして統計からこぼれ落ちている課題をひとつの画面に重ね合わせ、冷静に見極めなければなりません。

シャフカト・ミルジヨエフ大統領は、2016年末の就任直後に規制されていた為替取引を自由化し、近隣諸国と途絶えていた国境対話を再開しました。その後、2023年の憲法改正と早期大統領選挙を経て権力構造を整え直しました。[B008]「ウズベキスタン2030戦略」は、こうした政治や経済の変化を教育、福祉、産業、行政、環境分野へと広げた国政の青写真です。2026年版のダッシュボードには、目標ごとに現在の基準値と年ごとに達成すべき数値が項目別に記されています。2030年までに200万人に職業技術や起業のノウハウ、外国語を教授し、職がない、あるいは公式な所得が証明できない求職者70万人にはバウチャー形式で受講費を支援するという項目がその代表例です。[B001]

このような進め方は、ソフトウェア開発プロジェクトの工程表によく似ています。大きな目標を細かく分解したうえで担当省庁を定め、年ごとに達成状況を確認しながら数値を更新していく仕組みです。洗練されたプログラムが実行後にバグのログを透明に残すように、優れた国家計画もまた、目標に届かなかった指標を隠さずにその原因を明らかにしてこそ実効性を持ちます。予算が不足していたのか、現場の公務員による執行が遅れたのか、それとも当初立てた目標が現実離れしていたのかを率直に開示してこそ、次なる段階の政策が一步前進できるのです。

成長の光と速度の差異

2025年のウズベキスタン経済は、実質ベースで7.7パーセントという高い成長率を記録しました。世界銀行は同年のウズベキスタンの全国貧困率が8.9パーセントから5.8パーセントへと低下したと分析し、2026年の経済成長率を6.4パーセントと予測しました。[B002] 一方、国際通貨基金（IMF）は算定時期や前提が異なることから、2026年の成長率を6.8パーセントと見込みました。また、2026年4月の消費者物価上昇率は前年同月比で7.0パーセントに達しました。[B003] 機関ごとに提示する予測値がわずかに異なるからといって、どちらか一方の計算が誤っていると断定することはできません。予測を発表した時期に加え、国際金相場、海外送金額、国内の消費や投資水準をどのように想定したかによって試算結果が変わるためです。

2026年上半期の政府公式統計を見ると、成長の勢いは一段と増しています。国内総生産は前年同期比で8.5パーセント増加し、鉱工業生産は8.0パーセント、固定資本投資は17.5パーセント、サービス業は16.9パーセント拡大しました。[B010] ただし、この数字は半年間の暫定実績であり、IMFが示した6.8パーセントは年間通期を見据えた数値です。したがって、上半期の実績8.5パーセントと年間予測値6.8パーセントを単純に比較して、どちらが正しいかを拙速に判断することはできません。下半期に入って消費や投資が一息つけば、年間の成長率は自然と落ち着いてくる可能性があるからです。

こうした急成長の背景には、経済を牽引する三つの柱が存在します。ウズベキスタンの主要輸出品である金の価格が上昇すれば、輸出実績と国家財政は潤います。国外で働く労働者が母国へ送る仕送りは、庶民家庭の食卓と消費を下支えしています。これに加え、政府と外資が発電所や鉱山、道路や住宅の大規模な建設を進めたことで、

投資指標が大幅に押し上げられました。しかし、この三つの推進力がいつまでも同じ強さで維持されるとは限りません。国際金価格は世界の資源市場の動向に左右され、海外送金はロシアをはじめとする主な就業先の景気変動によって揺らぎがちです。大規模な建設現場もまた、工事が完了すれば雇用が縮小するリスクを抱えています。

IMFが2026年の報告書で警鐘を鳴らした理由もまさにここにあります。国民経済の許容限度を超えて需要が過度に急速な膨張を遂げる恐れがあるためです。巨大な国営企業や官民連携（PPP）事業から生じうる財政リスクを透明化し、適切に管理しなければなりません。政府が定めた優遇金利によって特定企業に政策資金を集中させていた慣行を改め、対外的な衝撃に見舞われた際に通貨価値が緩衝材の役割を果たせるよう、為替レートの柔軟性を確保する必要があります。[B003] アクセルを力強く踏み込んで加速している間にも、ブレーキが適切に利くかどうかを常に点検しなければならないという意味です。

貧困率の低下は確かに歓迎すべき知らせです。しかし、一人の人間の日常は、統計表の貧困ラインの上下二つの枠のように綺麗に割り切れるものではありません。所得がわずかに増えて辛うじて貧困ラインを脱したとしても、突然の医療費や冬季の暖房費が高騰すれば、庶民の家計はたちまち再び揺らぎます。ウズベキスタンの伝統的な地域共同体「マハッラ」が困窮世帯を直接見つけ出して支援する方式は、近隣の事情を身近な場所から見守ることができるという明確な強みがあります。ただし、支援が誰に行き渡り、真に助けを必要とする人が抜け落ちていないかを外部から検証できる、公平な電算記録の裏付けが不可欠です。個人的な付き合いや地域行政の都合が客観的なデータを優先するようになれば、いくら趣旨の優れた福祉制度であっても路地裏で形骸化しかねません。

若い国が投げかける問い

2026年4月、ウズベキスタン大統領府は、14歳から30歳までの若年層人口が950万人に達し、総人口の約25パーセントを占めると発表しました。毎年約27万組の若い新たな家庭が築かれているという統計も併せて提示されました。[B009] 活力ある若者層が厚いという事実は、国の未来を照らす力強い支えです。しかしその一方で、毎年学校を卒業して社会へと歩み出る若者たちに対し、良質な雇用や住まい、利便性の高い公共交通機関、安定した保育・養育環境を滞りなく整備しなければならないという重い責務でもあります。

政府が打ち出した「新ウズベキスタン青年2030」計画は、起業教育や職業訓練、外国語の習得、健康管理、ボランティア活動、政策参加を一つの総合パッケージとして扱っています。2026年から2027年にかけて7分野にわたる56の細部事業を推進し、海外の有力大学と連携した専門教育課程で2万人の若者を育成し、1,000件の起業計画を選定して金融機関からの融資を仲介するという具体的な青写真を提示しました。[B009] しかし、書類上の数値が大きいからといって、直ちに安定した雇用が生まれたと見なすことはできません。教育を修了した若者が実際に就職できたのか、その雇用が何カ月持続したのか、得られた賃金で家族の生計を立てられるのかを政府が粘り強く追跡調査してこそ、政策の実効性が証明されます。

青年政策の本質は、人々を無理に国境の内側に縛り付けることにはありません。若者たちがより広い世界へ羽ばたける自由とともに、いつでも母国へ戻って働ける道を広げることにあります。ロシアや韓国、トルコなどへ渡り、汗を流して働く若者からの送金は、故郷の家族を養う支えとなっています。しかし、彼らが外国で培った先進技術や経験が帰国後の国内産業へと結びつかなければ、個人の尊い成果は国家の成長と噛み合わないまま乖離してしまいます。国家間で資格を相互に認め合い、安全な労働契約を結べるよう支援するとともに、母国に戻って起業し、たとえ失敗したとしても再起できるよう制度的なセーフティネットを整備していく必要があります。

真の改革の試金石は、大々的な政策を発表したその瞬間から始まります。地方の小都市に暮らす20歳の若者が政府の支援公募を速やかに確認し、公正に競争へと挑めるかどうかは鍵を握ります。通信環境の整わない農村の集落でも不都合なくオンライン申請を行える必要があり、親の人脈や後ろ盾がなくとも選考審査が透明に進められているかを確認できなければなりません。惜しくも不合格となった若者に対しても

不採用の理由を丁寧に説明してこそ、制度は初めて信頼を獲得します。ダッシュボードに並ぶ目標値は、まさにこうした素朴で日常的な手続きの透明性を経ることで、生きた信頼へと変わるのです。

開かれた経済と残された政治的課題

ウズベキスタンは対外経済の門戸を急速に開放しました。しかし、政治的多元主義や市民社会が声を上げられる空間は、経済開放ほどの速さでは広がりを見せていません。欧州安全保障協力機構（OSCE）傘下の民主制度・人権事務所（ODIHR）は、2024年に実施されたウズベキスタン総選挙について、選挙管理の技術面では周到に準備されていたものの、全般的な政治環境が有権者の実質的な選択肢を制約していたと評価しました。公認登録された5つの政党間における政策論争が希薄であり、メディア報道への制約や投票手続き上の不備も併せて指摘されました。[B008]

こうした国際社会からの指摘は、ウズベキスタンの改革そのものを不当に貶めようとするものではありません。経済を開放し行政をデジタル化するスピードに比べ、権力を牽制し監視する制度の歩みが遅れをとるリスクを喚起する警告といえます。外国企業がある国に工場を建設し資本を投じようとする際、税制優遇措置ばかりを見ているわけではありません。契約上の紛争が生じた際に裁判所が法と原則に基づいて判決を下すのか、記者が権力層の汚職を自由に追及できるのか、地域住民が無理な開発事業に対して堂々と反対の声を上げられるのかまで入念に見極めます。政治体制がもたらす予見可能性と信頼は、企業が負うべき目に見えない経済的コストに直結するためです。

2026年に開催された世界銀行との公共ガバナンス改革会議においても、ウズベキスタン政府関係者は省庁ごとに分散していた行政データを統合し、政策決定プロセスへの市民参加を制度化するとともに、投入された予算額よりも実際に達成された成果を中心に据えて行政を運営する方策を議論しました。[B045] このような議論が書類上のスローガンに終わらず実効性を持つためには、公開される公共データが政府の実績を誇示するための道具として使われてはなりません。政策の執行過程で生じた失敗の割合や苦情処理の遅延時間、当初の計画を変更して予算を組み替えた理由に至るまで、ありのままに透明性をもって公開する必要があります。

決定権限が一人の指導者に集中すれば、一糸乱れぬ速さで物事を進めることはできます。しかし、政策に致命的な誤りが生じた際、それを途中で軌道修正する仕組みが機能しなくなります。議会や裁判所、メディアや市民団体がそれぞれ独立した権限を持ち牽制し合う理由は、行政の足を引っ張るためではありません。誤った判断が引き起こす甚大な国家的リスクを未然に排除し、被害を防ぐためです。ウズベキスタンが直面している次の段階の改革は、推進スピードを上げることと同じくらい、権力を分散し相互に検証し合える安全装置を強固に築き上げることなのです。

多角的に開かれた外交

地図を広げた旅行者は、ウズベキスタンの位置を目にして途方に暮れるような閉塞感を覚えるかもしれません。海へ出るにはどの方向へ向かって少なくとも二つの国の国境を越えなければならない二重内陸国だからです。この地において外交とは、抽象的な国際政治の議論ではなく、いま目の前にある市場のパンの価格や工場の部品納期を決定づける切実な生存の技術となります。北への道はカザフスタンを経て広大なロシアへと伸び、東への道はキルギスの険しい山脈を越えて巨大な中国市場へと通じています。西への道はカスピ海と南コーカサスを経てヨーロッパへと向かい、南への道は険路の続くアフガニスタンとパキスタンを抜けてインド洋の青い海を望んでいます。

ウズベキスタンは、いずれか一国の大国に肩入れして他の大国への扉を閉ざすような綱渡りではなく、四方の扉を同時に開け放つバランス外交を選択してきました。2026年6月にはロシアと向かい合い、産業技術や物流の協力策について踏み込んだ議論を交わしました。[B049] 同月にドイツで行った首脳会談では、両国間の政治対話や貿易、投資、文化交流を幅広く扱い、欧州連合（EU）との協力関係を強固なものにしました。[B050] さらに、中国へと向かう大規模な鉄道接続事業を推進し、韓国とは製造業や保健医療、高等教育の分野で緊密な実務協力を継続しながら、アゼルバイジャンをはじめとする地域内の近隣諸国との連携もきめ細かく築き上げています。[B006][B016][B005]

四方に扉を開いておく多角化外交は、すべての国と機械的に等しい距離を保つという意味ではありません。解決すべき課題ごとに手を携える相手がそれぞれ異なるからです。雇用とエネルギーの需給は、今なおロシアと切り離せない構造で結びついて

います。大規模な工場建設や社会基盤の拡充においては、中国の資本と施工能力が占める割合が大きくなっています。ヨーロッパは国際標準に沿った制度的ルールや先端技術、先進的な金融市場への通路を開いてくれます。韓国は製造業の育成や公衆衛生、人材育成の分野で長年にわたり現場での信頼を築いてきました。

[B049][B050][B016] ウズベキスタンは、このように入り組んだ対外関係網を、いずれか一方からの一方的な圧力に振り回されないための外交的緩衝地帯として位置づけています。

2026年7月31日、中央アジア5カ国とアゼルバイジャンの首脳がキルギスのチョルポンアタに集いました。この場でウズベキスタンは、中央アジアと南コーカサス、アフガニスタンを一つに結ぶ経済発展ベルトや共通デジタルプラットフォームの構築、地域内産業サプライチェーンの連携、教育および人工知能（AI）インフラの整備を提案しました。会談後、参加国はこうした協力の意志を盛り込んだ「チョルポンアタ宣言」を採択しました。[B005] この会談は、中央アジアの地域内協力が、過去の複雑な国境紛争を調整していた防御的な水準を超え、交通網やデータ、気候危機への対応、先端産業を共同で設計する未来志向の段階へと進化していることを明確に示しています。

国家間の真の関係改善は、華やかな首脳会談の場よりも、国境の村のささやかな辻にこそ鮮明に現れます。過去に対立を経験したウズベキスタンとタジキスタンの間では、旅客機や長距離バス、列車が再び定期的に往来するようになりました。国境地域での小規模貿易を活性化させ、貨物輸送の許可を電子システムで簡便に処理しようとする実務計画も具体化しつつあります。長年にわたり積もった心のわだかまりや不信感を一挙に拭い去ることはできないとしても、国境を行き交う人々や物資の足取りが頻繁になるほど、不測の紛争を対話によって解決していく実務的な通路もまた着実に広がっていきます。

鉄路は外交の言葉よりも正直である

2026年7月にウズベキスタン政府が発表した国家交通網構想には、4,000キロメートルに及ぶ国際複合輸送回廊と、4,700キロメートルの幹線鉄道網の拡充案が盛り込まれています。首都タシュケントやナヴォイ、ナマンガンに大規模な内陸物流拠点を築き、西の国境に位置するオラトをカスピ海へと向かう「中央回廊」の玄関口とし、南の国境にあるテルメズをアフガニスタンと結ぶ南部回廊の橋頭堡として育成するという戦略です。[B006]

中央回廊は、中国や中央アジアを出発したコンテナ貨物を、カスピ海を渡ってアゼルバイジャン、ジョージア、トルコを経由し、ヨーロッパへと運ぶ輸送ルートです。ロシア領を迂回する代替ルートとして国際社会の注目を集めていますが、地図の上にまっすぐな直線を引くことと、重い貨物を実際に滞りなく運び届けることとはまったく別の問題です。国境を越えるたびに通関書類の様式が異なり、国ごとにレールの幅である軌間が一致せず、港に到着して船と列車の積替えを行う際にもコンテナの荷役作業が遅延しがちです。国境を通過する前に通関データを事前共有し、輸送運賃や所要時間を一定の精度で予測できるソフトウェアシステムを整えることは、線路を新たに敷設する土木工事に劣らず重要です。

中国・キルギス・ウズベキスタンを結ぶ鉄道が完成すれば、東のアジア市場へと通じる物流距離は目に見えて短縮されます。しかし、険しい高山地帯を貫く莫大な建設費や借款返済の負担、煩雑な国境通関手続き、そして線路沿いに暮らす住民へもたらされる実質的な恩恵といった問題は、未永く検証し続けるべき課題です。新たに開通した鉄路が国家財政に通交料収入をもたらすだけで、肝心の列車が通過する農村の住民には騒音と粉塵ばかりを残すようでは、地域社会の支持を得ることは困難です。列車が停車する積替え拠点ごとに物流倉庫や車両整備工場、食品加工施設や宿泊業がともに繁栄し、地域住民に良質な雇用と所得が還元されなければなりません。

南へと向かうトランス・アフガン鉄道構想は、一段と慎重な目で見守る必要があります。2026年4月、ウズベキスタンとパキスタンの実務担当者は、この巨大な鉄道建設の妥当性を巡って協議を重ねました。[B007] 続く7月には、ウズベキスタン政府の交通計画文書においても本事業が「加速すべき中核課題」として明記されました。[B006] しかし、公式文書のそうした文言が直ちに順調な着工や完成を保証するわけではありません。険しい山岳ルートの確定や天文学的な財源調達、現場の安全確保は

もとより、アフガニスタン内部の複雑な政治情勢を解きほぐさなければならない、巨大な構想段階の事業だからです。

国境の街テルメズの川辺に立ち、アフガニスタン側を眺める人は、見慣れぬ鉄道橋の向こうの風景に好奇心と緊張感を同時に覚えやすいものです。もしトランス・アフガン鉄道が実際に結ばれば、テルメズを出発してアフガニスタンを縦断し、パキスタンのインド洋の港へとまっすぐ伸びる新たな物流の大動脈が開かれます。ウズベキスタンにとっては海へと通じる最短距離の南の出口が生まれ、アフガニスタンには少なからぬ通過料収入と地域雇用の創出機会が開かれる可能性があります。しかしその裏には、陰阻な高山地帯での難工事や武力衝突のリスク、国際社会による金融制裁と決済網の遮断、そしてアフガニスタン現地における女性や住民の人権という重い難題が絡み合っています。線路が敷かれることで平和を呼び水とする道もあり得ますが、最低限の平和と安定が根づかなければ、敷設したレールさえ安全に守り抜くことはできません。

国境を越える水と安全保障

中央アジアの安全保障と外交は、線路を繋ぐことだけで完結するものではありません。この地域の命の源であるアムダリヤ川とシルダリヤ川の流れは、人間が引いた国境線に沿って流れてはくれないからです。川の上流に位置するキルギスとタジキスタンは、厳しい冬の寒さを乗り切るために水力発電所で電力を生み出さねばならず、下流に位置するウズベキスタンとカザフスタンは、酷暑の夏季に綿花畑や農地に引く農業用水を切実に必要としています。上流国が冬に水を貯めて発電に使い切ってしまうと、下流国は夏に干魃に見舞われることになるため、ダム放流時期を巡って農民と発電公企業の利害関係が真っ向から衝突することになります。

賢明な水資源外交は、おのおのが自国の取り分ばかりを大声で主張することから始まるものではありません。空から降る降水量や万年雪・氷河の融解速度、ダムの貯水量と実際の放流量を、隣接諸国が一体となって精密に測定する作業から始まります。気象観測データをリアルタイムで透明性高く共有し、深刻な干魃に見舞われた際に各国が用水をどれほど削減するか、あらかじめ明確な規則を取り決めておく必要があります。上流の冬季の余剰電力と、下流の化石燃料および夏季の農業用水を取り引きする「水・エネルギー交換契約」についても、季節ごとの単価と供給量を文書で明確に

残さねばなりません。国境を越えて流れる大河には、軍事力よりも根深い信頼と恨みの記憶がともに積み重なります。互いに約束を誠実に守り抜いた歳月が積み重なるほど、予期せぬ大干魃が訪れた際にも破局を免れ、危機を乗り越える力もまた育まれていくのです。

アフガニスタンに向き合う外交戦略もまた、これと似たバランス感覚を求めています。ウズベキスタンはアフガニスタンを、固く封鎖すべき南の危険地帯としてのみ捉えるのではなく、地域経済の通商網の一員として抱き込もうと努めています。国境の向こうへ電力を安定的に供給して鉄道を結び、アフガニスタンの青年に職業訓練や人道支援物資を届ける営みは、隣国が極端な孤立に陥って脅威を増大させる事態を防ぐ防波堤となります。かといって、国際社会が一貫して求めている基本的人権の保障やテロ防止の義務を見過ごすわけにはいきません。実務的な接触と正式な外交関係の承認とは、厳然として次元の異なる問題です。実務的な対話窓口は常に開いておきながらも、支援の条件と相手側の責任を明確に線引きする、冷静で精緻な外交力が求められています。

地方から読み直す改革

首都タシュケントを離れ、郊外ののどかな村に足を踏み入れた人は、都市の目まぐるしい疾走感がふと立ち止まったかのような印象を抱きます。首都の華やかな統計指標がどれほど急激に上昇しようとも、地方の時間はその場に留まったままであることもあり得るからです。タシュケントの市民が手元のスマートフォンでわずか数分のうちに電子行政手続きを終える一方で、人里離れた農村の住民は不安定なインターネット回線を捉えようと集落を歩き回ったり、町へ出るための移動手段をまず心配しなければならなかったりします。同一の法律や政策を全国で施行したとしても、地方自治体の財政事情や第一線の公務員の行政能力によって、住民が肌で感じる結果は千差万別です。「全国平均」というたった一つの数字は、こうした地域間の深い隔たりを覆い隠してしまいがちです。

「ウズベキスタン2030戦略」のダッシュボードは、数多くの政策目標を年度ごとに細分化し、一目瞭然に示しています。[B001] このシステムがもう一段階発展するためには、地域別の詳細な統計や投入された予算、そして目標に届かなかった具体的な理由に至るまでを立体的に結びつけて示す必要があります。全国規模の就業者数は

増えたものの特定の農村地域では女性の雇用がむしろ減少していたり、全国の病院数は増加したものの熟練した専門医が首都圏の大規模病院ばかりに集中して地方の診療空白が深刻化していたりすることもあり得ます。華やかな平均値の傍らに、地域や性別、年齢層ごとの格差をありのまま並べて提示してこそ、政策の手が届かなかった陰や隙間をようやく見つけ出すことができるのです。

地方自治体に実質的な行政権限を委譲すれば、地域の現場事情に合致した政策を迅速に決定することができます。しかし、権限ばかりを押しつけて見合う自主財源や専門人材を与えなければ、それは中央の責任を力のない地方へ転嫁することに過ぎません。逆に中央政府があらゆる地域開発事業をことごとく牛耳ってしまえば、地方の行政責任者は住民の声に耳を傾ける代わりに、首都から下される大統領の指示ばかりをいつまでも待ち続けることになります。いかなる事務を地方に委譲し、税をどのように公平に配分するのか、そして地域住民が税金の使途をいかに直接監視できるのかを、法律と制度によって明確に定めておかねばなりません。

住民参加型予算制度は、老朽化した地域の学校を修繕したり、暗い路地に街灯を設置したりするように、住民の肌感覚に寄り添った生活課題を直接解決する有益な通路となり得ます。ただ、オンライン投票の結果のみによって支援事業を選定してしまうと、人口が多くインターネット環境の整った中心街の事業ばかりが採択されるという偏りが生じます。日中の生計を立てるために公聴会へ出席することが難しいケア労働者や、移動が困難な障害者、通信の届かない僻村の住民の声を個別に訪ねて聴取する補完の仕組みが欠かせません。投票に参加した人数の多さよりも、現に置き去りにされている隣人が誰であるかを絶えず問い直す細やかさこそが、手続きの公正さを完成させるのです。

蔓延する腐敗を払い落とすこともまた、処罰の度合いを強めるだけでは根絶が困難です。許認可の手続きがあまりに複雑で、担当公務員の裁量基準が曖昧であるほど、迅速処理費や賄賂を要求する闇の隙間が生じるのは避けられません。行政手続きの処理期限や担当者の氏名を電算システムに明確に記録し、申請を却下する際には具体的な法的根拠を提示して市民が正当に異議を申し立てられる手続きを保障しなければなりません。政府の公共契約や調達入札に関する資料は、誰もがダウンロードして他企業と容易に比較・分析できるオープンデータの形で開放すべきです。世界銀行が2026年の政府改革会議において繰り返し強調した成果重視の行政と市民参加の価値

も、まさにこうした第一線の行政における小さな手続きの一つひとつにおいて、真の試練を経ることになります。[B045]

地方の現場で起きた小さな失敗をもみ消して隠すことなく率直に記録してこそ、中央政府の国家政策も初めて貴重な教訓を得ることができます。人里離れた村で意欲的に始まった職業訓練コースが実際の就職につながらなかったとしても、それを訓練生個人の怠慢や不誠実のせいばかりにすることはできません。訓練場所を行き来する通勤バスが不足していたのか、地元企業が当初約束していた採用人数を守らなかったのか、教えた技術が現場の需要から取り残された古い知識だったのかを、多角的に検証してみる必要があります。真の改革とは、上から下へと一方的な指示や命令を下すだけの垂直線にとどまらず、現場の生々しい試行錯誤やフィードバックが政策決定者に滞りなく伝わる健全な循環構造を築いてこそ、初めて完成するのです。

改革を長続きさせる方法

後世の歴史家たちは、ウズベキスタンの2026年を急激な成長指標の数字で記憶する可能性が高いでしょう。経済成長率や対外投資誘致額、延伸された鉄道の総延長や教育修了生の数がダッシュボードの画面をびっしりと埋め尽くしています。これらの数値は決して絵空事ではなく、実際に起きた暮らしの変化を映し出しています。両替の規制が解かれて市場が息を吹き返し、固く閉ざされていた隣国との国境が開かれ、いたる所に新たな企業や学校が開設されました。極度の貧困の淵から抜け出して安堵の息を漏らす庶民の家庭もまた、目に見えて増えました。[B002]

しかし、一国の歴史はいくつかの短期計画や統計数値だけで完成するものではありません。国際原材料価格が急落し、在外労働者からの送金が減少する不況が訪れたとしても、庶民の福祉網と公教育の教室は揺るぎなく機能し続けなければなりません。最高権力者の特別指示が下りなくとも、第一線の公務員が定められた法律と原則に従って黙々と職務を果たさなければなりません。報道記者が権力の痛いところを突く不都合な質問を投げかけても、身辺の脅威や司法処分を恐れずに済む社会にならなければなりません。隣国との間で予期せぬ国境紛争が持ち上がった際にも、指導者個人の親交に頼るのではなく、あらかじめ合意しておいた外交的な仲裁手続きが先に機能すべきです。

「ウズベキスタン2030戦略」のダッシュボードには、まだ埋められていない空白が残されています。この空白は行政の至らなさを露呈する弱点であると同時に、国の制度を正しく改め直していくための貴重な機会でもあります。政府が誇示したい成功実績ばかりを選んで埋めていくなら、ダッシュボードは一方的な体制宣伝の看板へと成り下がってしまいます。しかし、目標に届かなかった手痛い失敗や、それを正していった修正記録まで率直に書き加えるならば、この画面は政府と市民が知恵を出し合っ
て共に読み進めていく信頼に足る国家の作業日誌となるでしょう。ウズベキスタンの改革の最終的な成否は、ダッシュボードに記された目標数値の華々しさではなく、現場の誤りを勇気を持って見出し、それを正していく国家システムの成熟度によって決まるはずです。

第8章 革新経済と対外開放

黄金色の数字と1行のコードの間

ナボイの鉱山では荒々しい岩石を砕く鈍い音が響き渡り、タシュケントの小さなオフィスでは開発者がキーボードをせわしなく叩いています。片方では地中の鉱物を掘り出し、もう片方ではモニターの中のプログラムを作り出しています。都市と砂漠を行き来する旅行者なら、まったく異なる二つの風景にささやかな好奇心を抱くことでしょう。2026年のウズベキスタン経済は、この二つの光景の間を足早に行き交っています。金と銅が現在の輸出をしっかりと支えている一方で、情報技術と新たな製造業は次世代を牽引する輸出品を模索しています。

ウズベキスタンは、豊かな地下資源に恵まれるという大きな幸運を手に入れました。しかし鉱物は、一度掘り出せば自然と減っていく資源です。国際市場における価格も、ウズベキスタン政府の思う通りには決められません。金の価格が上がれば国家収入が増えて安堵するものの、価格が下落すれば国家予算と為替レートが一挙に揺らぐリスクを抱えています。鉱物を売って得た資金で人々の技術を育て、産業基盤を強固に固めなければならない理由がここにあります。

ナボイ鉱業・冶金会社は、2025年に金315万トロイオンスを生産したと発表しました。2024年に記録した310万オンスを上回る数字です。[B011] 同社は世界の金市場で相当なシェアを占める重要企業です。しかし、国営企業による華々しい生産発表が、環境汚染に伴うコストや地域住民の暮らしぶりまでつぶさに示してくれるわけではありません。金の生産量という数字を読む際には、水をどれほど使ったのか、廃棄された土石はどのように管理されているのか、職場の安全性や国家が得た税収はいくらなのかも、あわせて綿密に精査しなければなりません。

ウランもまた、国の財政を支える重要な輸出資源です。国営企業ナボイウランは、2025年にウラン7,000トンを生産したと明らかにしました。2026年4月にはキジルコク鉱床で商業生産を開始しました。同社が発表した設計基準の年間生産量は1,200トンで、予想操業期間は15年です。[B012] 同社は地中に化学溶液を注入して鉱物を溶かし出す地下溶液浸出法を用いています。土地を大きく掘り返さずに済む利点はある

ものの、地下水層がどのように流れているか、溶かし出した溶液を漏れなく回収できているかを長期間慎重に見守る必要があります。技術の名称がもっともらしく聞こえるからといって、環境に対して無条件に安全だと早合点してはなりません。

巨大な銅工場は、ウズベキスタン経済が持つもう一つの顔です。アルマリク鉱業・冶金コンビナートは、2026年3月に第3銅選鉱工場の稼働を開始しました。事業費27億ドルを投じ、工場敷地だけでも196ヘクタールに達します。設計基準で年間6,000万トンの鉱石を処理し、銅精鉱約90万トンを生産することができます。[B013] ここで言う精鉱とは、採掘した鉱石から有用な銅成分を選別して集めた中間製品を指します。この数値を純銅や電気銅90万トンと誤解してはなりません。中間加工品と最終製品を混同して捉えると、産業の実質的な規模を過大に見積もることになります。

鉱物の価値を国内に残す道

鉱物資源が豊富に埋蔵されている国が真に豊かになるためには、資源を大量に採掘することにとどまっていってはなりません。未加工の原鉱石や精鉱の状態で他国に売り渡してしまえば、精密加工や部品製造、製品設計や修理の過程で生まれる高い付加価値をすべて他人の手に委ねることになります。ウズベキスタンが自ら銅を用いて電線や変圧器の部品を生産し、金属加工機械を修理し、鉱山から得られるデータを分析する専門企業を育成すれば、同じ量の鉱物からでもはるかに多くの質の高い雇用を生み出すことができます。

こうした道のりには、陥りやすい罠が潜んでいます。政府が特定の工場だけを選び、低利の融資や税制優遇措置を長期にわたって集中させれば、企業は市場での競争力よりも官公庁の決定ばかりに頼るようになります。赤字が積み重なる国営企業を国費で果てしなく支え続ければ、それに伴うリスクと負担はそのまま国民に跳ね返ってきます。国際通貨基金（IMF）は2026年の報告書において、ウズベキスタンの国営企業や官民連携事業がもたらしかねない財政リスクを透明性をもって管理するよう勧告しました。政府が恣意的に配分する優遇融資も段階的に削減すべきだと指摘しています。[B003]

国家の産業政策は畑に種をまく作業に似ていますが、すべての芽に延々と同じ量の水を注ぎ続けるわけにはいきません。政府の支援を受けた企業が当初約束した雇用をきちんと創出したか、目標としていた輸出実績を上げたかを毎年透明性をもって公

開する必要があります。目標に届かなかった事業は支援条件を厳格に見直すか、あるいは思い切って打ち切らなければなりません。失敗を隠さず明るみに出す明確なルールが定着してこそ、新たな挑戦を始める企業にも公正な機会がもたらされます。

鉱山開発の恩恵が地域住民にどれほど行き渡っているかも、軽視できない問題です。鉱山の近くに暮らす住民は、飛散する粉塵や枯渇する水脈による苦痛を真っ先に味わいます。国全体の輸出実績が向上したという誇らしげなスローガンだけでは、住民が背負う日常の不便や犠牲を正当化することは困難です。鉱山から徴収した税金のうち、どれほどがその地域の病院や学校、清潔な上水道施設の建設に充てられたのかを明確に開示すべきです。周辺の水や土壌が汚染されていないかを検査する業務は、企業の影響力から独立した機関が担い、結果を透明性をもって公表しなければなりません。経済の革新は、工場に新たな機械を導入することだけにとどまりません。目に見えないコストまで正直に開示する会計と制度こそが、真の革新なのです。

コードを輸出する若い企業

情報技術（IT）産業は、地下の鉱物とはまったく異なるルールで動きます。金1オンスを他国へ送れば、倉庫からはその分の金がなくなります。一方でソフトウェアプログラムは、数多くの国々に売れていったとしても、コンピュータの中に完全なオリジナルがそのまま残ります。卓越した開発者ひとりが持つ知識と経験は、ともに働くチーム全体へと急速に広がっていきます。インターネットで結ばれた世界では、海のない内陸国という地理的な制約も、かつてほど高い障壁にはなりません。

ウズベキスタンのIT Parkは、2026年上半期に輸出を目指す企業608社が新たに入居したと発表しました。このうち外国資本によって設立された企業は297社に達しました。これにより外資系入居企業数は計1,095社に増加し、ここに資本を投じた投資家の国籍も75か国に上りました。[B014] 政府の公式統計によると、2026年第1四半期の情報技術サービス輸出額は1億9,180万ドルを記録しました。このうちソフトウェアプログラミングサービスは、通信・情報化サービス全体の総生産額の46.5パーセントを占め、中核としての存在感を高めています。[B015]

これらの統計数値は、ウズベキスタンの情報技術産業が芽吹き、成長しつつあることを示す明白な兆候です。しかし、看板を掲げた企業の数と働きがいのある質の高い雇用の数が、常に比例して伸びるわけではありません。登録企業が多くても、実際

には売上がほとんど立っていなかったり、従業員をほとんど雇用していなかったりする企業が少なくない可能性もあります。輸出額が拡大したとしても、外国の元請け企業から回された初歩的な外注作業に依存しているだけでは限界に突き当たります。働く従業員が実際にどのようなスキルを習得し、妥当な報酬を得ているのか、開発したプログラムの知的財産権を自国の企業が保持しているのかまで綿密に見極めてこそ、産業がどれほど深く根を下ろしているかを測ることができます。

ウズベキスタンの若い開発者にとって、流暢な英語と盤石な数学力はもちろん貴重な財産です。しかし、それ以上に息長く自身を支えてくれる力は、身の回りにある問題が何であるかを自ら見つけ出し、定義する能力です。外国企業から渡された作業指示書に書かれたコードを機械的に打ち込んでいるだけでは、仕事の発注が途絶えた瞬間にできることも一緒に消え去ってしまいます。農業用水を賢明に分配するシステムや市内バスの運行間隔を短縮するプログラム、ウズベク語の音声を認識する技術、病院の診療予約ネットワークのように、自らが暮らす社会の具体的な課題を解決していくことで、初めて価値あるプロダクトが蓄積されます。たとえ完成段階で失敗した試作品であっても、その中で得た学びは次の段階のプログラムを生み出す素晴らしい糧となります。

政府は減税を行ったり清潔なオフィスを提供したりすることができ、大学はしっかりと基礎数学やソフトウェアの設計原理を教えることができます。しかし、政府や大学が起業家に代わって世の中のどの問題を解決すべきかを選び出したり、成功する企業の数的人為的に決めたりすることはできません。健全な産業エコシステムとは、小さな会社が挑戦に失敗して倒産したとしても、起業家が巨額の負債や落第者という烙印に縛られることなく再起できる環境のことです。開発者が自由に職場を移籍しながら互いのノウハウを共有し、女性開発者が安心して働ける環境が整い、首都を離れた地方の学生もストレスのない高速インターネットを通じて学びの機会を享受できる必要があります。

世界貿易機関の門前で

ウズベキスタンは早くも1994年に世界貿易機関（WTO）への加盟を申請しましたが、交渉は長年にわたり停滞していました。しかし近年、改革政策を推し進める政府が発足したことで、加盟手続きは再び加速しています。2026年7月27日に開催された作業部会会合において、ウズベキスタン政府はその年のうちに加盟手続きを完了させるという目標を重ねて強調しました。2026年3月以降、国内法190件を世界貿易機関の国際規範に合わせて改正し、商品およびサービス市場の開放に関する二国間協定31件を締結したと報告しました。現在も一部の加盟国とは、残る加盟条件を巡って激しい交渉を続けています。[B004]

この状況を正しく理解するには、進展のプロセスを時系列に沿って冷静に見つめる必要があります。2026年7月27日の時点において、ウズベキスタンはあくまで加盟へとひた走る過程に立っています。年内に加盟するという目標を掲げたことと、実際に加盟手続きを完了したこととは厳然として異なります。実務交渉がすべてまとまった後も、作業部会報告書と加盟条件を全加盟国が公式に承認する必要があり、ウズベキスタン議会での批准を経る国内の法的手続きまで無事に終えて初めて、加盟が成立するのです。

世界貿易機関への加盟は、一国がグローバル市場という広い運動場に足を踏み入れる入場券のようなものですが、入場券を手にしたからといって直ちに徒競走で勝てるわけではありません。関税率や輸入許可の規定が透明かつ予測可能になれば、国内企業は海外から必要な部品を調達し、完成した製品を輸出することが一段と容易になります。相手国が貿易上の約束を破った際には、国際機関の公式な紛争解決手続きを踏む道も開かれます。しかしその裏には、政府の保護の下で安住していた国内の工場が、安価で良質な輸入品と直に対峙しなければならない厳しい現実が待っています。物価が下がれば消費者は歓迎するでしょうが、競争力に劣る老朽化した工場で働いていた労働者は職を失い、迷いと不安に苛まれる可能性があります。

したがって、市場開放の前後で展開される国家政策は、競争力を失った旧式工場を無理にかばい立てするよりも、そこで働く人々を保護することに重きを置くべきです。もはや持ちこたえられない企業に底の抜けた桶のように補助金を注ぎ込むより、職を失った労働者が新たなスキルを身につけて有望な職種へと移行できるよう、頼もしい足がかりを用意するほうがはるかに賢明です。これと並行して、輸入農産物の安

全性、工業製品の安全基準、複雑な通関書類を処理する公務員の専門性も向上させなければなりません。国境の税関で荷物を通過させる時間がどれほど短縮されようとも、検査基準が定まらず揺らいでいては、国際社会からの信頼を一瞬にして損ねてしまうからです。

外国資本を迎え入れる作法

国境を越えて流入する海外投資の中には、資金だけでなく、工場を建設・設計する技術、効率的な生産手法、世界規模の流通網、そして働く企業文化が一挙に運び込まれます。綿密かつ適切に締結された契約は、現地の労働者に貴重な技術ノウハウをもたらし、周辺の協力企業を着実に育て上げます。しかし、性急で不適切な契約は、中核となる利益だけをそっくり外国へと流出させ、国内には汚染された環境を浄化するコストと手に負えない負債ばかりを残すことになります。

政府と民間企業が手を組む官民連携方式は、空港や発電所、高速道路のように莫大な資金を要する社会インフラを建設する際、広く用いられます。民間企業が工事費を負担し、先進的な運営技術を導入してくれば、政府としては当面投入すべき財政負担を軽減でき、一息つくことができます。しかし、政府が民間事業者に対して一定の収入を無条件で保証したり、為替変動による損失を一手に引き受けると約束したりすれば、将来国民が納めるべき税金は見えない借金へと姿を変えることになります。政府が契約書にどのような条件を盛り込み、どれほどの金額を保証したのかを世の中に余すところなく公開してこそ、市民や議会が国家財政のリスク要因をあらかじめ点検し、備えることができるのです。[B003]

外国企業を誘致するための競争において、ただ減税条件ばかりを前面に押し出す国は長く持ちこたえられず、容易に行き詰まってしまいます。投資家の心を惹きつける真の魅力とは、公正で揺るぎない裁判所、常に予測可能な透明性ある法と規則、手際のよい熟練労働者、そして24時間途切れることなく供給される電力や通信網です。企業は税金を数パーセント多く納めることよりも、一夜にして恣意的に変更される許可規定や通関手続きをはるかに恐れます。担当公務員の一言や一本の電話が法典以上の力を振るうような不安定な市場では、どれほど健全な企業であっても長く留まることなく、急いで荷物をまとめることになるのが常です。

ウズベキスタンが過去に断行した外国為替制度の改革は、門戸を大きく開く開放政策の重要な出発点でした。企業が輸入商品の代金を期日どおりに支払い、現地で得た利益を外貨へ自由に換金できてこそ、初めて国境を越えた商取引が持続できるためです。その次に進むべき課題は、公正な競争秩序を打ち立てることです。国が運営する国営企業と民間企業が同じ電気料金を支払い、同等の条件で銀行融資を受け、法廷でも平等な手続きを踏まなければなりません。単に政府所有であるという理由で経営損失を帳簿の陰に隠したり、一等地の土地を優先的に占有させたりしたままでは、斬新なアイデアを抱いた民間企業の芽は決して育ちません。

資金が巡る道を広げる

発足したばかりの小規模企業は、どれほど優れた事業構想を持っていても、工場に据え付ける最初の機械を購入する資金や、これまで積み上げてきた取引実績が圧倒的に不足しています。銀行の窓口では、担保となる不動産を豊富に持つ大企業へ融資する方を好都合と捉えがちです。気概あふれる若手起業家や農村の女性事業家、小さなサービス企業は、銀行に差し入れる建物や土地がないため、融資窓口の敷居をまたげずに引き返し、深いため息をつくことになりがちです。対外開放がもたらす豊かな果実が少数の大企業だけに偏らないようにするためには、金融への門戸を広げ、アクセスを改善していかなければなりません。

企業や個人の信用を評価する際には、従来の不動産担保ばかりにとらわれるのではなく、日常的な商取引の履歴や真面目に納税してきた記録を幅広く確認することが考えられます。ただし、この過程で個人の金融情報や生活データを無分別にかき集めれば、別のプライバシー侵害問題が浮上します。誰がどのような目的で自分の信用情報を閲覧したのか透明な記録を残さねばならず、誤った情報があれば訂正できる救済手続きを整えなければなりません。コンピュータプログラムが算定したスコアのために融資を断られたのであれば、担当職員は顧客に対してなぜ拒否されたのか、その理由を筋道立てて納得できるよう説明するのが当然です。

財布の中の現金に代わり、スマートフォンやカードを用いた電子決済を普及させていけば、店舗のあらゆる売上や納税の記録が透明に残ります。路地裏の小さな店であっても、この客観的な取引記録を根拠として銀行から事業資金の融資を受ける足がかりを得られますし、政府にとっても国の経済という血液がどこをどのように巡って

いるかを把握できます。しかしその裏には、零細商人が背負わねばならない決済手数料の負担や、個人の日常が監視されかねないというリスクが常に潜んでいます。スマートフォンを扱えなかったり、文字の読み書きが不自由だったりする身近な人々も、日々の買い出しに不便を感じないよう、現金決済の手段を残しておく配慮が併せて求められます。

海外へ出て汗を流して働く労働者たちが故郷へ送金する外貨は、ウズベキスタンの数多くの家庭における生計を力強く支える生命線です。送金手数料が引き下げられれば、同じ時間汗水流して働いた対価が、故郷の家族の手に余すところなくより多く届きます。この資金を単に日々の生活費として使い果たすのではなく、子どもの教育費や古い住まいの修繕費、地域の小さな商店を開く元手として増やしていけるよう手助けする適切な金融商品を整えることもできます。だからといって、遠くから送られてきた貴重なお金を無条件に事業へ投資するよう家族を急き立ててはなりません。病気の家族の医療費や温かい一食を賄うために使うお金もまた、大切な生命を守り抜く何物にも代えがたい価値ある使い道だからです。

金融市場の門戸を広げれば広げるほど、巧妙な詐欺犯罪や手に負えない借金の罠を防ぐ安全装置が切実になります。目先のお金に困っている庶民を惑わす手軽な無担保融資の広告は、収入が不安定な人々を危険な深みへと引きずり込みがちです。融資を行う際には、将来支払うべき利息や延滞損害金がいくらになるのかを契約書の冒頭に分かりやすく明記して提示せねばならず、借り手に自力で返済する能力があるかどうかを綿密に確認しなければなりません。正しい金融知識を教育することも大切ですが、金融商品を販売する金融機関の厳格な説明責任を併せて追及すべきであり、不当に被害を受けた人へ無差別に全責任を押し付けてはなりません。

電力と水が定める産業の速度

新たな工場を建設するという野心的な計画書は、机上の紙の上では電力や用水をあたかも枯渇することのない無制限の資源であるかのように書き込みがちです。しかし実際の工場の生産設備は、供給される電圧がわずかに揺らぐだけでも一瞬にして停止してしまいます。巨大な鉱山や鉱石を選別する選鉱工場は、莫大な量の電力と水を消費します。先端ソフトウェアを手掛けるIT企業もまた、サーバーが所狭しと並ぶデータセンターを休みなく稼働させ、熱を冷ますために膨大な電気と冷却水を使わねばなりません。工場を増やす産業政策と、電力網や水資源を管理するエネルギー政策は、必ず一枚の試算表を見つめながら足並みを揃えなければなりません。

2026年2月に発表された政府の公式資料を見ると、ウズベキスタンの総発電設備容量は2万5,800メガワットであり、このうち太陽光や風力といった再生可能エネルギー設備が約8,000メガワットを占めています。[B027] しかし、発電所の看板に記された設置容量と、私たちが実際にいつでも引き出して使える供給電力の規模は厳然として異なります。日が暮れた夜間や風の収まった日でも電気が途絶えないよう耐える頑丈な送配電網と、大容量のエネルギー貯蔵システム（ESS）が力強く支えてこそ、工場が止まることなく安定して稼働できるのです。

外国企業を誘致するにあたり、法外に安価な電気料金を約束し、それによって生じる赤字を国費で補填するならば、それに伴う莫大なコストは国家予算という帳の陰に隠れてしまいます。電気料金は発電所で電気を作る際にかかった実際の原価を忠実に反映するよう適正化しつつも、暮らし向きに余裕のない低所得世帯の基本的生活に支障が出ないよう、別途福祉料金制度を設けて温かく手当てしなければなりません。あわせて、大企業に産業用電力の割引優遇を与えたのであれば、その恩恵が実際に質の高い雇用の創出や技術移転という成果として国に還元されたのかを透明に明らかにすべきです。電力を極めて多く消費する大規模事業場に対しては、リアルタイムの電力使用量データの提出を求め、エネルギーを節約する具体的な削減目標を厳格に要求しなければなりません。

水が貴重な乾燥地域に新たな工場を建設する際には、目標生産量ばかりを試算するのではなく、どれほどの水を使うのか緻密な水資源予算を併せて策定しなければなりません。どの河川や貯水池から水を引いてくるのか、浄化後にどれだけ自然へ戻すのか、そして深刻な干ばつに見舞われた際に誰の水から優先して削減するのかを、あ

らかじめ明確に定めておく必要があります。工場で使った水をきれいにろ過して再利用するリサイクル設備を整えることも大きな力となりますが、放流する水に含まれる汚染物質の基準を厳格に設け、検査結果を包み隠さず透明に公開せねばなりません。近隣の農民が耕作するための農業用水や住民が口にする飲料水を、産業用という名目で音もなく奪い去っていく構図は、地域社会に拭い去ることのできない深い対立の溝を生み出します。

技術を残す契約

外国の先進企業が進出を決定すると、真新しい最新鋭の機械設備が工場に次々と運び込まれます。しかし、作業員が単に操作ボタンを押す方法しか学ばなければ、後になって外国の技術者たちが帰国した際、わずかな故障一つに立ち往生して工場の操業を止めざるを得なくなります。複雑な設計図面を読み解き、劣化した部品を現地生産品へと交換し、生産工程全体を自ら改善していく奥深い技術的知見を国内にしっかりと残しておかねばなりません。このため、外国企業と契約を結ぶ段階から、現地技術者のための体系的な研修時間、実力を培った現地人材の役職昇進、共同研究開発（R&D）への参加条項を契約書に明確に明記しておくことが考えられます。

工場に投入される資材をどれほど国内で調達したかを示す現地調達比率は、技術がどれほど移転されたかを推し量る重要な指標となります。しかし、この比率の数値だけを無理に引き上げようと、安価な段ボール箱のような包装資材や清掃業務を現地調達の実績にしれっと紛れ込ませる小細工に走ることもあり得ます。見かけの統計に惑わされることなく、製品の基幹部品や精密検査、製品設計やソフトウェア開発のうち、国内企業が実際に担った割合がどれほどかを綿密に見極めねばなりません。国内の協力企業が国際的な品質認証を堂々と取得し、他のグローバル企業にも部品を納品できるだけの実力を備えるようになって初めて、先進技術と知見はその国の産業生態系の中に深く根を下ろすのです。

大学と企業が手を組んで進める産学連携が、若い大学生を安価な賃金のインターンとして使い潰す抜け道へと成り下がっては決してなりません。産業現場の生きた課題を解決していく貴重な機会を与えつつも、学生を傍らで導く経験豊かな主任技術者が必ず配置されなければなりません。学生たちが汗を流して生み出した研究成果の知的財産権を誰に帰属させるのか、それに伴う正当な報酬はいくらなのかを、事前に明

確な契約で定めておく必要があります。そうしてこそ、学生たちが大学の門を出た後も、現場で培った貴重な実務経験を他の企業でも堂々と認めてもらうことができるのです。

政府が支援する国家研究開発（R&D）予算は、時には手痛い失敗を経験することもあり得る大胆で挑戦的な問いに対しても果敢に投じられねばなりません。目先ですぐに売れる完成品を生み出せなくとも、長い年月をかけて掘り下げる堅実な基礎科学研究こそが、国の技術競争力を支える太い根幹となるためです。その代わり、どのような研究に公金を投じるかを決定する審査過程や最終的な研究成果を透明に公開し、研究者が得た実験データや結果を同僚の学者たちによって徹底的に検証させなければなりません。政権の有力者と親しいという理由だけで特定の研究機関にばかり使途不明な研究費が繰り返し流れ込むようであれば、情熱を抱いて夜を徹する若い研究者たちの前途はあっけなく閉ざされてしまいます。

女性や地方に暮らす若者たちが先端技術教育の門を叩ける環境が適切に整えられているかも、細やかに点検しなければなりません。専門教育課程が夜遅くに終了したり、割り当てられた寄宿舍が安全でなかったりすれば、学生の参加は減少せざるを得ません。実力ある専門講師陣が首都タシュケントだけに偏っていれば、首都と地方の間の教育格差は歯止めが利かないほど広がってしまいます。非対面のオンライン授業が物理的な距離の壁を縮めることはできても、コンピュータ機器や通信費の支援、そして分からない箇所をいつでも質問し答えてくれる献身的な教員が傍らに寄り添ってこそ、実質的な学びの果実を結ぶことができるのです。

統計が覆い隠す企業の生涯

新設された企業の数、政府が成果を誇示する政策発表の場にお決まりのように頻繁に登場します。しかし、華々しく看板を掲げた会社が1年後、そして3年後にも着実に売上を伸ばしながら生き残っているかを追跡してみると、全く異なる光景が広がります。だからといって、店舗や会社を畳む廃業を無条件に恥ずべき失敗と決めつけるべきではありません。市場で新しいアイデアを存分に試すことができ、許容できる範囲内で損失を清算した上で再び新たな挑戦へと乗り出せるのであれば、市場全体はその苦い経験を通じて貴重な教訓を学ぶのです。

単に企業の生存率統計を良く見せるという名目で、市場で競争力を失った限界企業を無理に延命させれば、より有望な分野へと流れるべき資本と人材の足が縛り付けられてしまいます。事業を畳む廃業手続きを透明で予測可能な形に整え、不正な意図なく誠実に努力しながらも失敗した事業家の債務を合理的に減免・調整する再生制度を定着させなければなりません。これとともに、会社が倒産した場合でも、そこで働いていた労働者の未払い賃金や未納の税金を優先して弁済する確かな法的枠組みも整える必要があります。秩序ある退出もまた、活力ある新規参入と同じくらい、市場経済を健全に機能させる大切な柱だからです。

表面に表れた輸出総額の統計も、その実情を項目ごとに細かく見極めなければなりません。国際金相場が急騰すれば、同じ重量の金を売っても帳簿上の輸出額は跳ね上がります。IT（情報技術）サービスのアウトソーシング受託実績が伸びても、全売上がたった一つの海外取引先に過度に偏っていれば、いつ途絶えるか分からない危ういリスクを抱えることになります。輸出する品目がどれほど多様か、取引相手国がいくつの国にわたるか、自国内で直接生み出された付加価値がどれほどか、そして中小企業と大企業がバランスよく混ざり合っているかを見定めてこそ、国家経済の屋台骨がどれほど強靱で厚みを増したかを正確に把握できるのです。

世界貿易機関（WTO）に正式加盟すれば、国境で徴収していた関税収入が減少し、産業分野ごとに押し寄せる波の高さや衝撃の大きさがそれぞれ異なって現れる可能性があります。[B004] 政府は加盟の調印を行う前に、輸入品の攻勢に脆弱な業種や被害を受ける懸念が大きい地域を率直に明らかにし、職を失う危機に瀕した労働者が別の職場へ円滑に移れるよう緻密な転換対策を整えておかなければなりません。力のある企業の裏工作に振り回され、関税撤廃の猶予期間を裏で密かに延ばすような付け焼き刃の対症療法は、市場の信頼を根底から損ないます。保護を提供する明確な期限と支援を打ち切る客観的な評価基準を、最初から市場に正々堂々と公表しておくほうがはるかに賢明です。

国の門を外す対外開放とは、単に国境検問所の扉を大きく開け放つだけのことでありません。国内の数多くの企業が、歪みのない公正な市場情報や安定した電力、透明な金融融資、そして信頼できる裁判所の保護を分け隔てなく享受できるよう、制度的基盤を整えることです。押し寄せる外国商品や巨大資本を前に委縮したり恐れたりしないためには、自国の法と制度がその中で暮らす人々をしっかりと支えなければ

なりません。大きく開かれた扉の隙間から荒々しい外風が吹き荒れても、決して揺らぐことも倒れることもない強固な家を着実に築き上げていく過程こそが、対外開放の真の姿なのです。

成長率より厚みのある経済

2026年上半期、ウズベキスタンの国内総生産（GDP）は前年同期比で8.5パーセントも成長しました。産業生産は8.0パーセント、固定資本投資は17.5パーセント、サービス業は16.9パーセントという高い増加率を記録しました。[B010] 設備投資とサービス分野が目立って活発に動いた場面です。しかし、この半年間の実績をもって、1年を通じて続くかのように拙速なバラ色の幻想を抱くわけにはいきません。国際通貨基金（IMF）は2026年のウズベキスタンの年間経済成長率を6.8パーセント水準と冷静に予測し、高騰する物価上昇と景気過熱がもたらす財政リスクをあわせて警告しました。[B003]

経済成長率という数値は、ある国の経済規模がどれほどの速さで規模を膨らませているかを示しています。しかし、外部から予期せぬ危機が襲った際、その経済がどれほど粘り強く耐え抜けるかは、まったく次元の異なる問いです。国際金価格が暴落した際に減少した輸出額をどのような代替品で埋めるのか、深刻な干ばつに見舞われた際に巨大工場が水の使用量をどれほど巧みに削減できるのか、外国からのアウトソーシング案件が途絶えた際に若手開発者が独自のソフトウェアで市場を開拓できるのかを、一つひとつ吟味しなければなりません。産業の屋台骨が幾重もの多様な層で強固に構築されていてこそ、経済は不意に襲いかかる外部の衝撃を分散して受け止め、しっかりと持ちこたえることができるのです。

イノベーションという耳当たりのよい言葉は、大都市の真ん中にそびえ立つ新築ビルの輝くガラス壁と実によく似合っているように見えます。しかし、暮らしを変える真の変化は、そのように外見として華やかに現れることのない地味な場所で静かに起こるものです。煩雑だった税関の通関書類が1枚減り、名もない中小企業が巨大国営企業と同じ価格で産業用電力の供給を受け、鉱山周辺の水質検査記録を平凡な地域住民が透明性をもって閲覧でき、大学生が夜を徹して組み上げた小さなプログラムが市場で喜ばしい最初の客を迎える、まさにその瞬間にイノベーションは芽吹きます。コンピュータのプログラムコードは、潜んでいる小さなエラーを放置しておけば、い

つかシステム全体を停止させてしまいます。一国の経済システムもまた、これと少しも変わりません。

ウズベキスタンが地下の鉱物を採掘する資源大国から最先端の知識基盤国家へと一朝一夕に変貌することはできません。だからといって、国の宝である金や銅の採掘を安易に止めたり放棄したりする理由もありません。豊富な天然資源を売って得た貴重な時間と財源を、未来を担う若者たちの教育に投資し、公正な制度を整える元手へと変えていけばよいのです。見知らぬタシュケントの街を歩く旅行者であっても、この国の変化を見つめながら控えめな期待を抱くようになります。地中に埋もれた黄金色の輝きがいつか底をついて色あせようとも、人の頭の中に刻まれた創造的な設計図と知識は決して失われることなく残るからです。その確かな実力が備わったとき、対外開放は外の世界へ向けて国境の扉を開け放つ一回限りの出来事をはるかに超え、自らの二足で堂々と世界へ歩み出す確固たる力となってくれるはずです。

第9章 社会の変化と韓国・ウズベキスタン協力

教室から始まる変化

朝の授業の始まりを告げるチャイムが鳴ると、ウズベキスタンの教室にもかすかな緊張が漂います。席に着いた子どもは、教科書に書かれた正解を暗記すべきか、それとも心に浮かんだ考えを口にしてもよいのか迷いながら、先生の顔をうかがいます。教員は新しい教育課程を身につけつつも、多すぎる生徒とあまりにも不足している教材を一人で抱え込まなければなりません。国家が掲げた改革は、大統領宮殿の宣言文よりも、まさにこうした小さな教室においてこそ、より長い時間をかけて試されることになります。

ユニセフとウズベキスタン政府は2026年2月、国家教育課程の改編を拡大すると発表しました。当時提示された目標は、幼児教育と正規の学校教育を合わせ、毎年約880万人にのぼる学習者に恩恵を届けることでした。[B018] 続いて8月18日には、新しい国家教育課程体系を正式に発足させました。この段階で適用される対象は、初等・中等教育を受ける約700万人の生徒です。この体系を整えるため、ウズベキスタン国内の専門家147人と国際専門家30人が約2年間にわたり260回を超える会議と協議を重ねました。[B048] 先に挙げた880万人と700万人という二つの数値は、調査の誤りによるものではなく、対象に含まれる教育段階や集計範囲の違いから生じた差です。

新しい体系は、生徒が知識を機械的に暗記することにとどまらず、自ら問題を解き、仲間と協力する力を養う方向を目指しています。教育課程を変えるということは、教科書の表紙を掛け替えるだけで終わるものではありません。教室で教員が子どもたちの思いがけない質問を寛容に受け止め、試験がたった一つの正解ではなく思考の過程を評価し、親が我が子の失敗を学びの自然な過程として受け止める文化までもが共に変わってこそ、初めて完成するのです。

新しい教科書が各学校に届いたとしても、教員が新しい教授法を十分に習得していなければ、授業は容易に以前のやり方へと逆戻りしてしまいます。教室ごとにコンピューターを導入したとしても、インターネット接続が途切れたり遅かったりすれば、

デジタル授業はすぐに立ち往生します。その結果、大都市の学校と辺鄙な農村の学校との間の教育格差は、むしろさらに広がりかねません。改革の成果を印刷して配布した教科書の部数だけで測るなら、子どもが教室で実際に何を学んだのかを見失ってしまいます。読解や数学、科学の基礎学力はもちろんのこと、子どもたちが授業にどれほど能動的に参加しているか、地域や性別による格差や死角が生じていないかを丁寧に見届ける必要があります。

ウズベキスタンは人口が急速に増加しており、若年層の割合が高い国です。2026年4月時点で14歳から30歳までの青年人口は950万人に達し、総人口の約4分の1を占めています。[B009] これに伴い、毎年学校を巣立って労働市場へと飛び込む若者の数も絶えず増え続けています。もし学校で手にした卒業証書がまともな雇用へとつながらなければ、青春の活力は国家を支える力とならないまま、先の見えない長い待機の日々へと変わってしまうしかありません。

職業教育は、産業現場の企業が求める技術と、教室で生徒が学ぶ内容をつなぐ堅固な架け橋の役目を果たします。しかし、この架け橋が企業による目先の注文ばかりを追っていては、技術環境が少し変化しただけですぐに役に立たなくなってしまいます。生徒は目の前の一台の機械を扱う実践的な技術とともに、その機械が作動する基本原理を身につけなければなりません。使用するソフトウェアや作業ツールが変わったとしても、問題を細かく分解して考察し、データを正しく解釈する能力は身体に残り、一生役立ちます。教育は、職場に初出勤する初日だけをゴールにしてはなりません。生涯の中で幾度も職業を変えることになる若者たちに、いつでも新しい技術を学び直すことのできる基礎体力を養う過程であるべきなのです。

ケアが経済になるとき

ごく普通の家庭の一日を静かに思い描いてみます。朝早く子どもを起こして顔を洗わせ、温かい食事を用意し、体の不自由な親の薬を用立てた後、乾いた洗濯物を取り込んで畳みます。この過酷な労働は、家族の日常を維持する確かな基盤でありながら、市場経済を示す統計数値にはほとんど表れません。大半の家庭において、女性たちがこの仕事に圧倒的に多くの時間を注ぎ込んでいます。女性が外に出て経済活動を行おうとしても、子どもを預ける保育施設や高齢者をケアする公共サービスが不足していれば、選べる道はどうしても狭まってしまいます。

国際労働機関（ILO）とウズベキスタン政府の関係機関は2026年2月、ケア経済をテーマに政策対話を開きました。この場では、ケアサービスの質を高める方策、現場の従事者に保障すべき適切な労働条件、女性の経済活動への参加を一つに結びつけて掘り下げた議論が行われました。国際労働機関は、ウズベキスタンが2023年に家庭内暴力を刑事罰の対象と規定し、新しく改正された労働法において同一価値の労働には同一の報酬を支払うべきであるという原則を明記した進展を、前向きな変化として評価しました。[B017]

法典に新しい条項が書き加えられたことは、正しい方向へ進む最初の一步にすぎません。暴力にさらされた被害者が報復の恐れなしに警察に助けを求められるか、緊急に身を寄せるシェルターに十分な空きがあるか、加害者を処罰する裁判がいつまでも先延ばしにされないかが、直後に解決すべき課題となります。同一労働同一賃金の原則もまた、性別によって働く職種や役職が明確に分断されていれば、現場で守られているかどうかを見分けるのは困難です。学校の教員や看護師、保育士のように女性が多数を占める職種の賃金水準そのものが社会的に低く抑えられているならば、個々の企業の中で男女の給与明細を比較するだけでは、構造化された不平等を炙り出すことはできません。

ケアサービスに国家財政を投入すれば、二つの有益な道が開かれます。幼い子どもや体の不自由な高齢者が安全な環境で見守られ、家庭内でケアを一手に引き受けていた家族は学びの場や職場へと出て新たな人生を設計する機会を得られます。だからといって、保育施設の数だけを増やすことで満足するわけにはいきません。現場で汗を流すケア労働者の適正な賃金と十分な休息时间、専門教育と安全基準を漏れなく整えなければなりません。低賃金に甘んじる女性労働者の犠牲に寄りかかって別の女性の社会進出を支えるような矛盾した構造は、決して長続きしないのです。

世界銀行が2026年7月に公開したウズベキスタンの脆弱層女性自立支援事業の計画案を見ると、地方に暮らす脆弱層の女性が小規模な起業や経済活動を始める際、個別カウンセリングや円滑な行政へのアクセス、迅速な相談・申請窓口による支援が不可欠であると説明されています。[B019] 事業名に「自立」という言葉を冠したからといって、少額の融資だけを手渡して背を向けてしまえば、その資金は自立の足がかりとなるどころか、重い借金如山となに残りかねません。商品売り出す市場を見つけ、帳簿のつけ方を学び、働いている間に子どもを安心して預けられる場所を見

つけてあげてこそ、生計活動は息長く続きます。障害のある女性や交通が不便な過疎地の女性、暴力の傷を抱えた女性は、同じ支援申請書を手にしていても、それぞれ高さの異なる現実の壁に突き当たるのです。

マハッラとデジタル行政

ウズベキスタンの伝統的な地域共同体であるマハッラは、住民たちが肩を寄せ合って暮らす町内組織であると同時に、行政機関の手を村の隅々まで届ける身近な連絡係でもあります。マハッラは地域の中で支援を切実に必要としている隣人を見つけ出し、若者や女性の小規模事業を支援政策と結びつけます。近隣住民の具体的な暮らしぶりや境遇を隅々まで知っているという点は、マハッラが持つ大きな強みです。硬直した行政書類には記されない家ごとの切実な事情を、自らの目で直接確かめることができるからです。

しかし、お互いの距離が近すぎるという事実は、思わぬ危うさを生むこともあります。日頃から親しい間柄の人と見知らぬ余所者を差別して扱う懸念があり、狭い地域によからぬ噂が広まるのを恐れて家庭内暴力の被害者が口を閉ざしてしまうこともあります。地域の中で誰に支援金が渡ったのかが透明に明かされなければ、住民の間でえこひいきだという疑念が芽生えます。情報ネットワークを活用したデジタル行政は、こうした弊害を軽減するのに役立ちます。福祉支援の申請基準や審査過程をコンピューターの画面上に記録として残せば、担当者が個人的な親密さに応じて勝手に結果を左右することは難しくなります。

だからといって、画面の中に構築されたネットワークが公正さを自ずと保障してくれるわけではありません。インターネットやスマートフォンを扱うのが難しい高齢者や障害者は、新しいデジタル窓口の前で踵を返し、深い疎外感を味わう可能性があります。もしシステムに基礎データが誤って入力されれば、不当な判定が歯止めなく広がってしまいます。福祉受給の資格を決めるスコアにどのような情報が反映されているのかが分からなければ、支援を受けられなかった市民は、自分がなぜ落とされたのか理由を尋ねることすらできません。デジタル福祉制度は、当事者が不当な判定に対して異議を申し立て、誤った記録を訂正できる道筋を併せて整えておく必要があります。

コンピュータプログラムは、誤った数値が入力されれば、一見何の問題もなさそうに見えるもっともらしい誤答を導き出しがちです。福祉行政システムも例外ではありません。婚姻の有無や住民登録の住所、申告された所得のように数字で整理しやすい情報ばかりを集めていると、家庭の奥深くに潜む暴力や抱えきれないケアの苦痛を見落としやすくなります。現場で住民と直に向き合う相談員の直感や定性的な判断を、安易に排除するわけにはいきません。その代わりに判断の理由を詳細に記録として残し、他の同僚や上司が入念に再検討できるようにすべきです。数値データと人の温もりのどちらか一方だけを選ぶことはできません。機械と人間が互いの隙間を埋め合い、誤りを正し合えるよう、賢明にシステムを設計しなければならないのです。

韓国とつながる古くからの道

韓国とウズベキスタンが結んできた縁の織り目には、二重の時間が重なり合っています。一つは、政府間の外交文書や投資協定書が着実に積み重ねられてきた「国家の時間」です。もう一つは、険しい歴史を切り拓いてきた高麗人コミュニティや、遠い地を行き来した留学生、汗を流して働いた労働者や国際結婚家庭が紡ぎ出してきた「人の時間」です。貿易統計や投資額といった無機質な数字の裏側には、見知らぬ国の言葉を覚え、不慣れな制度に適応しようと、慎重に一日一日を耐え抜いてきた数多くの個人の営みが息づいています。

ウズベキスタン大統領府は2026年5月、韓国との経済協力の現況を公式に発表しました。2026年初頭から両国間の貿易額は前年同期比で12パーセント増加し、ウズベキスタン現地には韓国資本が入った合併企業約1000社が活動していると明らかにしました。あわせて、これまでに韓国が投資した累計金額は80億ドルを超え、韓国輸出入銀行をはじめとする各種基金が参加した協力事業の規模は20億ドルを上回ると説明しました。[B016] この数値はウズベキスタン政府が集計して発表した資料であり、両国の統計機関の算定基準や為替レートの変動によって詳細な数値には多少の差異が生じることがあります。

投資規模が大きいからといって、両国の関係がおのずと深まったと早合点することはできません。投資が行われた後、現地にどのような産業技術と雇用が残るのか、事業契約は透明に結ばれたのか、環境保護の基準は適切に守られたのかを冷静に見極める必要があります。もし韓国企業が必要な部品を大半を外国から持ち込み、現地に

は低賃金の組み立て作業の職ばかりを残すとするなら、両国の産業的結びつきはうわべだけのものに終わってしまいます。一方で、現地の部品メーカーが厳しい品質基準を学び、自ら製品の設計や修理を担い、現地の若者たちが企業の管理職へと成長する機会が開かれるとき、初めて経済協力は深く根を下ろすのです。

医療や保健の分野で進められている協力も注目に値する点です。2026年5月のウズベキスタン政府の発表では、集学的総合病院や化学技術センター、製薬産業団地が、現在まさに建設工事が進められている代表的な事業として挙げられました。[B016] ここでいう集学的総合病院とは、複数の診療科の専門医が一堂に会し、一人の患者が抱える病気を多角的に診断・治療する統合型の病院を指します。立派な病院の建物が完成したとしても、現地の医師や看護師を継続的に教育し、故障した先端医療機器を適時に修理し、必須医薬品を安定して供給する体制が整っていなければ、患者を十分に救うことはできません。もし首都タシュケントの大病院だけが近代化されるならば、遠く離れた農村に暮らす患者たちは治療を受けに来るために、過酷な移動と高額な宿泊費をそのまま背負い込むことになります。

韓国で培った医療の経験や制度をウズベキスタンへ伝える際、自国のやり方をそのまま丸写しにして持ち込もうとしてはうまくいきません。健康保険の仕組みや人口構成、集落から病院までの距離、言語や文化がまるで異なるためです。韓国の都心では手軽に使われていたスマートフォンの診療予約アプリも、通信環境が整っていないウズベキスタンの農村では役に立ちにくくなります。そのため、病院を建てシステムを構築するにあたっては、初期設計の段階から現地の医療関係者や住民の声に真摯に耳を傾けなければなりません。真の技術移転とは、最新の医療機器を箱に詰めて送ることにとどまらず、機械が止まったときに現地の技術者が自ら原因を突き止めて修理できる自立の力を育むことなのです。

一本の鉄道が結ぶ都市

2026年には韓国の現代ロテムが製造した高速列車が、タシュケントと歴史あるオアシス都市ヒヴァを結ぶ路線で運行を開始しました。[B016] スマートな車体の高速列車は、地図上では遥か遠くに感じられた二つの都市の物理的な距離を一気に縮めました。ヒヴァの古き遺跡を訪れる旅行者はどこまでも広がる赤い砂漠を横断する時間を大幅に節約できるようになり、地方に暮らす住民は首都の大病院に通ったり質の高い教育を受けたりする貴重な機会を得ました。高速鉄道の車両を販売することは産業レベルの製造業契約にすぎませんが、その列車がもたらす変化はウズベキスタン社会の日常のタイムテーブルそのものを塗り替えています。

高速列車が止まることなく末永く安全に走り続けるためには、頑丈な車両のほかにも整えるべき条件が数多くあります。列車を操縦する運転士や車両を管理する整備士を体系的に育成しなければならず、摩耗した部品を適時に調達し、軌道と信号制御システムを隙間なく連動させておく必要があります。韓国のメーカーが列車の整備や維持管理に関する技術的な知識を現地の鉄道チームへ余すところなく引き継いでこそ、納入契約期間が終了した後も列車は線路の上を力強く走り続けることができます。乗車料金もまた、深く熟慮すべき課題です。いくら速い列車が外国人観光客にとって快適な移動手段になったとしても、日々の暮らしを営む地元住民にとってあまりに高額であれば、移動がもたらす恩恵は社会全体に行き渡りません。

交通インフラ協力の成果は、有名観光地に観光客の足を運ばせることにとどまりません。新設された駅の周辺にある小さな商店やタクシー運転手、民泊を営む小規模事業者には相応の収入がもたらされるかもしれませんが、その一方で地価や家賃が急騰し、代々暮らしてきた元々の住民が郊外へと追いやられる副作用が生じる恐れもあります。したがって、駅周辺の開発を進める際には、地域住民の自由な歩行路の確保、伝統市場の商人への空間的配慮、車いすを利用する障害者の安全なアクセシビリティ、そして長い歴史をたたえる古い路地の保全策をバランスよく盛り込まなければなりません。

労働の移動に必要な約束

数多くのウズベキスタンの若者たちが、韓国の工場や大学で働いたり学業に励んだりしています。反対に韓国の人々もまた、新たなビジネスチャンスを求めたり教育活動を展開したりするために、ウズベキスタンに拠点を構えて暮らしています。このように国境を行き交う人の移動は、人手不足に悩む国の空席と、仕事を求める人のニーズをつなぐ役割を果たしています。しかし、人間を産業統計に記された生産力の数値としてのみ捉えてしまうと、労働契約書の紙面の外側にある一人の人間の過酷な暮らしや人格は容易にかき消されてしまいます。

遠い国へと渡った移住労働者は、不慣れな言語の壁はもちろんのこと、賃金の未払い、不慮の労働災害、不安定なビザ延長問題といった重荷を一手に背負い込みがちです。飛行機に乗る前に韓国語の教育を受けていたとしても、騒音に満ちた実際の工場の作業場で飛び交う荒々しい現場用語や安全標識には戸惑うばかりです。そこに勤務先を自由に変更できない制度的な制約まで重なると、不当な扱いを受けても強制退去を恐れて黙って耐え忍ぶことになります。両国間の労働協定は、何人を選抜して送り出したかという送出規模よりも、不当な扱いを通報できる相談窓口や専門の通訳サービス、負傷時の迅速な医療支援、そして帰国後の再定住支援がどれほど手厚く整っているかを尺度として評価されるべきです。

労働契約書は、働く人が正確に理解できるよう母国語に丁寧に翻訳して手渡さなければなりません。毎月受け取る給与から差し引かれる寮費や食費名目の控除額、時間外労働や休日労働の手当の計算方法、契約満了時の退職条件などを誰もが分かるように透明に明記しておいてこそ、紛争を防ぐことができます。理不尽な問題や事故が生じた際に、駐韓大使館や労働当局、地域の外国人支援センターが言い訳をして責任を押し付け合わない協力体制も欠かせません。真に優れた労働協定とは、事故が起きなかったと誇る広報パンフレットによって証明されるのではなく、不慮の事故に見舞われた際に一人の労働者を孤独に放置しないという真摯な約束から生まれるものです。

外国での就労や留学を終えて母国へ戻ってきた人々の汗の染み込んだ経験は、国家にとって貴重な財産です。韓国の生産工場で身につけた徹底した品質管理や職場の安全手順、病院で学んだ細やかな看護技術、大学で培った研究設計の能力を、ウズベキスタン現地の企業や学校へと橋渡しするステップが必要です。海外で取得した資格を母国で公認し、小資本での起業相談を支援すれば、若者の海外就職は故郷を去る断

絶ではなく、新たな発展を呼び込む呼び水となり得ます。万が一の起業失敗の際にも挫折することなく別の職場へと復帰できるよう後押しする、社会的な再起支援のセーフティネットも整えなければなりません。

文化が翻訳される場

華やかな韓国ドラマやポピュラー音楽は、ウズベキスタンの若者たちが韓国語を学び韓国文化に憧れを抱く親しみやすい窓口となっています。韓国の人々の間でも、千年のシルクロードの息吹が宿るサマルカンドの青い遺跡や独特な高麗人の食文化、彼らの波乱に満ちた歴史への関心が静かに広がりつつあります。こうした文化交流は両国の人々の心を引き寄せますが、テレビやインターネットの画面に映る姿がその社会のすべてであるはずはありません。不夜城のごとき大都市の華麗な風景や劇的な成功を収めた主人公の姿ばかりに目を奪われていると、黙々と一日を生きる平凡な市民の過酷な現実を見落としがちになります。

互いに異なる文化を翻訳するという営みは、単語を別の言語へと一対一で置き換える狭い作業をはるかに超えています。同じように『家族』という言葉の口にしたとしても、生きてきた世代や地域によってそこに込められた責任の重みや期待値はまったく異なる場合があります。業務上の会議の席で相手が言葉を控え沈黙を守っているからといって、それを全面的な同意だと早合点すれば思わぬ誤解が生じます。速戦即決の素早い判断を能率とみなす組織と、じっくりと信頼を築いて初めて心を開く組織が協力する際には、互いの呼吸を合わせるための十分な時間が必要です。相手の文化を丸暗記すべき堅苦しいマナーリストとして扱うのではなく、彼らがなぜそのような選択を下したのか、その背景に息づく暮らしのあり方に温かな眼差しを向け、問いかけてみる必要があります。

両国の大学が手を携える学術交流は、こうした深みのある問いを絶えず交わし合える貴重な学びの場です。何人の交換留学生を送り合ったかという頭数よりも、ともに額を突き合わせて受講する共同講義の充実した中身こそが重要です。韓国の学生がウズベク語やロシア語で書かれた現地の史料を自ら読み解き、ウズベキスタンの学生が現代学術の研究設計や厳密なデータ検証法を体得するとき、知識は一方通行にならず双方向へと豊かに流れます。学術論文を共同執筆する際にも、現地の研究者を現地調査のアンケートや資料収集を手伝うだけの助手に甘んじさせてはなりません。研究

の核心となる問いを立てる段階から、著者の表記順、収集した学術データの所有権に至るまで、対等なパートナーとして最初からともに議論し決定すべきです。

子どもの住所が機会を分けないように

一人の子どもの未来と人生の可能性は、学校の塀の中だけで決まるわけではありません。母親の胸の中にいるときの栄養状態、毎日口にする清潔な水、適切な時期に受ける予防接種、親の安定した所得、そして雨風をしのげる安全な住まいが、子どもが世界を学ぶ確固たる基盤となります。ユニセフがウズベキスタンで展開する救援・開発事業において、保健や基礎栄養、正規教育、児童保護、飲料水と衛生環境、社会政策を切り離すことなく一体として扱う理由もまさにここにあります。[B020] いずれか一つの分野でどれほど目覚ましい成果を収めたとしても、別の生活領域に大きな穴が開いていれば、その結実はいとも簡単に水泡に帰してしまうためです。

大都市の名高い名門校へ生徒が雲のように押し寄せると、その周辺の私教育費や住宅価格もつられて高騰します。一方で農村の若い生徒たちは、長い距離を歩いて行き来する過酷な通学路に苦しみ、教える教員が不足して学習に難渋しがちです。身体の不自由な障害児には、段差をなくした緩やかなスロープやニーズに合わせた点字・音声教材、専門的な訓練を受けた特別支援教員の温かな手助けが切実に求められます。行政の台帳に入学登録を終えたという数字一つだけでは、その子どもが教室の中で授業にどれほど楽しく参加できているか、友人たちと打ち解けて温かな触れ合いを交わしているかまでは決して窺い知ることはできません。

新しい教育課程が長期的に就学前の幼児教育段階までを包摂し、880万人に達する子どもたちへ行き届くことを目指すというのは、きわめて壮大で重みのある約束です。[B018] 2026年8月に船出した小・中等教育の段階体系もまた、約700万人の生徒を抱えてスタートしました。[B048] こうした巨大な変化を迎えるにあたり、現場の教員一人にそのすべての重責を背負い込めと押し付けてはなりません。同僚の教員たちと知恵を出し合って新たな授業指導案を作成できる時間的ゆとり、指導法に行き詰まったときに気兼ねなく相談できる研究会、教室で新しい手法を試したうえで現場に合わせて修正できる自律的な裁量を教員たちに与える必要があります。もし学力到達度テストの結果を教員を序列化して問責するための尺度としてばかり振りかざすなら、

教員たちは指導が難しく学力の遅れた生徒を受け持つことを敬遠し、尻込みしてしまいます。

多様な言語を操る能力もまた、子どもたちに新たな機会の扉を大きく開いてくれます。国の国語であるウズベク語に根を張りながらも、長年通用してきたロシア語や各地の地域言語、世界と対話するための英語、そして就職の可能性を広げる韓国語を学ぼうとする熱意が、教室内で幾重にも重なり合っています。複数の言語を巧みに使いこなす力は、国際貿易や学術研究において大きな足がかりとなります。ただし、試験や教材を作成する際には、特定の公用語がおぼつかないという理由だけで、その子が本来備えている優れた数学的思考力や科学的探究力まで低く評価されてしまう理不尽が生じないように、細やかな配慮が必要です。

地方の若者が大学の門をくぐれるよう入学の機会を広げたとしても、卒業後に就職できる良質な雇用が首都タシュケントばかりに集中しては、地方都市は貴重な若い人材をそっくり奪われてしまいます。地方の大学がその地域の病院や農場、製造工場と手を組み、現場の長年の課題をともに解決していく産学連携に率先して乗り出す必要があります。優秀な学生を大都市へと送り出すだけでなく、故郷へ戻って存分に研究し汗を流して働ける良質な基盤を整えるバランスの取れた政策が切実に求められています。

保健からつながる信頼

病院とは、先端医療技術が病を抱えた人間の深い不安と向き合う場所です。新たに導入された診断機器の性能がいかに優れていても、患者が治療費の見当がつかずに気をもんだり、医師の難解な説明を十分に理解できなかったりすれば、恐怖のあまり治療を先延ばしにしてしまいます。したがって、韓国とウズベキスタンが力を合わせて推進する総合病院の建設や製薬産業の協力においては、診療水準を高める取り組みにとどまらず、貧しい患者であっても気軽に病院の門を叩けるアクセシビリティや、自身の健康状態を平易かつ正確に知る権利を当初から一体として設計に組み込まなければなりません。[B016]

コンピュータで管理される電子健康記録（EHR）システムは、複数の診療科の医療従事者が患者の精密検査結果を滞りなく共有できるように役立ちます。そのおかげで、患者が病院内のあちこちの科を回って同じ血液検査や放射線検査を何度も繰り返

すという無駄を減らせます。しかし、プライバシーに関わる機微な病歴情報が外部に漏洩した場合、患者は取り返しのつかない深い傷や被害を受けるおそれがあります。医療従事者であっても自身の診療にどうしても必要な情報だけを閲覧できるよう権限を厳格に制限し、システム内の記録を誰がいつ照会したのかという電子的アクセスログを綿密に残し、誤った情報が見つかった際には患者本人が容易に訂正を求められる法的手続きを整えておく必要があります。

コンピュータの人工知能を活用してX線やCT画像を読影し、重篤な疾患の発症リスクをあらかじめ予測する先端ソフトウェアが医療現場に導入されることもあります。しかし、韓国の大病院の患者データを学習させて開発した診断プログラムを、ウズベキスタンの患者にそのまま適用したからといって、同様に正確な性能を発揮するだろうと安易に断定してはなりません。病院ごとに保有する撮影機器の機種や撮影方法が異なるだけでなく、地域住民が主にかかる疾患の発症パターンにも大きな違いがあるためです。ウズベキスタン現地の臨床データに基づいて診断ツールの正確性を徹底的に検証しなければならず、コンピュータが導き出した読影結果について、最終的に患者へわかりやすく明確に説明し責任を負う主体は、常に人間の医師であり続けなければなりません。

製薬産業団地を造成することは、外国の高価な医薬品に依存していた構造から脱却し、必須医薬品を自国内で自ら生産できる貴重な機会を開いてくれます。もし薬の製造に必要な中核原料や配合技術を外国から際限なく買い続けなければならないとすれば、国際サプライチェーンが揺らいだり寸断されたりした際に工場の機械も止まらざるを得なくなります。したがって、薬効を証明する厳格な品質試験基準、製薬企業を監視する保健規制当局の独立性、そして服薬後に現れる副作用を速やかに収集する監視体制がともに成熟していかなければなりません。安価なジェネリック医薬品を一刻も早く大量生産しようとする性急な目標が、市民の命を守る徹底した安全性検査を後回しにするようなことがあっては決してならないのです。

農村の小さな診療所は、都心のきらびやかな大病院に比べれば、一見すると質素に見えるかもしれません。しかし、妊産婦の健やかな出産を支える妊娠管理や乳幼児の必須予防接種、高齢者の慢性疾患の管理を、もっとも身近な場所で担う不可欠な医療拠点です。韓国の政府開発援助（ODA）や協力資金が首都の象徴的な建造物の建設ばかりに偏ることのないよう、農村地域の医療従事者を再教育し、遠隔ビデオ相談と

巡回移動診療車を組み合わせた実効性のある事業を展開しなければなりません。遠隔診療とは、首都と地方のコンピュータ画面をつなぐだけの作業では終わらないのです。検査や処方のもとに患者をケアする現場の人がいてこそ成り立ちます。

協力事業の公開点検表

両国が共同で推進する大規模な協力事業には、中央政府や公企業、民間企業、大学の研究所、総合病院が複雑に絡み合って関与します。参加機関が多く外見上は頼もしく見えますが、いざ現場で予期せぬ問題が発生したときには、責任を互いになすりつけ合って逃れてしまいがちです。したがって、初期の契約書を作成する段階から、事業の具体的な達成目標や投入予算の内訳、実務責任者、環境・労働保護の基準、事業関連情報の公開範囲を明確に定めておかねばなりません。事業の主要な内容をまとめた案内書を韓国語とウズベク語の両言語で分かりやすく整理し、両国の市民なら誰もが閲覧できるように透明性高く公開すれば、不要な疑惑や誤解を大幅に減らすことができます。

テープカットを伴う華やかな竣工式が終わってからこそ、事業の真の評価が始まります。病院は開院後に最初の診療を開始したあとに、高速列車は四季の厳しい暑さと寒さを経験しながら線路を走ったあとに、新しい教育課程はそれを学んだ卒業生たちが職場に出て実力を発揮したあとに、落ち着いて点検してしかるべきです。機械の度重なる故障回数や修理にかかった時間、採用された現地スタッフの比率、診療を受けるために患者が待機した時間、作業現場で発生した大小の安全事故の記録を、透明性をもって社会に公開しなければなりません。見栄えのよい成功事例ばかりを選び出して体裁よく包装して発表するだけでは、次の事業でも同じ失敗や弊害をそっくりそのまま繰り返すことになります。

住民や労働者が声を上げる苦情窓口は、事業の推進過程で生じる誤りをきわめて早期に発見する貴重な火災報知器のようなものです。工事現場で汗を流す労働者や近隣の村の住民たちが、後から不利益を被るのではないかと恐れることなく、作業現場の安全問題や正当な土地補償について堂々と自身の権利を主張できなければなりません。受け付けた苦情に対していつまでに誠実に回答するかという処理期限を明示し、結果に不服がある場合の再審手続きを整え、複数の苦情から共通して噴出する根本的

な原因を調査して包み隠さず公開してこそ、同じ不満が繰り返される悪循環を断ち切ることができます。

事業を推進する韓国の公共機関や企業もまた、一方的に恩恵を施す援助者という傲慢な視線から脱却しなければなりません。ウズベキスタン現地の学者や公務員、市民団体の活動家たちは、解決すべき課題が何であるかをともに定義し、事業予算の使い道をともに決定する対等な協力のパートナーです。たとえ事業の名称において韓国の優れた技術やブランドが前面に出ていたとしても、工事完了後に残された施設を何十年にもわたって維持管理し利用していく主役は、まさにその地に足をつけて暮らす現地住民たちなのです。

ウズベキスタン政府もまた、外国の莫大な資本や先進技術に頼るばかりで、国家が果たすべき本来の行政責任を外国企業へ押しつけてはなりません。事業用地を確保するための土地収用と補償、建設現場における労働基準法の遵守状況を見守る労働監督、自然破壊を防ぐ厳格な環境許認可手続きは、ひとえに自国政府が主権者の姿勢をもって担うべき役割です。もし外国企業が当初交わした約束や契約を守らないのであれば、法と原則に則って厳正に是正を求めなければならず、自国の国営企業が事業過程で過ちを犯した際にも、同様の厳格な基準を適用して正さなければなりません。真の相互尊重とは、互いの恥部や欠点を見て見ぬふりをして覆い隠す、形ばかりの礼儀とは根本的に異なるものです。

人の尺度で測る協力

韓国とウズベキスタンは、産業投資や総合病院の建設、高速鉄道の開通、学校教育改革に至るまで、幅広く多彩な協力を約束しています。[B016] 今後両国が築いていく関係の深さと成熟度は、協定書に並ぶ華やかな事業リストの長さではなく、ごく普通の人々の日常にどのような具体的な変化を残したかによって推し量るべきです。工場で働く現地の若者が故障した設備を自力で手際よく修理できるようになったか、遠い農村の患者が首都まで出向かなくても適切な時期に適切な治療を受けられるようになったか、韓国への留学を終えて帰国した若い人材が学んだ知識を社会のために十分に活かせる職場が整えられたかを、絶えず問い直さなければなりません。

社会の真の変化は、一夜にして変わる迅速な法律条項と、長年培われ固定化した緩やかな生活習慣の狭間で起こります。法律に家庭内暴力を厳罰に処すと明記したと

ころで、被害者の胸にしこりとなって残る恐怖と沈黙が一朝一夕に跡形もなく消え去るわけではありません。最新の教育課程を盛り込んだ新しい教科書を子どもたちに配ったとしても、教室の中で自由に質問を投げかけ議論する文化が根づくまでには長い年月がかかります。外国の先進技術によって立派な病院を建設したとしても、医療スタッフと患者の間に芽生える厚い信頼は、幾日もともに向き合い診療を重ねてきた時間の中でこそ育まれるものです。変化の歩みが遅いからといって、性急に焦ったり失望して諦めたりしてはなりません。その遅さこそが、私たちが今後どこに一層の愛情を注ぎ、根気強く見守るべきかを教えてくれる貴重な道標だからです。

ウズベキスタン社会に満ちる若者たちの生き生きとした顔は、自らの夢を広げる正当な機会を切に待ち望んでいます。韓国との国際協力は、若者たちのこの切実な待ち望む思いを、人手不足の際に使い捨てにする安価な労働力として軽視してはなりません。互いに不足する人手を融通し合う一過性の取引を超えて、若者たち一人ひとりが自らの足で立つ母国社会において堂々と人生の進路を選択できる力量を育むべきです。教室に座る幼い生徒や、人目につかない場所で汗を流すケア労働者、海外から帰国した熟練技術者、そして農村の診療所で病に苦しむ患者が、昨日よりも少し広がった人生の選択肢を手にするとき、地図上の遠い距離を越えて、両国の心は真に近づくことができるのです。

第10章 アラル海と気候危機、再生の試み

海が退いた場所

砂丘の真ん中に、一隻の船が錨も下ろせないまま佇んでいます。船を浮かべていた水が、遙か彼方へと去ってしまったからです。かつてアラル海の名高い港町だったムイナクを訪れた旅人は、錆びついた船体を眺めながら、海がどれほど遠くまで退いてしまったのかを実感し、途方に暮れるような思いを抱くかもしれません。ここは、子どもが生まれて大人へと育つ間に、海岸線が地図の外へと押し出されてしまった現場なのです。

アラル海は、ウズベキスタンとカザフスタンの間に広く横たわっていた巨大な内陸湖でした。しかしソビエト時代にアムダリヤ川とシルダリヤ川の流れを綿花畑や農地の灌漑用水へと転換したことで、湖へ流れ込む水は急激に減少しました。2026年の中央アジア水・土地連結網の資料は、アラル海が本来の大きさの約10パーセントしか残っていないと説明しています。[B023] 水量が減ると水の塩分濃度が跳ね上がって漁業は完全に崩壊し、干上がって露わになった湖底の塩と粉塵は、風に乗って近隣の村や農地へと絶え間なく降り注ぎました。[B023]

この悲劇を過ぎ去った旧政府の失策にばかり帰してしまうと、今私たちが背負うべき責任の重みが見えにくくなってしまいます。同資料によれば、現在も中央アジア全人口の約80パーセントが、アムダリヤ川とシルダリヤ川の流域から流れてくる水に頼って暮らしています。[B023] 農民の畑や都市の水道管、電力を生み出す発電所、そして自然の湿地が、いずれも一本の川の水を分かち合っています。気温が上昇し山脈の氷河が減少するにつれて、共に分かち合う水の供給は一段と危うくなっていきます。

アラル海全体をかつての大きさにそのまま戻す計画は、現実的ではありません。だからといって手をこまねているわけにはいかず、今すぐに実践できる課題が残されています。干上がった湖底から舞い上がる砂塵を鎮め、わずかに残された湿地を守り抜き、地域住民の所得と健康に配慮することです。さらに、このような痛切な失敗をほかの河川流域で繰り返さないよう防がねばなりません。再生とは、古い写真の中

の風景を無理に復元する作業というよりも、人と自然生態系が再び持ちこたえられる条件を一步步整えていくことなのです。

黒サクサウールの小さな森

2026年3月、ウズベキスタンの森林当局は、アラル海の干上がった湖底に黒サクサウールをはじめとする砂漠植物を植える作業に着手したと発表しました。政府の公式発表によると、2018年から2025年までに約200万ヘクタールに及ぶ土地で「緑の被覆」を施すか、あるいは植林を行う作業が進められました。[B021] ただし、この数値は種を蒔き苗木を植えた面積を意味するにすぎません。この広大な区域全体が生い茂る森へと豊かに育ったと受け止めてはなりません。

サクサウールは、極度に乾燥し塩分濃度の高い土地でも粘り強く耐え抜く植物です。深く伸びた根は散り散りになる砂をしっかりと抱え込み、密生した枝は地表近くを吹く強い風を和らげます。この植物が乾いた大地にしっかりと根づけば、風に舞う塩の粉塵の量を減らしてくれます。砂漠そのものをなくすことはできなくても、新たに生まれた砂漠が人々の生活の場を脅かさないよう防いでくれる盾となるのです。

植林事業の成否は、地に蒔いた種の重さや苗木の数だけで推し量ることはできません。数年が経過した後に、実際にどれほどの面積で植物が生き残ったのかを綿密に調査する必要があります。土壌の塩分濃度や降水量、風の強さ、家畜を放牧する密度によって、植物の生存率が大きく左右されるためです。衛星写真は広大な大地の巨視的な変化を一目で見せてくれますが、地表に芽生えた若い植物がどれほど健全か、どのような種が混ざり合っているのかまでをつぶさに教えてくれるわけではありません。現場で直接標本を確認する精密調査と、現地住民による長年の観察記録を突き合わせて見極める必要があります。

途方もない面積に木を植えたという統計上の数字は、発表するには格好が付きます。それに比べ、根を下ろせずに枯れ果てた面積を率直に公開することは、どうしても気が重い作業になりがちです。しかし、失敗した区域を隠してしまえば、誤った手法を繰り返して貴重な予算と時間を浪費することになります。どの樹種がどのような土壌で生き残り得たのか、水は適切なタイミングで供給されたのか、柵を越えて家畜が侵入しなかったのかをつぶさに記録しておいてこそ、次回の植林作業を改善できる

のです。生態系を再生する取り組みにおいても、失敗や誤差を記録する過程が欠かせません。

湿地は命の宿る場所です

アラル海の周辺には、いまでも潤いを湛えた湖や生い茂るアシ原、川の流れが分かれる三角州が残されています。この湿地は、渡り鳥や魚、水辺の植物たちが生きていく大切な拠り所です。地域住民にとっては、魚を獲り、家畜を飼い、アシを刈り、エコツーリズムの観光客を迎える生計の基盤でもあります。乾いた湖底に草木を植えることと同じくらい、いま残されている水路や湿地を損なうことなく守り抜くことが重要です。

ウズベキスタンの環境当局は、2026年4月に開催されたアラル海地域湿地復元会議において、75万7千ヘクタールを超える保護区の指定やサクサウールの植林、住民のための小規模な生計支援、デジタルモニタリング体系の構築を重点課題として提示しました。[B022] しかし、保護区の面積が広いからといって、その生態系がおのずと保全されるわけではありません。設定された境界線の内側で密かに行われる密猟や過度な放牧を監視する人員が配置されねばならず、湿地へと続く水路が途絶えないようにし、地域住民と交わした約束がしっかりと守られなければなりません。

自然の湿地を保護することと住民の生計を支えることを対立関係として捉えてしまうと、正しい解決策を見出すのは難しくなります。住民を生活の場から追い出して柵を巡らせるだけでは、監視の目が緩んだ隙を突いて忍び込むようになり、対立の溝が深まるばかりです。かといって何の制限もなく資源を自由に使わせてしまえば、貴重な生態資源は瞬く間に減少してしまいます。どの季節にどの区域への立ち入りを控えて休ませるか、獲ってもよい魚の大きさや漁獲量をどれくらいに定めるか、住民と生態研究者が知恵を出し合って共に決めなければなりません。

住民に支給される小規模な支援金は、養蜂による蜂蜜の採取、苗木の育成、エコツーリズムの案内、伝統工芸品の製作といった新たな収入源を確保する助けとなります。[B022] その際、支援事業の数ばかりを増やして満足するのではなく、数年が経った後も各家庭の所得が安定して持続しているかを見守る必要があります。観光客の足が遠のくオフシーズンにはどのような仕事で暮らしを立てるのか、女性たちが収入を直接管理しているか、特定の有力世帯にばかり支援が偏っていないかを綿密に確認し

なければなりません。自然生態系の保全と住民の暮らしが足並みを揃えて進むとき、私たちが定めた保護の取り決めも末永く力を持ち続けるのです。

川の水は国境を読みません

アムダリヤ川とシルダリヤ川は、国境線を越えていくつもの国を縫うように流れています。川の上流に位置する国は、寒い冬の時期に暖房や電力を得るため、ダムに水を貯めてから放流しようとしています。これに対し、下流にある国は、猛暑の夏期農繁期に作物を育てる水路へより多くの水が流れ込むことを望みます。一つの川とダムを共有しながらも、水が切実に求められる季節と用途が互いに異なっているのです。気候変動は、国家間に絡み合うこの長年の水配分問題をいっそう複雑で厄介なものにしています。

2026年4月に第一歩を踏み出した中央アジア水・土地連結網は、地球環境ファシリティからの3000万ドルの支援を原資として推進される地域協力事業です。水資源と土地の生態系を切り離さず一体のものとして捉え、国境を越えた国家間協力を導き出すことに目的があります。[B023] 投入される資金の規模よりも重要なのは、互いの水文データを透明性をもって共有することです。上流ダムの貯水量や下流地域の灌漑需要、山岳地帯の積雪量や氷河の状態、河川の水質情報をそれぞれが隠して閉鎖的に扱えば、各国は相手の意図を疑い、最悪の事態ばかりを思い浮かべて不安に陥りやすくなります。

透明なデータ共有は、国家間の信頼を積み上げる小さな装置となります。水位観測所の測定基準と情報公開の時間をあらかじめ揃えておけば、深刻な干ばつに見舞われた際にも、感情的な非難を先行させるのではなく理性的な水量調整を真っ先に議論できます。どの国がどれだけ水を引き込んだかを追及するだけに終わらず、老朽化して漏水している水路を改修したり、水消費量の多い作物を他の作物へと転換したりするのにかかる費用を、周辺国が共に分担する道も開かれます。水外交は、首脳会談の場で交わされる華やかな握手よりも、観測所から日々送られてくる誠実な水位データから力を得るのです。

アフガニスタンが進める灌漑水路の開発もまた、アムダリヤ川の下流の流れと直結しています。ウズベキスタンとしては、隣国アフガニスタンの平和と経済的な結びつきを望みつつも、自国の下流地域へと流れ込む水供給が減少することを懸念せざる

を得ません。この二つの願いは、現実において互いに衝突しかねません。相手国の開発の権利を無条件に否定するのではなく、水を引き込む取水量や水路工事の日程を透明に共有し、節水技術を共同で整えていくほうが安全です。水は一国の安全保障問題であると同時に、周辺国すべての生存がかかった共通の基盤だからです。

水路から漏れる水

ウズベキスタンの農業は、人為的に水を引く灌漑施設に深く依存しています。しかし、古くにつくられた素掘りの土水路は、水が地中に染み込んだり強い日差しで蒸発したりして損失が大きいものでした。2026年5月、ウズベキスタン大統領府は、最近主要な幹線水路2000キロメートルの区間にコンクリートの内張りを施し、毎年約13億立方メートルに達する水を節約したと発表しました。さらにその結果、85万8千ヘクタールに及ぶ農地の水供給事情が改善し、5万1千ヘクタールの土地を再び農地として利用できるようになったと公表しました。[B025]

水路をコンクリートで舗装すれば漏水現象を減らすことができますが、場所を見極めながら慎重に施工しなければなりません。ある区域では、土を通じて地中に染み込んだ水が地下水を満たし、周辺の野生の木々を育んでいる場合もあるからです。水路を直線化してしまうと、川の下流生態系へと流れ込んでいた水量や流速が変わってしまうおそれがあります。工事費や維持管理費の負担も決して小さくありません。どの区間で深刻な水損失が生じているのかをまず測定し、生態系に及ぼす影響と農家が得られる便益とを比較検討する必要があります。

作物を栽培する畑では、作物の根元付近に水を一滴ずつ滴下する点滴灌漑方式や、土壌水分を精密に測定する技術が水消費の削減に役立ちます。しかし、農家に設備を配給するだけでは不十分です。灌水フィルターに異物が詰まった際に直ちに交換できる部品や、ポンプ稼働に必要な電気料金の支援、農民への機器講習が滞りなく続けられなければなりません。規模の小さな農家は、設備導入にかかる初期費用を負担することが困難です。政府の補助金が大規模な企業型農家にばかり集中すれば、水を節約する恩恵と費用の負担が二極化してしまいます。

どの作物を植えるかを決めることもまた、水政策の重要な一環です。綿花や小麦の生産目標、国家による買い取り制度、農産物の輸出価格などが、個々の農民の選択を縛りつけることがあります。このような状況で水の使用料だけを引き上げれば、貧

しい農家が真っ先に打撃を受けることになります。農民が水消費の少ない作物へと転換したとしても、収穫した農産物を安定して販売できる市場や貯蔵施設が整っていないければなりません。蛇口から落ちる水一滴の価格の中には、一国の農業政策全体が内包されていると言えるのです。

気候公約の正確な意味

ウズベキスタンは新たな国家気候計画を通じ、2035年までに国内総生産（GDP）単位当たりの温室効果ガス排出量を2010年の基準値から50パーセント削減すると公約しました。[B046] ここでの基準は経済規模単位当たりの排出量、すなわち「排出原単位（排出集約度）」です。国家経済が急速に成長した場合、たとえ排出原単位を半減させたとしても、国全体の温室効果ガス総排出量は増加する可能性があります。

こうした統計上の差異を明確に認識しておく必要があります。ひとつの工場が製品ひとつを生産する際に使うエネルギーを減らしたとしても、工場の数が増えれば国全体の排出量は大きくなるからです。気候計画を適切に評価するためには、排出原単位の数値と併せて総排出量も確認しなければなりません。発電や産業、建築、交通などの各分野において、実際に排出量をどれほど削減できたのかも公開されるべきです。

ウズベキスタン政府は2026年6月現在、再生可能エネルギーが全設置発電容量の約30パーセントを占めており、2030年には50パーセントを超える計画だと明らかにしました。[B026] 2026年2月の大統領府資料を見ると、総発電設備2万5800メガワットのうち再生可能エネルギーが8000メガワットで約31パーセントと記されています。[B027] この数値は機器を備え付けた「設置容量」を意味します。1年間に実際に電気を生み出した発電量の割合とは区別して見なければなりません。

太陽光発電は夜間に電気を作ることができず、風力発電は風の強さによって発電量が変わります。設置容量が増えるほど、電力網の安定性やエネルギー貯蔵装置、予備発電、電力需要の調整技術が重要になります。送電線が不足していれば、砂漠の太陽光発電所が作った電気を都市へ適時に送ることができません。新しい発電所の竣工式の写真に感嘆するよりも、どの時間帯にどれだけの電力を供給したのかを丁寧に見極める方が正確です。

天然ガス発電を減らしていく過程では、庶民世帯の暖房費や電気料金の負担も考えなければなりません。エネルギー価格を急に引き上げてしまうと、低所得世帯が厳しい寒さに耐え忍ぶことになります。かといって、すべての人に安価でエネルギーを供給すれば、富裕な世帯がより多くの支援の恩恵を享受することになります。基本使用量は低く抑えて保護し、過度な消費には実際の費用を課す精緻な制度設計や、古い住宅の断熱を改修する支援が並行して進められなければなりません。

科学が住民の言葉と出会うとき

アラル海地域では、土と水、植物、人々の健康がひとつに絡み合っています。日本とウズベキスタンの研究チームが参加するSATREPS事業は、2026年7月に土壌塩類化と農業、生態系回復をつなぐ科学協力の進捗状況を共有しました。[B024] 衛星データと実験室での分析は、人間の目には見えない微細な変化を見つけ出します。どの土地にどんな作物を植えるべきか、どこで塩分が高まっているかを判断する道しるべになってくれます。

研究結果が学術論文にとどまっているだけでは、村の人々の選択は変わりません。農民たちが理解しやすい言葉で土壌情報を説明し、種子や灌漑方法を直接試すことのできる小さな畑を用意する必要があります。住民たちが長年肌で感じてきた風の向き、井戸水の味、家畜の動きも貴重なデータです。科学者は住民の経験を迷信として退けるのではなく、測定可能な問いへと置き換えて受け入れるべきです。

住民の健康を調査する際には、より慎重な姿勢が求められます。砂塵や塩分、農薬への曝露だけでなく、貧困や栄養状態、医療へのアクセス性が人々の身体に複合的に作用するためです。ひとつの病気を軽率にアラル海のせいにしてしまうと、原因を見誤る恐れがあります。逆に、完全な科学的証拠が得られるまで何の措置も講じなければ、住民たちがそのリスクをそのまま背負い込むことになります。粉塵警報や清潔な水の供給、定期的な健康診断、学校の教室の換気のように被害を軽減する措置は、長期的な研究と並行して進められなければなりません。

暑さに適応する村と都市

気候危機は、遠い未来の平均気温上昇だけを意味するものではありません。真夏の教室が暑すぎて授業を受けられず、労働者が炎天下に倒れ、停電で冷蔵庫が止まって医薬品や食べ物が傷むといった具体的な災害として現れます。アラル海地域や乾燥した都市では、水不足と猛暑、砂塵が同じ日に重なって襲いかかることもあります。

猛暑警報は、気温の数値ひとつを知らせるだけでは不十分です。湿度や夜間の気温、地域ごとの日陰、電力事情も併せて考慮しなければなりません。学校や保健所、伝統的な自治組織であるマハッラが連携し、独居高齢者や妊産婦、屋外労働者の安否を確認することができます。警報メッセージは、ウズベク語やカラカルパク語など、住民が実際に読む言語で速やかに配信されなければなりません。

屋外での労働時間は猛暑に合わせて変更することができます。日差しがひときわ厳しい昼間の時間帯を避けるようにスケジュールを組み、水や日陰、休憩時間を保障しなければなりません。賃金を出来高だけで支払うなら、労働者は体調を崩しても休むことができません。暑さのために作業を一時中断した時間が、解雇や減給につながるないようにする現場の労働ルールが必要です。

熱を帯びた建物は、冷房機器を増やすだけの方法では冷やすのが困難です。電力需要が一挙に集中し、大規模な停電リスクが高まるためです。屋根を明るい色で塗装し、外壁の断熱を補強し、風通しの良い通り道や日よけ、木陰を整えれば、電力消費を抑えながら室内の温度を下げるすることができます。古くからの地域の伝統建築には、厚い壁や中庭、日陰を作って暑さをしのいだ知恵が息づいています。新しいアパートを設計する際にも、その経験から学ぶことができます。

都市の樹木は、気温を下げて粉塵を減らすのに役立ちます。ただし、水が不足している地域では樹種や植える場所を慎重に選ばなければなりません。芝生を広く敷き詰めて絶えず散水しなければならない公園よりも、在来樹木と土が露出した庭園の方が地域の風土に合っている場合があります。公園の広さよりも、人々が歩く道に実際にどれだけ日陰が落ちているかを測るべきです。

干ばつ対策計画には、明確な優先順位が必要です。住民の飲み水や病院、基本衛生を最優先で守り、農業や産業における取水制限の基準をあらかじめ定めておく必要

があります。危機が訪れた後に影響力の強い利用者が水を先に奪ってしまえば、大きな対立が生じます。企業や大規模農場の水使用量をメーターで透明に測定し、住民が確認できるようにしなければなりません。

気候のコストを誰が支払うのか

太陽光や風力の発電施設を増やすことは、化石燃料への依存を減らしてくれます。[B026][B027]しかし、発電所が建設される土地には、牧畜や農業、自然生態系がすでに息づいている場合があります。地図の上に「空っぽの砂漠」と記されている場所であっても、住民たちが季節ごとに家畜を追って行き来する通り道であるかもしれません。工事を始める前に、土地利用の現状や野生動物の移動経路を綿密に調査し、住民と補償条件を取り決める必要があります。

送電線や発電所の建設によって雇用が生まれたとしても、工事が終われば雇用の規模は縮小してしまう可能性があります。地元住民に短期的な単純労働ばかりを任せ、熟練職を外部の人材で埋めてしまえば、期待と現実の乖離は大きくなります。地域の若者たちを電気技術者や整備士としてあらかじめ育成し、地元の企業が部品やサービスを供給できるように契約を設計することができます。

ガスや電気の価格を現実に合わせて調整するプロセスも公正でなければなりません。安価なエネルギーは無駄遣いを招きますが、貧しい家庭にとっては暖房や調理を賄う生命線です。所得水準や基本使用量をもとに脆弱な世帯を保護し、住宅の断熱材や暖房器具を交換する支援を優先して提供すべきです。料金の引き上げだけで節約を迫るなら、他の選択肢を持つ余裕のない人々が罰を受けることになります。

国際的な気候資金は、将来返済すべき借金なのか、無償の支援金なのかを明確に区別して公開されなければなりません。大規模な発電事業の収益は外国の投資家へと渡り、為替変動に伴うリスクは政府が背負い込む事態が起こり得ます。官民連携（PPP）契約に盛り込まれた政府保証や長期電力購入価格を、市民が知ることができるようにすべきです。将来世代が返済しなければならない資金であるなら、現代の議会と住民が契約条件を綿密に確認しなければなりません。

アラル海復元資金も同様の原則に従う必要があります。サクサウールの植林、湿地保全、保健医療、生計支援事業の予算を地図とともに公開すれば、重複投資や取り

残された空白を見つけやすくなります。国際機関ごとに報告方法が異なっているのは、住民が事業全体の規模を把握することは困難です。共通の分類基準と統一された公開様式を策定し、現地の言語による説明を添えなければなりません。

カラカルパクスタンの住民は、あらゆる決定における直接の当事者です。どの村に水道施設を先に整備するのか、どの地域を保護区に指定するのかを堂々と主張する権利があります。会議場に出席した人々の数よりも、住民の反対意見が計画を実際に変更させることができたのかを見る必要があります。真の参加とは、署名欄に名前を記入する形式的な手続きを超えて、政策決定権限の一部となるべきものです。

環境データの小さな革命

2026年のアラル海湿地事業は、デジタル観測体制を主要な課題として提示しました。[B022] 人工衛星と地上の感知センサーは、広大な地域の植生や水資源、砂塵の変化を頻繁に把握できるようにしてくれます。観測データが継続的に蓄積されれば、一時的な季節変動と事業の効果を明確に見分けることが容易になります。ある年、雨が多く降ったことで一時的に改善した数値を、復元の成果と取り違える事態を減らすことができます。

センサーも故障することがあり、測定値が誤っている場合もあります。測定機器の設置場所や誤差校正の日付、欠測期間も併せて公開しなければなりません。数値が急に良くなった場合、実際の環境変化によるものなのか、機器を交換したためなのかを確認する必要があります。住民たちが粉塵や水の状況を自ら記録する市民観測は、公式の観測網の空白を埋めるうえで大きな助けとなります。

環境データを公開する際、個人の健康や位置情報は徹底して保護されなければなりません。小さな農村で発生した希少疾患を詳細な住所とともに公開してしまえば、誰のことがすぐに特定されてしまいます。研究者は住民の同意を得て、調査に必要な情報のみを収集すべきです。公益という名分が住民のプライバシーを侵害してはなりません。

優れた環境地図とは、どこをさらに調査しケアすべきかを示す「問いの地図」です。危険を意味する赤色で表示された村に警報メッセージを送るだけで済ませるのではなく、清潔な水や医療陣、防塵設備を直ちに連携させなければなりません。データ

文書の最後の欄には、担当機関と実際の対応結果が記載されていなければならないのです。

再生をどのように数えるか

復元事業を進める際、広大な面積や夥しい苗木の数値を発表するのは容易です。しかし、砂混じりの風に苦しめられていた住民の咳が減ったのか、井戸水の塩分が下がったのか、飛び去っていった水鳥が戻ってきたのかを測るには長い時間がかかります。だからこそ、成果の指標は事業の初期から多角的な層に分けて設定しておかなければなりません。

木を植えた面積は私たちが投じた活動を示します。生き残った植物の割合は生態系における成果を示します。大気中の粉塵や土壌の移動量は環境の変化を示します。世帯所得や疾病負荷の変化は、人々の暮らしがどう変わったかを示します。これらの数値が常に同じ方向へと動くとは限りません。植物が増えても放牧地が狭まることで住民の仕事が減ることもあり、観光収入が増えても湿地が混雑して損なわれることもあります。

データは透明性をもって公開されるべきです。政府や国際機関が公的資金を投入した事業であれば、地図や予算、調査方法、失敗した区域の記録に至るまで、住民も閲覧できるようになっていなければなりません。携帯電話の画面から自分の村の状況を簡単に調べられるデータが望まれます。数値ごとに誤差範囲と調査日も正確に記さなければなりません。華やかな色彩で塗られた地図ばかりを掲げていては、実際の現実と見せかけの宣伝との境界が曖昧になってしまいます。

アラル海はよく「人間は自然に勝てない」という教訓として語られます。しかし、その言葉はあまりに大仰で、具体的な政策の失敗や責任の所在を曖昧にしてしまうことがあります。水の流れを変えてしまった政策があり、需要を膨らませた綿花生産目標があり、数々の警告を無視した傲慢な決定がありました。これから私たちが直面する選択も具体的でなければなりません。どの水路を改修するのか、どの湿地に水を残すのか、どの農家を支援するのか、ひとつひとつ定めていく必要があります。

再生とは、海をかつての地図の上に再び塗り直すという幻想を超えたものです。塩の混じる風が吹く日にも子どもたちが病気になりにくく、農民が少ない水で安定し

た収穫を得て、川を分かち合う国々が水文データを隠さない状態の事です。干上がった大地に育つ一本のサクサウルが、巨大な悲劇を一瞬で消し去ることはできません。それでも大地を吹き抜ける一筋の風を和らげてくれます。その小さく測定可能な変化の中にこそ、責任ある希望が始まります。

第11章 過去と未来が共存する首都タシュケント

広い通りの下にある古い肌理

タシュケントの朝は、それぞれ異なる速度で目覚めます。地下鉄の扉が閉まり、通勤の人波を乗せて走り出す一方で、広い大通りでは車が列をなして信号を待っています。古い伝統的な居住地であるマハッラの路地では、焼きたてのパンの香りが低い塀を越えて漂い、遠い空には新しい建物を建てる大型クレーンがそびえています。この首都は、過去の時代を完全に消し去って次の時代へと移り変わったわけではありません。異なる時代の痕跡が、ひとつの通りの中で肩を並べるように場所を分け合っています。

都市の名であるタシュケントは、一般に「石の都市」という意味に解釈されます。しかし、この都市が秘めた真の力は、石のように固く固まった静的な状態にとどまるものではありません。長い年月の間に経験した地震や戦争、帝国の支配と独立、急激な人口増加の中でも、人々が暮らしの場を粘り強く再び切り拓いてきたことに由来します。こうして、かつての市場やイスラム建築、ソビエト時代に整備された広い道路や現代的な建物が、一枚の地図の上に何層にも重なり合っています。

2026年1月1日時点で、タシュケント市の人口は317万8,100人です。ウズベキスタンの総人口3,823万6,704人のうち、約8パーセントがこの首都に集まって暮らしています。[B029] 昼間になると、周辺を行き来する通勤者や訪問者が加わり、通りは一層賑わいます。このように人が集まることで大学や病院、企業や文化施設が活発に立ち並ぶ一方で、住宅価格の上昇や交通渋滞、大気や水質の汚染、ゴミ処理といった現実的な悩みもまた深まっています。

ひとつの都市の真の姿を正しく理解するためには、華やかにそびえ立つ高層ビルの数を知るよりも、市民の平凡な一日をつぶさに見つめなければなりません。家からバス停へと続く歩道が安全であるか、子どもたちが学校を通うのにどれほど時間がかかるか、真夏の強い日差しを避ける木陰と冬の暖房が偏りなく整っているかを確か

めることが先決です。首都の真の未来は、壮大に広げられた鳥瞰図よりも、市民が毎日踏みしめて立つ自宅前の歩道ブロックの上でこそ、先にその姿を現します。

地震のあとに築かれた現代都市

1966年に発生した大地震は、タシュケント市街地の広い地域を一瞬にして崩壊させました。災害の直後、ソビエト連邦各地から数多くの技術者や建設労働者が集まり、都市を一から再建しました。その過程で、すっきりと伸びる大通りや広々とした広場、地震に耐える頑丈な耐震構造、強い日差しを遮る日よけの外壁が整備されました。ここに中央アジア固有の伝統文様や建築材料が、現代の建築様式と自然に調和していききました。

ユネスコ世界遺産委員会は2026年に「タシュケント近代建築：中央アジアの近代性と伝統」を世界遺産一覧表に登録しました。この登録遺産は、1960年代から1990年代初頭にかけて建てられた10件の代表的な建造物と複合施設群で構成されています。1966年の地震以降の再建事業を進める過程で、耐震技術や暑い気候に合わせた設計を取り入れ、そこに地域固有の文化的表現を見事に融合させた優れた事例であると評価されました。遺産の総面積は62.588ヘクタールに及び、建築類型や技術の発展を証明する基準を意味する世界遺産評価基準4番が適用されました。[B028]

見知らぬ街を歩く旅行者は、往々にして壮大な中世の遺跡ばかりを歴史として思い浮かべがちですが、今回の登録は遺産や歴史を見つめる視野を広げてくれます。世界遺産は、数百年前の中世のドームや日干し煉瓦の城壁にとどまるものではありません。親や祖父母の世代が映画を鑑賞し、会議に出席し、本を読んでいた近代の生活建築もまた貴重な歴史です。コンクリートで建てられた近代建築は、外観が古びて周囲にありふれているという理由で取り壊されやすいものの、こうした建築が解体されてしまえば、地震の傷を乗り越えて都市がどのような未来を夢見ていたかを物語る貴重な記録もまた失われてしまいます。

近代建築を保存するということは、建物を博物館の標本のように固く凍結させておくことを意味するわけではありません。劇場やホテル、市場や行政庁舎は、今日でも市民が行き交い、日常の中で使われ続けるべき空間です。老朽化した電気や消防の設備を改修し、車椅子の市民や体の不自由な人々が入りやすいように動線を整えなければなりません。その過程で、建物の当初の外壁や固有の空間構成をどこまで保

存するのか、繊細に見極める必要があります。利便性ばかりを追って輝く全面ガラスの壁を張り巡らし、古い建築の個性を消し去ってしまえば、利用は多少便利になるかもしれませんが、遺産が宿す本来の意味は色あせてしまいます。

世界遺産登録という喜ばしい知らせの裏には、実際の建物を管理するという一層困難な課題が控えています。指定された建物ごとに所有者が異なり、用途もさまざまであるためです。建物の周辺に無秩序に高層ビルが建つと、本来の建築が持っていた調和のとれた比例や開かれた景観が損なわれてしまいます。乱雑に掲げられた商業広告の看板や、外壁に無造作に取り付けられたエアコンの室外機、ずさんな仮設増築物もまた、本来の優美な景観を損なう原因となります。したがって、保存区域の管理規則を地域住民や商人に丁寧に説明して合意を得るとともに、老朽化した施設を修繕する費用をどのように分担するか、明確な基準を定めなければなりません。

青いドームと一冊のクルアーン

タシュケントが育んできた悠久のイスラム宗教文化の息吹は、ハスト・イマーム広場で出会うことができます。澄んだ青いドームと趣ある日干し煉瓦の建物が立ち並ぶここには、初期イスラム時代の希少なクルアーン写本の一部が保管されています。この遺物は一般に「ウスマーンのクルアーン」と呼ばれ、初期イスラム共同体の第3代カリフであったウスマーンが生前に直接読んだとされる、7世紀の由緒ある伝承と結びついています。

口伝で受け継がれてきた伝承は、共同体が抱いてきた貴重な記憶ですが、科学的かつ客観的な学術鑑定とは落ち着いて区別して扱わなければなりません。アメリカのメトロポリタン美術館は、この写本のうちの1枚を8世紀末から9世紀初頭の間に制作された作品と鑑定しています。さらに、原本の約3分の1に相当する分量がタシュケントのハスト・イマーム図書館に保管されていると説明しています。[B034] したがって、これをカリフ・ウスマーンが自らめぐりながら血を流したとされる7世紀の原本であると軽々に断定して記録する態度は控えるべきです。

だからといって、長年の伝承を偽りだとして安易に退ける態度もまた妥当ではありません。人々はこの古い書物の中に、自らの歴史や信仰、都市に対する深い誇りを幾重にも積み重ねてきたからです。博物館の解説パネルは、このふたつの側面を並べて示すことができます。地域共同体がこの写本を長い歳月にわたりどのように記憶し

敬ってきたかを伝える一方で、書体分析や羊皮紙の材質研究が示す歴史的な制作時期を静かに併記する手法です。信仰の記憶と学術研究は互いを排除し合うものではなく、それぞれ異なる問いに対して真摯に答えを差し出しています。

厚いガラスの展示ケースの前に立った訪問者は、古びて黄ばんだ1枚の紙と向かい合いながら、妙なる畏敬の念と慎み深さを覚えることになります。そこに置かれているのは古びた羊皮紙だけでなく、文字を一文字一文字心を込めて手で書き写し、戦乱の中でも書物を胸に抱いて守り抜いてきた無数の人々の悠久の時間だからです。照明の光や室内の湿度、温度を精密に管理し、わずかな損傷状態を細かく記録してこそ、その尊い時間が次の世代へとそのまま受け継がれることができます。カメラのフラッシュを制限する撮影規則や、1日の観覧人数を調節する細やかな措置もまた、遺物を損なうことなく守り抜く大切な保存過程のひとつです。

地下鉄が都市を折りたたむ手法

タシュケントの地下鉄は、中央アジア地域で早くに開通した代表的な都市鉄道網です。プラットフォームごとに優美な大理石の柱や趣あるシャンデリアの照明、地域特有の伝統文様がそれぞれ異なる趣を競い合っています。市民にとっては忙しい通勤の足を支える便利な交通手段であると同時に、地下に丹念に築かれた美しい公共建築でもあります。地上の道路が車で埋め尽くされて息苦しいとき、地下鉄は遠く離れた街区同士を、あたかも一枚の地図をさっと折りたたんで合わせるかのように間近に結びつけてくれます。

2026年5月、ウズベキスタン大統領府は2030年までにタシュケント地下鉄の総延長を103キロメートルに延ばし、駅数を79か所まで拡充する中長期発展計画を検討しました。1日の輸送人員を180万人まで引き上げ、運行路線に応じて列車の運行間隔を1分30秒から3分の水準まで稠密に短縮するという構想です。[B030] ただし、発表された数値はまだ完成した実績ではなく、今後達成すべき目標にすぎません。計画通りに実現するためには、隙のない工事工程の管理と十分な財政的裏付け、新型電車の導入や安全な先端信号システムの構築が滞りなく続けられなければなりません。

地下鉄網を拡張すれば、都心の自家用車の通行量を減らし、排気ガスの排出を抑える前向きな変化が期待できます。しかし、公共交通政策の成否は、駅の出入口内外の環境にかかっています。自宅から地下鉄駅まで歩く道が陰しく不便であったり、市

内バスの乗り換え時間が合わなかったりすれば、市民は結局再び自家用車を運転して通りに出るしかありません。安全な歩道や自転車道を整備し、バスの運行時刻表や統合乗り換え運賃制度を地下鉄と緊密に連携させて設計しなければならない理由がここに 있습니다。あわせて、幼い子どもを乗せたベビーカーや体の不自由な人々の車椅子が、エレベーターを利用して地上と地下を不自由なく行き来できるかを綿密に点検しなければなりません。

1枚の地下鉄路線図の中には、都市社会の見えない格差がそのまま表れることもあります。新興開発地域ばかりに駅が競うように新設され、取り残された郊外の古い住宅地が疎外されるならば、公共交通の恩恵がそのまま不動産価格の論理に振り回されることになります。したがって、地下鉄の延伸によってどの地域の住民が通勤・通学時間をどれほど短縮できたのか、具体的な指標を透明に公開しなければなりません。全体の1日あたりの利用客数がどれほど増えたとしても、電車内が足の踏み場もないほど混雑し、乗り換え通路で費やす時間が長引くようであれば、市民の日常が実質的に豊かになったとは言いがたいのです。

地下鉄駅の周辺を開発する際にも、細心の注意を払わなければなりません。駅周辺に店舗や住居を適切に配置すれば自家用車がなくても暮らしやすくなりますが、その見返りとして急激に高騰する賃料を負担できず、貧しい原住民や零細な商人たちが生活の場の外へと追い出される危険が伴います。公共賃貸住宅を十分に建設し、長年親しまれてきた伝統市場の場所をしっかりと保障しなければ、快適で便利な駅周辺は、結局のところ暮らし向きに余裕のある人々だけが享受する孤島へと変わってしまいます。

息をするのが苦しい日

タシュケントを訪れた旅行者は、晴れた日であっても山裾に薄く垂れ込める煙霧を眺めながら、妙な息苦しさを覚えることがあります。四方を山に囲まれた盆地地形と乾いた乾燥気候は、タシュケント上空の大気循環を滞らせます。ここに冬の暖房の煙や自動車の排気ガス、工場の煙突や建設現場から噴き出す微小粒子状物質が入り混じると、都心の空は灰色に曇ります。大気汚染は、教科書やニュースにしか現れない遠い国の環境の話などではありません。砂ぼこりの中で駆け回る子どもたちの学校のグラウンドや、高齢者の呼吸器、排気ガスを全身に受けながら街を巡る配達労働者の過酷な日常へと深く入り込む、切迫した生活の問題なのです。

ウズベキスタン政府は2026年3月、国家環境総合対策を点検する中で、タシュケントを含む主要大都市の大気汚染度が許容基準値を上回っている事実を公式に認めました。その解決策として、車両の汚染物質排出度に応じて環境等級ステッカーを貼付し、大気質測定網をきめ細かく増設し、環境配慮型の公共交通機関へと転換するという対策を打ち出しました。[B031] 行政当局が大気汚染の深刻さを公式文書に明記したことは望ましい出発点です。ただし実効を収めるためには、市民が自身の暮らす地域のリアルタイムの汚染数値や季節ごとの推移を容易に確認し、日常生活の中で対処できるよう、情報を透明に公開しなければなりません。

車両排出ガス等級制度は、老朽化した車両が排出する汚染物質を削減する上で有効な手段となり得ます。しかし、暮らし向きが苦しい零細なドライバーたちに車両の買い替えや修理の負担を丸ごと押しつけてしまえば、庶民の暮らしはたちまち崖っぷちへと追い詰められてしまいます。老朽車の早期廃車補助金や整備費用の支援を行い、公正で信頼できる車両検査所を各地に整備しなければなりません。さらに、裏金のやり取りによって不法に排出等級を改ざんする不正を根絶するためには、精密測定機器のデータと検査履歴を電算ネットワークで透明に連動させて管理する必要があります。

建設工事現場から舞い上がる粉塵は、高官たちが集まって水を撒くようなパフォーマンス写真の一枚で解決できるものではありません。積み上げられた土砂に防塵シートを隙間なく被せ、現場を出入りするダンプカーのタイヤをきれいに洗浄し、泥水や埃を積んで走る車両の運行ルートと通行時間を厳格に規制しなければなりません。環境基準に違反した建設業者の名簿と行政処分の内容を市民に透明性をもって公

開して初めて、法規は生きて機能します。免疫力の弱い子どもや患者が集まる学校や幼稚園、病院周辺の工事区域には、はるかに厳格な環境基準を適用すべきです。

都心のあちこちに緑豊かな木を植えることも、大気環境を清らかに保つ重要な政策の一つです。しかし、どんな木であれ数さえ多く植えればよいという安易なアプローチは、失敗を招きかねません。タシュケントの過酷な夏の猛暑と乾燥した水不足の環境に耐え抜くことのできる在来樹種を慎重に選ぶ必要があります。歩道ブロックの下にも木の根が呼吸しながら伸びていける土と、雨水が地中に自然と染み込む空間を十分に確保しなければなりません。植えた苗木の数を誇るよりも、3年後にそれらの木が都心にどれほど広く深い木陰を広げているかを測るほうが、市民が実感する生活の質をはるかに正確に示してくれます。

新空港が描く未来

タシュケントは、中央アジアの空路を結ぶ拠点空港都市へと飛躍しようという遠大な抱負を抱いています。老朽化し手狭になった既存の空港の混雑を緩和し、世界を結ぶ国際線の乗り継ぎ客を大々的に誘致するため、新たな国際空港の建設計画が第一歩を踏み出しています。規模が大きく華々しい国策事業であるほど、公式発表に記された統計数値の正確な基準時点やその真意を丹念に見極めなければなりません。

2026年6月1日に発表されたウズベキスタン政府の公式資料では、新空港建設の第1段階事業における年間旅客処理能力が2,000万人規模であることが明らかにされました。旅客ターミナルの延床面積は20万8,400平方メートル、航空機の駐機場は169機規模で、長さ4キロメートルの滑走路2本を整備するという内容です。[B032] 続いて6月19日に公開された官民連携（PPP）投資契約資料でも、第1段階の処理能力を年間2,000万人と明記しました。あわせて、将来的な長期的展望としては年間4,600万人まで受入能力を段階的に拡充するという構想も盛り込まれています。事業用地の総面積は1,310ヘクタールに達し、2026年から2030年にかけて推進される第1段階工事だけで約30億ドルにのぼる海外民間投資を誘致する計画です。[B033]

したがって、新国際空港が開港してすぐに年間5,000万人の乗客を運ぶと説明するのは事実と反します。初期の第1段階の完工目標と、将来の長期拡張構想を混同して誇張された数値だからです。空港施設は、ターミナルや滑走路の増設だけでなく、都心へのアクセス交通網の拡充や世界各国の航空会社による実際の就航需要が過不足

なく噛み合ってこそ発展できるものです。長期目標として提示された年間4,600万人という数字もまた、あらかじめ保証された実績ではなく、これから実現していかなければならない将来の青写真にすぎません。

空港は一国の表玄関となる立派なゲートウェイであると同時に、その敷地のすぐ隣で暮らす近隣住民にとっては多大な影響をもたらす巨大な隣人でもあります。絶え間ない航空機騒音や土地収用の問題、道路交通の混雑、空港運営に必要な膨大な用水や電力の供給といった現実的な摩擦が伴います。さらに、官民連携契約を締結する際には、実際の利用客が予測に届かなかった場合に生じる運営損失を、民間投資家と政府のどちらが負担するのかを明確にしておく必要があります。もし政府が最低運営収入や為替変動リスクを無理に保証してしまえば、将来、国家財政に大きな負担となって跳ね返ってくる可能性があります。[B003]

新空港とタシュケント都心を迅速に結ぶ空港鉄道や幹線急行公共交通網もまた、初期設計の段階から丹念に整えなければなりません。空港へと続く高速道路の車線を広げるだけでは、空港を出た車両が都心入口のボトルネックで再びひどい渋滞に巻き込まれるのが目に見えているからです。深夜や早朝に空港へ到着した外国人労働者やバックパッカーも、大きな負担なく安価に利用できる深夜公共交通機関が整備される必要があります。飛行機の乗り継ぎ時間を短縮する立派な空港を造るという名目のもとで、毎日のように職場を行き来する市民の通勤時間を路上で浪費させるようなことがあってはなりません。

新しいタシュケントと古いマハッラ

人口が急速に増加し都市規模が拡大するにつれて、「ニュー・タシュケント（新タシュケント）」のニュータウン開発や大規模な集合住宅団地の建設事業が活発に進められています。整然とした青写真の上には、碁盤の目のようにまっすぐ伸びる道路網や青々とした緑地公園、立派な行政庁舎が秩序正しく配置されています。こうした新都市エリアには、老朽化した旧市街のインフラ負担を軽減し、暮らしやすい住宅を十分に供給できるという利点があります。しかし、真っ白な紙の上に定規を当てて人為的に引かれた新都市は、従来の街並みの路地裏で長い歳月をかけて築かれてきた人間味あふれるつながりを容易に見失ってしまうという限界も抱えています。

古くからの伝統が息づくマハッラの細い路地は、車の出入りには手狭で不便であるものの、隣人同士が親しく挨拶を交わし、地域の子どもたちを皆で見守る温かなコミュニティ空間です。街角の小さなたばこ屋のような個人商店や、プラタナスの涼しい木陰、隣人と共有する中庭は、庶民の暮らしをしっかりと支える日常のセーフティネットとしての役割を果たしてきました。都市再開発事業を進める中で住民たちを遠くの郊外へ立ち退かせてしまえば、たとえ真新しいピカピカのマンションを1戸手に入れたとしても、何十年もかけて築いてきた仕事場や学校、強い見守りのつながりを一瞬にして失いかねません。通帳に振り込まれるわずかな補償金だけでは、その土地で住民たちが共に分かち合ってきたかけがえのない年月の重みを決して換算することはできないのです。

かといって、老朽化して危険な古い家屋を無条件に昔の姿のまま保存し続けるわけにもいきません。地震の揺れに弱い日干しレンガ造りの住宅や、上下水道管が腐食してしまった古い建物は、安全のために一刻も早い修繕が必要です。ここで重要となる基準は、再開発と保存を分かち公平な原則と民主的な手続きです。建物の精密安全診断の結果を住民に包み隠さず公開し、住み慣れた家を修繕して住み続けるか、それとも適切な補償を受けて新しい家へ転居するかを住民自身が選べる機会を与えるべきです。住宅の所有者だけでなく、そこに借家住まいをしている賃借人たちもまた、再開発計画の策定段階に堂々と参加できなければなりません。家主だけに補償金を渡して立ち退かせれば、その地域で黙々と汗を流して暮らしてきた数多くの借店人や借家人は、いつの間にか都市の地図の上から跡形もなく消え去ってしまいます。

綿密に収集された都市データは、保存と開発の間で生じる先鋭な対立を合理的に解決するための優れた羅針盤となります。建物の老朽度や耐震安全基準、住民の人口動態と通勤動線、街路樹の分布と地表面の熱気、大気汚染の数値といった膨大な情報を1枚の立体的な地図の上に重ね合わせて眺めてみれば、無秩序な開発がもたらす社会的コストを事前に見通すことができます。ただし、コンピュータに蓄積されたデータの量が多いからといって、行政の決定が自然と公平になるわけではありません。無数の数値の中でどのような公共の価値を優先すべきか、市民が一堂に会して自由に議論を交わす必要があり、データ収集の過程で個々の市民のプライバシーや位置情報が不当に侵害されないよう、万全な保護策を講じなければなりません。

水と木陰の都市設計

タシュケントの真夏の街を歩いていると、足の裏からアスファルトの熱気がそのまま伝わってきます。この乾燥して蒸し暑い季節は、都市を形作る道路や建材の品質を厳しく試します。広々と敷かれた黒いアスファルト道路や濃い色の屋根は、日中の焼けつくような太陽熱をそのまま吸収し、日が沈んで夜が更けても熱気を街中へとじわじわ放出し続けます。同じ日の同じ時間帯であっても、大木となった街路樹が木陰を作る路地と、炎天下のアスファルト駐車場の真ん中で感じる体感温度はまったく異なります。猛暑という気候災害は都市のすべての市民に等しく襲いかかりますが、その酷暑を避けるための資源は決して平等に行き届いているわけではありません。

冷房の効いたアパートから地下駐車場へ降り、自家用車に乗って移動する人は、都心の殺人的な熱気に触れることがほとんどありません。一方で、熱せられた路面の上で一日中汗を流す露天商や清掃労働者、日陰のない停留所で路線バスをひたすら待つ庶民、直射日光をまともに受ける古い集合住宅の最上階で一人暮らす高齢者は、危険な猛暑に無防備にさらされます。したがって、都市の猛暑対策は、都市全体の平均気温を下げるという巨視的な目標とともに、気候危機に脆弱な近隣の人々が過ごす生活空間へ真っ先に寄り添う温かな配慮から出発しなければなりません。

日差しが照りつける路線バスの停留所に涼しい日除けシェードと快適な木のベンチを置き、清潔な水飲み場を設けることは、一見すると些細な便宜施設の整備事業のように思えるかもしれませんが、しかしこれは、公共交通機関を利用する市民の基本的な移動権を保障し、熱中症から健康を守り抜く頼もしい防波堤となります。成長盛りの子どもたちが遊ぶ学校のグラウンドや、体調のすぐれない患者たちが行き交う病院の入口、人々で賑わう伝統市場の周辺には、広々とした日陰空間が一層切実に求められます。都市のヒートアイランドマップを作成し、夜間も熱気の冷めない暑い地域を赤く表示しておけば、どこに街路樹を優先して植え、大型の遮光シェードを設置すべきかという政策の優先順位をスムーズに判断できます。

都心に緑地を増やし木を植える際には、その木を育てるための水資源をどこからどのように確保するのかをまず問い直さなければなりません。市民が飲むべき貴重な水道水を都心の芝生や造園用の花壇へ無分別に引いて使えば、一般家庭への飲料水供給を脅かす結果を招きます。下水処理施設を経た再生水や貯留した雨水を安全基準に合わせて浄化し、賢く景観用水として再利用すべきです。あわせて、伸びた根が歩道

ブロックを押し上げて凸凹にし、歩行者を転倒させることがないように、木の周囲に十分な土の空間を確保するとともに、幼木がしっかりと根を張るまでの数年間、継続して手入れをし水を与えられる維持管理予算を、設計段階から必ず計上しておかなければなりません。

人口317万人を優に超える巨大な首都は、毎日おびただしい量のきれいな水を消費し、それと同等の膨大な生活排水を排出しています。[B029] 新築のマンション団地の数ばかりが雨後の筍のように増え、地下に埋設された老朽化した上下水道配管網を適時に整備できなければ、いたるところで漏水事故が発生して水道水が無駄に流れ出し、汚水があふれて土壌や地下水を汚染することになります。したがって、新たな大型建築物を許可する際には、その地域の上水道供給能力や終末下水処理場の処理能力を事前に厳格に検証しなければなりません。各家庭に水道メーターを設置することは節水を促す助けになりますが、経済的に困窮し、基本的な生活維持に必要な最低限の水道料金の支払いですら負担となる脆弱世帯を支える福祉の仕組みも忘れてはなりません。

乾燥した砂漠気候であっても、突発的な局地的大雨は一瞬にして低地の道路を水浸しにしてしまいます。都市の地表面全体を水を通さないアスファルトやコンクリートで隙間なく塞いでしまえば、雨水が地中に浸透できず、低い場所へと一気に集中してしまうからです。都心のあちこちにこじんまりとした緑地公園や土の小道を残し、すり鉢状に掘り下げたレインガーデン（雨水庭園）や雨水を一時的に貯留できる遊水広場を整備しておけば、浸水被害を軽減できます。こうした生態系空間は、普段は住民が散策し談笑を交わす憩いの場として使われ、激しい豪雨に見舞われたときには溢れる雨水にその場を快く譲る多目的な緩衝地帯となってくれます。

地震の記憶を安全規則へ

1966年に見舞われた大地震は、今日私たちが目にする近代タシュケントの都市構造と景観を一変させました。[B028] 悲劇的な地震の痛ましい記憶を、都心の広場に聳え立つ彫刻の記念碑の中だけに閉じ込めておいてはなりません。新たに建てられる高層ビルや長い歳月を耐え抜いてきた住宅、日々多くの人々が集う学校や病院の詳細な建築安全法規の中に、生き生きと息づいていなければならないのです。都市人口が爆発的に増加し、天を衝くような超高層ビルが密集するほど、工事現場におけるわずかな手抜き工事一つが取り返しのつかない大惨事へとつながりかねないからです。

国が定めた耐震設計基準がどれほど厳格であったとしても、実際の工事現場で施工業者が利益を上げるために鉄筋の配筋をひそかに省いたり、規格に満たないコンクリートを打設したりすれば、建物は砂の城のように脆くなってしまいます。許認可を出す官庁と癒着のない独立した第三者の専門監理機関が綿密に現場を検査し、工程の段階ごとに高解像度の記録写真を残し、建築資材の強度試験成績書を透明性をもって管理しなければなりません。不正施工を行った業者に対しては、行政処分の結果を社会へ余すところなく公開してこそ、規則の厳正さが保たれます。建物が完成した後も、内部構造を勝手に改造したり耐力壁をみだりに取り壊したりできないよう、厳格な構造安全点検を経るようする必要があります。

古い近代建築の耐震性能を補強する際には、安全性の確保と遺産固有の芸術的価値の保存との間で調和のとれた均衡点を見出さなければなりません。もともと建物が備えていた独特の浮彫や外壁の仕上げ材をすべて剥ぎ取り、最新の断熱パネルを重ね張りしてしまえば、耐震安全性は高まるかもしれませんが、歴史的建築遺産としての価値は大きく損なわれてしまいます。したがって、設計の初期段階から建物の安全を担う構造技術者と建築の歴史性を守る文化遺産保存の専門家が顔を突き合わせ、ひとつの設計図をともに描き出していく必要があります。ユネスコ世界遺産に公式登録された10棟の中核的建造物だけでなく、それらと肩を並べて同じ時代を生き抜いてきた周辺の建築群もまた、都市の歴史的文脈を豊かに織りなす大切な同伴者だからです。[B028]

見知らぬ都市に滞在する外国人旅行者や訪問客は、地震のような急な災害に見舞われた際、どこへ向かうべきかわからず戸惑ってしまいがちです。災害避難システムは、広々とした非常階段や安全な避難広場を確保するという物理的空間の問題にとど

まらず、情報を迅速に伝える通信の問題でもあります。危険が迫ったときにどの非常脱出路を通してどこへ避難すべきか、住民が日頃から熟知していなければなりません。ウズベク語を読めない外国人や、視覚・聴覚に障害のある移動制約者にも、ピクトグラムや振動アラートを通じて緊急災害通知が漏れなく届く必要があります。学校や伝統市場でわずかな時間でも避難の模擬訓練を繰り返し体に染み込ませておけば、地震に対する漠然とした恐怖心を、落ち着いた秩序ある避難行動の手順へと変えていくことができます。

救急患者の命を救う大病院や数多くの市民の足となる地下鉄、命の水ともいえる上水道配管や緊急通信網は、地震が襲い去った後も止まることなく稼働し続けなければなりません。こうした中核となる都市インフラごとに、非常用発電機や迂回通信網、緊急復旧用の予備部品を普段から徹底して点検しておく必要があります。中央データセンターの主サーバーが一時的にダウンしても、都市全体の行政機能が麻痺しないよう、システムのバックアップデータを複数の場所に分散して安全に保管しなければなりません。災害を克服する都市の真の回復力は、一棟のコンクリート建物の物理的な強度からのみ生まれるのではなく、危機のなかでも途切れることなく支え合うきめ細かなネットワークの柔軟性から生まれるのです。

市民が読み取れる都市データ

都市の大気測定網を大幅に拡充するという2026年の政府計画は、市民が日々吸い込む空気の質を目で直接確かめる絶好の機会を開くものです。[B031]しかし、電光掲示板やインターネットの画面に複雑な微小粒子状物質の濃度数値だけをぼつんと表示しておくだけでは、子どもや高齢者はその数字が何を意味し、どう対処すればよいのか判断に迷ってしまいます。汚染数値に応じて学校の体育の授業や屋外活動を自粛すべき明確な行動基準、微細粉塵遮断マスクの正しい着用法や室内換気のポイント、自分たちの地域の空気が悪化した具体的な原因を、誰もが一目でわかる平易な言葉で親切に解き明かして添えなければなりません。

都市の交通データを一般へ透明に開放することもまた、貴重な恩恵をもたらします。市内バスや地下鉄のリアルタイムの到着予定時刻、路線ごとの混雑度、車両の故障や遅延運行の有無、エレベーターの故障状況などを手元でリアルタイムに確認できれば、市民は一日の移動計画をはるかに効率よく組み立てることができます。若手研

究者や革新的なスタートアップ企業は、このオープンデータをもとに、一人ひとりに合わせた公共交通の経路検索アプリや車いす利用者のためのバリアフリー経路案内サービスを開発できます。もし行政当局がデータ公開の形式を予告なしに頻繁に変更したり、民間の自由なアクセスを厳しく制限したりすれば、市民の足を支えるはずの便利な革新的サービスもともに立ち往生してしまいます。

冷ややかに精製された都市データの裏側には、隠れた権力の力学が潜んでいることもあります。行政の地図上には何も表示されず空白になっている空き地や歩道であっても、実際の現場では露天商や路地で遊ぶ子どもたち、日雇い労働者が暮らしを営む大切な空間である場合があります。スマートフォンを使用しないため通信事業者の位置情報データに捉えられない路上生活者や高齢者、非正規滞在の移民は、データ地図の上でまるで最初から存在しない透明人間のように消し去られてしまいがちです。したがって、コンピュータで容易に計測できる数値化された動きだけを、都市行政や福祉政策の唯一の尺度とする過ちを犯してはなりません。

スマートフォンの市民不便通報アプリは、消灯したままの街灯や路地に不法投棄されたゴミをすばやく見つけて処理するうえで有用な道具です。しかし、行政の担当者が単に通報の処理件数を手早くこなすという量的な実績ばかりにとらわれていると、構造的で複雑な慢性化した苦情や陳情を後回しにしてしまう恐れがあります。同じ場所で似たような不具合がなぜ何度も繰り返されるのかという構造的な原因を突き止め、オンラインでの通報件数が極端に少ない衰退地域があれば、本当に不便がないからなのか、あるいはインターネットの扱いに不慣れな高齢者が多く暮らしているからなのかを、自ら現場へ足を運んで確かめなければなりません。デジタル機器に不慣れな高齢者のために、従来の固定電話や地域の住民センターの窓口を温かく開いておくべきなのは、まさにこのためです。

市当局が将来の都市計画案を市民に公開する際、暗号のような専門用語や複雑な地籍図だけをぽつんと提示するようでは、一般の住民は自分が暮らす家や日常的に通う馴染みの店が今後どう変わるのか到底見当もつきません。誰にでも理解しやすい丁寧な説明文や開発前後の変化を描いた図画、完成後に予想される道路交通量や移転対象となる世帯数を、透明性をもって併せて示さなければなりません。市民から寄せられた貴重な意見を集約した後は、その意見を反映して計画のどの部分を修正したのか、また現実的に受け入れられなかったとすればその理由は何なのかを誠実に説明する必

要があります。真の市民参加とは、説明会資料の閲覧数ではなく、市民の声によって行政の最終決定を実際に動かした変化の深さによって証明されるものだからです。

保存と開発のあいだに橋を架ける方法

タシュケントの近代建築群がユネスコ世界遺産に登録された意義深い出来事は、都市が歩んできた歴史を振り返る視座を一段と高める貴重な機会となります。[B028]千年の年月を宿す中世のイスラム建築と、地震を乗り越えて立ち上がった近代のコンクリート建築、人の温もりに満ちた昔ながらのマハッラの路地と洗練された新都市を切り離して捉えるのではなく、市民の息づかいが通い合うひとつの有機的な生活圏として包み込まなければなりません。新しく建設される超高層ビルの巨大な影が由緒ある遺跡を覆い隠してしまわないか、押し寄せる大型観光バスが住民の路地の通行を妨げていないか、新設の地下鉄駅が一帯の地価を吊り上げて元の住民を追いついてしまうことはないか、都市を構成する多様な要素の有機的なつながりを細やかに見極める必要があります。

周辺の開発が歴史的遺産に及ぼす影響を事前に検証する文化遺産影響評価は、ショベルカーが地面を掘り起こす前の初期企画段階で徹底して行われなければなりません。単に新築する建物の階高を数メートル下げたり、外壁のペイントの色を合わせたりするだけの形式的な審議に範囲を狭めてはなりません。遺産を望む開かれた景観や眺望権、工事の騒音や完成後の流動人口の流れ、路地の零細な商圈の生態系や地下に眠る埋蔵文化財、都心の古い大木に及ぼす影響に至るまで、幅広く検証する必要があります。最終的な建築設計案を市民へ透明に公開し、問題のある箇所を是正できる十分な議論の期間を設けなければなりません。すでに建設会社と施工契約を結び、古い建物を解体してしまった後にやむを得ず開く公聴会では、何の実効性も得られないからです。

本当に暮らしやすい成熟した都市は、過ぎ去った過去と訪れる未来のどちらか一方のみを選ぶよう強いることはありません。遙かな昔の歴史を剥製にされた観光の装飾品へと成り下がらせることもなく、訪れる未来を空を突く巨大なコンクリート建造物と同義と見なすこともしません。ハズラティ・イマーム広場の色褪せた羊皮紙のクルアーンに記された神聖な写本の文字と、大地震の灰燼を乗り越えて築かれた近代のコンクリート建築、地下を照らすほのかな地下鉄の明かりと新空港の滑走路が、それ

それに宿す異なる時代の記憶と息づかいを自由に語り合えるよう、寛大に受け止めてくれます。

このように幾重にも重なり合う異なる時間の綾を紡ぎ合わせる中心的な基準は、まさにその場所で息づき暮らしている人々にほかなりません。厳しい暑さの夏の日、弱々しい高齢者が涼しい木陰で心安らかに休めるか、私たちの子どもたちが澄んだ清潔な空気を心ゆくまで胸いっぱい吸い込めるか、長年情を通わせてきた店子や賃借人が再開発の後も生活の拠点に留まり続けられるか、歴史遺産を黙々と清掃し手入れする労働者が正当な汗の対価を得ているかを、絶えず問い直さなければなりません。タシュケントが世界的な国際都市として飛翔する道は、高層ビルが天に向かってそびえ立つ目も眩むような高さだけで開かれるものではありません。異なる時代の記憶と多彩な隣人たちが、誰ひとり締め出されることなく、ひとつの通りを親しく肩を並べて歩んでいけると、はじめてこの由緒ある首都の未来も大きく開かれるのです。

第12章 青の都サマルカンド

光が移ろうたびに姿を変える街

日が傾くと、レギスタン広場を埋める青いタイルは一つの色にとどまりません。陽光の角度に応じて、濃い藍色や淡い空色、金色の文様が壁面を伝って静かに移り変わっていきます。広場に足を踏み入れた旅行者は華麗な建築物に目を奪われがちですが、見渡せば、写真を撮る人々の傍らを、学校帰りの子どもや店じまいをする商人が行き交っています。サマルカンドは感嘆を誘う遺跡である以前に、住民が日々の営みを続ける生活空間なのです。

シルクロードという名を聞くと、砂漠に行くラクダの隊商や珍しい香辛料といったロマンあふれる風景を思い浮かべがちです。しかし実際の絹の道は、地図の上に引かれた一本の真っ直ぐな道ではありませんでした。季節や地形、国境や市場の状況に応じて枝分かれし、また合流する複雑なネットワークでした。その道を行き交ったのは商品だけではありません。人々の足跡を追って、言語や宗教、生産技術や病気、音楽や統治体制に至るまでが大陸を渡っていきました。

ユネスコは2001年にサマルカンドを「文化交差点」の名で世界遺産一覧表に記載しました。この遺産には、北東部に位置する古代アフラシアブ遺跡と、中世ティムール朝時代の記念碑群、19世紀から20世紀にかけて形成されたヨーロッパ風の市街地という、三つの明確な歴史的重なりが共に収められています。[B035] 異なる時代の足跡が消え去ることなく並んで保存されている点にこそ、サマルカンド本来の価値があります。特定の時代の建築物だけを都市のすべてだとみなせば、サマルカンドが抱く歴史の半分を見落とすことになります。

都市は、最初から順番にめくられていく本とは異なります。バスに乗って通り過ぎながら20世紀に建てられた住宅を眺めていても、路地を一つ曲がれば数百年前のティムール時代に築かれた青いドームに出くわします。足元の地中深くには、それよりはるかに古い城壁や道路が眠っています。都心に水道管を一本埋設するような小さな工事でさえ、幾重にも重なったさまざまな時代の痕跡に触れることになるのはそのためです。

アフラシアブ壁画に描かれた遠方の客

現在、サマルカンドの都心北側の丘には古代都市アフラシアブの遺構が残っています。かつてここは、交易に長けたソグド人の中心拠点でした。ソグド商人は中央アジアを中心に、中国やインド、イランを結ぶ東西貿易において重要な役割を担いました。彼らは多言語で契約書を作成し、険しい旅路で直面する危険を共に乗り越えていった交易の主役でした。

アフラシアブの宮殿跡から発見された壁画は、7世紀中葉の国際情勢を一堂に示しています。スミソニアン国立アジア美術館の説明によれば、この壁画には王の荘厳な行列や外国使節団の訪問、狩猟や宗教儀礼が描かれており、各壁面の場面がどの国家や歴史的出来事を指しているのかを解明する研究が続けられています。[B036] 長い年月の経過により顔料の色は褪せていますが、人物たちの服装や髪型、手に携えた進物は、彼らがどれほど遠い地域から訪れた使節であるかを鮮やかに物語っています。

壁画の西側壁面を見ると、鳥羽冠と呼ばれる羽根飾りの付いた冠をかぶった二人の人物が目を引きます。韓国の学界では、彼らの服飾の特徴を根拠に、高句麗から派遣された使節と解釈してきました。イ・スンヒの研究は、アフラシアブ壁画を朝鮮半島とソグド文明が結んでいた交流の様相を究明する重要史料として分析しています。[B037] 韓国の文化遺産当局もまた、2020年にウズベキスタンと推進した壁画保存協力事業を説明する中で、この遺跡を高句麗の使節が登場する貴重な文化遺産として紹介しました。[B043]

しかし、この遺物を前にするときは、冷静で慎重な視点を保つ必要があります。二人の人物の冠や服装が高句麗との関連性を示す有力な手がかりであることは確かですが、壁画全体の物語や使節団が担った具体的な任務までが完全に解明されているわけではありません。研究者たちは服飾様式や銘文の記録、発掘時の状況や周辺国の類似した図像を入念に対照しながら、歴史的事実に迫っています。今後、新たな遺物や文献が発掘されれば、これまでの解釈が変わる可能性も残されています。

こうした不確実性は、研究の限界というよりも、私たちが過去の真実を復元していく健全な学問のプロセスを示しています。「高句麗の使節がサマルカンドを訪れた」という簡潔な一文の記述の背後には、数多くの史料比較と熱心な学術的議論が存在し

ています。二国間の長い交流史を扱う際にも、常に厳密な証拠に裏付けられた範囲内で述べてこそ説得力が生まれます。

アフラシアブ壁画の保存作業は、国家間の学術協力が光を放つ現場です。顔料や土壁の化学成分を精密に分析し、展示空間の温湿度や壁面の亀裂状態を観察しながら、精細なデジタル記録を構築できるためです。保存の専門家とは、色あせた絵の上に新しい絵の具を塗り重ねて見栄えよく整える人ではありません。残された原形がこれ以上損なわれないように補強し、遺跡にどのような処置を施したかの記録を残して後代の研究者へ過不足なく引き継ぐ人なのです。

ティムールの首都が生み出した青の文法

14世紀末、ティムールはサマルカンドを巨大なユーラシア帝国の首都と決めました。彼は征服地から優れた職人や技術と呼び寄せ、大規模な建築事業を起こしました。その結果、レギスタン広場やビビハニム・モスク、グル・エミール廟、シャーヒ・ズィンダ廟群へと連なる、サマルカンド独特の青い都市景観が形成されました。現在私たちが目にする建築物は、ある一時期に完成してそのまま保存されてきたわけではありません。後を継いだ統治者たちによる増築や、後代の幾度もの修復工事を経て定着した姿なのです。[B035]

ティムール時代の建築物の前に立つと、その圧倒的な巨大さに息を吞みます。天空へとそびえ立つ入口の門や丸いドーム、遠くからでも目を引く鮮やかな色彩は、帝国の強大な権力を誇示する手段でした。しかし壁面をつぶさに観察すれば、タイルを焼き、アラビア文字を精巧に刻み込んだ無数の職人たちの手仕事が見え隠れしています。君主の偉業ばかりを称えていると、その裏に隠された侵略戦争や職人たちの強制移住、過酷な労働の犠牲を忘れがちになります。類まれな美的達成と権力の影は、同じ壁面の中に共存しているのです。

ティムールの孫であるウルグ・ベクは、国を治める君主であると同時に優れた天文学者でもありました。彼が建てた天文台では、巨大な四分儀をはじめとする観測機器を用いて、夜空の天体の運行を精密に測定しました。望遠鏡が発明される前であったにもかかわらず、誤差を大幅に抑えた恒星表を完成させることができたのです。[B035] このような学術的成果は、宮廷による財政的支援の上に、観測者の粘り強い探求と精密な数学的計算が結びついて結実したものでした。サマルカンドの青いドーム

ムを見上げるとき、美しい建築装飾だけでなく、天空の法則を解き明かそうとした中世科学の息吹にも思いを馳せる価値があります。

壁面を覆う青いタイルは、サマルカンド全体を統一された印象でまとめています。しかしタイルの表面に一步近づいてみると、修復された時期や使われた土の質感が区域ごとに少しずつ異なることに気づきます。損傷した部分をすべて綺麗な新品のタイルに取り換えてしまえば、建物に宿る歴史の痕跡も共に消え去ってしまいます。かといって、割れたり隙間が空いたりした箇所を放置すれば、雨水が浸透し、気温の変動に伴って構造物全体が崩落する危険が高まります。文化財の復元とは、古いものと新しいものの二者択一ではなく、歴史的証拠を損なわずに保存しながら構造の安全性をいかに保つかを模索する、精緻なバランスの追求なのです。

世界遺産都市が抱える難題

ユネスコはサマルカンドが持つ顕著な普遍的価値を認めつつも、保存管理において生じる問題点を綿密に点検しています。原形を考慮しない無分別な修復や、無秩序な都心開発事業は、歴史都市の真正性や固有の景観を損なう恐れがあるためです。[B035][B042] ここでいう遺産の真正性とは、すべての部材が建立当時の原形のままでなければならないという意味にとどまりません。建築材料や構造、位置や用途、伝統技術が長い歴史の中で結んできた関係性が、信頼できる形で維持されているかどうかを測る基準なのです。

高層ホテルが遺跡の堀に直接接していなくても、遠くから眺める都市のスカイラインを遮り、景観を損ねることがあります。市街地を貫く広い道路は車両の移動を円滑にする一方で、代々受け継がれてきた古い路地の構造を分断してしまいがちです。華やかな夜間ライトアップは観光客に素晴らしい夜景写真を提供しますが、近隣住民や野鳥の睡眠を妨げ、石材表面の温度を乱して遺跡に微細な損傷を与える恐れがあります。歴史都市の都市計画において、遺産区域の境界線の内側だけでなく、周辺環境まで併せて見渡さなければならない理由がここにあります。

大規模な建設工事を始める前には、文化遺産影響評価を徹底して行わなければなりません。地中に埋もれた遺構の損壊の可能性や建物の高さ、工事の振動、排水システム、交通量の変化、近隣住民の暮らしに及ぼす影響を検討する必要があります。この評価が開発許可を取り付けるための形式的な手続きにとどまっていれば実効性があ

りません。問題が確認された際には、複数の代替案を検討し、設計を果敢に修正できる権限を備えていなければなりません。ユネスコとの対話もまた、工事完了後に報告書を提出するようなやり方ではなく、計画を立てる初期段階から進める事前協議であるべきです。

地域住民の生活が排除された文化財保存は、都市を形骸化した舞台装置へと変質させてしまう危険を孕んでいます。代々暮らしを営んできた住民たちが高騰する家賃に耐えかねて街を離れ、跡地に土産物店ばかりが立ち並ぶようになれば、古い建物自体は残っても、その中で息づいてきた独自の生活文化は途絶えてしまいます。住民が古い家屋を修繕する際に利用できる伝統的な建築材料や施工技術を普及させ、財政的支援も併せて提供する必要があります。借家人や零細商人が追い出されないよう保護する制度もまた、保存政策の骨格として定着しなければなりません。

歩行空間が広がる都市

サマルカンド市は、旅行者が街に長く滞在して空間を体験できるよう、文化施設の拡充と歩行路の整備を進めています。2026年4月にウズベキスタン政府が検討したシルクロード博物館の建設計画は、約9ヘクタールの敷地に約6千点の遺物を展示する大規模な文化空間構想です。アフラシアブ博物館とレギスタン広場を結ぶ全長6.6キロメートルの観光遊歩道整備計画も併せて発表されました。[B039] 続いて2026年6月には、都心の13の主要通りを歩行者専用区域へと転換する観光開発策が議論されました。[B038]

ただし、これらの事業は2026年現在、検討段階にあるか推進中の計画であるという点に留意しなければなりません。青写真の段階にある計画を、すでに完成した事実のように受け止めるわけにはいきません。コンピューターで描かれた鳥瞰図と実際に建てられる施設の間には、常に差異が生じるものです。博物館を十全に運営するためには、外観の建築費だけでなく、繊細な遺物を管理する恒温恒湿設備や専門の研究員、解説員の確保、毎年必要となる運営予算が事前にしっかりと裏付けられていなければなりません。

歩行者専用通りを整備すれば、自動車の騒音が減少し、路地の小さな商店が活気を帯びるようになります。しかし、日中の気温が著しく上昇するサマルカンドの夏季には、日陰の休憩所や飲料水、ベンチが十分に備えられていなければ、見知らぬ道に

立つ旅行者でさえ数歩歩いただけで疲れ果ててしまいがちです。障害者や高齢者、ベビーカーが段差に引っかかることなく移動できるよう、バリアフリー設計を取り入れる必要があります。住民の引っ越し車両や配達トラック、救急車が自由に行き来できるよう、乗り入れ許可時間や迂回路を細やかに指定することも欠かせません。

観光客に見せるための整備事業が、住民が何十年にもわたって利用してきた生活動線を塞いでしまってはなりません。商店街の看板を画一的な一つの形状に統一してしまえば、写真の上ではすっきりと見えるかもしれませんが、路地の店々が培ってきた個性や年月の味わいは失われてしまいます。零細な露店商を無条件に締め出すのではなく、衛生や通行に関する基準を共に策定し、共存の道を探るべきです。歩行環境の改善が成功したかどうかは、増えた訪問者数だけで測るのではなく、路地の商店主の実質的な所得や住民が実感する生活の利便性を踏まえて評価してこそ当然といえます。

博物館もまた、壮大な建物の外観よりも、そこに収められる展示の語り（ナラティブ）の完成度に決定的な価値があります。シルクロードを、東西文明がひたすら平和に融和したロマンの空間としてばかり描いてしまえば、その途上で生じた戦争や奴隷売買、階級的不平等といった歴史の実態を見落とすことになります。支配層や富裕な商人の豪華な遺物だけでなく、土地を耕した農民や女性、道具を作った職人、対話をつないだ通訳者の暮らしを並列して見せてこそ均衡が保たれます。子どもたちが実際に触れて学べる遺物のレプリカや平易な解説、視覚や聴覚に障害のある人々のための配慮設備を整えることも、展示企画の不可欠な要件です。

観光の数字が膨らむとき

ウズベキスタン政府は、2026年の1年間で外国人観光客1,200万人を誘致するという国家規模の目標を掲げました。政府の発表によると、2026年5月初旬までに約300万人の外国人が同国を訪れました。[B041] ここで示された統計はウズベキスタン全土を訪れた総訪問者数を指しています。この数字をサマルカンド単一の都市の訪問者数と混同して引用しないよう注意が必要です。

外国人訪問客が増えれば、宿泊業や飲食業、輸送や観光ガイドの分野で新たな雇用が生まれます。しかし同時に水資源や電力の消費が急増し、ゴミの排出量や騒音公害、建物の賃料が急激に上昇します。名高い文化財の周辺にばかり人波が押し寄せ、

少し離れた一般の居住地域には観光の収益がほとんど届かないという不均衡も生じます。観光産業がもたらす経済的な恩恵と社会的なコストが、都市のどの区域、どの階層に集中しているのかを綿密に見つめ直す必要があります。

訪問客数を増やすことだけに注力する政策は、都市のインフラが受け入れられる限界と必然的に衝突します。レギスタン広場に1時間あたり入場できる適正人数や、幅の狭いシャーヒ・ズィンダの回廊で観覧客が安全に移動できる動線の規模、公衆トイレや廃棄物処理施設の容量を入念に算出する必要があります。ハイシーズンには時間帯別の予約制を導入し、近隣の別の遺跡や郊外の集落へと観光ルートを分散させれば、都心の遺跡にかかる過密の圧力を和らげることができます。

観光産業が生み出す雇用の質にも目を向けるべきです。ハイシーズンが過ぎると日雇い労働者の収入が途絶えてしまわないか、現地のガイドたちが体系的な職業教育を受け、相応の報酬を得ているか、女性や若手の人材に公平な昇進の機会が与えられているかを吟味しなければなりません。海外の宿泊予約プラットフォームが多額の手数料を差し引いても、現地の宿泊施設に実質的な収益が残るかどうかを確認する必要があります。物価が安い旅行先というイメージだけに頼っていると、現地の労働者の賃金水準まで低く据え置かれてしまうという弊害が生じるのです。

観光商品を企画し、都市の物語を伝える際には、歴史的事実の重みを守らなければなりません。口承説話は説話として、学術的な研究成果は仮説や学説として明確に区別して説明する必要があります。観光客の興味を引くために歴史的根拠のない王室の秘話や奇異な奇跡の物語を正史のように仕立てて語れば、長期的には都市の文化的信頼を損なうことになります。大衆向けの分かりやすい解説と学問的な厳密さは、決して対立する概念ではありません。

緑を加える計画

青いドームで象徴されてきたサマルカンドは、いまや瑞々しい緑を抱く生態都市への転換を試みています。2026年7月、ウズベキスタン大統領府はサマルカンドの砂漠化現象に対応し、環境に配慮した都市を築くための総合構想を検討しました。この構想には、電気バス50台を導入して都心の一部区域への乗用車の乗り入れを制限する案、全長102.7キロメートルにわたり3,532ヘクタール規模の緑地帯を造成する事業、灌漑水路319キロメートルの区間を改修して300ヘクタールの面積を持つ緑地団地を造成する計画が含まれていました。[B040]

ここで提示された数値は、政府が提案し策定した計画の目標規模を意味しています。現場で木々がすべて根を下ろしたことや、電気バスがすでに全面運行されていることを意味するわけではありません。緑地帯造成の実質的な成果は、地図の上に引かれた数値上の長さよりも、植えた木が実際に根づいた割合、下がった地表面の温度、住民たちが享受する木陰の広さによって冷静に判断されるべきです。乾燥した砂漠気候に合わない樹種をやみくもに植えてしまえば、貴重な水を浪費しただけで、木々は間もなく枯死してしまいます。

電気バスは、市街地の道路から排出される排気ガスや走行騒音を軽減する有用な手段です。しかし、バスを動かす電力をどのような方法で生産したのか、寿命を迎えたバッテリーを安全に処理する体制が整っているかもあわせて検証しなければなりません。バスの路線や運行間隔が不便であれば、市民は相変わらず自家用車に頼らざるを得なくなります。乗用車の通行を制限する前に、都心郊外に乗換駐車場を整備し、公共交通と歩行路の接続性を高め、交通弱者のための移動対策を入念に講じておくのが当然の順序です。

老朽化した灌漑水路を改修する事業は、緑地の造成だけでなく近隣の農業を維持する上でも極めて重要な課題です。水資源が乏しい乾燥地帯において広大な芝生で公園を整えれば、見た目には涼しげに映るかもしれませんが、膨大な維持用水を消費します。それよりも地域の気候に適した自生樹種や砂・砂利を配したドライガーデンを造り、雨水貯留施設や日よけの構造物を調和させるほうが賢明です。大型ホテルや公共建築の水消費量を定期的に計測して一般に透明性高く公開すれば、観光産業と市民の生活用水供給との間で合理的な均衡点を見いだすことができます。

郊外に新たな緑地団地を造成する試みは、旧市街にすでに根を下ろしている古木を保全する取り組みと歩調を合わせる必要があります。何十年にもわたって木陰を落としてきた大木1本の生態的価値は、新しく植えた何本もの幼木がすぐに代わりを務められるものではありません。開発事業を許可する際には、敷地内にある既存の樹木の位置や生育状態を事前に調査し、やむを得ず伐採や移植を行う理由を市民へ詳細に公開しなければなりません。工事完了後に木を植え直すという曖昧な約束だけを信じて、都心の長い年月を経た緑を安易に切り倒してはならないのです belt.

市場と工房が守る生活遺産

サマルカンドの文化的な生命力は、博物館のガラスケースの中だけに閉じ込められているわけではありません。活気あふれる市場で焼き立ての丸いパンを手渡し、生地を選びながら客と商人が掛け合う日常の佇まいの中にも、息づいています。代々受け継がれてきた陶磁器や伝統刺繍、木工芸、楮を使った製紙技術は、職人の手から弟子の手へと脈々と受け継がれています。生きた生活遺産には、剥製のよう展示室よりも、汗を流して働く生産の現場こそが切実に必要なのです。

訪問客が増加すれば、手工芸品の販路が広がる好機が生まれます。しかし、短時間での大量生産を求める市場の圧力が強まれば、粗悪な合成材料や機械で量産された工業製品が、長年の丹精が込められた手仕事の間を一瞬にして奪いかねません。現地で伝統的な手法により作られた手工芸品の品質基準を明確に定め、制作した職人の名前や天然素材、制作にかかった時間を詳細に案内すれば、買い手の側も本物の価値とその違いを深く理解できるようになります。

伝統を守るということは、過去の遺物を型通りに幾度も複製する行為にとどまりません。感性豊かな若い職人たちは、伝統的な文様を現代的な鞆や室内照明、デジタルグラフィックデザインへと取り入れ、新たな生命を吹き込むことができます。師匠から受け継いだ基礎技術を重んじつつ、自らが生きる時代の使い道を探っていく過程なのです。もし政府や自治体の工芸支援事業が過去の定型化された様式ばかりを頑なに求めるとすれば、職人たちの自発的な創作意欲は干からびてしまいます。

都心の観光地で不動産価格や賃料が高騰すれば、作業場を確保できない職人たちが郊外へと追いやられてしまいます。歴史ある伝統市場を近代化する際には、小さな工房や店舗の賃貸借契約期間を保障し、賃料の引き上げを制限する安全策を講じる必

要があります。老朽化した電線や火災に弱い設備を改修するとしても、迷路のように入り組んだ小さな店々を無理に取り壊して大型ショッピングモールの形へ統合してしまつては本末転倒です。狭い通路に沿ってそれぞれの特色ある店が所狭しと軒を連ねる構造そのものが、バザールならではの空間体験を生み出しているからです。

地域の郷土料理もまた、水資源と農民の労働が紡ぎ出した歴史です。サマルカンド名物のパンであるノシュノンや伝統的な炊き込みご飯のプロフは、この街を訪れた旅人に豊かで楽しい美食の思い出を刻みます。しかし、美味しいひと皿の背景には、小麦や米、ニンジンを炎天下で育て上げた農夫の汗や、食材を運んだ市場の労働者、熱い窯の前で長い時間に耐えた調理人の労苦が宿っています。観光PRが華やかに並べられた食卓を見せるだけにとどまらず、食材の産地や調理に携わる人々の労働環境まであわせて紹介するならば、観光客が支払った対価が地域社会の隅々にまで行き渡るようになるはずです。

マハッラの客となる作法

街を訪れた旅人は、昔ながらの佇まいを残す居住区「マハッラ」の路地を歩き、住民たちの素朴な日常を垣間見たいと願うものです。しかし、マハッラで暮らす人々にとって、自宅の前庭や門口が予告もなく見知らぬ人々の撮影現場へと変わることは戸惑い以外の何物でもありません。断りもなく他人の家の窓を覗き込んだりカメラを向けたり、祈りの時間や葬列の通り道を塞いだりすれば、異文化への好奇心は暴力的なプライバシー侵害へと変質してしまいます。現地のガイドは旅行者に対し、見学が許された区域や、住民への配慮として保つべき適切な距離を事前に明確に伝えておく必要があります。

伝統家屋を活かした民泊の運営は、一般家庭にとって貴重な副収入をもたらす手段となります。しかし、政府が求める安全や衛生の認証基準を過度に厳格かつ高額に設定してしまうと、資本力のある大手宿泊業者しか生き残れなくなります。かといって安全基準をやみくもに引き下げ、宿泊客を火災や事故の危険に晒すわけにもいきません。零細な住民の宿が基礎的な消防設備や透明な会計帳簿を備えられるよう、実務教育を提供し、無利子や低利の少額融資を支援するといった政策的な配慮が求められます。

路地の事情を熟知する住民たちが自ら街歩きルートを設計すれば、巨大な遺跡では耳にできない隠れた物語が浮かび上がってきます。地区の古い学校や小川のような水路、集落を見守ってきた守り神の大木、朝鮮半島からの移住者である高麗人をはじめとする様々な少数民族コミュニティが残した生活の痕跡が、散策ルートに取り込まれます。このように観光動線を多様化させれば、中心部の遺跡に集中する混雑を緩和する効果も得られます。その際、集落の観光で得られた収益を住民コミュニティへどのように分配するかという公平なルールを事業の初期段階から透明に公開しておくことが、摩擦を防ぐ鍵となります。

スマートフォンの観光案内アプリは、見知らぬ街で道を探し、宿を予約する手続きを格段に便利にしてくれます。ただし、利用者の位置情報を収集する際には、個人情報保護の同意手続きを必ず経なければなりません。アプリの検索・推薦アルゴリズムが広告料を多く支払った大型店舗ばかりを画面上部に表示するようになれば、路地の片隅にある零細な店舗は立ち行かなくなってしまう。有料の商業広告と公共の観光情報を明確に区別して表示し、多様な言語圏の利用者に同一の核心情報を公平に提供する必要があります。

華やかな夜間観光は、遺跡のライトアップ演出や夜間公演、深夜営業の飲食店の売り上げを押し上げる効果をもたらします。しかし、過度な夜の賑わいは近隣住民の安らかな睡眠や早朝の祈りを妨げ、夜通し街を清掃する環境美化作業員の労働負担を増大させかねません。区域の特性に合わせて夜間営業の制限時間を合理的に設定し、騒音の測定数値を近隣住民へ定期的に公開する手法が望まれます。夜間観光が生み出す経済的効果を語る際には、翌朝早くに備える近隣の人々の穏やかな日常にも等しく目を配る必要があります。

発掘と建設が出会う瞬間

サマルカンドでは、新たな上下水道管を埋設したり建物の基礎工事を行ったりするために地面を掘り進めるだけでも、思いがけない昔の遺構に行き当たることがあります。工期が迫る建設業者にとっては、工事の遅延を懸念して埋蔵文化財を密かに破壊したり埋め戻したりしたいという誘惑に駆られやすくなります。遺物の発見届出が事業者にとって一方的な損害や処罰にならず、実質的な保護措置へとつながるよう制度を整える必要があります。発掘調査によって工事が中断された際に生じる損失補償の基準をあらかじめ定めておけば、遺物の発見事実を隠蔽する動機を大きく減らすことができます。

救済発掘は、本格的な土木工事に着手する前に限られた期間内で地中の歴史資料を収拾し記録する緊急調査です。文化財当局は発掘許可の履歴や精密調査報告書、出土遺物の保管場所を一般に透明性高く公開すべきです。学術報告書が研究所の書架に閉じ込められたままでは、市民は開発によってどのような貴重な遺産が失われたのか知る術がありません。地域の博物館や学校が発掘成果を分かりやすい教育資料へとまとめ、一般と共有する取り組みが続けられなければなりません。

地中から現れたすべての遺構を、発掘された元の場所に原形のまま保存することは、現実的には困難です。遺跡の歴史的価値や保存状態、社会的な公共の必要性を冷静に見比べ、現地に残すべき場所と、精密な実測を経て移築復元すべき場所を賢明に見分けなければなりません。ここで肝要なのは、保存の是非を決める根拠が工事費の削減や差し迫った工程表の陰に隠れてしまわないよう、透明性をもって公開することです。開発事業者が発掘調査の費用を負担しているからといって、学術調査団による客観的な調査結果や評価を左右しようとするようなことは、決してあってはなりません。

デジタル3次元復元技術は、歳月のなかで崩れ去ったかつての建築物を仮想画面の上に鮮やかによみがえらせてくれます。その際、発掘を通じて実物として確認された確かな根拠と、研究者による学術的な推定とを、色彩や注釈を用いて明確に区別して表示しなければなりません。滑らかに完成されたコンピュータグラフィックス映像は、見る者に確定した真実であるかのような錯覚を与えやすく、仮説が歴史的事実として固定化してしまう危険を孕んでいるからです。いまだ解明されていない未知の領

域を率直に空白のまま残しておく節制と誠実さもまた、歴史解説において守るべき重要な美德です。

韓国と向かい合う壁画

韓国の読者にとって、サマルカンドという都市はアフロシヤブ壁画に登場する鳥羽冠をかぶった高句麗使節の姿を通じて親しみ深く感じられます。[B037][B043] しかし、この歴史的な接点を国家的な誇りを誇示する手段としてのみ消費してしまうなら、壁画が宿している広大な世界観を狭めてしまう結果を招きます。ソグド人が世界各国の使節を画面に描き留めたその空間において、高句麗使節はユーラシア大陸を緻密に結んでいた広大な交流網の一角を担う存在でした。歴史の中心と周縁は、私たちがどの場所に立って世界を眺めるかによって、いくらでも変わり得るのです。

韓国とウズベキスタンが推進する遺跡保存協力事業は、古代の交流の歴史を現代の科学技術と共通の倫理的責任によってつなぐ意義深い取り組みです。高解像度デジタルスキャンや顔料成分の分析、微細な亀裂のモニタリング、現地の保存人材の育成を対等に進めてこそ、特定の国が遺産を独占しようとしているという誤解を払拭することができます。調査や復元の過程で生み出されたすべての学術的一次資料は、当然ながら現地の研究陣とアフロシヤブ博物館へ完全に帰属されるべきです。共同研究の成果物もまた、ウズベク語、韓国語、英語などの多言語で出版されてこそ、より広い世界の学界や市民の間であまねく共有されることができます。

両国の青少年による教育交流の現場においても、この壁画を一問一答式の試験の正解を覚えるための単なる暗記材料にとどめずに扱うことができます。生徒たちに二人の使節の独特な服飾と周辺の他国の使節団の身なりとを見比べさせ、学者たちがどのような具体的根拠に基づいて彼らの出身地を推測しているのか、自ら問いを立てるように導くことができます。学界の分かれる解釈を冷静に検討しながら信頼できる歴史的根拠を選び取っていく探究の過程は、過去を学ぶ歴史の授業であると同時に、多様な資料を批判的に読み解くリテラシー教育にもなります。

サマルカンドが投げかける問い

サマルカンドは、過去の遺跡と現代の発展が何の摩擦もなく平和に共存している童話の世界のような絵姿ばかりではありません。ホテルを新築しようとする開発用地と歴史遺産の景観保存、観光客の利便性と地元住民の日常生活、見た目には華やかな青々とした芝生と乾燥した砂漠気候による水不足が絶えず衝突し、葛藤を生んでいます。都市の中にこうした利害の衝突が存在するという事実そのものが、都市政策の失敗を意味するわけではありません。都市の成熟度は、葛藤を隠さずに公論化し、それを調整する民主的な手続きと制度を備えているかどうかにかかっています。

ユネスコ世界遺産という栄誉ある名称は、遺跡を守る心強い防護壁であると同時に、重い国際的責務を伴います。[B035] 世界中の旅行者を惹きつけるブランドとなる一方で、都市で行われるあらゆる土木工事や建築復元の過程に、はるかに厳格な説明責任と透明性を要求するからです。行政官や開発事業者、文化財保存の専門家、そして地域住民は、都市の同じ地図を眺めながらも、互いにまったく異なる未来を思い描くことがあります。政策決定の客観的根拠と調査資料を透明性をもって公開し、最初の鍬を入れる前に住民の声に耳を傾け、開発によって生活の基盤を脅かされる人々に正当な補償と選択権を保障するのが当然のあり方です。

空に向かってそびえる青いドームは、はるか遠くから眺めると、寸分の曇りもない完全な調和を保っているかのように見えます。しかし、城壁の近くまで歩み寄った観察者の目には、微細にひび割れたタイルの隙間や、数百年にわたって幾重にも施された修繕の痕跡がありありと映ります。まさにこうした時間の傷痕と補修の跡こそが、この都市が生きて息づいてきた真の証拠なのです。サマルカンドの明日もまた、傷一つない完璧な設計図によって一朝一夕に完成されるものではありません。一滴の水を大切に使い、長年の隣人をみだりに追い出すことなく、歳月が刻まれた煉瓦一枚の歴史的証拠を損なうことなく残そうとする、数多くの試行錯誤と慎重な調整が積み重なって初めて、持続可能な都市へと歩みを進めることができるのです。

かつてのシルクロードが大陸の遥か遠くの国々をつないでいた交易路であったとするなら、今日のサマルカンドには、過ぎ去った過去と訪れる明日をしっかりと結び合わせる時代の通路が必要です。古代アフロシアブ壁画の使節図から都心を走る環境配慮型の電気バスに至るまで、中世ウルグ・ベク天文台の精密な恒星カタログから現代のデジタル都市データに至るまで、途切れることなく続く道です。その由緒ある道

の上で、旅行者はしばし足を止めて驚嘆を抱き、そして立ち去っていきますが、住民たちは世代を超えて日々の暮らしを黙々と紡ぎ続けます。結局のところ、都市の真の主人は、華やかな遺跡を束の間通り過ぎていく旅人ではなく、その生活の場を長きにわたり慈しみ、守りながら暮らす平凡な住民たちなのです。

第III部 旅と実用ガイド

第13章 千年の古都ブハラ

日が傾く頃、ブハラのレンガを眺めると、単なる一色の褐色には見えません。浮き出た模様には淡い金色が宿り、刻まれた溝には紫がかった影が落ちます。遠くから眺めたカラーン・ミナレットは太い一本の鉛筆のようにまっすぐそびえ立っていますが、近くに歩み寄ると、無数のレンガが精緻な規則に従って組み合わせられているのが分かります。小さな点が密集してひとつの画面を形づくる点描画のようでもあります。ブハラを理解する第一歩も、まさにここに 있습니다。この街は壮大な建物をいくつか並べた場所ではなく、路地と池、市場と学校、礼拝の空間がひとつにつながった古くからの都市網だからです。

ユネスコはブハラ歴史地区を、二千年を超える歴史を持つ都市として説明しています。10世紀から17世紀に至る中央アジアのイスラム都市の構造が、広い区域にわたってそのまま残されていると評価されています。世界遺産区域の面積は216ヘクタール、緩衝地帯は339ヘクタールに達します。登録基準は文化交流、都市建築の典型、宗教や思想の歴史に広くまたがっています。[C001] 一見すると数値の大きさに圧倒されそうになりますが、実際に現地に立ってみると、面積よりも道が延びる方向が目にとまります。城塞から市場へ、市場から池へ、池から学校へと続く道の流れそのものが、かつての都市の生きた設計図といえます。

地図の上でブハラは、過酷な砂漠のただなかにぽつんと打たれた点のように見えますが、長きにわたり交易と学問を結ぶ重要な要衝でした。ユネスコの資料によれば、この地は8世紀にカリフ帝国の巨大な文化の中心地として台頭し、その後何世紀にもわたってイスラム文化を牽引する中心的役割を担いました。[C001] 砂漠を越えてきた人々や荷が集まるにつれ、自然と冷たい水や日陰が求められ、取引のための契約や両替の仕組みも整える必要が生じました。過酷な旅路を終えた商人は宿を求め、学問を志す学生は教えを授けてくれる師を探しました。都市の建物群がこうした現実的な必要性が形となったハードウェアであったとすれば、その中で活発に行き交った言葉や知識は、都市を動かすソフトウェアに近かったといえます。

ポイ・カラーンでレンガを読む

ポイ・カラーン広場に足を踏み入れると、カラーン・ミナレットとカラーン・モスク、ミーリ・アラブ・マドラサが静かに向かい合ってたたずんでいます。その中でもカラーン・ミナレットは、カラハン朝時代に建てられた優れたレンガ装飾建築として知られ、ユネスコもモンゴル侵略以前から完全な姿で生き残った貴重な遺産としてこの塔を挙げています。[C001] 塔の表面をじっくり観察すると、土レンガを横にし、立て、斜めに交差させて積み上げた帯状の文様が幾層にも続いています。同じ土レンガを角度だけ変えて配置しただけなのに、陽の当たる場所によって光の陰影がまったく違って感じられます。装飾を壁の上に塗り重ねたり貼り付けたりすることなく、レンガを積み上げる手法そのものによって美しい文様を生み出しているのです。

ブハラには、チングス・カンがこのミナレットを見上げようとして帽子が脱げ落ち、地面に落ちた帽子を拾おうと腰をかがめたことで塔に一礼した形になり、どうしても破壊することができなかったという伝説が伝わっています。覚えやすい逸話ですが、伝説と検証された建築史を同列に置いて受け止めるべきではありません。記録によって立証された事実は、モンゴル軍が1220年にブハラへ侵攻した際、この塔がモンゴル侵略以前の建造物として破壊を免れて生き残ったという点です。[C001] 旅行者は伝説を心地よく楽しみつつも、それを歴史資料のように無批判に受け入れない慎重さを持つのが賢明です。伝説が都市に息づく人々の感情を映し出すものだとなれば、公式の記録は都市がくぐり抜けてきた歴史の時間をしっかりと留めてくれるものだからです。

ミナレットの向かいに位置するミーリ・アラブ・マドラサは、由緒ある教育の場です。マドラサとはイスラム世界において宗教や諸学問を教えた学校を指す言葉です。青いドームと巨大な入口がまず目を引きますが、この建物の真髄は寄宿室と中庭が織りなす構造的な関係にあります。学生たちが暮らした生活空間が四角い中庭を静かに取り囲み、学びと祈りが一日の日課を規則正しく導いていました。ここを訪れる際は、単に有名観光地を見て回るという気軽な気持ちよりも、長い歴史を通じて学問と信仰が継承されてきた学び舎に迎えられたという姿勢を持つのがふさわしいでしょう。扉が開いていたとしても、実際の授業が行われている部屋や立ち入り制限の札が掲げられた区域の前では足を止める必要があります。

カラーン・モスクの広々とした中庭に足を踏み入れると、都市の壮大なスケールが全身に伝わってきます。無数の人々が一堂に会し、同じ方向を向いて礼拝を捧げられるよう設計された空間です。外の路地は曲がりくねって狭く続いているようですが、モスクの中庭は視界が開けており、秩序が一目で見て取れます。入り組んだ迷路を抜けて突如として広い広場に出くわしたときのように、視界が心地よく開ける体験を与えてくれます。狭い道を慎重に歩いたあとに広大な庭で一息つかせるようなこうした空間の対比は、ブハラを歩く旅人の足取りに自然な休息とリズムをもたらしてくれます。

アルク、都市の記憶装置

アルク城塞は、平坦な都市の上に重厚な土壁を高くそびえ立たせています。城壁は滑らかな直線の代わりに、土が突き固められ、風雨にさらされて乾いた年月の起伏をありのままに現しています。ここは都市を治めた統治者の居所であり、行政の中心地でした。ユネスコは、この城塞が16世紀に再建されたものであり、はるか昔から都市の公的な中心を象徴してきた場所であると説明しています。[C001] この城塞を単なる一棟の華麗な宮殿として眺めるだけでは、半分しか見えていないことになります。城塞は君主の命令や徴税、国家の儀礼や裁判、警備と防衛が一体となって機能していた統治の運用システムだったのです。

城門をくぐり、坂道に沿って奥へと登っていくと、眼下にブハラの市街地が一望できます。高い場所からポイ・カラーンや市場のドームがある方角を見渡してみると、かつて権力と商業がいかに緊密に結びついていたかに気づかされます。統治者は市場を行き交う富や人の流れを見守る必要があり、商人たちは統治者が定めた秩序と法のもとで交易路の安全を保障される必要がありました。城塞と市場は決して切り離された別々の世界ではありませんでした。電線で結ばれた通信網のように、二つの空間は絶え間なく信号や資源をやり取りしながら都市を支えていました。

アルク城塞の相当な区域は、20世紀の激動の戦争や急激な変動を経て崩壊し、損壊しました。そのため、現在残されている空間をかつての完全な王宮の姿のままだと受け取ってしまうと、実際の歴史とは異なる幻想を抱きかねません。ここは過去の廃墟と近年の復元が幾重にも重なり合った歴史の現場として読み解くのがふさわしい場所です。近年新たに塗装された壁面と、長い風雪に摩耗した古いレンガ、そして案内板が指し示す崩れ落ちた部屋の跡を静かに見分けていくと、城塞が辿ってきた年月の

軌跡が鮮明に浮かび上がってきます。今ではがらんとした空き地でさえも、過去を証言する貴重な歴史資料なのです。

レンガひとつに込められた宇宙

イスマーイール・サーマーニー廟は、圧倒的な大きさで見る者を威圧することはありません。低い立方体の建物の上に、小ぶりで丸いドームがひとつ端正に載せられているだけです。ユネスコはこの廟を、10世紀のイスラム建築が生み出した傑作であり、イスラム世界全域に残る同時代の建造物の中でも屈指の貴重な遺産であると評価しています。[C001] 遠目には土で作られた素朴な小箱のように見えますが、数歩慎重に歩み寄ってみると、土レンガが見事に編まれた籠のように緻密に入り組み、その中で円と四角形が果てしなく変奏されながら姿を現します。

端正な四角形の本体は私たちが足をつける大地や部屋を連想させ、丸いドームは遙かな天を思わせます。四角形と丸い円が出会う四隅の隙間は、小さなアーチが滑らかに受け継いで支えています。千年前の建築家は、貴重な石や華美な彩色を用いることなく、もっぱら土レンガを置く向きと角度だけで奥行きのある立体感を生み出しました。午前と午後で建物の表面の印象ががらりと変わるのも、まさにこのためです。太陽が空を渡り光の角度を変えるたびに、壁面には新たな影が落ちます。カメラで写真を一枚だけ急いで撮って立ち去るより、霊廟の周りをゆっくりと一周歩いてみることをお勧めします。東西南北に向き合うたび、同じレンガの壁が四度とも異なる表情で語りかけてくるはずです。

市販の旅行資料には、この霊廟が数百年ものあいだ厚い泥の中に埋もれていたために破壊を免れ、保存されることができたという逸話がしばしば記されています。広く知られた説明ではありますが、信頼のおける確かな史料を通じて具体的な詳細を明確に確定することは困難でした。そのため、具体的な年や発見にまつわるエピソードを検証済みの事実として本文に掲載することはしていません。根拠を確かめにくい感嘆に頼るよりも、目の前にあるレンガの組積構造やユネスコが確認した建築的価値を静かに見つめるほうが、遺跡の持つ重みをより長く記憶に留めさせてくれます。

ラビハウス、水が生んだ居間

ラビハウス広場の中央には、広々とした池がたたずんでいます。「ラビハウス」という名前自体が「池のほとり」という意味を持っています。生い茂る木陰と屋外に置かれた低いテーブル、湯気の立つ茶器、そして水面に揺らめく歴史的建造物の影が一幅の穏やかな風景を描き出します。宗教建築が天に向かって高い垂直線を打ち立てるのに対し、ここでは視線が心地よく水平へと降りてきます。疲れた旅人が足を休める憩いの場であり、地元の人々の素朴な日常が静かに流れる居間のようにもあります。ブハラが過去に閉じ込められた博物館ではなく、今も温もりの通う生きた街であることを、ここに腰を下ろして初めて実感することができます。

ユネスコはラビハウズ一帯を、シャイバーニー朝以降のブハラを代表する重要な建築群として位置づけています。[C001] 池の周りにはマドラサやハーンカーの建物が、澄んだ水場を中心に空けたまま円を描くように取り囲んでいます。ここでいうハーンカーとは、神秘主義スーフィーの修行者たちや遠路を旅する巡礼者が寝泊まりしながら祈りを捧げた宿泊施設であり、修行の場でした。重厚な建物の代わりに、何も無い水場を中心においた空間配置が、ひととき穏やかでゆったりとした印象を与えてくれます。通信ネットワークにおいてもすべての機器が中央の座を占めようとせず、空いた経路を確保してこそ信号が円滑に流れるように、この広場でも空けておかれた池の空間が人々と涼やかな風を柔らかく循環させているのです。

池のほとりに並ぶ茶屋や商店は、慌ただしかった旅の速度をゆったりと緩めてくれます。ただし、多くの人々が集まる場所では、所持品の管理に油断してはなりません。イギリス外務省の渡航安全情報でも、市場や公共交通機関のような混雑する場所でのスリやひったくりの被害に注意するよう呼びかけています。[C027] ゆったりとした情緒を楽しむことと、慎重な警戒心を保つことは決して矛盾しません。バッグのファスナーをしっかりと閉めておくといった細やかな注意を払いながらも、香り高いお茶の風味を心ゆくまで味わうことができます。

市場のドームの下のデータ

ブハラ古い交差点には、「タキ」と呼ばれる丸いドーム屋根の市場建築が今も残されています。ユネスコは、両替商のドームや帽子商人のドームといった交易建築物を、都市の商業史を証明する重要な遺産として挙げています。[C001] このドーム屋根は、見栄えのための装飾にとどまらず、実用的な機能を担っていました。砂漠の照りつける厳しい日差しを遮り、ドームの下に涼しい空気が循環するよう促すとともに、四方から道が交差する地点を遠くからでも一目で見分けられる目印となっていました。人と物資が円滑に行き交うよう結びつけた、都市の市場における物理的な接続窓口だったといえます。

ドームの下にひしめく商店に並べられた品々は、ブハラが長い歳月をかけて磨き上げてきた職人技の精華を伝えています。色とりどりの織物や精緻な刺繍、金属工芸品や手打ちの刃物、細密画や華麗な絨毯がひとつの路地にところ狭しと集まっています。ウズベキスタン観光当局も、ラビハウズとポイ・カラーンの間に連なる市場のドームを伝統工芸品に出会える代表的な場所として案内し、ブハラの織物や絨毯を紹介しています。[C003] 店で品物を選ぶ際には、歴史ある本物だという商人の言葉を鵜呑みにするのではなく、誰がどのような材料でいつ作ったのかを落ち着いて尋ね、領収書を受け取っておくのが賢明です。歴史的価値のある文化財に分類されるような骨董品については、国外への持ち出し規定を別途入念に確認しておかなければ、思わぬトラブルを避けることができません。[C033]

市場の路地で値段を交渉する際、あえて商人と言い争う必要はありません。丁寧に値段を尋ね、少し考える間を置いたうえで、折り合いがつかなければ軽く微笑んで立ち去ればよいのです。工芸家が汗を流して作業する姿を見守り、説明を聞いたのなら、提示された価格に職人の長年の熟練と労働時間がそのまま込められていることも汲み取る必要があります。工房や人物を撮影する際は、まず断りを入れるのが基本的な礼儀です。手作業で心を込めて作られた品は、カメラで慌ただしく収めた一枚の写真よりも、手帳に書き留めた職人の名前と工房の場所を通じて、はるかに長く温かな記憶として残ります。

宗教の都市を歩く姿勢

ブハラは9世紀から16世紀にかけて、イスラム神学とスーフィズム思想を開花させた巨大な中心地でした。ユネスコの記録によれば、全盛期のブハラには200を超えるモスクと100以上のマドラサが立ち並んでいました。[C001] この膨大な数字は、単に建築物の数を誇示するために記された記録というわけではありません。都市の堅固な経済力が、学者や学生、筆写家や製本家をはじめ、彼らが滞在する宿所や食事を余すところなく支えていたことを意味しています。知識は机の上だけで育まれたのではなく、活気ある市場や清潔な井戸、確かな宿所が陰で黙々と支えていたからこそ花開くことができたのです。

郊外に位置するバハウドディン・ナクシュバンド廟は、今日でも地元の人々にとって深い信仰的意味を持つ代表的な巡礼地です。ここを訪れる者は、墓域内では声を静かに落とし、祈りを捧げる人の前を横切らず、写真を撮影してもよいかを現地でまず慎重に確認しなければなりません。男性も女性も肩と膝をきちんと覆う服装を用意していけば、宗教遺跡の入口で戸惑ったり引き返したりすることを防げます。ウズベキスタン観光当局もまた、宗教的な聖地では女性の訪問者が肩や背中、脚を覆う端正な服装を整えるよう案内しています。[C003] こうした服装は写真を残すための装いではなく、今も息づく現地の尊い信仰を尊重するための最低限の礼儀なのです。

ブハラの歴史において、息づいていたのはイスラム信仰だけではありません。公式観光資料を見ると、この地域にはゾロアスター教やキリスト教、ユダヤ教、仏教を信じる多様な信仰共同体が長い歳月を共に暮らしてきた多彩な痕跡が残されています。[C003] かつてのユダヤ人街であるマハッラやシナゴークを訪れる際は、少数派コミュニティの生活の場を単に見慣れない物珍しい撮影スポットとして消費しない成熟した姿勢が求められます。見学可能な時間帯や開放区域は現地で丁寧に確認し、他者の神聖な礼拝を好奇心本位の見せ物に貶めないよう、慎重な節度を自ら保つ必要があります。

保存とは古い壁を新品のように仕立て直すことではない

ブハラを支えてきた日干し煉瓦や木造の建築物は、気候や環境の変化に対して脆弱です。ユネスコは、地下水の上昇や土壌の塩分、木材を食い荒らすシロアリが歴史的建造物に継続的な被害を与えていると指摘しています。さらに、遺跡の特性に合わない新しい資材や未熟な工法、復元記録の不足、無理な都市開発の圧力もまた、文化遺産の歴史的真正性を損なう危険要因として挙げられています。[C001] 古い土壁が平らでないからといって表面をセメントで滑らかに塗り固めてしまえば、当面は綺麗に見えるかもしれませんが。しかし、土や煉瓦が持つ本来の通気性が遮断され、外見上は問題なく見えても見えない内側で損傷が深刻化する恐れがあります。

2025年、世界遺産委員会はブハラの統合都市計画および保存管理計画が完全に策定されるまで、世界遺産区域および緩衝地帯内で行われる新規開発や建設工事の停止措置を維持することを再確認しました。あわせて、2024年に諮問機関が現地を調査して提示した勧告事項を新たな管理計画に忠実に反映するよう要請しました。[C002] このような厳格な決定は、遺跡を訪れた旅行者にも重い問いを投げかけます。私たちは果たして、塗り直された艶やかな表面ばかりを美しさとみなしてはいないだろうか。古い時間の痕跡を損なうことなく守りながら、ここに根を下ろす住民たちが心安らかに暮らせる道とはいったい何だろうか。ブハラはガラスケースの中に閉じ込められた剥製の展示品ではなく、保存と生活の間で絶えず調和を図り続ける生きたシステムなのです。

一日を計画する方法

ブハラの旧市街は、ゆっくりとした歩調で空間を味わうのに実に適した場所です。早朝には光の差し込む角度が美しいサーマーン廟をまず訪れ、日差しが照りつける日中には涼しい日陰ができる市場ドームやマドラサの中庭を巡るルートが適しています。日が傾き始める夕暮れ時にポイ・カラン広場へ戻れば、赤い夕焼けの中で煉瓦の精巧な文様が鮮やかに浮かび上がります。夜にはラビハウズの池のほとりに座ってお茶を飲みながら、一日歩いた道を振り返るのにうってつけです。ただし、こうした日程を模範解答のように固執する必要はありません。気温が跳ね上がる季節には、無理に歩き回るよりも涼しい屋内で休み、水分を十分に補給する時間を何よりも優先すべきです。公式観光案内でも、ブハラの夏は高温乾燥するため、強い日差しを避ける備えを万全にするよう呼びかけています。[C003]

有名な見どころを一つでも多く巡ろうと足を速めてしまうと、都市空間が秘める繊細なつながりを見落としがちになります。ポイ・カランからラビハウズまで歩みを進めるうちに、路地の片隅にある古びた潜り戸や低い排水路、日干し煉瓦の質感がわずかに変化する境界線、路地の日陰に置かれた木製の椅子などに目が留まります。電子地図の画面には決して表示されない生き生きとした情報です。道がなぜこのように曲がりくねっているのか、乾いた砂漠の風がどの隙間から吹き込んでくるのかを、身体全体の感覚を通して知ることになります。

ブハラの郷土料理は、長時間の歩行で疲れた旅行者の活力を補うのによく合います。公式観光資料では、ブハラ風の伝統的な炊き込みご飯である「オシ・ソフィ」が他地域のプロフとは異なる独自の調理法で作られると紹介されており、ハリサやカイシといった独特な郷土料理もあわせて案内されています。[C003] 見慣れない料理名だけでどのような食材が使われているか見当がつかない場合は、肉や乳製品、ナッツ類が含まれているかどうかを店に事前に尋ねるのが確実です。食物アレルギーがあるなら、関連する説明文をウズベク語とロシア語でスマートフォンなどに控えておく配慮が大きな助けとなります。食後に添える温かいお茶の一杯は、厳しい暑さの中でひと息つく心地よい憩いの時間をもたらしてくれます。

都市の外に広がるもうひとつのブハラ

旧市街の遺跡を見て回るだけでブハラをすべて見尽くしたと思いがちですが、城壁の外にも注目すべき歴史の現場が残されています。北の郊外に位置するシトライ・モヒ・ホサ宮殿は、ブハラの最後の統治者たちが滞在した夏の宮殿です。ウズベキスタンの公式観光資料は、この夏の宮殿をはじめ、ヴァラフシャやパイケントの古都遺跡、ナクシュバンディー教団ゆかりの聖者たちの墓域をブハラ地域の重要な文化資源として案内しています。[C003] 旧市街の素朴な黄土色の土壁とは異なり、華麗な装飾や庭園、ヨーロッパの建築様式が混ざり合った宮殿内部を眺めると、19世紀から20世紀初頭にかけてブハラが外の世界を受け入れた独特の手法を読み取ることができます。

夏の宮殿の内部を埋め尽くす鏡張りの壁と白い漆喰装飾は、写真で見ると単にまばゆいひと筋の光の塊のように見えがちです。しかし間近に歩み寄ってじっくりと見つめると、職人が手彫りした精緻な植物の唐草文様と、無数の小さな鏡片がそれぞれに光を反射し、繊細に煌めいているのが分かります。中央アジアの伝統工芸技術とロシア帝国末期の好みとが、ひとつの建築空間の中で重なり合っているのです。こうした文化的な混交を、固有の純粋性が損なわれたと過小評価する理由はありません。都市とは常に新しい人々や文物を絶え間なく受け入れ、自ら独自の手法で再配列しながら発展してきたからです。

パイケント遺跡は、ブハラ・オアシスが育んできた交易の歴史を、都心の外に広がる広大な平原へと押し広げて見せてくれます。ここは高くそびえる華麗なドームの代わりに、地表に低く沈んだ遺構が大半を占めているため、事前の知識や案内なしに訪れた人には単なる荒涼とした土の丘に見えがちです。ユネスコは、パイケントを野外博物館として整備する事業に関連し、遺跡の形状を不可逆的に損なう決定を下す前に、世界遺産影響評価報告書と初期設計案をあらかじめ提出するよう勧告しました。[C002] 古代の発掘現場を観光地として整備する作業は、立派な建物を一棟建てて終わるものではありません。新しく敷設される進入路や利便施設が、数千年に及ぶ古い地層や周辺固有の景観をどのように変えてしまうのかを慎重に見極める配慮が前提とならなければなりません。

郊外を巡る日程は、徒歩で回る旧市街の散策とは異なる備えが必要です。遺跡間の距離がかなり離れており、公共交通機関の運行情報も変動しやすいからです。チャー

ター車を利用する際は、運転手と巡るルートや遺跡での待機時間、駐車料金や通行料が含まれているかどうかを出発前に明確に取り決めておかなければ、見知らぬ土地での揉め事を避けられません。スマートフォンにはオフライン地図の位置情報をあらかじめダウンロードしておき、宿泊先におおよその帰着予定時刻を伝えておくのが無難です。猛暑の夏季には、車内に十分置いておく飲料水と、遺跡を見学しながら携帯して飲む水とをあらかじめ分けて用意する細やかさが求められます。

ブハラを2日間かけて巡るなら、初日はアルク城塞やポイ・カラン、市場ドーム、ラビハウズへと続く旧市街の有機的な都市構造を歩いて探訪する日程が適しています。2日目にはイスマーイール・サーマーニー廟や郊外の夏の宮殿、あるいは宗教巡礼地の中から自身の関心に合った場所を選んで訪れると充実します。すべての遺跡に余さず足を運ぼうとする性急な計画は、路地が秘める固有の情緒を見失わせかねません。ひとつの場所に立ち止まって案内板の説明にじっくり目を通し、建物の周りを静かに一周歩いてみるようなゆとりのある時間が必要です。

旅の手帳に記録を残す際は、自らの目で直接目撃した事実と耳で聞き及んだ話を明確に区別して書き留める習慣が役立ちます。煉瓦の多彩な色合いや城門の雄大な高さ、市場の路地を満たす活気ある物音は、旅行者が現場で直に確かめた一次資料です。一方で、現地の案内人が語ってくれたチングス・カンの伝説や聖者たちの神秘的な奇跡の逸話は、口伝で継承されてきた口承説話です。そして、ユネスコが確定した築造年代や保存状態に関する評価は、検証された文献記録にあたります。これら三つの層を混同することなく整然と整理しておけば、記録が無味乾燥にならず、歴史的事実という確かな基盤を見失うこともありません。

路地をカメラに収める際、見事な建物の写真ばかりを求めて、そこに佇む住民を画角の外へ追いやろうとしてはなりません。ブハラは人々の息づかいと生活が営まれる場であって、無人の映画セットではないからです。家の戸口に腰掛ける近隣の住民や、店先で黙々と汗を流す商人を、単なる写真の添え物のように扱うのは控えるべきです。もし人物の顔がはっきりと写る構図であれば、会釈や身振りでまず断りを入れる必要があります。祈りを捧げる信徒の姿や民家の私的な中庭には、レンズを向けるよりも自らの両の目に静かに焼き付けるような配慮がふさわしいといえます。

カメラのレンズを少しの間下ろしたとき、はじめて路地の温もりや人々の温かな語らいが記憶の中に鮮やかに染み入ってきます。

もし長時間の歩行が難しい同行者がいるなら、一日の移動動線を小さな輪を描くように細かく分けて計画するのが賢明です。城塞一帯、ポイ・カラン広場一帯、ラビハウズの池の一帯をそれぞれ分けて歩き、エリア間の移動には車両を利用する方法です。凹凸のある古い石畳や高い敷居は、一般的な地図には決して表示されない隠れた障壁です。車椅子やベビーカーを伴う場合は、宿泊施設を予約する際に出入口のスロープの有無やトイレへの動線条件を事前に綿密に確認しなければなりません。歩行距離を短縮して無理を避けたからといって、決して都市を表面的にしか見ていないということにはならないのです。

ブハラを離れる前に、スマートフォンに収められた数々の写真フォルダを見返す前に、街を形づくっていた道の織り成す構造を静かに辿り直してみることをお勧めします。城塞は都城に向けて統治の号令を下し、市場のドームは人と物、富を結びつけました。マドラサは知識を磨いて蓄え、後世へと伝え、池は疲れた人々の渴きを癒やして足を休めさせました。そしてミナレットは、果てしない砂漠で道を探す人々にとっての道標となりました。千年の古都という呼び名は、古い建築物がただ数多く残されているという意味にとどまりません。それぞれ異なる役割を担った空間が、一つの都市の中で途切れることなく緊密に結びついてきたことを意味しています。澄み渡るブハラの青空の下に立てば、千年を耐え抜いてきた煉瓦の一枚一枚さえも、精巧な歴史の文章のように読み解けてくるはずです。

第14章 城壁の中の都市ヒヴァ

ヒヴァの西門をくぐると、まず周囲の音が変わります。外の道路を走っていた車の音は分厚い城壁に遮られ、石畳を踏みしめる足音がはっきりと耳に届きます。通りの先に目を向けると、太くどっしりとした青緑色の塔が丸くそびえています。カルタ・ミナルです。上へ伸びる途中で立ち止まったかのような塔の姿は、まるで句点を打っていない文章のようにも見えます。その傍らに立つ土色の城壁と青いタイルは、互いにまったく異なる温度をたたえています。ヒヴァは、こぢんまりとした空間の中に鮮やかな色彩と長い時間を幾重にも折りたたんだ都市です。

イチャン・カラは、ヒヴァの内側を取り囲む城郭都市です。ユネスコは、アムダリヤ川南方のホラズム地方の旧オアシスに位置するこの地について、砂漠を越えてイランへ向かう隊商たちが最後に息を整えて滞在した休息地であったと説明しています。この場所は1990年に世界遺産に登録されました。遺産区域内には51の記念建造物と250軒の住宅が密集して立ち並び、城壁の高さが10メートルに達する場所もあります。[C004] 狭い面積の割に建物が密集しているため、実際に中を歩いてみると、モスクの門を通り過ぎるやすぐに民家の低い窓が続き、狭い路地を曲がると宮殿の広い中庭が不意に姿を現します。

城壁は、荒々しい砂漠と賑やかな都市の間を隔てるフィルターの役割を果たしていました。城門を閉ざせば、出入りする人や物資の流れを一目で管理することができました。昼間は商人と物資が行き交う交易路となり、夜間は都市を守る堅固な防衛線となりました。現在のイチャン・カラもまた、城門をくぐった瞬間に歩く速さが明らかに変わります。ここはもともと車が走るために整備された道ではないからです。自分の足でゆっくり歩きながら日陰を探し、角を曲がるたびに道を慎重に確かめながら進むべき都市です。

未完成の塔が完成させた風景

カルタ・ミナルは、基部がどっしりと広く、上部が断ち切られたように不格好に残る独特の姿をしています。その名前自体も「短い塔」という意味を持っています。伝承や文献には、本来は天空高くそびえる巨大な塔を建てようとしたものの、統治者の死去に伴い工事が中断したという話が記されています。ただし、計画されていた高さや工事が中断された具体的な理由については案内資料ごとに食い違いがあるため、ここでは確定した数値としては記載しません。目ではっきりと確認できる確かな事実は、この塔が未完成のまま残され、表面を覆う青緑色のタイルがヒヴァを代表する風景として定着しているという点です。

結局完成しなかった建造物が一都市の象徴になったという事実は、どこか趣深い感慨を与えてくれます。一般的な建築設計では、建設途中の状態を失敗や誤りとみなしがちです。しかしヒヴァでは、途中で止まった姿のまま人々の記憶の中心に根を下ろしました。太い円筒形の塔身は、上へ登るにつれて細くなる前にぷつりと途切れています。そのおかげで、ぽっかり空いた上部を青空が代わりに埋めてくれているような印象を受けます。人の計画が途絶えた場所に、流れる時間が自然な仕上げの線を引いてくれたかのようです。

塔のすぐ傍らに位置するムハンマド・アミン・ハン・マドラサは、カルタ・ミナルと自然に調和して一目で視界に入ってきます。壮大なイスラム神学校の建物と塔は、教育と信仰、そして都市統治者の権威をひとつの空間に鮮明に示しています。壁面のタイルを間近で観察する際、旅行者はその表面をむやみに触らないよう注意しなければなりません。写真で見る施釉タイルは硬く頑丈そうに見えますが、実際には乾いた砂漠の塩分や湿気、激しい気温変化に長年さらされ、傷つきやすい状態にあります。指先で軽く触れる程度の小さな力であっても、無数の訪問者が繰り返せばタイルの表面が擦り減ってしまうほどの大きな損傷につながります。

柱の森の光

ジュマ・モスクの内部に入ると、無数の木の柱が森のように立ち並んでいます。ユネスコの世界遺産記録によると、このモスクは幅55メートル、奥行き46メートルの大きさで、天井に設けられた2つの八角形の天窓からほのかな光を取り込み、212本の木製円柱が内部を支えています。[C004] この数値は、事前準備資料に記されていた218本という記録とは異なっています。本書はユネスコの現在の公式説明に基づき、柱の数を212本と表記します。ひとつの遺跡であっても、参照する資料や調査時期によって具体的な数値が異なり得ることを示す明確な事例です。

モスクの平らな屋根の陰に足を踏み入れると、熱く照りつける外とは異なり、ひんやりと落ち着いた空気の肌触りが伝わってきます。立ち並ぶ柱は、刻まれた彫刻の文様もそれぞれ異なり、作られた時代もまちまちです。規格化された部品を均一に打ち出す工場生産方式では、決して作り出せない光景です。異なる時代に削り出された木の柱が、ひとつの屋根を仲良く支えています。数百年前の古い柱の隣に、後代に修復された柱が寄り添うように立つ風景を見ていると、歴史とは一度で完璧に仕上げられたプログラムというよりも、長い歳月をかけて修正と追記を重ねてきた長いソースコードに近いのではないかと思えてきます。

天窓から差し込む明るい光の輪と、その光から遠ざかって薄暗くなる柱の間を静かに眺めていると、目が暗闇にゆっくりと慣れていきます。カメラは暗い室内を無理に明るくしようと感度を上げますが、人間の目は時間をかけてほのかな明暗をありのままに受け止めます。内部で写真を撮影する際は、フラッシュをたく前に撮影規則をよく確認しなければなりません。静かに身を伏せて祈りを捧げる人が見えたら、カメラのレンズを下げて礼儀を尽くします。このモスクの静謐な光は、せっかちな撮影機材よりも、静かに待つことのできる眼差しにより深く応えてくれます。

石の宮殿の三つの中庭

タシュ・ハウリは「石の宮殿」という意味を持つ名で広く呼ばれています。19世紀のアッラー・クリ・ハン統治時代に建てられた宮殿で、ユネスコはイチャン・カラの優れた建築遺産のうち、この時期に建てられた2つの宮殿を代表例として挙げています。[C004] 外側からは土壁が堅固に阻んでいるため内部の様子をうかがい知るとは難しいですが、扉を開けて足を踏み入れると、用途の異なる中庭が次々と広がります。公式な賓客を迎える謁見の中庭、宴や儀式を執り行う中庭、家族が暮らす私的な中庭が、それぞれ明確な空間規範に従って区分されています。

ヒヴァのタイル装飾は、単一の青色にとどまりません。濃い藍色と澄んだ青緑色、乳白色の白、そして輪郭を際立たせる黒い線が調和を保ちながら、小さな区画を精緻に埋めていきます。壁面の文様は一定の単位を規則的に繰り返していますが、隅や窓枠の周辺に至ると配列の仕方がさりげなく変化します。コンピュータプログラミングにおいてループ文が短い命令で広い画面を埋め尽くすように、タシュ・ハウリの職人たちは小さな文様を次々とつなぎ合わせて巨大な壁面を完成させました。機械と異なるのは、職人の指先から生まれたわずかな揺らぎです。完全に均一に刷り出されたようなタイルは見当たりません。人の手が生み出したこの小さな差異が、冷たい壁面に温かな生命力を吹き込んでいます。

中庭の一角にそびえる高いアイヴァンは、照りつける日差しを遮る陰を作り、涼しい風の通り道を開いてくれます。アイヴァンとは、一面が中庭に向かって開放されている広いテラスやポーチのような空間を指します。華やかな文様装飾ばかりに目を奪われず、影が落ちる方角に目を向けると、かつての職人たちが過酷な気候条件に建築でどのように応えたかが明確に浮かび上がります。灼熱の夏のヒヴァにおいて、視覚的な美しさと生き抜くための建築技術は切り離されていません。直射日光を遮る屋根の奥行き、熱気が上へと抜けるよう設計された天井の高さ、そして中庭の適切な面積比率が有機的に噛み合って機能しています。

住まいが残ってこそ都市は生きる

イチャン・カラの持つ歴史的価値は、華麗な宮殿やモスクだけにとどまりません。ユネスコは、四角い中庭と彫刻が施された木柱が支える玄関ポーチ、そして私的な生活空間を過不足なく備えた伝統家屋もまた貴重な遺産であると規定しています。

[C004] 城壁内に残る250軒の住宅は、ここが単に王や貴族だけの空間ではなく、一般の住民たちが暮らしを紡いできた生活の場であったことを証明しています。物干し竿に干された洗濯物や香ばしい炊事の匂い、路地に響く子どもたちの笑い声が失われた都市は、剥製にされた演劇の舞台セットへと容易に成り下がってしまいます。

旅行者は、迷路のように入り組んだ狭い路地を歩く際、目の前にある扉をうっかり展示館の入口と勘違いしないよう注意が必要です。開け放たれた扉の奥は、誰かの団欒の場である民家かもしれません。開いた窓の隙間から不意にカメラのレンズを向けたり、駆け回る子どもたちを保護者の許可なく撮影したりしてはなりません。狭い道で住民とすれ違うときは、端に寄って先に道を譲る配慮が望まれます。静かな路地は不慣れな旅行者にとって格好の写真の背景に見えるかもしれませんが、そこに暮らす人々にとっては、毎朝ゴミを出し、子どもたちを学校へ送り出す大切な日常の通路なのです。

ユネスコは2026年に、イチャン・カラの保存状態に関する新たな決定を下しました。2026年から2031年まで推進される総合管理計画や3次元精密スキャンデータの構築といった成果は肯定的に評価しつつも、内城であるイチャン・カラと外郭都市ディシャン・カラを包括する都市開発計画が世界遺産固有の価値を損ねないかについて十分に証明されていないとして懸念を表明しました。あわせて、主要な木造建築物であるジュマ・モスクを安全に保護するための5カ年管理計画を策定するよう要請しました。[C005] ヒヴァを手入れし守り続ける取り組みは、今なお進行形です。現代的な開発と住民の居住権、増加する観光需要、そして崩れやすい土壁の維持管理が、現実の中で絶えず衝突し、調整されています。

土を積み上げて築いた城壁には、降る雨や流れる歳月のほかにも目に見えない敵が数多く存在します。ユネスコは、木材を食い荒らすシロアリや土に含まれる塩分、地下から湧き上がる湿気が、建造物の木材や壁体の基礎を蝕む恐れがあると指摘しました。[C004] 2026年の決定文書もまた、土壁構造の安定性やシロアリ被害、土壌水分の状態を精密に調査し、それに応じた修復作業の結果を報告するよう明記していま

す。[C005] 外見だけを整えようとセメントを塗り重ねるのではなく、本来用いられていた土や藁の性質、そして伝統的な建築工法を正しく理解する作業が先に行われなければなりません。訪問者が城壁にむやみによじ登ったり、無理に体を預けて脆くなった土の表面を崩したりしないよう慎重に行動することもまた、遺跡を守るための小さな実践です。

城壁の上とミナレットから眺める都市

展望台や城壁のような高い場所に立つと、イチャン・カラの端正な長方形の輪郭や東西南北の城門の位置を一目で把握するのに適しています。ただし、上へと続く階段は傾斜が急で幅が狭いため、上る人と下りる人が狭い通路を互いに譲り合わなければなりません。安全手すりの設置状況や入場可能時間は、現地で必ず事前に確認しておく必要があります。雨で石が滑りやすくなっていたり激しい砂漠の風が吹く日には、見事な写真を1枚残そうとする欲よりも、足を踏み外さないよう安全を確保するほうが賢明です。

高い場所に立って都市を見下ろすと、華麗な青いドームよりも、素朴な土色の平らな屋根のほうかはるかに広く広がっていることが分かります。観光パンフレットなどは目を引く華やかな記念建造物を前面に出しがちですが、都市の実質的な本体をなしているのは、軒の低い民家と入り組んだ路地です。土色の屋根の間から尖ってそびえ立つミナレットは、迷いやすい路地において親切な道標の役割を果たしてくれます。屋根の上に載せられたパラボラアンテナや、複雑に張り巡らされた電線も目に入ります。数百年前の古い城郭都市が、現代の通信網と溶け合いながら今なお息づいている生々しい証拠です。

陽が西に傾き、ほのかな明かりが灯ると、土壁の立体的な凹凸が昼間よりもいっそう鮮明に浮かび上がります。夜の風景に情緒があるからといって、通りが常に安全であると油断してはなりません。英国外務省は、ウズベキスタンの混雑した市場や公共交通機関を利用する際、スリやひったくりの被害に遭わないよう格別の注意を払うよう呼びかけています。[C027] 明かりの乏しい人通りの少ない路地を歩くときは同行者と足並みを揃え、通信が途切れた場合に備えて宿泊先の位置をオフライン地図にあらかじめ保存しておきます。深夜に移動しなければならないときは、路上で手当た

り次第に車を拾うのではなく、正規に登録された配車アプリを利用するか、宿泊施設のフロントに配車を依頼するほうが安全です。[C027]

ヒヴァへと至る道の変化

長時間のフライトを経て訪れた旅行者は、近隣のウルゲンチ国際空港に降り立った後、車でヒヴァへと移動するのが一般的でした。2026年8月17日、ウズベキスタン大統領府は、ウルゲンチ国際空港とヒヴァ鉄道駅を直結する全長11キロメートルの新たな鉄道連絡線を発表しました。公式発表によると、この路線は空港と全国の鉄道網を乗り換えなしで直接結ぶウズベキスタン初の連絡網であり、ウルゲンチからヒヴァまでの所要時間を従来の80分から半分の40分へと短縮し、年間約65万人の乗客を輸送できるように設計されています。[C006]

この鉄道路線には、中国で製造された6両編成のCR200J電車が投入されます。ウズベキスタン大統領府の発表によれば、この列車は約400人の乗客を乗せることができ、客室内には無料Wi-Fiや電子機器の充電ポート、快適な冷暖房システム、交通弱者のための利便設備が整えられています。さらに同区間では、架線が途切れた場所でも自備バッテリーで走行可能な新型トロリーバス10台も運行を開始する予定です。[C006] これは2026年8月のヒヴァの交通環境に生じた目覚ましい変化といえます。ただし、現地の事情により実際の列車発車時刻や乗車券の購入方法は日々変更される可能性があるため、飛行機を降りてすぐに利用する接続交通機関を決める前に、公式時刻表や駅窓口の案内を改めて入念に確認しておく必要があります。

ウズベキスタン鉄道の予約サイトには、ヒヴァ、ウルゲンチ、ヌクスが出発駅と到着駅の一覧に並んでいます。[C036] 都市間を結ぶ長距離列車は曜日ごとに運行スケジュールが異なり、座席等級も細かく分かれています。単に「ヒヴァ」という都市名だけを見て安易に切符を購入するのではなく、正確な駅名と現地到着時刻を念入りに確認しておかないと思わぬ失敗につながります。列車が深夜に到着する予定であれば、駅前まで出迎えてくれる送迎サービスが可能かどうか、事前に宿泊先に問い合わせしておくとう安心です。空港連絡鉄道が開通したからといって、すべての長距離列車が空港駅に停車するわけではないためです。

ヒヴァとホラズムをあわせて読み解く

城壁の内側に2日ほど滞在して街を巡った後は、城門の外に広がるホラズム平原へと視野を広げてみるのも一興です。砂漠のただ中にそびえるアヤズ・カラやトブラク・カラといった土の要塞群は、イチャン・カラよりもはるかに遥かなる古代ホラズム文明の深い地層を物語ってくれます。要塞の名前に同じく「カラ」と付いているため近隣にあるように思えますが、実際には遺跡ごとの距離や未舗装道路の状況は千差万別です。バスや列車などの定期公共交通機関だけで1日に複数の遺跡をまとめて巡るのは困難です。そのため、宿泊先のフロントや正式に登録された旅行代理店を通じて信頼できる車両と運転手を手配し、燃料費や通行料を含めた正確な費用と帰着時刻を書面やメッセージで明確に確認しておくのが安全です。

乾燥した砂漠気候のもとでは、地図上では近い距離であっても、身体が感じる疲労感はずっと大きくなります。十分な飲料水やつばの広い帽子、日焼け止め、そして肌を保護する薄手の長袖の衣服を必ず準備しておく必要があります。夏の真昼の土の要塞には、日差しを遮る日陰がほとんどありません。歳月に削られた城壁の端は、足を踏み入れた瞬間に崩れ落ちる危険があるため、写真を撮ろうと崖っぷちに無理に立つことのないよう注意しなければなりません。また、足元に転がっている遺跡の日干しレンガのかけらや割れた陶片を記念品代わりに持ち帰ってはなりません。いくら小さな破片であっても、元あった場所から離れてしまえば、それが宿していた貴重な考古学的文脈や情報が永遠に失われてしまうためです。

ホラズムの文化遺産は、壮大な建築物の外でも生き生きと息づいています。ヒヴァとホラズム地方に伝承されてきた伝統舞踊「ラズギ」は、2019年にユネスコの人類無形文化遺産の代表一覧表に記載されました。[C039] 現地で公演を鑑賞する際には、踊り手の素早い回転や華麗な手つきばかりを追うのではなく、軽快な打楽器のリズムに合わせて身体の中の部位から所作が始まるのかに注目してみるとよいでしょう。息づく伝統とは、博物館のガラスケースの中に閉じ込められた剥製の遺物とは異なります。舞台上の演奏者の調べと踊り手の身のこなし、そしてそれを見守る観客の呼吸が重なり合い、一瞬一瞬新しく花開く生命体なのです。

四つの城門から街を読み解く

イチャン・カラの城郭は南北に細長い長方形をしています。ユネスコの資料によると、南北約650メートル、東西約400メートルの空間の中に街が密集しています。[C004] 一見するとこじんまりとした広さに思えますが、幾重にも入り組んだ迷路のような路地を歩いていると、体感する距離はずっと長く感じられます。西門であるオタ・ダルヴァザは、大半の旅行者が最初にくぐる代表的な出入口です。一方で北門や南門、東門へと足を向けると、記念碑的建築物の先に広がる地元住民の生活空間や外側の街並みへと視野を広げることができます。

城門は街へと入る通路であると同時に、内外を行き交うすべての流れを管理し記録する関門でもありました。かつては砂漠を渡ってきた隊商（キャラバン）を迎え入れて徴税や物資の検査を行い、夕暮れが迫ると門を固く閉ざして街の治安を守りました。現在の城門もまた、入場券の改札や観光案内、土産物店、車両の進入規制といった多彩な役割が一体となっています。城門をくぐる際には、記念写真を撮ることと同じくらい、自分がどの門から入ったのかを地図アプリにきちんと記録しておくことをお勧めします。夜になると土壁の佇まいがどこも似通って見え、帰り道に方角を見失って迷いやすくなるためです。

多くの人々でにぎわう西門のあたりを抜け、東へとゆっくり歩を進めると、アラクリ・ハーン・マドラサや伝統市場、そしてかつての隊商宿の遺構が次々と姿を現します。ユネスコは、イチャン・カラをマドラサ、市場、隊商宿（キャラバンサライ）が完全な構造を保って共存している卓越した遺跡であると説明しています。[C004] 隊商たちのラクダや荷物が留まった隊商宿は、現代のホテルと物流倉庫を兼ね備えた複合施設でした。かつてのヒヴァの莫大な富は、宮殿の中で自然に湧き出たものではありません。陰しいシルクロードを越えてきた珍奇な品々がこの市場で選別され取引される活気ある営みの中で、着実に蓄えられていったのです。

パフラヴァン・マフムド廟を包み込む青いタイル装飾は、先述のカルタ・ミナルとはまた異なる深みのある落ち着いた趣を漂わせています。ユネスコはこの廟をイチャン・カラの中核をなす代表的な歴史的建造物の一つとして挙げています。[C004] パフラヴァン・マフムドは優れた詩人であり比類なき力持ちでもあった人物で、宗教的にも敬愛される聖者としてヒヴァの人々の心に深く刻まれています。廟を訪れる際は、伝説的な英雄の物語に思いを馳せる楽しさとともに、ここが神聖な祈りの場であると

いう点を忘れず、厳かな参拝マナーを守らなければなりません。参拝者で混雑する時間帯には、狭い出入口を塞いだまま長時間立ち止まって写真を撮ることのないよう配慮が必要です。

城壁の内側にあるイチャン・カラだけでなく、その外側を取り囲むディシャン・カラもまた、ヒヴァの紛れもない一翼を担っています。世界遺産の案内板などでは内側の城郭が主に取り上げられがちですが、実際の住民の日常の暮らしや現代都市の基本機能は、外側の城郭都市へと自然につながっています。2026年にユネスコがイチャン・カラとディシャン・カラを一体として捉え、バランスの取れた保存開発計画を策定するよう求めたのも、両者が歴史的・機能的に決して切り離せない有機的な関係にあるためです。[C005] 城壁の内側の古建築だけを見栄えよく整え、外側の生活圏で無秩序な開発を許してしまえば、内側の城郭都市が宿す歴史的景観や価値そのものまで揺らぎかねません。

城門を抜けてディシャン・カラ方面へ足を踏み入れると、道幅や歩行環境、行き交う車の速度が内側とは一変します。静寂に包まれた城郭内でのんびりと散策していた感覚をそのまま外でも保つわけにはいきません。車道を渡る際には信号機や周囲の車の動きを注意深く見極める必要があります。観光地図に詳しく載っていない一般の住宅街の路地を巡る際には、すれ違う住民に私有地ではないかを丁寧に確認するようにします。外側の街の日常を垣間見るという口実で、他人の生活空間を無遠慮に覗き見たり無断で立ち入ったりする行為は慎むべきです。

光よりも先に温度を感じ取る夏

ヒヴァの真夏には、空から照りつける強烈な日差しが乾いた土壁や石畳に照り返し、四方から熱気が立ち込めます。地図上では城壁内の路地が短く見えても、日差しを遮る木一本ない炎天下を歩いていると、体力は急激に消耗します。涼しい早朝や夕暮れ時に屋外の路地を歩き、日差しが厳しい真昼には柱の影が涼しいジュマ・モスクや博物館の屋内、アイヴァンの日陰にとどまるように動線を組むのが賢明です。小さな鞆に常に水筒を入れて持ち歩き、喉の渇きを覚える前に少しずつこまめに水分を補給しておきましょう。

もし歩いていて激しい喉の渇きや頭痛、めまい、吐き気などの症状が現れたら、直ちに写真撮影を中断し、エアコンの効いた屋内や涼しい木陰を探して休息を取る必

要があります。一緒に歩いている同行者のろれつが回らなくなったり足元がおぼつかなくなったりした場合は、躊躇することなく熱中症を疑い、周囲に助けを求めなければなりません。ウズベキスタンの救急医療の電話番号は103番、総合緊急通報番号は112番です。[C030] 砂漠気候の街に来たのだからこの程度の暑さは我慢すべきだという思い込みは、重大な事故につながる恐れがあります。

砂漠から土埃が吹き付ける風の強い日には、屋外でカメラのレンズを交換している間にボディの内部へ細かな砂埃が入り込み、機材を痛めてしまいがちです。しかし、高価な撮影機材を守ることよりも、旅行者自身の目や呼吸器を守ることのほうが先決です。砂嵐が激しい日にはマスクや保護用眼鏡を着用して健康を守りましょう。高い城壁の上で突然の突風にあおられて帽子が飛ばされたとしても、帽子を拾おうと手すりのない城壁の縁へ慌てて身を乗り出すような危険は避けなければなりません。

日が暮れた後は、昼間のうちに地図アプリに登録しておいた出入口や宿泊先の場所を、オフラインマップで念入りに確認しながら歩きます。路地を照らすほのかな夜間照明は風情があるように見えても、古びた石段や突き出た敷居は暗がりには隠れて足を取られやすくなります。足元を安全に照らす小型の懐中電灯をひとつ携帯しておく心強いものです。ただし、明るい懐中電灯の光で住民が暮らす家の窓を正面から照らすことのないよう配慮が必要です。

城壁の内側にある宿と城壁の外側の宿には、それぞれ明確な一長一短があります。内側に泊まれば、観光客のまばらな静けさに包まれた早朝や深夜の路地の風情を心ゆくまで味わうことができます。その一方で、一般車両が宿の目の前まで入れないため、凹凸のある石畳の上を重いスーツケースを引きずって運ばなければならない負担が伴います。城壁の外の宿は鉄道駅や空港への移動に便利ですが、主要な遺跡の観光エリアを行き来するたびに毎回時間をかけて歩かなければなりません。宿を予約する前に、どの城門から出入りするのか、タクシーが宿の入口のどこまで乗り入れられるのか、建物内にエレベーターがなく急な階段しかないのかなどを事前に確認しておくことをお勧めします。

路地で道に迷ったときは、目立つミナレットの塔ひとつだけを頼りに方角を探ろうとしないほうが賢明です。狭く曲がりくねった路地の奥深くに入り込むと、低い屋根に遮られて肝心の高い塔が見えなくなり、似通った土壁ばかりが視界に続くことになりがちだからです。東門や西門、ジュマ・モスク、そして滞在先の宿のように、互

いに十分離れた主要な拠点を3か所ほど地図にあらかじめ保存しておくのが安全です。携帯電話のバッテリー残量が少なくなってきたら、画面の明るさを下げて現在の地図画面をスクリーンショットで保存しておきます。さらに、紙の手帳に宿の名前をウズベク語やロシア語ではっきりと書き留めておけば、道を尋ねる際に言葉が通じなくても容易に助けを得ることができます。

土産物店で品物や装飾品の写真を撮る際には、たとえ購入しない場合でも、まず店主に丁寧に断りを入れるのが礼儀です。値段交渉をする際にも、感情的になって言い争う必要はありません。自分が考える妥当な価格を落ち着いて明確に提示し、折り合いがつかなければ軽く微笑んで立ち去ればよいのです。手仕事で丹精込めて作られた工芸品は、機械製品と違って完全に同じ形のものがふたと存在しません。形や色合いのわずかな違いを欠点とみなすのではなく、どのような素材を使い、どのような工程を経て作られたのかを店主に穏やかに尋ねてみるのもよいでしょう。旅がもたらす永い記憶は、値切って浮かせたわずかなお金よりも、その過程で交わした温かい対話の中にこそ深く刻まれるものです。

城壁の中の夜は静かに更けていきますが、その中で暮らす人々の日常が止まることはありません。

ヒヴァの一日は、それほど広くない範囲の中で深みを増していきます。夜明けには人通りのない路地のひんやりとした土壁に向き合い、午前にはジュマ・モスクの柱の間から差し込む柔らかな光に目を向けます。暑い真昼にはアイヴァンの日陰で息を整え、日暮れ時には城壁に上ってミナレットが指し示す夕焼けの方角を改めて確かめます。有名な名所の数を忙しく巡るよりも、同じ路地を時間帯や日差しの趣を変えて二度三度とゆっくり歩いてみるほうが、ヒヴァの息づかいを感じるには適しています。

街を離れる際にカルタ・ミノルを再び見上げると、初めに目にした未完成ゆえの物足りなさとはまったく異なる意味が目に留まります。たとえ頂までそびえ立つことはできなかったとしても、この塔は過ぎ去った歳月の中でヒヴァを指し示す心強い基準点となってくれました。イチャン・カラもまた、昔の姿を剥製にして閉じ込めた箱などではありません。家々には人が暮らし、新しい鉄道が街をつなぎ、遺跡を守る保存計画が時代に合わせて書き直されています。城壁は、滔々と流れる時間を押しとどめることはできませんでした。その代わりに、時の波が自由に出入りできる城門を世界に向けて開いておいたのです。

第15章 ヌクス・テルメズ・フェルガナと小さな町々

ウズベキスタンの地図を広げてみると、国土が一方向に長く伸びているわけではありません。それにもかかわらず、ここを旅する感覚は、まるで一つの国の中でいくつもの気候帯を渡り歩いているかのようです。北西のヌクスでは、風が乾いた塩と埃を運んで吹き抜けます。南のテルメズでは、アムダリヤ川の向こうにアフガニスタンの大地が目の前に迫ります。東のフェルガナ盆地では、険しい山脈が広大な平野を心地よく包み込んでいます。この三つの地域を並べて眺めてみると、ウズベキスタンが「青いドームの国」という断片的なイメージよりもはるかに広く、多様な姿を秘めていることが見えてきます。

本章で扱う旅のルートは一直線ではなく、大きく曲がりくねっています。ヌクスからテルメズへまっすぐ南下し、そこから再びフェルガナへ移動すると、移動に費やす時間が大幅に増えてしまいます。地図を見ながら日程を立てる旅行者が、長い移動距離を前に思わず足踏みしてしまう理由がここにあります。こうした場合は、首都タシュケントを拠点とし、航空便や鉄道を組み合わせて利用するのが現実的です。2026年8月のウズベキスタン航空の公式運航状況によれば、タシュケントとヌクス、テルメズ、フェルガナを結ぶ国内線が就航しています。[C015] 便数や出発時刻は季節や曜日によって変動します。訪れる都市の選定と移動手段の選択は、時刻表の画面を開きながら同時に進める必要があります。

ヌクス、砂漠に隠れた美術館

ヌクス市内に入ると、道幅の広い道路がまっすぐ延び、低い建物の向こうに空が広々と開けています。見知らぬ街路に立つ旅行者の視線は、自然とイーゴリ・サヴィツキー記念カラカルパクスタン共和国立美術館へと向かいます。ウズベキスタン公式観光案内は、ヌクスをカラカルパクスタン共和国の首都として紹介し、サヴィツキー美術館とベルダフ国立博物館を代表的な名所として挙げています。[C007] 古代遺跡が真っ先に思い浮かぶ他のシルクロードの都市とは異なり、この街の最初の光景に20世紀美術が位置している点は独特です。

サヴィツキー美術館は、旧ソ連時代のロシア・アヴァンギャルド美術とカラカルパクの民族美術、そして考古学の発掘資料が一堂に会する空間です。旅の準備資料には、ここの所蔵点数がそれぞれ異なる数字で記されていました。公式の観光資料ですらページごとに数値が異なるため、本文では総所蔵点数を特定の数字として断定しません。作品の価値が数量の多寡で損なわれないよう、収集家がどのような志を抱いてなぜ集めたのかに焦点を当てます。政治的弾圧や戦争、大都市中心の嗜好から追いやられて破棄されそうになった作品群が、遠く離れた砂漠の街で無傷のまま生き残ったという収集の歴史こそが、深い意味を持っています。

美術館を訪れた人々は、華やかなロシア・アヴァンギャルド美術に目を奪われ、カラカルパクの人々の生活文化をつい見過ごしてしまいがちです。伝統的な移動式テントであるユルタの装飾や衣服、装身具、織物には、砂漠の環境のなかで花開かせた日々の色彩と構造が息づいています。布地に刻まれた文様は、目を楽ませる装飾であると同時に、自らの属する部族や祖先の記憶を表す印でもあります。コンピュータ画面の中の小さなアイコン一つに多くの情報が凝縮されているように、織物の色合いや繰り返される文様もまた、長い歳月をかけて共同体がともに読み解いてきた言語なのです。解説パネルを落ち着いて読んだあとで再び作品を眺めると、見慣れなかった形が意味を持つ文章へと姿を変えて迫ってきます。

美術館を訪れる前には、公式の案内窓口を通じて当日の営業時間や開放されている展示室をあらかじめ確認しておく必要があります。膨大な所蔵品を誇る美術館であっても、遺物の保存修復処理や展示替え作業のために一部の空間が閉鎖されていることがあります。写真撮影の可否や追加料金の規定は、入場券を購入したあと、案内スタッフに直接確認します。有名な作品だけを急いで写真に収めて立ち去るのではなく、一つの展示室にじっくりととどまり、作品の素材や制作時期をつぶさに比べながら鑑賞する姿勢が、この美術館にはよく似合います。

ヌクスを旅する際には、現地の空気の状態を日程計画に必ず反映させなければなりません。英国外務省の健康案内によると、カラカルパクスタンおよびホラズム地域では、干上がったアラル海方面から吹き込む塩分や埃、汚染物質を含んだ風により、年間を通じて大気の質が悪化することがあります。子供や高齢者、呼吸器系に持病のある人は、こうした大気からより大きな影響を受けるおそれがあります。[C034] 大気の質が悪い日には屋外での予定を減らし、顔に密着するマスクを着用します。水分

は定期的かつこまめに補給し、強い喉の渇きを覚えてから一度に大量に飲むような方法は避けたほうが賢明です。

ムイナク、消えた水の跡

ヌクスを出発して北のムイナクへと向かう道のりは約200キロメートルです。公式観光資料によれば、ムイナクはかつてアラル海沿岸で栄えた大きな漁業都市でしたが、現在では干上がった海の傍らに佇む街になったと説明されています。船が打ち捨てられた場所、ムイナク地域博物館、新たに形成されたアラルクム砂漠、そしてウスチュルト台地が主な訪問スポットとして紹介されています。[C008] 車窓の外に果てしなく広がる平坦な荒野を長く見つめていると、奇妙な寂寥感が胸をよぎります。目的地に着いたとき、砂地に残された数隻の船を眺めるだけで終わらせず、海水が干上がったあとに取り残された人々の社会がどのように変化したのかに思いを馳せる必要があります。ここを一風変わった写真撮影スポットとして消費するだけでは、この現場が抱える多くの事実が見失われてしまいます。

砂地に放置された船の赤錆びた表面を見て、終末映画のワンシーンのようだと語るだけでは、そこで暮らしてきた住民たちの時間は消し去られてしまいます。漁業の停止によって役目を失ったのは、船だけではありません。魚を扱っていた加工工場や物流の輸送網が止まり、住民の生計はもちろん、独自の食文化や村の祭りに至るまでが同時に揺らぎました。アラル海の物語は、第10章で取り上げた環境問題と深く結びついています。本章では、その現場に向き合う旅行者の落ち着いたまなざしに焦点を当てます。悲劇を映える写真の背景として使うのではなく、地域博物館の展示や現地の案内を通じて、水が豊かだった時代とそれ以後の暮らしの双方を見つめます。

ヌクスとムイナクの間には、列車一本で往復できるような観光ルートはありません。日帰りの移動距離が長く砂漠の道路を走る必要があるため、車両の整備状態と運転手の休養が安全を左右します。正規に登録された旅行会社や宿泊先を通じて信頼できる車を手配し、出発前に車両番号、運転手への連絡方法、帰着予定時刻、飲料水や食事の有無を確認しておきます。個人で借りたレンタカーのほうが自由に思えるかもしれませんが、通信電波の弱い砂漠区間で道に迷ったり故障したりした場合、対処が困難になります。

吹きすさぶ風の立つ砂漠に立つと、上空から全景を収めてみたいという好奇心からドローンを飛ばしたくなるかもしれません。しかし、ウズベキスタンにおいて無人航空機であるドローンの持ち込みおよび使用は、政府の事前承認が必要な事項です。許可なく持ち込んだり使用したりした場合、機体を没収され処罰を受ける危険が伴います。[C040] 旅行前に公式な許可手続きを確認できなかった場合は、最初から携行しないほうが安全です。砂漠がもたらす広大な空間感覚は、手にしたスマートフォンのカメラでも十分に記録することができます。

テルメズ、国境で出会う仏教

テルメズはウズベキスタンの南端に位置しています。広大なアムダリヤ川のすぐ対岸はアフガニスタンの領土です。「国境の街」という言葉は、都市の印象を軍事的な話題だけに狭めてしまいがちです。しかし、テルメズの奥深い歴史の地層には、ギリシャ系バクトリア、クシャーナ、仏教、イスラムの痕跡が幾重にも重なり合っています。時代ごとに異なる宗教と言語が川の流れに沿って絶え間なく行き交いました。地理的な果てが、文化の行き止まりであったわけではありません。

ファヤズ・テパは、かつてのテルメズに位置していた仏教寺院および僧院の遺跡です。ウズベキスタン観光当局の説明によると、寺院や僧侶の住居、作業スペースを備えた中庭構造が存在し、小さなストゥーパや壁画の痕跡が残されています。ここから発掘された三尊仏像の実物は首都タシュケントのウズベキスタン歴史博物館に所蔵されており、現地のテルメズ考古学博物館には精巧な複製品が展示されています。[C009] 遺跡と博物館をあわせて巡ることで、地中から出土した遺物がどのように研究され展示されているかという文脈が自然とつながって見えてきます。

旅行の準備資料には、ファヤズ・テパの年代を1世紀から3世紀の間と記しているものもあれば、公式観光ウェブページのように紀元前1世紀まで遡るとしている説明もあります。[C009] 考古学遺跡の建立時期や使用期間は、発掘調査の解釈によって記述が異なる場合があります。そのため、特定の年に限定するよりは、クシャーナ朝時代の前後に繁栄した仏教複合遺跡として幅広く理解しておくのが賢明です。現地に到着したら、遺跡の解説板に最新の研究成果が反映されているかどうかとも直接確認してみるとよいでしょう。

近隣のカラ・テパは、砂岩の丘を掘り込んで造られた洞窟空間と日干し煉瓦の建物が調和した仏教遺跡です。崩れかけたまま残るズルマラ・ストゥーパの土構造物もまた、同地域の仏教史の広がりをお話しています。公式観光資料によれば、カラ・テパの寺院と僧院は西暦2世紀頃に建立され、ズルマラ・ストゥーパはクシャーナ朝期にあたる1世紀から2世紀頃の建築構造であると説明されています。[C009] 華やかな青いタイルが残されていない土の塊を前にすると、往時の姿を思い描く想像力が求められます。ただし、その想像は発掘資料という確かな土台の上に立脚していなければなりません。

テルメズ考古学博物館を先に見学してから遺跡へ向かうと、跡地に散らばる小さな壁の破片や土器片の持つ意味が理解しやすくなります。反対に、遺跡を先に歩いてから博物館を訪れると、ガラスケースの中の遺物に現地の温度や風の感触が重なって感じられます。どちらの順序を選ぶにせよ、これらすべての行程を半日のなかに詰め込もうとすれば、移動だけに追われることになりかねません。博物館の見学に一日、旧テルメズ遺跡の探訪に一日と、日程を分けて充てるのが効果的です。

テルメズはアフガニスタンとの国境に接する都市です。大韓国外交部の海外安全情報案内では、テルメズ地域を訪問する際にテロの危険に留意するよう記されています。[C028] 英国外務省も、2022年にアフガニスタン側からウズベキスタン南部へロケット弾が発射された事例に触れ、国境地帯における現地の報道や当局の案内に従うよう勧告しています。[C027] 市内周辺の考古学遺跡を探訪するからといって、国境管理施設に近づく理由はありません。軍事施設、国境の橋、検問所の周辺はカメラで撮影しないようにします。

国境地帯の治安情勢は、旅行の出発前日であっても急変することがあります。宿泊先の関係者、正規に登録されたガイド、外務省の渡航情報を併せて確認する必要があります。道路での検問が頻繁に行われるため、パスポートの提示を求められた際にすぐ取り出せるよう携帯します。原本を手が届かないバッグの奥深くにしまい込まず、かといって市場の路地などで人目に触れやすいポケットに入れるのも避けるべきです。規定や安全上の判断が迷うときは、遺跡の一つや二つを思い切って諦めます。日程表に残された空白は、決して失敗などではありません。

フェルガナ盆地、技が息づく道

フェルガナ盆地は、四方を山に囲まれた広大で肥沃な平野です。旅行者は往々にしてフェルガナ市だけを検索してしまいがちですが、伝統工芸の中核はコーカンド、マルギラン、リシュタンに分散しています。一つの都市ですべてを見ようとするのではなく、この三つの都市を結ぶ小さな三角形としてルートを思い描くと把握しやすくなります。コーカンドはハン国の宮殿と歴史を、マルギランは絹織物を、リシュタンは陶器を代表する場所として記憶に留めることができます。

コーカンドのフダヤル・ハーン宮殿は、タイルで装飾された正面といくつもの中庭を通じて、コーカンド・ハン国の権力を今に伝えています。宮殿だけを見て街を後にするのではなく、周辺の市場やモスクの路地も併せて歩いてみます。統治権力の建築と庶民の生活との間にある距離感が目に入ってきます。博物館の内部を見学する際には、復元された部屋と創建当初の姿をとどめる部分とを見分ける視点も大切です。色彩が鮮やかだからといってすべてが新造されたわけではなく、古びて見えるからといってすべてが昔の遺物であるわけでもありません。

マルギランのアトラスやアドラスは、糸を先に染色し、その糸を用いて文様を織り出す織物です。完成した布地の上に後から模様を型押し・プリントする手法とは異なります。絹糸を部分ごとに縛って染めたあとに解くことで色の境界を作り出し、その糸を機に掛けて一本ずつ織り上げます。ユネスコの記録によれば、マルギラン工芸開発センターは2007年に設立され、アトラスおよびアドラスの製造技術教育、展示、工芸バザールの運営、資料刊行を継続して行ってきました。この伝承事業は、2017年にユネスコの最良保護実践台帳に登録されました。[C011]

ここでの織りの工程は、計算手順のように作業順序が精密に噛み合って進みます。桑の葉を与えて蚕を育て、繭から糸を紡ぎ出して撚りをかけ、きれいに洗って染色した後に機にかけて織物に仕上げます。ユネスコは、養蚕と伝統的な絹生産技術がシルクロードの文化交流と結びついており、2022年にウズベキスタンを含む複数国の共同無形文化遺産として登録されたと説明しています。[C012] 一枚の絹織物には、農業や染色の化学、文様設計、職人の手の力が過不足なく溶け込んでいます。

工房を訪れる際は、目の前の実演が実際の完全な制作工程なのか、旅行者向けの短い体験コースなのかを丁寧に尋ねてみます。「天然染料」という商人の言葉だけで

品質を軽率に判断することはしません。経糸と緯糸の素材、手織りかどうかの別、染色法や洗濯方法を入念に確かめます。完成品の価格がそれぞれ異なる理由を理解すれば、品物に対する姿勢も変わってきます。工芸家が注いだ時間を値踏みするような値切り交渉をするよりは、旅の予算に見合った小さな小物を心を込めて選ぶほうが賢明です。

リシタンの陶芸は、深みのある青や青緑の釉薬の色合いで知られています。ユネスコはウズベキスタンの陶芸文化を2023年に人類無形文化遺産の代表一覧表に記載しました。生活用の大皿であるラガンや水瓶、タンドール窯、小さな土の玩具に至るまで幅広い品々が作られ、陶芸技術が家族や村の共同体、陶芸学校や工芸行事において代々受け継がれていると説明しています。[C010] リシタンの学校で古参の巨匠が土を準備し、弟子に伝統文様を教える様子もユネスコの記録に収められています。[C010]

陶器を一点選ぶ際には、表面の絵柄だけを見てはいけません。底面の仕上げや微細なひび割れがないか、実際の食器用か装飾用か、安全な運搬梱包ができるかを確認します。古い骨董品のように見える品物は、空港からの出国時に文化財の持ち出しをめぐる問題が生じることがあります。新しく作られた工芸品を購入する際は、領収書と制作者情報の証明書を受け取っておきます。割れやすい器を持ち帰るなら、航空機の機内持ち込み手荷物規定も確認しておく必要があります。ウズベキスタン航空は2026年5月の発表で、搭乗客の身の回り品と機内持ち込み手荷物のサイズおよび重量規定を個別に明記しました。[C016]

盆地内で都市間を移動することは、地図上の距離から推し量るよりも時間がかかる場合があります。フェルガナ、マルギラン、リシタン、コーカンドの間には鉄道やバス、タクシーが運行していますが、出発地のターミナルが一か所に集まっておらず分散していることがあります。ウズベキスタン鉄道の公式電子乗車券サイトでは、フェルガナ、マルギラン、コーカンド、アンディジャン、ナマンガン、ポプが検索可能な駅リストに表示されます。[C036] 検索結果に列車が表示されないからといって、鉄道路線自体が運行していないと早合点する必要はありません。該当する日に座席販売が開始されていないか、直通便がない日である可能性があります。

山に囲まれた盆地地形では、地震や大気の問題もあらかじめ考慮しておく必要があります。韓国外交部は東部のナマンガン、フェルガナ、アンディジャンで地震が頻

発するおそれがあるとして注意を呼びかけています。[C028] イギリス外務省もまた、冬季の大気汚染が首都タシュケントやフェルガナ盆地の主要都市で悪化する可能性がある」と記しています。[C034] 宿に入ったら、まず非常口と階段の位置に目を留めておきます。地震が発生した際にはエレベーターを使わず階段で避難するという安全原則を、同行者と事前に確認しておきます。

シャフリサブスとナヴォイ、中継都市の持つ意味

サマルカンドの南に位置するシャフリサブスは、征服君主アミール・ティムールが生を受けた故郷です。二つの都市の間を行き来する際は高速道路や山道を通して移動しますが、天候の変化や道路規制によって所要時間が大幅に延びることがあります。シャフリサブスでは、ユネスコ世界遺産区域の保存問題や大規模な復元事業を巡る議論が長年にわたり続いてきました。目の前に広がる広大な広場だけを見て、かつての都市が元からがらんだとうだったと早合点してはなりません。広場の造成によって失われた居住の場や古い路地の痕跡を、解説資料などから落ち着いて探ってみます。

ナヴォイは、多くの旅行者が列車の窓越しに通り過ぎてしまう都市です。計画都市であり産業の中心地という顔を持ち、キジルクム砂漠へ向かう玄関口という性格も帯びています。歴史遺跡ばかりを求める旅では何の変哲もない空白地のように映るかもしれませんが、ウズベキスタンの現在の経済や都市設計を観察する上では意義深い場所です。すべての都市に長く滞在する必要はありません。ただ、列車を乗り換えるために束の間立ち寄る乗換地点も、数多くの人々が暮らす生きた都市であるという事実思いを馳せてみます。

ヌラタやギジュドゥヴァンのような小さな都市は、大規模な観光地よりも伝統工芸やオアシスの水、素朴な宗教生活の一端を見せてくれます。ギジュドゥヴァンの陶芸は、リシタンの陶器とは色も文様も大きく異なります。二つの地域を比較する際、どちらが優れているかを論じるのではなく、土や釉薬、窯の形状、消費層の好みがどのように異なる様式を生み出したのかを観察してみます。工房への訪問は職人の作業時間帯に合わせ、制作実演を当然の無料サービスとして求めない配慮が求められます。

小さな都市で宿を選ぶ際は、インターネットの星評価よりも実際の立地や運営実態の確認が重要になります。列車やバスの到着が深夜になる場合は、出迎えて鍵を開けてくれる人がいるかどうかを事前に確認します。外国人宿泊登録（レジストラツィ

ヤ)を正常に処理し、公式な確認書類を発行できるかどうかも確かめます。[C040]宿泊費の決済方法や予約のキャンセル条件は、メッセージのやり取りで記録に残しておきます。停電や温水の出が遅い状況に備えて、モバイルバッテリーや乾きやすい薄手のタオルを用意しておくとう安心です。

地域を移動していくと、使われる言語の響きや肌触りも変わってきます。ヌクスやモイナクではカラカルパク語に触れることができ、ブハラではタジク語が耳に入り、多くの都市でロシア語が通じます。ウズベク語が国の公用語であるという事実と、日常の暮らしの中で複数の言語が併用されているという事実は、等しく併存しています。話し方や外見だけで相手のアイデンティティを軽率に決めつけてはなりません。どの言語が話しやすいかをまず尋ね、翻訳画面を並んで見せ合いながら意思疎通を図ろうとする姿勢が大切です。

地方都市の市場や小さな食堂では、国際クレジットカード決済が利用できないことがあります。イギリス外務省の安全情報でも、主要大都市の郊外では国際カードの取り扱いや現金自動預払機(ATM)の利用が制限される場合があると案内されています。[C027]大都市を離れる前に、ウズベキスタンの通貨であるスムの現金を小額紙幣で用意しておきます。ただし、所持している現金の全額を一箇所の財布にまとめず、小分けにして保管します。

小さな都市のための旅の設計

ウズベキスタンの西部、南部、東部を一度に巡るなら、訪れる都市の数よりも移動日をカレンダーにまず書き込みます。ヌクスやモイナクでは土埃と長い一本道が待ち受けています。テルメズでは遺跡間の移動や国境地帯における安全確認の手続きが必要です。フェルガナ盆地では職人工場の作業時間帯に合わせなければなりません。そのため、各地域で少なくとも半日程度は予定を入れない余白の時間を設けておきます。日程に遅れが生じなければ、その時間は地元の市場や喫茶店でのんびりと過ごせば十分です。

旅行の資料は二つの層に分けて保管しておきます。一方の層には、滅多に変わらない文化遺産の解説や博物館の背景知識を集めておきます。もう一方の層には、航空便の時刻、見学の入場時間、道路状況、大気質、外務省の安全告知などを収めておきます。前者は書籍やユネスコの資料を通じて事前に確認しておくことができます。後

者は出発直前に最新情報として改めて取得する必要があります。更新頻度の異なるデータを一つのファイルにごちゃ混ぜにしない工夫です。

地域を跨いで移動する日には、到着後に大掛かりな観光予定を無理に入れ込まないようにします。飛行機や列車が定刻に到着したとしても、宿のチェックインや宿泊登録、現金の用意、食事、次の移動の確認などに思いのほか多くの時間と気力を費やすためです。モイナクで砂塵に見舞われたり、テルメズで検問に手間取ったりすれば、疲労が蓄積して体感的な到着も遅れます。空けておいた夜の時間は決して無駄ではなく、翌日の冷静な判断力を保つための心強い緩衝地帯となります。

子どもと一緒に旅であれば、難しい博物館の名前を覚えるよりも、その日一日に出会う感覚をまず決めてみます。ヌクスでは一枚の絵の中に使われた色彩を探し、テルメズではレンガと土の手触りの違いを手で触れる代わりに目で比較してみます。マルギランでは糸が布へと変わっていく順序を頭の中に描いてみます。複雑で難解な歴史も、具体的な一つの問いに絞って眺めてみれば、心の中に長く刻まれます。

ヌクスでは、危うく消え去るところだった絵画の数々が生き残りました。テルメズでは、乾いた土の下に埋もれていた仏教交流の道筋が再び姿を現しました。マルギランとリシタンでは、悠久の技術が職人の手を経て弟子へと受け継がれています。三つの地域は互いに遠く離れていますが、旅人に同じ問いを投げかけてきます。何かを歴史に残すということは、貴重な品を博物館のガラスケースに収めておくだけで終わるものなのか、と。その答えは、人や場所、技術が絶え間なく交わる現在の光景の中にあります。小さな都市が宿す光は、決して薄暗くも鈍くもありません。大都市の影の外側に、静かに佇んでいたにすぎないのです。

第16章 鉄道・航空・都市交通の利用法

タシュケント駅の電光掲示板は、気ぜわしい旅行者の心とは対照的に、静かに表示を切り替えていきます。列車番号や出発時刻、ホームの情報が1行ずつ移り変わるなか、手にしたパスポートとスマートフォンの中のQRコードを確認しながらも、チケットに記された駅名が合っているのか、ふと不安になることがあります。ウズベキスタンで道に迷ったり日程が狂ったりするような大きな失敗は、複雑な技術のせいではなく、名前の似た都市や見当違いの駅、パスポート番号の誤入力といった、ほんの些細な情報の食い違いから生じるものです。

ウズベキスタンの交通網を一つの大きな体系として把握すると、移動の計画が立てやすくなります。鉄道はタシュケントやサマルカンド、ブハラといった中心都市を結ぶ大黒柱の役割を果たします。国内線の航空便は、ヌクスやウルゲンチ、テルメズ、フェルガナのような遠隔地へ移動する際、道中で過ごす時間を短縮してくれます。市内に入れば、地下鉄やバス、配車タクシーが宿の前までの残りの距離をつないでくれます。ここで個々の移動手段の性能以上に注目すべきなのは、それらが組み合わさる乗り継ぎ地点です。空港から鉄道駅まで、あるいは駅から宿までのわずか10キロメートル余りの区間が、旅の全行程を大きく狂わせることもあるからです。

切符を買う前に都市名を駅名に置き換える

公式の鉄道電子チケットサイトの検索一覧には、タシュケント、サマルカンド、ブハラ、ヒヴァ、ウルゲンチ、ヌクス、ナヴォイ、アンディジャン、カルシ、ジザフ、テルメズ、コーカンド、マルギラン、ポプ、ナマンガンといった都市が登録されています。[C036] 旅行者は日程表を作成する際、有名な観光地名だけを書き留めるのではなく、実際に利用する出発駅と到着駅の名前を具体的に記載しておく必要があります。たとえば、ブハラの歴史地区と実際の鉄道駅は遠く離れているため、駅から旧市街までの移動時間も行程にゆとりを持って組み込んでおけば、現地で慌てずに済みます。

向かうべき駅を間違えたり、予約画面が開かなかったり、カード決済が止まったり、航空便が遅延したりといった事態はいつでも起こり得ます。荷物が時間どおりに

出てこず、道路までもがひどく渋滞すれば、時間は容赦なく過ぎ去っていきます。旅先で直面するトラブルは予告もなく不意に訪れますが、これらに落ち着いて対処するには、決められた手順を守り、時間に余裕を持っておく必要があります。

タシュケント市内には鉄道駅が複数あります。そのため、乗車券に記載された出発駅の名前を正確に確認し、その駅の地図上の位置をあらかじめスマートフォンに保存しておくのが安全です。タクシーの運転手に単に「タシュケント駅へ行ってほしい」とだけ伝えると、見当違いの駅に連れて行かれる恐れがあります。列車に乗る前日には、電子チケットに書かれた駅名、列車番号、出発時刻を宿のスタッフや公式カスタマーセンターに問い合わせ、もう一度確認しておきます。鉄道電子チケットサイトに案内されている公式コールセンターの電話番号は1005番です。[C036]

公式の予約窓口を利用することは、旅の安全を守る確かな備えとなります。鉄道サイトでは、偽造された乗車券や他人名義の切符を所持している乗客は列車に乗りできず、法的責任を問われる可能性があるとして警告しています。[C036] ネットの検索広告やメッセージャーを通じて切符の購入代行を持ちかける個人に頼るのではなく、公式ウェブサイトやアプリ、鉄道駅の窓口を直接利用しなければなりません。相手に送金してQRコードの写真だけを受け取るような取引は避け、発券された切符の名義人が自分自身になっているかを確認する必要があります。

電子チケットを購入する手順

2026年6月に改定されたウズベキスタン鉄道の電子チケット利用規約によると、乗車券の予約は公認された運行時刻表に基づき、列車の始発駅基準で60日前の現地時刻午前10時から開始されます。ただし、運行会社の事情によって販売開始日が調整される場合もあります。[C013] もっとも、60日前から購入できるからといって、座席の確保が無条件に約束されているわけではありません。旅行者が集中するハイシーズンや人気の高速列車では、予約受付が始まるとすぐに座席が埋まり、選択の幅が狭まることもあります。

切符を購入する際は、出発地と到着地、乗車日を選択して検索を始めます。希望の列車を指定した後は、客車の等級と座席の位置を確認します。公式の予約案内によれば、乗客の人数と個人情報を入力し、支払い方法を選択すると、電子チケットがメールで送信されます。[C014] このとき画面を慌てて進めず、決済を行う前にパスポー

トのローマ字氏名の綴り、パスポート番号、生年月日、性別が実際のパスポート原本と一致しているかを念入りに対照しなければなりません。1文字でも間違っていると、列車に乗る際に乗車を拒否されることがあります。

外国人旅行者は、現地に実際に携行する有効なパスポート情報に基づいて電子チケットを予約する必要があります。パスポートにキリル文字とラテン文字が併記されている場合は、公式案内に明記された入力規則に落ち着いて従わなければなりません。決済前であれば誤った内容を簡単に修正できますが、決済完了後は情報の修正が保証されないためです。[C014] 家族や同行者の切符を代表者1人がまとめて購入する場合でも、乗車する全員の個人情報を漏れなく確認する必要があります。オンライン規約上、1回の注文で決済できる人数は最大4名までとなっています。[C013]

座席を選ぶ際は、列車の名称だけを見て運行速度を安易に推測してはいけません。高速座席列車、一般座席列車、寝台設備を備えた夜行列車では、移動の所要時間や車内環境が異なります。夜行列車のうち、プラツカルトは通路に向かって開放された多人数用の寝台区画で、クーペは扉の付いた個室寝台です。エスヴェや高級客車は、少人数の乗客がゆったりと利用できるようになっています。公式規約によると、プラツカルト、クーペ、エスヴェ、高級客車の乗車券価格には寝具類の利用料金が含まれています。[C013]

座席指定の客車を利用する際、窓側や通路側の席を希望どおりに選べない場合があります。2026年6月の規約によると、座席はシステム上で順番に自動割り当てされ、窓側や通路側といった個人の好みを個別に反映することはできません。[C013] 同行者と並んで座りたい場合は、決済の直前に座席配置図を確認する必要があります。もし異なる客車にある座席を分けて選択する場合は、別々に注文手続きを進めなければならないこともあります。[C013]

決済画面で処理が止まった場合

公式予約の案内画面には、ウズカードやフモといった現地の決済ネットワークをはじめ、Visa、Mastercard、Mir、Google Pay、Apple Pay、UnionPayなど多様な手段が提示されます。[C014] 2026年6月の規約でも国際クレジットカードやデジタルウォレットによる決済方式が別個の項目として扱われています。[C013] しかし、韓国で発行されたカードが現地のサイトで常にスムーズに決済できるとは限りません。カード会社による海外決済ブロックや本人認証手続き、ブラウザのポップアップブロック設定、現地のシステム状態などによって、決済の承認が止まったり失敗したりすることがあります。

もし決済処理中に画面が止まってしまっても、焦って承認ボタンを何度も連続して押しはいけません。まずは金融機関のアプリの利用明細と鉄道サイトのアカウントの予約履歴を落ち着いて照合し、乗車券が正常に発券されているかを確認したうえで再試行すべきです。二重決済が疑われる場合は、該当の画面と取引明細を保存したうえで、公式カスタマーセンターに問い合わせるのが安全です。さらに、出発直前の予期せぬ決済トラブルにも対処できるよう、予備の国際決済対応カードや緊急用の現金を併せて用意しておくといよいでしょう。

ウズベキスタン現地時刻の午前2時30分から3時にかけては、鉄道の発券システムの技術点検が行われるため、電子チケットの発行が一時中断されることがあります。[C013] 韓国とウズベキスタンの間には4時間の時差があり、韓国のほうが4時間進んでいます。[C029] 深夜に韓国から切符を予約していて突然エラー画面が表示されても、カードやアカウントの不具合だと早合点せず、ウズベキスタンの現地時刻がシステム点検の時間帯に重なっていないかをまず確認する必要があります。

電子チケットの発券が完了したら、PDFファイルをスマートフォンの内部ストレージやオフラインストレージにダウンロードし、インターネット接続がなくても開けるように保存しておきます。スマートフォンの画面の明るさ調整がうまくいかなかったりバッテリーが切れたりする事態に備え、紙に1部印刷しておくといより安心です。ウズベキスタンの国内線列車の電子チケットは、スマートフォンの画面上のQRコードを見せるか、A4用紙に印刷した紙を提示することで乗車でき、これは駅や客車に読み取り機器が備えられている場合に該当します。[C013] 公式の購入案内でも、国内

線列車の場合は電子チケットの印刷を義務付ける条件はないと説明されています。

[C014]

国境を越える国際列車には、国内線とは異なる乗車ルールが適用される場合があります。独立国家共同体（CIS）加盟国間を行き来する一部の路線で電子チェックインに対応していない場合は、ウズベキスタン現地の鉄道駅窓口に立ち寄り、正式な紙の乗車券に引き換える必要があります。[C013] したがって、国境をまたぐ日程を計画する際は、国内線の利便性だけで判断せず、所持しているパスポートやビザ、入国審査の条件、紙の乗車券への引換義務の有無などを、出発の数日前に公式窓口を通じて事前に確認しておく必要があります。

乗り継ぎ時間は十分に確保する

鉄道の利用規約では、誤解や乗り遅れによるトラブルを防ぐため、駅間の乗り継ぎ時間を最低でも3時間以上確保するよう推奨しています。[C013] 同じ駅構内で別の列車に乗り換える日程であっても、運行の遅延、出入口での保安検査、広いホーム間の移動時間などを漏れなく計算に入れておく必要があります。異なる駅へ移動して乗り継ぐ場合は3時間でも余裕がないことがあるため、地図アプリで車での移動距離や通勤ラッシュ時の道路渋滞まで考慮しておかなければなりません。

飛行機から降りて列車に乗り換える場合は、さらに十分な時間的余裕が求められます。入国審査や荷物の受け取り、両替、SIMカードの購入、市内の交通渋滞など、予期せぬ変動要因が次々と現れるからです。国際線で到着した当日にサマルカンド行き的高速列車を過密なスケジュールで組み込んでしまうと、飛行機が一度遅延しただけでその後のすべての交通手段が狂ってしまいかねません。到着初日はタシュケント市内で1泊し、翌朝に出発したとしても、それは時間を無駄にすることにはなりません。不測のトラブルを柔軟に吸収してくれる貴重なバッファーとなってくれるのです。

鉄道駅には、記載された列車の出発時刻よりも早めに到着しておくほうが安心です。駅舎の入口で手荷物の保安検査を受ける必要があり、駅員がパスポートと乗車券を一人ひとり照合するためです。規模の大きな駅では、出入口から乗車ホームまで歩く距離も決して短くありません。飲料水や簡単な軽食は駅に来る前に用意しておき、手荷物の数を煩雑に増やさないようにします。列車が途中の駅に一時停車している間

にホームの外へ遠くまで歩いていくような行動は、乗り遅れる危険が非常に高いため控えるべきです。

夜行列車を利用する際は、パスポートや現金、スマートフォンなどの貴重品を小さなバッグに入れ、就寝時も身近な場所に置いておく必要があります。英国外務省の安全ガイドラインによると、夜行列車に乗車する際は貴重品を厳重に管理し、個室内に荷物だけを置いたまま席を離れないこと、また夜間は客室のドアを内側から施錠することが推奨されています。[C027] 現地で出会った乗り合わせの乗客の温かい親切をむやみに警戒する必要はありませんが、熟睡している間に起こり得る紛失事故に備え、各自で所持品の管理方法を決めておく姿勢が安全につながります。

航空便が時間を買ってくれる区間

首都タシュケントからヌクス、ウルゲンチ、テルメズ、フェルガナへ移動する際は、国内線の航空便を利用するほうが、陸路で費やされる長い移動時間を短縮できます。2026年8月のウズベキスタン航空の公式運航状況には、これらの都市間を結ぶ路線が実際に表示されていました。[C015] ただし、この記録は特定日の運航情報であるため、毎日同じ便数や時刻で飛行機が飛ぶとは限りません。実際の旅行日程が決まったら、航空会社の公式予約システムを通じて当日の運航状況を改めて確認する必要があります。

航空便は空を飛んでいる純粋な飛行時間が短いだけにすぎません。市内から空港までの移動時間や搭乗手続き、保安検査、到着後の荷物の受け取りにかかる時間をすべて合わせると、近距離区間では高速鉄道よりもむしろ時間がかかることもあります。タシュケントとサマルカンドのように鉄道の便が良い都市間では、都心へのアクセス性まで比較検討する必要があります。一方、ヌクスやテルメズのように距離の離れた西部や南部の地域へ向かう場合は、航空便の効率性が高まります。目的地までの距離に応じて、移動手段を柔軟に使い分けることが大切です。

2026年5月15日、ウズベキスタン航空は機内持ち込み手荷物の規定を告知しました。前の座席の下に収納する身の回り品バッグは、重量5キログラム以下で、3辺の合計が92センチメートルを超えてはなりません。頭上の棚に収納する機内持ち込み手荷物は、3辺の合計が115センチメートル以下で、各辺の寸法はそれぞれ55センチメートル、35センチメートル、25センチメートルを超えてはなりません。[C016] そ

の際、バッグのキャスターや取っ手、外側に突き出たポケットの大きさまで、すべて計測寸法に含まれます。

機内持ち込み手荷物の重量制限は、エコノミークラスで8キログラム、ビジネスクラスで10キログラムです。複数のバッグを持って搭乗した場合、それらをすべて合わせて1つの手荷物とみなされ、全体のサイズ基準が適用されることがあります。[C016] 現地の市場で工芸品を買って荷物が増えた旅行者は、こうした手荷物規定をあらかじめ計算に入れておく必要があります。割れやすい陶器の器を安全に包もうとしてかさばる箱で梱包すると、重量基準は満たしていてもサイズ制限に引っかかり、搭乗口で困ることになりかねません。

航空機の客室内の収納スペースが不足している場合、規定サイズに収まっている機内持ち込み手荷物であっても、航空会社の案内に従って無料で貨物室に預け入れなければならないことがあります。[C016] パスポートや薬、モバイルバッテリー、重要な貴重品はいつでも身につけておけるよう、あらかじめ別の小さなバッグに分けておく必要があります。航空券に含まれる受託手荷物の無料許容量は、購入した運賃クラスによってそれぞれ異なるため、予約確認書で個別に確認しておくべきであり、機内持ち込み手荷物の案内告知だけを見て預け入れ荷物の規定まで推測してはなりません。

ウルゲンチ空港とヒヴァを結ぶ新たな接続

2026年8月17日、ウルゲンチ国際空港とヒヴァ鉄道駅を結ぶ11キロメートルの鉄道連絡線が公開されました。ウズベキスタン大統領府は、空港と鉄道を直接結ぶ国内初の事業であると明らかにしました。この鉄道線の開通により、ウルゲンチとヒヴァの間の移動時間は従来の80分から40分へと短縮され、年間約65万人の乗客を輸送できるように設計されています。[C006]

同区間に投入される6両編成のCR200J型電車は乗車定員が約400人で、車内無料Wi-Fiや電子機器の充電ポート、冷暖房設備、バリアフリー設備を備えていると発表されました。新型トロリーバスもウルゲンチ・ヒヴァ区間に追加投入される予定です。[C006] 旅行者は朗報と実際の運行時刻表を区別して見極める必要があります。鉄道が新たに開通したという発表が、直ちに自分の搭乗した飛行機の到着時刻とぴったり

合う列車の運行を意味するわけではないからです。航空便が遅延した際に後続で乗れる次の列車があるかどうかまで確認しておかなければ、足止めを食うことになります。

都市の中を移動する3つの方法

タシュケント市内では、道路の渋滞を回避できる地下鉄が優れた移動手段となります。市内バスは地下鉄の路線が届かない郊外の生活圏を結んでくれます。配車タクシーは、荷物があるときや夜遅くに宿の玄関口まで直行したいときに便利です。旅行者はひとつの交通手段だけに固執せず、移動距離や所要時間、荷物の重さ、一緒に歩く同行者の体力を考慮して、状況に応じて適切に使い分ける工夫が求められます。

統合交通カードのATTOは、タシュケントだけでなく、ブハラ、ヌクス、サマルカンド、テルメズ、ウルゲンチ、フェルガナ、ヒヴァをはじめとする多くの都市の市内バスでも利用できます。運行会社の案内によると、タシュケントではすべての市内バスと地下鉄の改札口で利用可能です。[C017] カードを端末にかざした後、画面に緑色の確認サインが表示されるかを目視で確認する必要があり、赤色の表示は決済が正常に処理されなかったことを意味します。[C017]

2026年9月1日からは、契約路線の市内バスに乗車する乗客は乗車と同時に運賃を支払わなければならない、交通カードや銀行カード、スマートフォンの非接触決済方式が利用できるという新規定が発表されました。[C018] 本書の執筆基準時点は2026年8月22日であるため、まだ制度が施行される前の告知事項です。9月以降に現地を訪れる旅行者は、ウズベキスタン運輸省の資料を確認し、制度の実際の施行状況と地域ごとの適用範囲を改めて確認する必要があります。

バスに乗って運転手に直接現金を渡す方法は通用しないことがあります。都市ごとにQRコード乗車券、交通カード、銀行カードの利用基準がそれぞれ異なるためです。ATTOカードを購入できる販売場所やチャージ方法を宿のスタッフに尋ね、1日の移動回数が少なければ1回券を購入する方がよいかどうか比較検討すべきです。1枚の交通カードで複数人が続けて端末にタッチして乗車できるかどうか、現地の規定を確認したうえで利用する必要があります。

配車タクシーを利用すると、アプリに出発地と目的地、料金が明確に記録されるため、料金を巡るトラブルを減らすことができます。イギリス外務省の安全指針でも、

空港の公式タクシーやYandex、MyTaxiなどの専用アプリで呼んだ認可車両の利用を推奨しています。路上で手を挙げて拾う無許可タクシーは、後部座席にシートベルトがない場合があると警告しています。[C027] 配車タクシーが到着したら、車両ナンバーと運転手の写真をアプリの画面と照合し、ナンバーが異なる場合は乗車してはなりません。

圧縮天然ガスを燃料とするバスやタクシーが多く、車両の安全点検規定が厳格に守られていない事例があるという外交安全情報もあります。できる限り状態の良い近代的な車両を選んで乗る方が安全です。[C027] 後部座席に座る場合でもシートベルトを着用しなければなりません。運転手が走行中に携帯電話を見たりスピードを出しすぎたりした場合は、丁寧に速度を落とすよう求め、危険だと判断したときは明るく人のいる安全な場所に車を停めてもらい、降車する必要があります。

日程が狂ったときのリカバリー法

思いがけず列車に乗り遅れたり列車が運休になったりした際、慌てて非公式の代行業者に安易に近づいてはなりません。まずは駅の窓口や鉄道の電子チケットアカウントで次の列車の空席があるか、手持ちの乗車券の払い戻しが可能かを確認すべきです。2026年6月の利用規約には、国際カードの払い戻しと重複決済の処理手順が個別に規定されています。[C013] 購入したチケットの運賃種別やキャンセルのタイミングによって払い戻し金額が異なるため、口頭の説明だけに頼らず、公式画面の取引履歴を保存しておく必要があります。

航空便が遅延した際は、航空会社の専用アプリと空港の電光掲示板の情報の双方を注視する必要があります。2026年3月、イギリス外務省は中東情勢の緊迫化に伴い、領空閉鎖や遅延、欠航が周辺路線にも影響を及ぼす可能性があるとして、航空会社や旅行会社のお知らせを確認するよう案内しました。[C026] 乗り継ぎ国の状況がウズベキスタン行きの便に直ちに影響を及ぼすこともあります。航空便の遅延に伴う宿泊費や新たな航空券の購入費用が海外旅行保険でどこまで補償されるかも、出発前あらかじめ確認しておくべきです。

日程が狂ったときに備える迂回ルートは、落ち着いて2段階までに絞って立てておきます。ブハラ行き的高速列車に乗り遅れた場合は、普通列車や翌朝の始発列車の座席をまず探します。それすらなければ、国内線航空便や車での移動を比較検討する

といった具合です。気が焦って複数のアプリで同時に決済を進めると、重複してチケットを購入して損をしがちです。ひとつの選択肢をキャンセルした事実を確認してから、次の決済に進む必要があります。

移動スケジュールが遅れる場合は、宿泊予定の宿に直ちに連絡しなければなりません。深夜0時を過ぎると玄関ドアを施錠する小規模な宿もあります。予約プラットフォームのメッセージ機能と電話の双方を使って、到着の遅れを伝えます。送迎車を予約していた場合は、新たな到着時刻を伝え、追加料金が発生するかどうかを確認する必要があります。ドライバーと連絡がつかない場合は、空港や駅の公式タクシー窓口に戻り、安全な車両を利用する方が賢明です。

現地で交通トラブルを解決する際にも、パスポートの写真やクレジットカード番号をメッセージアプリで見知らぬ相手に送信してはなりません。鉄道乗車券の再発行は公式アカウントや駅の窓口で手続きを行います。追加の金銭を送金すれば座席を確保できるといった個人メッセージを受け取った場合は、カスタマーセンターで事実かどうかを確認すべきです。一刻も早く解決したいという焦りの心理が、セキュリティ上の脆弱な隙になりやすいのです。

オフラインで保存しておくべき5つの画面

旅行に必要な交通関係の資料は、インターネット接続が途切れても開ける状態にしておく必要があります。パスポートの顔写真ページの写し、電子チケットのPDFファイル、宿の住所と電話番号、駅や空港の地図、大使館の緊急連絡先をスマートフォンのオフラインストレージに保存しておきます。ファイル名には日付と区間をあらかじめ記載しておきます。例えば「0824_タシュケント_ブハラ_列車」のように付けておけば、駅の窓口の前で慌てることなく素早く見つけ出すことができます。

家族やグループでの旅行であれば、チケットを1人のスマートフォンだけにまとめて保管してはなりません。同行者のうち1人にも控えのファイルを送っておきます。子どもや高齢者の常備薬、飲み水、薄手の上着は、大きなスーツケースの奥底にしまい込まず、手荷物のバッグに入れておきます。長時間の移動においては、荷物の重さを減らすことと同じくらい、必要な物がいつでも手の届く場所にあるかどうかが重要になります。

スマートフォン内では、実際のチケットファイルと決済領収書を別々のフォルダーに分けて保存しておきます。支払いが完了した決済画面は乗車券の代わりにはなりません。QRコード、乗客名、列車番号、日付、出発駅がはっきりと確認できるファイルを開いて確かめる必要があります。紙の印刷物をバッグに入れていたとしても、スマートフォンにも控えを残しておく方が安全です。

日程表を整理する際は、予定と現在のステータスを区別して記録する必要があります。「予約済み」「決済完了」「発券済み」「チェックイン完了」はそれぞれ異なる状態です。決済完了のSMS通知を受け取っただけでチケットの発券を確認していないと、駅で困り果てることになります。開発プロジェクトにおいて保存ボタンを押しただけでデプロイが完了したわけではないのと同様に、交通の日程も同じです。パスポート情報と一致するチケットをダウンロードし、実際の出発駅に到着して列車に乗車して初めて、1区間の移動が完了するのです。

ウズベキスタンの鉄道網や航空路線網は急速に変化しています。新たな連絡線や決済方式は旅行を快適にしてくれますが、制度の変化が速い分、インターネット上の古い旅行記に載っている時刻表や料金情報はすぐに過去のものとなってしまいます。出発前日に公式時刻表を再確認し、乗り継ぎスケジュールには十分な余裕を持たせ、チケットとパスポートの氏名を一文字ずつ照合してみる。先端技術以上に、こうしたささやかな確認の習慣こそが、旅行者を望む目的地へと無事に送り届けてくれるのです。

第17章 通信・インターネット・両替・決済の実務

空港の到着ロビーに降り立ったとき、スマートフォンの画面がグレーのまま停止してしまうと、目の前の街が遥か遠くに感じられます。配車アプリは現在地を捉えられず、宿の住所は開かないメールボックスの中に閉じ込められます。カード決済の通知まで途絶えると、見知らぬ土地に一人取り残されたような心細さが押し寄せることもあります。旅行者は、地図やお金、通訳から交通機関の予約に至るまで、すべてが細いインターネットの接続回線一本に頼っていた事実とそのとき初めて気づきます。ウズベキスタン旅行に向けたデジタルの備えは、現地のSIMカードを素早く購入するだけで終わるものではありません。通信網が途切れても、落ち着いて次の目的地へと歩みを進められるよう、代替手段を用意しておく備えが欠かせません。

スマートフォンとお金は、互いに連動して機能します。現地のSIMカードが正常に動作して初めて配車アプリや地図アプリを安心して利用でき、クレジットカードが使えるからこそ移動のための鉄道チケットをオンラインで購入できます。カードが使えなくなれば現金に頼らざるを得ず、現金を引き出すには地図アプリを開いて最寄りの銀行やATMを探さなければなりません。ひとつの連携が狂うと、他の部分まで連鎖的に滞ってしまいます。通信手段、現金、カード決済をそれぞれ二重に用意しておくべき理由がここにあります。

到着前にスマートフォンへ入れておくもの

韓国で飛行機に乗る前に、宿泊予約確認書、初日に泊まる宿の住所、空港から宿までのルートマップ、電子航空券、パスポートの控えを端末本体にオフラインファイルとして保存しておきます。地図アプリでは、タシュケント、サマルカンド、ブハラ、ヒヴァをはじめ、訪問する都市のエリアマップをあらかじめダウンロードしておきます。ダウンロードしたファイルは、インターネット接続を切った状態で問題なく開けるか直接確認しておく必要があります。ダウンロード完了の表示だけで安心しがちですが、機内モードをオンにした状態で実際に画面が表示されるか試してみるのが確実です。

持参するスマートフォンがSIMロックされていないか、eSIMに対応している機種かも確認しておきます。現地で物理SIMカードを差し替える予定なら、普段使っている韓国のSIMカードを紛失しないよう、SIMピンと小さな保管ケースを用意します。メインバンクのアプリで海外決済やATM出金の制限が解除されているか点検し、本人認証番号が韓国の電話番号宛てにしか送信されない仕組みになっていないかも確認します。韓国のSIMカードを抜いた後でも銀行アプリが正常に利用できるか、事前にログインを試しておく必要があります。この準備を怠ると、現地の通信状態がいくら良好でも資金が使えなくなり、立ち往生してしまいます。

緊急連絡先と宿の情報は、スクリーンショットの画像とテキストメモの2つの形式で併せて保存しておきます。スクリーンショットは元の書式をそのまま確認できますが、文字をコピーして検索するのが困難です。テキストメモは内容をコピーして電話アプリや地図の検索バーにそのまま貼り付けるのに適しています。宿の名前は英語表記とウズベク語の現地表記を併記しておきます。タクシー運転手にアルファベットの綴りだけを見せると首を傾げられがちですが、現地の文字と地図アプリのピンを一緒に見せれば、目的地をすぐに把握してもらえます。

旅行者向けSIMプランは変更される

過去の旅行記やブログに書かれた旅行者向けプランだけを頼りに通信会社の店舗に行くと、戸惑うことになりかねません。2026年2月19日より、モビウズ（Mobiuz）は従来の旅行者専用SIMプランの新規加入および番号移行を停止しました。[C019] ユーセル（Ucell）の旅行者向けプラン群も、現在公式ウェブサイトでアーカイブプランに分類されており、新規加入はできません。[C041] 過去の記事にあるデータ容量や価格を購入の基準にしないよう注意が必要です。

現在、公式に加入を受け付けている選択肢としては、ビーライン（Beeline）のHelloプランがあります。ビーラインはこの商品をウズベキスタンを訪れる外国人や観光客向けのプランとして案内しています。外国人旅行者1人のパスポートで開通できる回線数には上限があり、このプランはウズベキスタン国内でのみ利用可能で、国外ローミングへの変更はできないと明記されています。[C020] データ容量や料金条件は変更される可能性があるため、空港の店舗や公式サイトで当日の条件を念入りに確認します。

モビウズは2026年7月9日、ウズベキスタン観光委員会と業務協約を結び、外国人が入国前に国家観光プラットフォームを通じて無料データ付きのeSIMの発給を受けられる事業を推進すると発表しました。[C021] ここでは事業の進捗状況を慎重に見極める必要があります。協約が結ばれ制度導入の計画が発表されたのは確かな事実ですが、すべての旅行者が今すぐ同じ手続きで発給を受けられるとは限りません。実際に申し込み画面が開設されて運用されているかを、出発日に改めて確認する必要があります。

代理店でSIMカードを購入する際は、パスポートの原本を提示する必要があります。担当スタッフに対し、総支払金額、基本データ容量、通話可能時間、利用有効期間、自動決済による更新日、追加データのチャージ方法を端末の管理画面で見せてほしいと依頼します。SIMカードのパッケージを捨てる前に、そこに記載されている現地の電話番号やカスタマーセンターの番号、データ残量確認用の番号コードをスマートフォンのカメラで撮影しておきます。店舗を出る前に、地図検索、ウェブブラウザへの接続、音声通話の着信が正常に行えるかをその場でテストします。

訪れた場所が公式代理店であるかを確認する手順もおろそかにはできません。街頭の簡易販売所がすべてトラブルを起こすわけではありませんが、パスポート情報やカード決済を伴う開通手続きは、移動通信事業者の直営店や公認表示が明らかな公式販売店を利用するほうが安全です。スタッフが無断でインストールした見知らぬアプリに銀行カードの情報を入力してはなりません。SIMカードの開通や通信設定に必要な範囲を超えてスマートフォンの過度なアクセス権限を求められた場合は、ただちに手続きを中断すべきです。

SIMカードの契約時に記入したメールアドレスに案内が送信された場合、迷惑メールフォルダに振り分けられることがあります。現地の電話番号が正式に有効化されるまでは、ショートメッセージによる本人認証が正常に処理されないサービスもあります。配車アプリや主要なメッセージアプリは、韓国にいるうちにあらかじめインストールしてログインを済ませておくと、空港の到着ロビーでの手間を省くことができます。新しい現地の電話番号が発行された後は、予約済みの宿や韓国の同行者に変更後の連絡先を伝えておきます。

30日を超える端末登録

ウズベキスタンには、移動通信端末の個体識別番号（IMEI）の登録を義務付ける制度があります。UZIMEIの公式案内によると、現地の通信事業者のSIMカードをスマートフォンに初めて挿入してネットワークに接続した日から30日以内に端末番号を登録しなければなりません。この期間内に登録を完了しない場合、現地の通信サービスの利用が遮断されることがあります。[C022] 短期旅行者は期限前に出国するため問題ありませんが、30日近く滞在する場合や近いうちにウズベキスタンを再訪する予定がある場合は、登録基準をあらかじめ把握しておく必要があります。

自国のSIMカードを挿入したまま国際ローミングサービスを利用する外国人訪問客には、UZIMEIの端末登録料が課されない旨が公式ホームページに記載されています。[C022] 現地のSIMカードを装着する場合とローミングを利用する場合で異なる規則が適用されるわけです。スマートフォンに物理SIMスロットとeSIM機能が両方備わっている場合、スロットごとに割り当てられた個体識別番号が異なることがあります。電話のダイヤル画面でアスタリスク、シャープ、ゼロ、ロク、シャープ（*#06#）を順に入力して端末識別番号を確認し、その画面のスクリーンショットを保存しておきます。

端末登録は、UZIMEIの公式ウェブサイト、MyGovアプリ、Birdaアプリ、または市内の登録事務所に直接出向いて手続きを行うことができます。登録申請の受付後に手数料を納付しなければならない期限が別途定められているため、出国直前や締め切り期日まで先延ばしにしてはなりません。[C022] 空港での税関申告手続きと端末登録規定は、持ち込む端末の台数や状態によって連携の仕方が異なる場合があります。新しいスマートフォンを複数台持ち込む場合や長期滞在を予定している場合は、税関規定とUZIMEIの公式案内を併せて照合しておきます。

接続は都市の外で弱まる

タシュケント市内でスムーズにつながっていたモバイルデータ通信も、ムイナクや郊外の砂漠の遺跡群へ向かう道中では同じ速度を保てるとは限りません。移動通信事業者が提供する全国サービスエリアマップだけでは、屋内の圏外エリア、悪天候、険しい地形、基地局の過負荷に伴う接続遅延を完全に見極めることは困難です。市街地を離れて遠方へ移動する際は、おおよその移動ルートと戻る予定時刻をあらかじめ宿に伝えておき、同行するドライバーの電話番号を手帳に控えておきます。オフライン地図には、途中で立ち寄るガソリンスタンドや一定規模の集落の位置を丁寧にマークしておきます。

同行者の通信回線をスマートフォン1台だけに集中させない工夫も有効です。同行者のうち1人は韓国の通信会社のデータローミングを有効にし、もう1人は現地のSIMカードを装着するといった方法です。通信料金は少し余分にかかりますが、一方の通信網が不通になった際にもう一方でルートを検索できるため、不慣れな僻地でも心強い備えになります。一人旅の旅行者であれば、ローミング可能な韓国のSIMカードを完全に無効化せずサブ回線として維持しておきます。ただし、予期せぬ高額請求を避けるため、データローミングの自動接続は遮断しておく必要があります。

モバイルバッテリーはあらかじめ十分に充電しておき、預け入れ荷物ではなく機内持ち込み手荷物に入れます。利用する航空会社のバッテリー携行規定は搭乗前に確認しておきます。長距離列車の座席や新型の電車に電源コンセントが備わっていても、すべての座席の差込口が正常に機能するとは限りません。移動時に邪魔にならない短い充電ケーブルと壁挿しタイプの充電器を別に用意しておきます。宿の壁にあるコンセントが緩んでいる場合は、重い急速充電器を不安定な状態で差し込んだままにしないよう注意を払います。

カフェやホテルの公衆Wi-Fiは手軽に利用できますが、金融取引に使用するにはセキュリティ上のリスクが伴います。銀行送金やオンラインでの鉄道チケット決済のように機微な情報が行き交う際は、現地のモバイルデータ通信や安全性が確認されたプライベートネットワークを利用します。カフェのWi-Fiに接続する際、クレジットカード番号やSNSアカウントのパスワードを要求する画面が表示された場合は、直ちにウィンドウを閉じるべきです。スマートフォンのOSや銀行アプリは出国前に最新バージョン

ンへアップデートしておきます。旅行先では、出所が不明なSMSやウェブリンクを通じてアプリのインストールファイルをダウンロードしてはなりません。

公式通貨はスム

ウズベキスタンの公式な法定通貨はスムであり、国際標準通貨コードはUZSです。現地で買い物をしたりサービスを利用したりする際は、スム単位を基本として計算します。商人が米ドルで価格を提示してきた場合でも、当日に適用されるスムの為替レートと実際の支払額を再確認する必要があります。イギリス外務省は、両替手続きは必ず認可を受けた公式の両替所でのみ行い、違法な闇市場を利用しないよう勧告しています。破れや落書きのある紙幣、古くて傷んだ旧札の米ドルは、公式の両替窓口で両替を拒否されることがあると注意を促しています。[C027]

為替レートは日々変動します。ガイドブックに書かれた数字だけを暗記しておく、と、現地到着時のレートと乖離していて戸惑いがちです。ウズベキスタン中央銀行が公示する公式レートを基準線とし、市中銀行やクレジットカード会社が上乗せする為替手数料率を別途計算に入れる必要があります。[C033] 空港の両替所では初日に使う公共交通機関の運賃や簡単な食事代程度にとどめて両替し、市内に入ってから公認銀行で残りの旅費を小分けにして両替する方法が、紛失や為替差損のリスクを減らしてくれます。

両替した現金は、高額紙幣と少額紙幣をバランスよく混ぜて持っておきます。伝統市場、路地裏の伝統的な茶屋、地方の小都市のタクシーでは、お釣りが不足していることが珍しくありません。高額紙幣を1枚だけ差し出すと、お釣りが出ずに長い間待たされたり、欲しくもない品物を余計に買わされたりする厄介な状況に陥ります。銀行で両替した際に受け取る両替明細書は、旅行を終えて出国するまで捨てずに保管しておきます。両替窓口の前で現金をすぐに数えてから財布にしまい、通りの真ん中で財布を大きく広げて見せるような行動は控えます。

手持ちの現金を財布ひとつにまとめて入れておくのは避けます。その日に使う日常経費、万一に備えた予備資金、パスポートと非常用クレジットカードの3か所に分けて別々に携行します。宿の客室に金庫が設置されているからといって過信は禁物であり、金庫の作動方式や床への固定状態をまず確認します。所持品を紛失した際の被

害を最小限に抑えるよう保管場所を分散させておく備えこそが、頑丈な鍵よりも実質的な防壁となります。

カードの普及は進んだが現金をなくすには至っていない

ウズベキスタンの電子決済市場は、ウズカード（Uzcard）とフモ（Humo）という2大決済ネットワークを中心に動いています。2026年4月、ウズカードは提携銀行と連携し、ディスカバー（Discover）およびダイナースクラブ（Diners Club）カードの加盟店決済と現金引き出しサービスを大幅に拡大したと発表しました。[C023] 同年4月に公示されたウズカードの手数料体系には、Visa、Mastercard、UnionPay（銀聯）など国際ブランドカードの取引処理項目も含まれています。[C023] 外国人旅行者が海外発行カードを利用できる窓口は着実に広がりを見せています。

しかし、店舗の窓に国際カードのロゴが貼られているからといって、決済承認が常に一度で下りるとは限りません。イギリス外務省の案内によると、タシュケントや主要な大都市を離れると海外カード対応のATM（現金自動預払機）は少なく、外国で発行されたクレジットカードが広く使えない地域も多くあります。[C027] ブハラの近代的なホテルとヌクス郊外の小さな食堂とでは、カード決済環境に大きな差が見られます。地方の小都市や郊外へ移動する前に、大都市で前もって十分な現金を下ろしておかなければ足止めを食うことになります。

現金自動預払機（ATM）を利用する際は、銀行の支店内や照明が明るく人通りのある安全な場所を選びます。機器の画面に表示された対応カードのロゴと引き出し通貨の種類を念入りに確認します。ウズベキスタン現地では、海外カードで現金を下ろす際に基本通貨としてスムが出金される方式が一般的です。画面にウォンや米ドルに金額を換算して決済するかを尋ねる選択画面が表示されたら、適用為替レートと追加手数料を見極めて判断します。現地通貨建てで決済したほうが有利かどうか、出国前にクレジットカード会社の利用規約を確認しておきます。

カード挿入口がぐらついていたり、暗証番号キーパッドの上にカバーを被せたような痕跡が見られたりする場合は、その機械を使ってはなりません。暗証番号を入力する際は、もう片方の手でキーパッドの上を覆い、周囲の視線を遮ります。機械から現金が出てこないのに口座から引き落とされたという通知メッセージが届いた場合は、慌てずに機器の画面や貼られている管理番号、設置場所、取引時刻を記録し、カード

発行元の銀行へ直ちに問い合わせます。承認履歴を確認しないまま隣の機械へ移り、すぐに大金を再び下ろそうとする行為は避けます。

店舗で代金を支払う際は、決済端末の画面に表示された金額を目で確認してからカードを通すかタッチします。店のスタッフがカードを持ったまま客の視界から外れた場所へ移動しないよう、注意深く見守ります。スタッフが決済に失敗したと言っても、スマートフォンのカードアプリを開いて実際に承認されているかどうかをまず照合しなければなりません。決済レシートに記載された請求金額や通貨単位もしっかり確認します。レジの前で行う小さな3つの確認が、予期せぬ二重決済トラブルを防いでくれます。

暗証番号と認証コードを守る方法

2026年2月、ウズカードは金融機関や決済代行業者の従業員が顧客に対してカードの暗証番号、本人確認の認証コード、カード詳細情報を要求することは決まないと案内しました。第三者がどれほど緊急のトラブルが生じたかのように装ったとしても個人金融情報を渡してはならず、関連する金融アプリは公式ストアからのみダウンロードすべきだと呼びかけました。[C024] 旅行中は、タクシー運転手や宿泊施設のスタッフの親切な案内に甘えて、思わずスマートフォンを丸ごと手渡してしまいがちです。決済ボタンを押したり本人認証を行ったりする操作は、必ず自分自身の手で行わなければなりません。

銀行のセキュリティ担当を騙る電話がかかってきたら、躊躇なく通話を切り、カードの裏面に記載されたカスタマーセンターの代表番号へ直接電話をかけます。メッセージアプリに送られてきた決済用ウェブリンクはクリックせず、インストール済みの公式金融アプリを自分で開いて取引を進めます。スマートフォンに送信されたワンタイム認証コードは現金と同じです。店のスタッフが誤った承認を取り消すと言って認証番号を教えるよう求めてきても、伝えてはなりません。画面共有や遠隔操作アプリのインストール要求もきっぱりと断る必要があります。

カード決済の承認通知はオンにしておくものの、スマートフォンのロック画面にカード番号全体や残高情報が表示されないよう通知設定を調整します。携帯電話の画面ロック用パスコードと銀行の決済用暗証番号を同じ数字に設定してはなりません。端末を紛失した際に別の電話やパソコンから迅速にカード利用を停止できるよう、ク

レジットカード会社の緊急紛失届出番号やオンラインアカウントの復旧手順を紙のメモに書き留め、バッグの奥深くにしまっておきます。

鉄道と市内交通の決済

ウズベキスタン鉄道の公式オンライン予約案内によると、現地専用カードのほか、Visa、Mastercard、ミール（Mir）、Google Pay、Apple Pay、UnionPay（銀聯）が決済手段として利用できます。[C014] 海外カードは通信網の状態によって決済承認が途中で弾かれることがあるため、1枚のカードだけに頼らないようにします。決済完了後は、カードの承認通知を確認するだけで終わらず、乗車券のPDFファイルと14桁の電子乗車券番号が正常に発行されているか確認しなければなりません。

[C013]

ATTO交通カードは、首都タシュケントをはじめ複数の都市の市内バスで幅広く使えます。交通カードの運営会社は、ブハラ、ヌクス、サマルカンド、テルメズ、ウルゲンチ、フェルガナ、ヒヴァをサービス対応都市として挙げています。[C017] バスの基本運賃は地域によって異なります。タシュケント基準の運賃を地方都市のバスにそのまま当てはめないよう注意が必要です。バスに乗った直後は、端末にカードをかざし、緑色の正常乗車ランプが点灯することを目で確かめます。

ウズベキスタン運輸省は、2026年9月から路線契約市内バスにおいて交通カード、市中銀行カード、スマートフォンによる非接触型決済を全面導入する新規定を施行すると発表しました。[C018] 制度の施行日以降に旅行される方は、訪問先の地域のバスで該当する決済方式が実際に定着しているか現地であらためて確認することをおすすめします。新制度が導入される初期の数日間は、端末のシステムエラーや現場での案内の混乱が生じる可能性があるため、小額の現金や専用交通カードを補助の決済手段としてあわせて用意しておくほうが安全です。

2026年4月から拡大された免税還付

ウズベキスタン政府は2026年4月1日より、外国人旅行者向けの付加価値税（VAT）事後還付制度を全国のすべての国際空港へと拡大して施行しました。公式観光当局の発表によると、還付手段として現金とカードでの受け取りの双方が選択でき、還付を受けるための最低購入金額基準は30万スムです。カード還付方式を選択した場合、物品を携行して出国した日から起算して3営業日以内に処理が完了します。[C025] 従来厳しく制限されていた対象品目の制限も解除され、食品類を除く一般商品全般へと還付対象が広がりました。[C025]

免税還付の対象品を購入したからといって、還付金が自動的に口座へ振り込まれるわけではありません。商品を選ぶ際には、その店がタックスフリー（Tax Free）加盟店であるか、電子レシートにパスポート番号をはじめとする必須情報が漏れなく入力されているか、出国審査時に現物を提示する必要があるかを確認しなければなりません。決済レシートや商品の包装箱は、出国するまで破損させずに保管しておきます。還付対象の品物を機内持ち込みではなく預け入れ荷物に入れるつもりなら、空港の税関検査場が手荷物預け入れエリアの手前にあるかどうかを事前に確認しておきます。順序を誤って先に荷物を預けてしまうと、税関職員に品物を見せることができなくなり還付を受け損ねるおそれがあります。

公式発表資料によると、付加価値税の還付対象総額のうち85パーセントは外国人旅行者に実際に還付され、残りの15パーセントは還付代行手数料として配分されます。[C025] レジで商品を購入する際に課された税金の全額よりも手元に戻る還付額がやや少なく感じられるのは、まさにこの手数料のためです。カードで還付金を受け取ることにした場合は、そのカードが帰国後も有効な状態であるか確認しておきます。税関でスタンプを受けた還付申請書と取引承認番号は、口座に入金されるまで捨てずに保管しておきます。

1日に1度合わせる出納記録

旅の経費は、毎晩宿に戻ってから5分だけ時間を取って整理しておきます。支出の内訳は、現金支出、カード承認、両替金額、現金引き出しという4つの項目に分けて管理します。使った金額と滞在都市、支払った用途を簡潔にメモします。クレジットカードのアプリで未確定取引として計上されている決済は、後から最終請求額が変わる可能性があるため、別に印をつけておきます。同行者と割り勘にした精算記録も先延ばしにせず当日のうちに記録しておけば、記憶の食い違いを減らせます。

支出を几帳面に記録しておくのは、旅の高揚感を窮屈な数字で縛り付けるためではありません。カードの二重決済やポケットからの現金の紛失を早い段階で発見するための安全策です。誤って承認された取引は、1〜2日過ぎてからよりも1〜2時間以内に気づいたときのほうが、カード会社への取り消し要請がはるかにスムーズに進みます。旅の日数が重なるほど、記録は簡潔でなければ最後まで続けられません。昼食代12万スム、タクシー代3万スムのように、要点だけを1行でメモしておくだけでも十分です。

小さなトラブルに対処する復旧手順

データ通信が突然途切れたら、慌てずに機内モードの切り替え、スマートフォンの再起動、データ残量の確認、SIMカードの選択確認、アクセスポイント名（APN）の再設定の順で1つずつ確認していきます。複数の設定を一度にむやみに変更しないよう注意が必要です。どの項目を変更したか分からなくなると、元の正常な状態に戻すことすら難しくなります。通信会社の代理店でスタッフのサポートを受ける際も、スタッフが変更した設定画面をあらかじめスクリーンショットで保存しておきます。

カードの承認が拒否されたときは、口座残高の不足、海外自国通貨建て決済（DCC）遮断の有無、1日の利用限度額超過、カード会社の不正利用検知システムからの通知を順番に確認します。決済端末にカードを何度も無理に通そうとする前に、カードアプリで承認拒否の理由をまず確かめなければなりません。ATMがカードを吐き出さずに吸い込んでしまった場合は、機械の前面に記載された銀行のカスタマーセンター番号と自国のカード発行会社へ速やかに連絡し、隣で機械をこじ開けてやると申し出てくる見知らぬ通行人の手助けはきっぱりと断ります。

現金を紛失したときは、動揺を鎮め、残ったお金とクレジットカードを別の安全なポケットへ移すことから始めます。通ってきたルートをたどりながら紛失した場所を探すにしても、人通りの少ない暗い路地へ1人で引き返すような危険な行動は避けます。盗難が疑われる状況であれば、現地の警察通報番号である102番や統合緊急番号である112番に通報し、事件受理番号を取得しておきます。[C030] 帰国後に海外旅行保険を請求する際、現地警察の事故証明書と支出レシートが必須の証明書類となります。

通信もお金もすべて途絶えてしまったとき、旅行者を守ってくれる最後のセーフティネットは現地の人々とのコミュニケーションです。スマートフォンのインターネットが不通になったら、宿のフロントに頼んで信頼できる公式コールタクシーを呼んでもらうよう依頼すれば解決します。クレジットカード決済が使えなくなったときは、パスポートを持って銀行の窓口へ行き、丁重に助けを求めることができます。ただし、いかなる状況であってもカードの暗証番号や本人認証番号だけは他人に教えてはなりません。親切な手助けを受けることと、自分の資産の管理権限を他人に譲り渡すこととは明確に異なります。

セキュリティの脆弱な公衆Wi-Fiに接続した状態では、インターネットバンキングの暗証番号を変更してはなりません。急ぎの送金や口座振替は、現地のモバイルデータ通信網を利用するか、セキュリティが確かな宿泊施設専用の回線で行います。スマートフォンを丸ごと紛失するという最悪の事態に備え、通信会社のローミングセンターや主要カード会社の紛失届出電話番号、アカウントの復旧手順を紙の手帳にペンでしっかりと書き留めておきます。

スマートフォンの画面の中に都市の数多くの情報が詰まっているのは確かですが、旅先の真の姿がその小さな機械の中にだけ閉じ込められているわけではありません。手書きの紙のメモや少額の予備の現金、予備のクレジットカード、印刷された紙の乗車券がバッグに入っていれば、画面が真っ暗に消えてしまった瞬間でも旅人の歩みが止まることはありません。見事なデジタル旅行とは、24時間絶え間なくネットに接続された状態を指すではありません。接続が途切れ、しばし世界から切り離された瞬間にも、慌てることなく自分の道を見出して歩みを進める落ち着いた旅のことなのです。

第18章 マナーと食事、安全に旅を終える方法

茶碗に茶がなみなみと注がれず、底に二、三口分ほどしか入っていないと、韓国から訪れた客は茶が足りないのではないかと首をかしげるかもしれません。ウズベキスタンでは、茶碗に茶を少しずつ注ぎ、こまめに注ぎ足すことで客を手厚くもてなします。公式観光案内でも、客の茶碗に注ぐ量を少なくして頻繁に満たす習慣が紹介されています。[C032] 茶碗に残された余白の意味を知らないと、温かいもてなしをかってぞんざいな扱いだと誤解しかねません。旅先でマナーを学ぶということは、単に規則を丸暗記することにとどまらず、同じ光景であっても文化によってまったく異なる意味を持ち得るのだと理解することから始まります。

ウズベキスタンの人々の暮らしは、ひとつの型だけに収まるものではありません。タシュケントの近代的なオフィス、ブハラの歴史ある宗教空間、カラカルパクののどかな村、フェルガナの活気あふれる工房では、それぞれ使われる言葉遣いや服装、客を迎える雰囲気異なります。誰もが同じマナーを守っていると一般化してしまうと、現地の多様な暮らしを正しく見つめることはできません。ここにまとめた内容は、不慣れな土地での失敗を減らすための手引きです。旅先では、本で読んだ文章に頼るよりも、相手の振る舞いを落ち着いて観察し、丁寧に尋ねる姿勢のほうが大きな助けになります。

挨拶は速度を落とす装置

大韓国外交部の海外安全旅行案内によると、ウズベキスタンでは初対面の際、「アッサラーム・アライクム」と挨拶しながら右手を左胸に当てるか、握手を交わすと説明されています。[C028] 現地の人々のように完璧に発音しなければならないと気負う必要はありません。軽く微笑みながら「サローム」と短く挨拶し、相手の出方に自然に合わせれば十分です。右手をそっと胸に当てる動作だけでも、手を握ることなく相手に深い敬意を伝えることができます。

相手が先に手を差し出さないのであれば、こちらから無理に手を伸ばして握手を求めないほうが無難です。宗教的な理由や個人の考え方から、異性と握手を交わさな

い人もいるためです。その際は軽く会釈をしながら手を胸に当てると、気まずい瞬間を和やかにやり過ごすことができます。現地の親しい間柄で交わされる頬への挨拶は、親密度や地域によって作法が異なるため、旅行者の側から安易に試みないほうが安全です。[C028]

道や飲食店では、年配者を真っ先に温かく迎え、席を譲る姿をよく目にします。だからといって、あらゆる出会いや対話を年齢や社会的地位だけで固定化して捉える必要はありません。相手の名前を聞いた際、聞き慣れない発音で戸惑ったときは、ためらわずに丁寧にもう一度聞き直すとよいでしょう。中途半端に似た別の名前で呼んでごまかすよりも、時間をかけて正しい発音をひとつひとつ身につけるほうが、相手にとってもはるかに誠意が伝わります。

見知らぬ旅先で口にするウズベク語の数言は、閉ざされた心の扉を開く鍵となります。「ラフマツト」はありがとうの意味であり、「イルティモス」はお願いしますという言葉に近いです。都市や地域によってはロシア語が広く使われていますが、現地の誰もがロシア語を心地よく感じるわけではありません。スマートフォンの翻訳アプリを使う際は、不確かな発音で読み上げるよりも、翻訳された画面を相手に静かに見せて意図が正しく伝わっているか確認するほうが誤解を減らせます。地名もまた、ウズベク語のラテン文字表記とロシア語表記で異なる場合があるため、目的地を確認する際には注意深く見ておく必要があります。

家に招かれたとき

現地の人々の家庭に招かれた際は、観光地を見物するような軽い気持ちで足を踏み入れてはなりません。約束の時間は厳守し、やむを得ず遅れる場合はあらかじめ連絡を入れて了承を得ます。玄関に入る際は、脱ぎ揃えられている靴に気を配り、靴を脱いで上がるべきか丁寧に尋ねます。家を訪ねる際は、新鮮な果物やきれいに包装された菓子などをささやかな手土産として用意すると喜ばれますが、相手の宗教や生活習慣をよく知らない状態でお酒を贈ることは避けたほうが無難です。

ウズベキスタンにおいて「ダスタルハン」とは、料理を並べる食卓布や膳立てだけでなく、そこで営まれる食事文化そのものを指します。席にはまずパンや果物、ナッツ類と温かいお茶が用意され、続いて湯気を立てる温かい料理が運ばれてきます。主人が客に絶え間なく料理を勧めるのは、もてなしの心からくる振る舞いです。すでに

お腹がいっぱいであれば、皿を無理に空にして新しい料理を勧められ続けるよりも、胸にそっと手を当てて、料理が素晴らしくすでに十分ごちそうになったという意味を伝えるほうが自然です。もし特定のアレルギーがあったり、宗教上の理由や菜食主義のために避けたい食材がある場合は、食事が始まる前に丁寧にあらかじめ説明しておきます。

パンはウズベクの食卓で中心となる大切な食べ物です。そのため、パンを床に置いたり粗末に捨てたりせず、丁寧に扱わなければなりません。丸いパンである「ノン」を食卓で手でちぎって分け合う際、どちらの手で取るべきか迷ったときは、周囲の人々の所作をよく見てそれに倣えば問題ありません。大皿から取り分ける際に個人が使ったスプーンを直接入れることを嫌がる家庭もあるため、主人が取り分け用として差し出してくれた道具を使うのが礼儀になっています。

茶の席は、客と主人が交わす対話の速度を穏やかに整えてくれます。ウズベキスタン観光当局は、焼きたてのパンと熱いお茶で客を手厚く迎える文化、お茶を茶碗に3回注いでは急須に戻して味と香りを均一に行き渡らせる作法、客の茶碗に少しずつ注いでもてなす慣習を説明しています。[C032] 家庭や伝統的な茶屋（チャイハナ）によってお茶の出し方には多少の違いがあるかもしれません。茶碗に入ったお茶の量が少ないからといって、急いで注ぎ足すよう催促するのではなく、主人がお茶を勧めながら会話を紡いでいく流れをゆったりとした心で見守ればよいのです。

宗教空間では訪問者よりも礼拝が優先される

ウズベキスタンのモスクや霊廟、マドラサの中には、観光地である以前に、今なお現地の人々が祈りを捧げ学びを続ける場が多くあります。入場券を購入したからといって、建物のすべての部屋に自由に出入りする権利まで得られるわけではありません。礼拝の時間と重なって立ち入りが一時的に制限された場合は、静かに順番を待つか引き返すべきです。礼拝を行っている人の前を横切ってはならず、大声で話したり電話に出たりする行為も慎まなければなりません。

宗教遺跡を巡る際は、肩や膝を覆うきちんとした服装を用意しなければなりません。ウズベキスタン観光当局は、宗教的名所を訪れる際、女性の訪問者に対して肩や背中、脚を覆う服装を整えるよう勧告しています。[C003] 男性も同様に、膝上の短いズボンやノースリーブのトップスは避けるのが望ましいです。入り口で頭を覆う布

や体を隠す羽織りものを貸し出してくれる場所もありますが、個人用の薄手のスカーフをあらかじめ持ち歩いていれば、よりスムーズに出入りできます。

靴を脱いで入る空間では、足の裏が人や経典の置かれた方向を向かないよう注意して座らなければなりません。建物の敷居や墓域の境界石に腰掛ける行為も控えます。内部の写真撮影に関する案内表示が見当たらない場合は、まず管理スタッフに確認する必要があります。撮影が許可されている区域であっても、フラッシュや三脚の使用は禁止されている場合が多いです。厳かに祈りを捧げる人々の姿は華麗な建物の装飾とは明確に異なるため、同意を得ずに顔を無断でカメラに収めてはなりません。

大韓国外交部の安全案内によると、ウズベキスタンでは外国人による布教活動が法律で厳格に禁じられています。[C028] 路上で宗教書を配ったり現地の人々に改宗を勧めたりする行為は、単なるマナー違反にとどまらず法的処罰につながる可能性があります。個人的な信仰を静かに語り合うささやかな会話と組織的な布教行為は明確に区別すべきであり、法の枠組みを外れる行動は決して行ってはなりません。

写真一枚にも境界がある

活気ある市場の商人、黙々と作業する工房の職人、駆け回る子どもたち、秩序を守る軍人や警察官は、それぞれ置かれた状況がまったく異なる人々です。現地の住民の人物写真を撮る際は、カメラを手にしたまま目配せだけで済ませるのではなく、写真を撮ってもよいか明確に許可を得る必要があります。相手が手を振って拒んだなら、直ちにカメラを下ろさなければなりません。撮った写真をその場で画面に映して見せることで打ち解けることもあります。後で見せればよいと考えて同意なしに先にシャッターを切る行為が正当化されるわけではありません。

国境線周辺や検問所、軍事施設、空港の保安区域は、写真撮影が厳格に禁止されている場所です。南部テルメズー帯の川や橋を美しい風景とだけ捉えて不用意にシャッターを切ると、厄介な事態に巻き込まれる恐れがあります。国境に接したデリケートな国境施設である可能性が高いためです。現地の警察から写真を消去するよう警告を受けたり取り調べを受けたりする前に、周囲の撮影禁止標識を入念に確認し、他の人々の様子をまず見渡すべきです。

ドローンは一般的なカメラと同じように気軽に荷物へ入れてはなりません。英国外務省の最新の入国案内によると、ウズベキスタンでは許可を得ていないドローンの持ち込みと使用が原則として禁止されており、ごく例外的な場合に限って事前承認が下されます。正式な許可なくドローンを持ち込んだり飛行させたりして摘発された場合、重い罰金刑や懲役刑を科される可能性があり、機器も没収されます。[C040] 出国前に正式な許可手続きを完全に終わらせていないのであれば、スーツケースからあらかじめドローンを外しておくことが安全を守る賢明な選択です。

プロフは料理であり関係である

プロフは米と肉、ニンジンやタマネギなどの野菜、香辛料を大鍋に入れて炒め煮にする、中央アジアを代表する米料理です。地域によって使われる米の品種や油の種類、入る肉の部位やニンジンの切り方、具材を炒める順序がそれぞれ異なります。ユネスコはこうしたプロフの文化と伝統の価値を認め、2016年に人類無形文化遺産の代表一覧表に記載しました。プロフは日常の食事の場はもちろん、子どもの誕生、結婚式、新年を祝う行事、葬儀や追悼に至るまで、人の生涯を彩る重要な節目ごとに分かち合われ、社会的な絆を固く結びつける媒体としての役割を果たしています。[C031]

プロフを食堂のメニュー表に記された一皿の料理としてのみ捉えると、そこに込められた人と人との深い関係性を見落とすことになります。「カザン」と呼ばれる巨大な大釜で、何十人、何百人もの人々が共に食べるご飯を長い時間かけて丹精込めて炊き上げ、それを隣人たちと分け合う過程そのものがプロフ文化の本質です。ユネスコの記録においても、プロフを作る調理知識は家族や友人、師匠と弟子、教育機関の関係を通じて代々受け継がれていると記されています。[C031] したがって、プロフの調理法は食材を並べた一覧を超えて、共同体を共に築いていく生活の知恵なのです。

タシュケント、サマルカンド、ブハラ、フェルガナで味わうプロフは、盛り付けの佇まいや風味がそれぞれ際立って異なります。公式観光資料によると、フェルガナ盆地では赤みを帯びた貴重なデヴジラ米と丸ごとのニンニクをふんだんに使い、深い味わいを引き出します。[C042] ブハラの資料では、具材を混ぜずに層状に重ねて蒸し上げる「オシ・ソフィ」の独特な調理法が伝えられています。[C003] どの都市の料理が元祖か優劣を競うよりも、米粒の噛みごたえのある食感や太めに切られたニン

ジンの甘み、ほのかに広がる油の香りをじっくりと味わってみるほうが、食の楽しみを一層深めてくれます。

伝統的な製法で作られたプロフは油と肉がたっぷり使われており、消化するには少々重く感じられることがあります。客としての礼儀を尽くそうと、無理に一皿を平らげて胃腸を痛める必要はありません。注文の際に少なめを頼み、新鮮なトマトサラダと温かいお茶を添えれば、油っぽさを和らげてずっと快適に食事ができます。一方、ベジタリアンの旅行者であれば、ご飯から肉の塊を取り除いたとしても、釜の底で肉の出汁や動物性油脂が染み込んでいる点を心に留めておく必要があります。料理を注文する前に、調理過程でどのような食材が使われているかあらかじめ尋ねておくのが賢明です。

パン、サムサ、マンティ、ラグマンの地図

ノンとは平たく丸い形に焼き上げるウズベキスタンの伝統的なパンです。生地中央に繊細な文様を刻んだ後、タンドールと呼ばれる土窯の熱い内壁に貼り付けて焼き上げます。地域やパン屋ごとにパンの厚みや、ふっくらとした縁の香ばしくカリッとした食感が異なります。窯から取り出したばかりのノンを両手でちぎるときに立ち上る白い湯気と香ばしい匂いは、旅行者の心を温かく満たしてくれます。パンを写真に収めるだけの見世物として扱うのではなく、どんな小麦粉を使い、どんな窯で焼いたのか尋ねてみるならば、その街の人々の素朴な日常がおのずと見えてくるはずです。

サムサは、薄い生地の中に細かく刻んだ肉や玉ねぎ、あるいは甘いカボチャを詰め、窯で香ばしくパリッと焼き上げたパンです。外側が非常に熱いうえに中には濃厚な肉汁がたっぷりと詰まっており、慌てて一口目を大きく頬張ると口の中をやけどしかねません。マンティは具材をふんだんに詰めて蒸し上げた大ぶりの蒸し餃子で、ラグマンはコシのある麺に肉や野菜を炒めてのせたり、スープを合わせたりする麺料理です。シュルパは脂の浮かぶ澄んだ濃厚な肉スープとして食卓に供されます。メニューに並ぶ名前は同じでも、店ごとにだしの取り方や素材の扱いといった腕前はさまざまです。

北西部のヌクスやカラカルパクスタン自治共和国では、その土地で採れる粗粒の穀物や肉類、新鮮な乳製品で彩られた食卓が、過酷な自然を映し出す旅の地理を生き生きと物語ってくれます。南部のテルメズの厳しい暑さの中では、喉の渇きを潤す甘

い果物と温かい一杯のお茶が大きな安らぎをもたらします。肥沃なフェルガナ盆地では活気あふれる市場の豊かな青果や名品のデヴジラ米を、コーカンドではほんのり甘い伝統菓子を味わうことができます。自分だけの味覚の地図を記録するときは、インターネット上の有名店ランキングにこだわるよりも、食材がどの土地で育ち食卓まで届いたのか、その道筋をじっくり書き留めてみると旅はあっという間に深まります。

公式の観光案内資料によれば、ウズベク料理は羊肉、牛肉、馬肉とともに野菜をふんだんに使ったスープ、新鮮なサラダ、多彩な乳製品やパンをバランスよく取り入れており、カロリーとタンパク質が豊富であると紹介されています。菜食を希望する客は、店のスタッフに事前に伝えれば適切な菜食料理を案内してもらえると記されています。[C033] しかし、この案内文をどこでも完全に菜食が保証されているという意味として受け取るのは禁物です。店によって菜食という言葉を理解する基準や範囲がそれぞれ異なるためです。

アレルギーと食事の安全性

ナッツ類やゴマ、乳製品、卵、小麦粉、肉のスープなどにアレルギー反応がある場合は、該当する内容をウズベク語やロシア語で記したメモをあらかじめ紙に印刷しておく必要があります。個人的な好みで食べないという表現よりも、「この食品を食べると重体になり、病院に緊急搬送されるおそれがあります」のように危険性を明確に示す文章にしておくことで、無用な誤解を減らせます。該当する食材の写真と現地語の訳を一緒に見せれば、意思疎通はあっという間に確実になります。アレルギー症状が重い人であれば、医師から処方された常備薬を常に鞆やポケットに携帯しておくべきです。

気温の高い季節には、火を通した料理であっても常温で長時間放置されていたものであれば腹痛を引き起こしやすくなります。客で賑わう店を選び、注文を受けてから火にかけて調理されたばかりの熱い料理を選ぶほうが安全です。生野菜のサラダはどのような水で洗われたかを確認することが難しいため、胃腸の調子が優れない日や身体が疲れている日には、自ら皮を剥いて食べる果物や芯まで十分に火を通した料理を選びます。飲料水はキャップの封が切られていないミネラルウォーターを購入して飲み、すでに開栓されていたペットボトルには再び口をつけないようにします。

旅先で急に食事の量を大幅に増やすと、消化器官に不調をきたしやすくなります。油分の多いプロフや香ばしいサムサ、糖度の高い果物を1日のうちに一度にまとめて食べ過ぎないように、食事の内容を調整する必要があります。温かいお茶や清潔な水をこまめに少しずつ飲み、長時間の夜行列車に乗る前には胃に負担をかけない食べ慣れたものを軽く口にする程度にしておくのが賢明です。下痢や嘔吐が止まらない場合や、血便、高熱、重度の脱水症状が現れた場合は、ためらわずに旅行保険会社や現地の医療機関に連絡し、助けを求める必要があります。

イギリス外務省はウズベキスタンの全般的な医療環境や地域ごとの医療設備の格差について注意を促しており、現地の病院での治療費はもちろん、緊急時の患者移送まで補償する旅行保険に加入しておくことを推奨しています。[C034] 緊急時に救急車を呼ぶための現地の電話番号は103です。[C030] もし病院を受診しなければならない場合は、普段服用している薬のリストやアレルギー情報、旅行保険証券、パスポートの写しをもれなく持参する必要があります。

「安全な国」という言葉の裏にある空白

米 국무省は2026年1月、ウズベキスタンに対する渡航情報を通常の注意が必要なレベル1に指定しました。[C035] だからといって、この評価が犯罪や予期せぬ事故が一切起きないという保証になるわけではありません。イギリス外務省の資料によれば、バザールや公共交通機関のような混雑する場所でスリやバッグのひったくり事件が頻繁に発生していると案内されています。[C027] 大韓民国外交部もまた、韓国人旅行者を対象とした窃盗や詐欺、暴行被害が発生しており、滞在先での居住登録違反や各種の安全事故が継続して報告されていると明らかにしています。[C028]

混み合う市場の路地を歩くときは、リュックサックや鞆を身体の前側で背負うように持つのが安全です。パスポートと現金の入った財布は、紛失のリスクを分散させるために同じポケットにまとめて入れないようにします。見知らぬ人が衣服に異物をつけたり、前を塞いで話しかけたりして注意をそらそうとしてきた場合は、慌てることなくまず所持品の位置を素早く確認しなければなりません。オープンカフェの椅子やテーブルの上に携帯電話を無造作に置いたまま、周囲の風景を撮影するために席を離れる行為は危険です。現地の人々の温かく親切な人柄を信じる心と、自身の持ち物を自ら拔かりなく守る警戒心は、いくらでも両立させることができます。

日が暮れた後は、照明が明るく人通りのある大通りを選んで移動すべきです。道端で手を振って客引きをする無許可の自家用車に乗るよりも、空港の公式タクシー乗り場を利用するか、スマートフォンのアプリで正式に許可された車両を呼ぶほうが安全です。イギリス外務省はヤンデックス（Yandex）やマイタクシー（MyTaxi）などの配車アプリを具体例に挙げ、登録された正規の交通手段を利用するよう勧めています。[C027] 車に乗り込む前には、配車画面に表示された車両のナンバープレートと実際のナンバーが一致しているかを確認し、リアルタイムの移動ルートを同行者や家族に共有しておきます。

市街地で政治的なデモが発生していたり、大勢の群衆が集まって騒然としていたりする場所は遠ざける必要があります。イギリス外務省は、大規模な集会の現場には武装した治安要員が多数投入される可能性があるため、好奇心からであっても現場に近づかないよう警告しています。[C027] 何が起きているのか記録しようと携帯電話のカメラを構えて近づく行為は、予期せぬ危険を招くおそれがあります。その場を速やかに離れ、安全な場所へと退避することが最優先です。

パスポートと滞在登録

大韓民国の一般旅券を所持する国民は、観光目的で訪問する場合、最長30日まで査証なしで入国でき、駐韓ウズベキスタン大使館は入国日を基準としてパスポートの残存有効期間が少なくとも6か月以上残っていなければならないと案内しています。[C037] 出入国に関する規定は随時変更される可能性があるため、出国前に公式窓口を通じて再確認しておく必要があります。パスポートの表紙や査証欄が破損している場合や、過去に紛失届を出した後に見つかったパスポートである場合は、出国前に航空会社や大使館に問い合わせて出入国に支障がないか確認しておかなければ、思わぬ不都合を被ることになります。

外国人の宿泊登録手続きは滞在先の宿泊施設が代行してくれる場合がほとんどですが、登録が正常に完了したかを確認する最終的な責任は旅行者本人にあります。ウズベキスタン政府の公式な外国人滞在指針および観光案内資料によると、宿泊施設の管理者や家主は外国人宿泊客の到着後直ちに滞在登録を行うよう定められています。[C030][C033] したがって、ホテルや宿を移動するたびに紙の登録確認証を受け取るか、電子登録記録が適切に処理されているかを念入りに確認しなければなりません。

一般家庭の民泊や野外キャンプ、車中泊などは登録手続きや管轄機関が異なる場合があります。そのため、いっそうの注意が必要です。

イギリス外務省の最新の安全指針では、現地到着後3日以内に最初の登録を完了させる必要があり、別の都市に移動して滞在する場合も改めて登録を行わなければならないと説明されています。ホテルに宿泊する際は宿のスタッフがこれを代行しますが、個人宅に滞在する場合は家主がエ・メフモン（E-mehmon）電子登録システムまたは管轄の行政機関を通じて直接申請しなければなりません。[C040] 空港や国境で出国審査を受ける際、全日程の滞在証明の提示を求められることがあるため、宿泊領収書と登録証を日付順にきちんと揃えて保管しておく必要があります。インターネット上のブログに書かれた古い旅行記の休日の計算方法を鵜呑みにするより、政府機関の最新の公式案内に従うほうが確実です。

ウズベキスタンでは外国人が外出する際、常にパスポートの原本を携帯しなければならないという法的義務があり、路上で現地の警察官による職務質問を受け、身分証の提示を求められることがあるというイギリス外務省の案内もあります。[C027] パスポートの原本はファスナー付きの内ポケットや身体に密着するセキュリティポーチなどに入れて大切に保管すべきです。万が一の紛失に備えてスマートフォンやメールの受信箱にパスポートの写真ページの写しを保存しておくとう安心ですが、セキュリティの甘い公開クラウドのリンクで開いたままにしておいてはいけません。万一パスポートを紛失した場合は、速やかに最寄りの警察署に紛失届を提出し、大韓民国大使館に連絡して再発行の手続きを進める必要があります。

薬品と健康、粉塵と地震

普段服用している処方薬がある場合は、薬品名が記載された元の包装箱のまま持参し、英文の処方箋や医師の所見書を必ず携帯しなければなりません。特定の鎮痛剤成分や睡眠導入剤、向精神薬などは、入国時に税関申告や厳格な証明書類の提示を求められることがあります。イギリス外務省は、自国で処方箋なしに容易に入手できるコデイン成分を含む一般的な風邪薬でさえ、ウズベキスタンの入国審査で持込禁止品目として摘発される可能性があるかと警告しており、持込制限医薬品のリストを事前に対照し、税関の申告規定を徹底して確認するよう勧告しています。[C040] 荷物の大きさを減らそうと複数の錠剤を小さな携帯用ケースにまとめて混ぜて入れて入国する行為は、無用な疑いを招くため避けるべきです。

西部のカラカルパクスタンやホラズム州一帯では、干上がったアラル海の底から塩分や微小粉塵を大量に含んだ激しい砂嵐が吹き付け、大気の水質が急激に悪化することもあります。冬場には暖房と盆地地形の影響により、タシュケントやフェルガナ一帯の大気汚染も深刻化することがあるとイギリス外務省は指摘しています。[C034] 喘息や呼吸器系の疾患を持つ旅行者であれば、大気質測定アプリをこまめに確認し、微小粒子状物質対応のマスクや携帯用吸入器を準備するとともに、空気が濁っている日には無理な屋外活動を控えて屋内で十分休養する日程を組むべきです。

ウズベキスタンは地殻活動が活発な地震危険地帯に属しています。イギリス外務省は現地で定期的に地震の揺れが感知されていると案内しており、大韓民国外交部もまた東部地域やサマルカンド近郊における地震の危険性について注意深く説明しています。[C027][C028] したがって、ホテルや宿にチェックインした際には、非常階段の位置や建物外の空き地といった避難場所をあらかじめ把握しておく必要があります。揺れを感じたときは、割れやすいガラス窓や倒れる危険のある背の高い家具からすぐに離れ、鞆やクッションで頭を覆って保護しなければなりません。地面の揺れが収まった後に屋外へ避難する際は、閉じ込められる危険のあるエレベーターは絶対に使わず、階段を使って歩いて降ります。

助けが必要なときのダイヤル番号

ウズベキスタン政府の公式ポータルを見ると、緊急時に連絡する統合緊急番号112、火災通報101、警察への犯罪通報102、救急車の出動要請103、災害救助1050が案内されています。旅行者専用の観光案内および救助用電話番号は1173です。[C030] イギリス外務省の資料によれば、1173の観光ホットラインは年中無休で24時間運営されており、ウズベク語やロシア語だけでなく英語での相談にも対応していると説明されています。[C038] これらの緊急連絡先はスマートフォンの連絡先に登録しておき、バッテリー切れに備えて手帳や紙の日程表にもしっかりと書き留めておく心強いでしょう。

駐ウズベキスタン大韓民国大使館の事件・事故対応24時間当直電話は+998-90-029-6963です。通常の勤務時間における大使館代表電話は+998-71-252-3151から3153までであり、ソウルの外交部領事コールセンターは+82-2-3210-0404につながります。[C029] 一般的なビザの問い合わせや公証のような日常的な相談と、強盗や窃盗、暴行、交通事故のように身の危険が及ぶ緊急事案とを明確に区別し、適切な番号へ連絡する必要があります。

予期せぬ事故が起きたときは、慌てずに周囲の安全な場所へ身を移したうえで、112番や該当する緊急通報番号へ電話をかけて助けを求める必要があります。加入しておいた海外旅行保険会社にも直ちに事故の連絡を入れます。パスポートを紛失した際は、現地の警察署で発行される紛失届出証明書があつて初めて、大使館で緊急パスポートの円滑な再発給を受けることができます。クレジットカードを失くした場合は、金融機関のアプリや国際電話を通じて速やかに利用停止を申請することで、二次被害を防ぐことができます。気が動転していても記憶だけに頼らず、事案が起きた正確な日時と場所、被害状況、警察に届け出た事件受理番号をメモに几帳面に記録しておく必要があります。

旅を締めくくる最後の日

帰国を控えた最後の日には、鞆に記念品を詰め込む前に、まず重要書類から落착いて整理しなければなりません。パスポート原本と帰国用の航空券、全日程の滞在登録証、付加価値税の還付レシート、手元に残った現地通貨やカードの決済内訳を順に点検します。市場や工房で購入した伝統工芸品がウズベキスタンの文化財持ち出し禁止規定に抵触していないか、領収書や製作年代の証明書類をあらかじめ確認しておく必要があります。ドローンや持ち込み制限のある医薬品のように、税関に別途申告すべき物品が荷物に入っていないかも、今一度点検しておきます。

手元に残った現地通貨のスムがあるからといって、空港の免税店で慌てて使い切る必要はありません。市内の宿から空港までのタクシー代や、万一のフライト遅延に備えた非常用の食費をきちんと残しておく必要があります。税金の還付を申請する物品は、空港税関による現物確認を受ける前に受託手荷物として預けてしまわないよう注意します。搭乗前には航空会社のアプリを開き、出発時刻の変更の有無や手荷物の重量規定を入念に確認します。急変する国際情勢によって経由地の乗り継ぎ便や飛行ルートが変更される場合があるため、航空会社や保険会社の最新の告知事項を必ず確認するようにという2026年3月のイギリス外務省の勧告も忘れてはなりません。

[C026]

スマートフォンに収めた旅行写真をクラウドにバックアップして整理する際には、撮影位置情報がそのまま残った現地住民の顔写真を不特定多数に公開してもよいのか、いま一度慎重に思いを巡らせる必要があります。事前に同意を得ていない人物写真は、インターネット上にむやみに掲載しないのが礼儀です。大使館の緊急連絡先やパスポートの写し、航空券の予約情報が写ったスクリーンショットも個人情報流出のリスクがあるため、ソーシャルメディアに紛れ込んで投稿されないよう注意しなければなりません。旅行者が残した記録が長く留まるように、見知らぬ異邦人を温かく迎え入れてくれた現地の人々のプライバシーや安全もまた、長く尊重されるべき当然のものです。

ウズベキスタンをあとにするとき、旅行者の心に残るのは大げさな教訓ではなく、日々の瞬間に身についた素朴な姿勢です。茶杯を半分だけ満たして差し出してくれた主人の温かな心遣いを汲み取る気持ち、丸いパンを両手で丁寧にちぎって分け合った手の温もり、モスクの敷居の前で足音と声をひそめた慎ましさ、賑わう市場の路地で鞆のファスナーを閉めた落着いた警戒心がそれにあたります。温かいもてなしを受

けたからといって、守るべき礼儀や慎重さまで崩してよいわけではありません。成熟した旅行者は、相手が差し出す好意に感謝しながらも、彼らの生活の場と深い信仰を尊重し、自身の安全と書類を抜かりなく守り通します。そうした心構えで旅を終えた人は、青いタイルで輝いていた遺跡のドームだけでなく、冷めゆく茶杯に静かに温かいお茶を注ぎ足してくれた現地の人々の優しい手のぬくもりまで、長く胸に留めることになります。

参考文献

執筆および確認基準日: 2026-08-22

最新資料の検索範囲: 2026-02-22から2026-08-22まで。歴史・文化の一次資料や随時更新される公式ページについては、発行時期が古い資料や発行日の記載がない資料も併せて参照しました。

- [A001] 著者／機関: World Bank. タイトル: Uzbekistan. 発行日: 発行日未詳、随時更新の国別概要. URL: <https://www.worldbank.org/ext/en/country/uzbekistan>. 確認日: 2026-08-22.
- [A002] 著者／機関: ウズベキスタン共和国政府. タイトル: Territory. 発行日: 2025-07-15. URL: <https://gov.uz/en/pages/territory>. 確認日: 2026-08-22.
- [A003] 著者／機関: ウズベキスタン共和国国家統計委員会. タイトル: Which region has the largest population? 発行日: 2026-04-30. URL: <https://stat.uz/en/press-center/news-of-committee/68042-ajsi-udud-a-olisi-eng-k-p-5>. 確認日: 2026-08-22.
- [A004] 著者／機関: ウズベキスタン共和国国家統計委員会. タイトル: About 56 percent of the population of Uzbekistan is of working age. 発行日: 2026-06-03. URL: <https://stat.uz/en/press-center/news-of-committee/68572-zbekiston-a-olisining-arjib-56-foizi-me-natga-lajo-atli-4>. 確認日: 2026-08-22.
- [A005] 著者／機関: Navoi Mining and Metallurgical Company. タイトル: Company. 発行日: 発行日未詳、随時更新の企業概要. URL: <https://www.ngmk.uz/en/company/>. 確認日: 2026-08-22.
- [A006] 著者／機関: Navoiyuran State Enterprise. タイトル: Navoiyuran Commences Commercial Uranium Production at the Qizilkok Deposit. 発行日: 2026-04-24. URL: <https://navoiyuran.uz/en/en24042026/>. 確認日: 2026-08-22.
- [A007] 著者／機関: ウズベキスタン共和国国家生態気候変動委員会. タイトル: The Central Kyzylkum National Nature Park. 発行日: 2025-04-01. URL: <https://gov.uz/en/eco/news/view/22776>. 確認日: 2026-08-22.
- [A008] 著者／機関: ウズベキスタン共和国国家生態気候変動委員会. タイトル: Cooperation on Restoring Water and Land Ecosystems in Central Asia Gains Momentum. 発行日: 2026-04-10. URL: <https://gov.uz/en/eco/news/view/152232>. 確認日: 2026-08-22.
- [A009] 著者／機関: ウズベキスタン共和国国家統計委員会. タイトル: A conference was held dedicated to the preliminary results of the population and agricultural census. 発行日: 2026-06-30. URL: <https://stat.uz/en/press-center/news-of-committee/68979-a-oli-va-ishlo-kh-zhaligini-r-jkhatga-olish-tadbirin-ing-dastlabki-natizhalariga-ba-ishlangan-konferentsiya-tkazildi-4>. 確認日: 2026-08-22.
- [A010] 著者／機関: ウズベキスタン共和国. タイトル: Constitution of the Republic of Uzbekistan. 発行日: 2023-04-30. URL: https://constitution.uz/uploads/constitution_en.pdf. 確認日: 2026-08-22.
- [A011] 著者／機関: ウズベキスタン共和国政府. タイトル: President Shavkat Mirziyoyev: 2026 to become fundamental in developing all spheres. 発行日: 2025-12-26. URL: <https://gov.uz/en/news/view/114575>. 確認日: 2026-08-22.
- [A012] 著者／機関: UNESCO World Heritage Centre. タイトル: Silk Roads: Zarafshan-Karakum Corridor. 発行日: 2023年、世界遺産登録. URL: <https://whc.unesco.org/en/list/1675>. 確認日: 2026-08-22.

- [A013] 著者／機関: UNESCO Silk Roads Programme. タイトル: Cities along the Silk Roads. 発行日: 発行日未詳. URL: <https://en.unesco.org/silkroad/silk-road-themes/cities-silk-roads>. 確認日: 2026-08-22.
- [A014] 著者／機関: ウズベキスタン共和国大統領府. タイトル: The State Symbols. 発行日: 発行日未詳、常時提供資料. URL: https://president.uz/en/pages/view/symbols?menu_id=10. 確認日: 2026-08-22.
- [A015] 著者／機関: ウズベキスタン共和国中央銀行. タイトル: Frequently Asked Questions, What currency units were used before the introduction of the national currency sum? 発行日: 2026-08、日付未記載. URL: https://cbu.uz/en/press_center/question_answer/3809/. 確認日: 2026-08-22.
- [A016] 著者／機関: ウズベキスタン共和国中央銀行. タイトル: O'zbekiston milliy valyutasi 30 yoshda. 発行日: 2024-07-01. URL: https://cbu.uz/uz/press_center/news/1754036/. 確認日: 2026-08-22.
- [A017] 著者／機関: ウズベキスタン共和国中央銀行. タイトル: 10 sum, was in circulation until March 1, 2020. 発行日: 発行日未詳. URL: <https://cbu.uz/en/banknotes-coins/banknotes/1994/10/>. 確認日: 2026-08-22.
- [A018] 著者／機関: UNESCO World Heritage Centre. タイトル: Uzbekistan, Properties inscribed on the World Heritage List. 発行日: 随時更新、2026-07登録分反映. URL: <https://whc.unesco.org/en/statesparties/uz>. 確認日: 2026-08-22.
- [A019] 著者／機関: Smithsonian Institution, Human Origins Program. タイトル: Teshik-Tash. 発行日: 発行日未詳. URL: <https://humanorigins.si.edu/evidence/human-fossils/fossils/teshik-tash>. 確認日: 2026-08-22.
- [A020] 著者／機関: Arev Pelin Sümer ほか17名. タイトル: A Method to Analyze Low-Quality Archaic Human Genomes and its Application to the Teshik-Tash 1 Neandertal. 発行日: 2026-08-14. 資料の性質: bioRxivプレプリント論文、査読前. DOI: 10.64898/2026.08.10.743885. URL: <https://www.biorxiv.org/content/10.64898/2026.08.10.743885v1>. 確認日: 2026-08-22.
- [A021] 著者／機関: UNESCO World Heritage Centre. タイトル: Sarmishsay Petroglyphs. 発行日: 2024-02-07、暫定リスト提出日. URL: <https://whc.unesco.org/en/tentativelists/6784>. 確認日: 2026-08-22.
- [A022] 著者／機関: The British Museum. タイトル: Graeco-Bactrian, collection term. 発行日: 発行日未詳. URL: <https://www.britishmuseum.org/collection/term/x56682>. 確認日: 2026-08-22.
- [A023] 著者／機関: UNESCO World Heritage Centre. タイトル: Ancient Termiz. 発行日: 2008-01-18、暫定リスト提出日. URL: <https://whc.unesco.org/en/tentativelists/5298>. 確認日: 2026-08-22.
- [A024] 著者／機関: Ladislav Staněk, Jan Kysela, Tomáš Tencer, Peter Milo, Shapulat Shaydullaev. タイトル: Geophysical and archaeological survey of the Hellenistic period settlement Iskandar Tepa in the Bactro-Sogdian borderlands. 発行日: 2026-06. 学術誌: Journal of Archaeological Science: Reports 72, 105742. DOI: 10.1016/j.jasrep.2026.105742. URL: <https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S2352409X2600177X>. 確認日: 2026-08-22.
- [A025] 著者／機関: The Metropolitan Museum of Art. タイトル: Kushan Empire, ca. Second Century B.C.-Third Century A.D. 発行日: 2000-10. URL: <https://www.metmuseum.org/es/essays/kushan-empire-ca-second-century-b-c-third-century-a-d>. 確認日: 2026-08-22.
- [A026] 著者／機関: Étienne de la Vaissière, Encyclopaedia Iranica. タイトル: Sogdiana iii. History and Archaeology. 発行日: 2011-03-04、最終改訂 2016-11-04. URL: <https://www.iranicaonline.org/articles/sogdiana-iii-history-and-archaeology/>. 確認日: 2026-08-22.
- [A027] 著者／機関: Étienne de la Vaissière, Encyclopaedia Iranica. タイトル: Sogdian Trade. 発行日: 2004-07-20、最終改訂 2013-01-15. URL: <https://www.iranicaonline.org/articles/sogdian-trade/>. 確認日: 2026-08-22.

- [A028] 著者／機関: Richard N. Frye, Encyclopaedia Iranica. タイトル: Central Asia iii. In Pre-Islamic Times. 発行日: 1990-12-15、最終改訂 2017-12-13. URL: <https://www.iranicaonline.org/articles/central-asia-iii/>. 確認日: 2026-08-22.
- [A029] 著者／機関: Clifford Edmund Bosworth, Encyclopaedia Iranica. タイトル: Bukhara ii. From the Arab Invasions to the Mongols. 発行日: 2000-01-01、最終改訂 2013-05-06. URL: <https://www.iranicaonline.org/articles/bukhara-ii/>. 確認日: 2026-08-22.
- [A030] 著者／機関: The Metropolitan Museum of Art. タイトル: Central and North Asia, 500-1000 A.D. 発行日: 2000年より随時更新. URL: <https://82nd-and-fifth.metmuseum.org/toah/ht/06/nc.html>. 確認日: 2026-08-22.
- [A031] 著者／機関: Clifford Edmund Bosworth, Encyclopaedia Iranica. タイトル: Central Asia iv. In the Islamic Period up to the Mongols. 発行日: 1990-12-15、最終修正 2017-12-13. URL: <https://www.iranicaonline.org/articles/central-asia-iv/>. 確認日: 2026-08-22.
- [A032] 著者／機関: Clifford Edmund Bosworth, Encyclopaedia Iranica. タイトル: Khwarazmshahs iii. The Line of Anuṣṭigin. 発行日: 2009-04-20、最終修正 2012-11-14. URL: <https://www.iranicaonline.org/articles/khwarazmshah/iii-the-line-of-anustigin/>. 確認日: 2026-08-22.
- [A033] 著者／機関: David O. Morgan, Encyclopaedia Iranica. タイトル: Ṣengīz Khan. 発行日: 1990-12-15、最終修正 2013-04-01. URL: <https://www.iranicaonline.org/articles/cengiz-khan/>. 確認日: 2026-08-22.
- [A034] 著者／機関: UNESCO. タイトル: History of Civilizations of Central Asia, Volume IV, Part One, The Age of Achievement: A.D. 750 to the End of the Fifteenth Century. 発行日: 1998. URL: <https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000111664>. 確認日: 2026-08-22.
- [A035] 著者／機関: Bertold Spuler, Encyclopaedia Iranica. タイトル: Central Asia v. In the Mongol and Timurid Periods. 発行日: 1990-12-15、最終修正 2017-12-13. URL: <https://www.iranicaonline.org/articles/central-asia-v/>. 確認日: 2026-08-22.
- [A036] 著者／機関: Linda Komaroff, Suzan Yalman, The Metropolitan Museum of Art. タイトル: The Art of the Timurid Period, ca. 1370-1507. 発行日: 2002-10-01. URL: <https://www.metmuseum.org/essays/the-art-of-the-timurid-period-ca-1370-1507>. 確認日: 2026-08-22.
- [A037] 著者／機関: UNESCO World Heritage Centre. タイトル: Urban Heritage Atlas: Samarkand, Crossroad of Cultures. 発行日: 発行日不明. URL: <https://whc.unesco.org/en/urban-heritage-atlas/samarkand/>. 確認日: 2026-08-22.
- [A038] 著者／機関: UNESCO World Heritage Centre. タイトル: Ulugh Beg Observatory. 発行日: 2025. URL: <https://whc.unesco.org/document/221321>. 確認日: 2026-08-22.
- [A039] 著者／機関: UNESCO Silk Roads Programme. タイトル: Evolution of Astronomy along the Silk Roads. 発行日: 2018. URL: <https://www.unesco.org/en/articles/evolution-astronomy-along-silk-roads>. 確認日: 2026-08-22.
- [A040] 著者／機関: Yuri Bregel, Encyclopaedia Iranica. タイトル: Abu'l-Khayrids. 発行日: 2009-02-20、最終修正 2018-05-23. URL: <https://www.iranicaonline.org/articles/abul-khayrids-dynasty/>. 確認日: 2026-08-22.
- [A041] 著者／機関: Glenn E. Curtis 編, Library of Congress Federal Research Division. タイトル: Kazakhstan, Kyrgyzstan, Tajikistan, Turkmenistan, and Uzbekistan: Country Studies. 発行日: 1997. URL: https://tile.loc.gov/storage-services/master/frd/frdcstdy/ka/kazakstankyrgyzs00curt_0/kazakstankyrgyzs00curt_0.pdf. 確認日: 2026-08-22.

- [A042] 著者／機関: UNESCO. タイトル: History of Civilizations of Central Asia, Volume VI, Intellectual and Political Ferment. 発行日: 2005. URL: https://en.unesco.org/silkroad/sites/default/files/knowledge-bank-article/Vol_VI%20silk%20road_intellectual%20and%20political%20ferment.pdf. 確認日: 2026-08-22.
- [A043] 著者／機関: 黄英三, 韓国学中央研究院 韓国民族文化大百科事典. タイトル: 高麗人強制移住. 発行日: 1995、最終修正 2024-08-28. URL: <https://encykorea.aks.ac.kr/Article/E0072274>. 確認日: 2026-08-22.
- [A044] 著者／機関: ウズベキスタン共和国政府 民族関係および海外同胞委員会. タイトル: Association of Korean Cultural Centers of Uzbekistan. 発行日: 2025-08-25. URL: <https://gov.uz/en/icc/news/view/80748>. 確認日: 2026-08-22.
- [A045] 著者／機関: U.S. Geological Survey. タイトル: M 5.3, 9 km NNW of Tashkent, Uzbekistan. 発生日: 1966-04-25 UTC. URL: <https://earthquake.usgs.gov/earthquakes/eventpage/iscgem848721/executive>. 確認日: 2026-08-22.
- [A046] 著者／機関: Vakhitkhan A. Ismailov, Chiara Scaini, Sharofiddin I. Yodgorov, Doston D. Jumaev, Bekzod U. Aktamov, Shukhrat B. Avazov ほか. タイトル: Seismic risk assessment of Tashkent's residential buildings based on the 1966 earthquake scenario. 発行日: 2026-04-28. 学術誌: Scientific Reports 16, 19753. DOI: 10.1038/s41598-026-44585-3. URL: <https://doi.org/10.1038/s41598-026-44585-3>. 確認日: 2026-08-22.
- [A047] 著者／機関: ウズベキスタン共和国観光委員会. タイトル: Tashkent modernism added to the UNESCO World Heritage List. 発行日: 2026-07-29. URL: <https://gov.uz/en/uzbektourism/news/view/198921>. 確認日: 2026-08-22.
- [A048] 著者／機関: ウズベキスタン共和国青年庁. タイトル: Preparations for the 35th Anniversary of Independence and Youth Month Discussed. 発行日: 2026-06-08. URL: <https://gov.uz/en/yoshlar/news/view/175202>. 確認日: 2026-08-22.
- [A049] 著者／機関: ウズベキスタン共和国国家統計委員会. タイトル: Demographic indicators of the Republic of Uzbekistan in figures. 発行日: 2026-01-27. URL: <https://stat.uz/en/press-center/news-of-committee/66568-zb-ekiston-respublikasining-demografik-k-rsatkichlari-ra-amlarda-5>. 確認日: 2026-08-22.
- [A050] 著者／機関: UNESCO World Heritage Committee. タイトル: Decision 45 COM 8B.13, Silk Roads: Zarafshan-Karakum Corridor. 発行日: 2023. URL: <https://whc.unesco.org/en/decisions/8394/>. 確認日: 2026-08-22.
- [A051] 著者／機関: István Vásáry, Encyclopaedia Iranica. タイトル: Qarā 𐬰𐬀𐬭𐬀. 発行日: 2000-01-01、最終修正 2013-12-17. URL: <https://www.iranicaonline.org/articles/qara-ketay/>. 確認日: 2026-08-22.
- [A052] 著者／機関: ウズベキスタン共和国 Uzarchive Agency. タイトル: Toshkent zilzilasi, xalqlararo birdamlik nuqtasi nomli fotohujjatli ko'rgazma tashkil etildi. 発行日: 2026-04-17. URL: <https://gov.uz/oz/archive/news/view/154885>. 確認日: 2026-08-22.
- [B001] ウズベキスタン大統領府. "O'zbekiston - 2030 strategiyasi." 更新型政策ダッシュボード、2026年確認. <https://president.uz/oz/pages/view/strategy>
- [B002] World Bank. "Macro Poverty Outlook for Uzbekistan: April 2026." 2026-04-16. <https://documents.worldbank.org/en/publication/documents-reports/documentdetail/099857308042617534>
- [B003] International Monetary Fund, Middle East and Central Asia Department. "Republic of Uzbekistan: 2026 Article IV Consultation - Press Release; and Staff Report." IMF Country Report No. 2026/152, 2026-06-23. <https://www.imf.org/en/publications/cr/issues/2026/06/23/republic-of-uzbekistan-2026-article-iv-consultati>

on-press-release-and-staff-report-577186

- [B004] World Trade Organization. "Uzbekistan reaffirms 2026 WTO accession goal, thanks members for continuing engagement." 2026-07-27. https://www.wto.org/english/news_e/news26_e/acc_27jul26_470_e.htm
- [B005] President of the Republic of Uzbekistan. "President of Uzbekistan outlines prospects for advancing regional cooperation among the Central Asian countries and Azerbaijan." 2026-07-31. <https://www.president.uz/en/lists/view/9476>
- [B006] President of the Republic of Uzbekistan. "President reviews proposals to develop the transport and logistics system." 2026-07-01. <https://www.president.uz/en/lists/view/9370>
- [B007] Ministry of Foreign Affairs of the Republic of Uzbekistan. "On the meeting with the Ambassador of Pakistan." 2026-04-29. <https://gov.uz/en/mfa/news/view/159703>
- [B008] OSCE Office for Democratic Institutions and Human Rights. "Uzbekistan's parliamentary elections 2024: ODIHR election observation mission final report." 2025-02-27. <https://odihr.osce.org/odihr/elections/uzbekistan/586323>
- [B009] President of the Republic of Uzbekistan. "Yangi O'zbekiston yoshlari - 2030 strategiyasi amalga oshiriladi." 2026-04-20. <https://www.president.uz/oz/lists/view/9120>
- [B010] National Statistics Committee of the Republic of Uzbekistan. "Uzbekistan by the numbers, January-June 2026." 2026-07-28. <https://stat.uz/en/>
- [B011] Navoi Mining and Metallurgical Company. "NMMC Highlights 2025 Performance and Developments at Media Briefing." 2026-03-12. <https://www.ngmk.uz/en/press-center/news-and-press-releases/OAV-vakillari-NKMAJ-tomonidan-2025-yilda-amalga-oshirilgan-ishlar-bilan-tanishdi/>
- [B012] Navoiyuran State Enterprise. "Navoiyuran Commences Commercial Uranium Production at the Qizilkok Deposit." 2026-04-24. <https://navoiyuran.uz/en/en24042026/>
- [B013] Almalyk Mining and Metallurgical Complex. "MOF-3: The New Stage in Development of the Copper Industry in Uzbekistan." 2026-06-18. <https://agmk.uz/en/news/3-mis-boyitish-fabrikasi-ozbekiston-mis-sanoatining-yangi-taraqqiyot-bosqichi>
- [B014] IT Park Uzbekistan. "IT Park Uzbekistan continues to strengthen Uzbekistan's position as a global IT destination." 2026-07-18. <https://www.it-park.uz/en/itpark/news/it-park-uzbekistan-continues-to-strengthen-uzbekistan-s-position-as-a-global-it-destination>
- [B015] Government Portal of the Republic of Uzbekistan. "Digital technologies and Transport." 2026-07-24 更新. https://gov.uz/en/activity_page/digital_technology
- [B016] President of the Republic of Uzbekistan. "President of Uzbekistan discusses expanding investment partnership with the Republic of Korea." 2026-05-03. <https://president.uz/en/lists/view/9170>
- [B017] International Labour Organization. "Uzbekistan advances dialogue on care economy to promote gender equality and decent work." 2026-02-19. <https://www.ilo.org/resource/news/uzbekistan-advances-dialogue-care-economy-promote-gender-equality-and>
- [B018] UNICEF Uzbekistan. "Curriculum Reform is stepped up in Uzbekistan. Unique national Uzbekistan Curriculum aims to reach 8.8 million learners." 2026-02-26. <https://www.unicef.org/uzbekistan/en/press-releases/curriculum-reform-stepped-uzbekistan-unique-nation>

al-uzbekistan-curriculum-aims

- [B019] World Bank. "Revised Stakeholder Engagement Plan, Enhancing Self-Employment Opportunities for the Most Vulnerable Women: Promoting Social Inclusion and Self-Reliance in Uzbekistan." 2026-07-01.
<https://documents.worldbank.org/en/publication/documents-reports/documentdetail/099070126084516941>
- [B020] UNICEF Uzbekistan. "What we do." 2026年確認. <https://www.unicef.org/uzbekistan/en/what-we-do>
- [B021] Government Portal of the Republic of Uzbekistan, Forestry Agency. "Planting of desert plants has begun on the dried seabed of the Aral Sea." 2026-03-06. <https://gov.uz/en/urmon/news/view/140001>
- [B022] Government Portal of the Republic of Uzbekistan, National Committee for Ecology and Climate Change. "Priorities for the Restoration of Wetlands in the Aral Sea Region Discussed." 2026-04-13.
<https://gov.uz/en/eco/news/view/152882>
- [B023] Government Portal of the Republic of Uzbekistan, National Committee for Ecology and Climate Change. "Cooperation on Restoring Water and Land Ecosystems in Central Asia Gains Momentum." 2026-04-10.
<https://gov.uz/en/eco/news/view/152232>
- [B024] Government Portal of the Republic of Uzbekistan, Ministry of Higher Education, Science and Innovation. "SATREPS-2020: Science and Innovation for the Aral Sea Region." 2026-07-23.
<https://gov.uz/en/innovation/news/view/196829>
- [B025] President of the Republic of Uzbekistan. "President reviews measures for efficient use of water resources and mudflow waters." 2026-05-25. <https://president.uz/en/lists/view/9250>
- [B026] Government Portal of the Republic of Uzbekistan, National Committee for Ecology and Climate Change. "Uzbekistan Presented Its Achievements in Implementing Climate Commitments in Bonn." 2026-06-15.
<https://gov.uz/en/eco/news/view/178895>
- [B027] President of the Republic of Uzbekistan. "Measures to accelerate implementation of energy projects reviewed." 2026-02-23. <https://www.president.uz/en/lists/view/8963>
- [B028] UNESCO World Heritage Centre. "Tashkent Modernist Architecture. Modernity and Tradition in Central Asia." 2026. <https://whc.unesco.org/en/list/1766/>
- [B029] National Statistics Committee of the Republic of Uzbekistan. "The population of Uzbekistan has exceeded 38.2 million." 2026-01-28. <https://stat.uz/en/press-center/news-of-committee/66574-zbekiston-a-olisi-38-2-mlndan-oshdi-4>
- [B030] President of the Republic of Uzbekistan. "Proposals to improve efficiency of Tashkent Metro reviewed." 2026-05-13. <https://president.uz/en/lists/view/9201>
- [B031] Government Portal of the Republic of Uzbekistan. "Measures for the implementation of nationwide environmental projects reviewed." 2026-03-24. <https://gov.uz/en/news/view/145142>
- [B032] Government Portal of the Republic of Uzbekistan. "Progress on major investment projects in the transportation sector reviewed." 2026-06-01. <https://gov.uz/en/news/view/171208>
- [B033] Government Portal of the Republic of Uzbekistan. "Yangi Toshkent xalqaro aeroportini qurish va uni ekspluatatsiya qilish bo'yicha DXSH shartnomasi imzolandi." 2026-06-19.
<https://gov.uz/oz/news/view/181103>

- [B034] The Metropolitan Museum of Art. "Folio from the Tashkent Qur'an." 所蔵品解説、2026年確認。
<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/454661>
- [B035] UNESCO World Heritage Centre. "Samarkand - Crossroad of Cultures." 2001年登録、2026年確認。
<https://whc.unesco.org/en/list/603/>
- [B036] Smithsonian Institution, National Museum of Asian Art. "Afrasiab mural paintings." 2026年確認。
<https://sogdians.si.edu/afrasiab-mural-paintings/>
- [B037] イ・スンヒ. "サマルカンド・アフロシアブ壁画、そして韓半島とソグドの交流." 崇実史学 44, 2020, 189-221.
<https://doi.org/10.16942/ssh.2020.44.6.09>
- [B038] President of the Republic of Uzbekistan. "Measures reviewed for the development of Samarkand region's districts through specialization." 2026-06-10. <https://www.president.uz/en/lists/view/9296>
- [B039] President of the Republic of Uzbekistan. "New projects in culture and tourism reviewed." 2026-04-16.
<https://president.uz/en/lists/view/9113>
- [B040] President of the Republic of Uzbekistan. "President reviews proposals on combating desertification and implementing green city principles." 2026-07-06. <https://www.president.uz/en/lists/view/9387>
- [B041] Government Portal of the Republic of Uzbekistan. "Tourism and Culture." 2026-05-04更新。
https://gov.uz/en/activity_page/tourism
- [B042] UNESCO World Heritage Centre. "Samarkand - Crossroad of Cultures: Documents and State of Conservation." 2025年決定収録、2026年確認. <https://whc.unesco.org/en/list/603/documents/>
- [B043] 国立文化遺産研究院. "文化財庁、高句麗使節が描かれたアフロシアブ宮殿壁画保存の契機を整備." 2020-04-10.
https://www.nrich.go.kr/kor/boardView.do?bbs_idx=41909&bbscd=33&menuIdx=283
- [B045] World Bank. "Future of Government: A Call to Action." 2026-05-27セッション収録。
<https://www.worldbank.org/en/programs/futureofgovernment/future-of-government>
- [B046] Government Portal of the Republic of Uzbekistan. "Uzbekistan will reduce its greenhouse-gas emissions by 50% by 2035." 2025-11-18. <https://gov.uz/en/eco/news/view/102865>
- [B048] UNICEF Uzbekistan. "National Education Milestone: New National Curriculum launched to achieve a world-class education for about 7 million learners in the Republic of Uzbekistan." 2026-08-18.
<https://www.unicef.org/uzbekistan/en/press-releases/national-education-milestone-new-national-curriculum-launched-achieve-world-class>
- [B049] President of the Republic of Uzbekistan. "President of Uzbekistan puts forward new proposals for Uzbek-Russian cooperation." 2026-06-05. <https://www.president.uz/en/lists/view/9285>
- [B050] President of the Republic of Uzbekistan. "Presidents of Uzbekistan and Germany reaffirm commitment to deepening multifaceted partnership." 2026-06-17. <https://www.president.uz/en/lists/view/9325>
- [C001] UNESCO World Heritage Centre. Historic Centre of Bukhara. 発行日: 未表示. URL:
<https://whc.unesco.org/en/list/602/> 確認日: 2026-08-22.
- [C002] UNESCO World Heritage Committee. Decision 47 COM 7B.90, Historic Centre of Bukhara. 発行日: 2025. URL:
<https://whc.unesco.org/en/decisions/8814> 確認日: 2026-08-22.

- [C003] Uzbekistan Travel. Bukhara. 発行日: 未表示. URL: <https://uzbekistan.travel/en/i/bukhara/> 確認日: 2026-08-22.
- [C004] UNESCO World Heritage Centre. Itchan Kala. 発行日: 未表示. URL: <https://whc.unesco.org/en/list/543/> 確認日: 2026-08-22.
- [C005] UNESCO World Heritage Committee. Decision 48 COM 7B.23, Itchan Kala. 発行日: 2026. URL: <https://whc.unesco.org/en/decisions/9080/> 確認日: 2026-08-22.
- [C006] President of the Republic of Uzbekistan. A New Railway Connecting the Airport with the Urgench Railway Station Put into Operation. 発行日: 2026-08-17. URL: <https://www.president.uz/en/lists/view/9504> 確認日: 2026-08-22.
- [C007] Uzbekistan Travel. Nukus. 発行日: 未表示. URL: <https://app.uzbekistan.travel/en/i/nukus-en/> 確認日: 2026-08-22.
- [C008] Uzbekistan Travel. Muynak. 発行日: 未表示. URL: <https://uzbekistan.travel/en/i/muinak/> 確認日: 2026-08-22.
- [C009] Uzbekistan Travel. Fayaztepa Buddhist Temple Complex. 発行日: 未表示. URL: <https://uzbekistan.travel/en/o/fayaztepa-buddhist-temple-complex/> 確認日: 2026-08-22.
- [C010] UNESCO Intangible Cultural Heritage. Ceramic Arts in Uzbekistan. 発行日: 2023. URL: <https://ich.unesco.org/en/RL/ceramic-arts-in-uzbekistan-01989> 確認日: 2026-08-22.
- [C011] UNESCO Intangible Cultural Heritage. Margilan Crafts Development Centre, Safeguarding of the Atlas and Adras Making Traditional Technologies. 発行日: 2017. URL: <https://ich.unesco.org/en/BSP/margilan-crafts-development-centre-safeguarding-of-the-atlas-and-adras-making-traditional-technologies-01254> 確認日: 2026-08-22.
- [C012] UNESCO Intangible Cultural Heritage. Sericulture and Traditional Production of Silk for Weaving. 発行日: 2022. URL: <https://ich.unesco.org/en/RL/sericulture-and-traditional-production-of-silk-for-weaving-01890> 確認日: 2026-08-22.
- [C013] Uzbekistan Railways. Public Offer for the Provision of Services for the Sale of Electronic Travel Documents. 発行日: 2026-06. URL: <https://eticket.railway.uz/en/pages/public-policy> 確認日: 2026-08-22.
- [C014] Uzbekistan Railways. How to Buy E-tickets? 発行日: 未表示. URL: <https://eticket.railway.uz/en/pages/how-to-buy> 確認日: 2026-08-22.
- [C015] Uzbekistan Airways. Flight Schedule and Flight Status. 発行日: リアルタイム更新資料. URL: <https://www.uzairways.com/en/schedule> 確認日: 2026-08-22.
- [C016] Uzbekistan Airways. Uzbekistan Airways Hand Baggage Regulations. 発行日: 2026-05-15. URL: <https://www.uzairways.com/en/press-center/news/uzbekistan-airways-hand-baggage-regulations> 確認日: 2026-08-22.
- [C017] ATTO. Passengers. 発行日: 未表示. URL: <https://www.atto.uz/uz/passengers> 確認日: 2026-08-22.
- [C018] Ministry of Transport of the Republic of Uzbekistan. In All Cities, Public Transport Will Switch to a New Payment Procedure. 発行日: 2026-06-04. URL: <https://gov.uz/ru/mintrans/news/view/173234> 確認日: 2026-08-22.
- [C019] Mobiuз. Changes to the Terms of the Tourist SIM Tariff Plan. 発行日: 2026-02-04. URL: <https://mobi.uz/ru/news/2026/100005/> 確認日: 2026-08-22.

- [C020] Beeline Uzbekistan. Hello Tariff Plans for Foreign Citizens. 発行日: 未表示. URL: <https://beeline.uz/en/welcome-new> 確認日: 2026-08-22.
- [C021] Mobiuз. Mobiuз and the Tourism Committee Develop Digital Services for Foreign Tourists. 発行日: 2026-07-09. URL: <https://company.mobi.uz/en/press/2026/104043/> 確認日: 2026-08-22.
- [C022] UZIMEI. About the UZIMEI System and Registration. 発行日: 未表示. URL: <https://uzimei.uz/en/about> 確認日: 2026-08-22.
- [C023] UZCARD. UZCARD Expands Acceptance of Discover Network and Diners Club Cards in Uzbekistan with Partner Banks. 発行日: 2026-04-29. URL: <https://uzcard.uz/news/uzcard-rasshryaet-priyom-kart-discover-network-i-diners-club-v-uzbekistane-sovmestno-s-bankami-partnyorami> 確認日: 2026-08-22.
- [C024] UZCARD. Information for Users of Payment Services. 発行日: 2026-02-10. URL: <https://uzcard.uz/en/news/informatsiya-dlya-polzovatelej-platyozhnyh-servisov> 確認日: 2026-08-22.
- [C025] Uzbekistan Travel. A VAT Refund System for Foreign Citizens Has Been Introduced. 発行日: 2026-03-10. URL: <https://uzbekistan.travel/uz/o/chet-el-fuqarolariga-qqsni-qaytarish-tizimi-yolga-qoyildi/> 確認日: 2026-08-22.
- [C026] Foreign, Commonwealth and Development Office. Uzbekistan Travel Advice. 発行日: 2026-03-19更新. URL: <https://www.gov.uk/foreign-travel-advice/uzbekistan> 確認日: 2026-08-22.
- [C027] Foreign, Commonwealth and Development Office. Uzbekistan Safety and Security. 発行日: 随時更新資料. URL: <https://www.gov.uk/foreign-travel-advice/uzbekistan/safety-and-security> 確認日: 2026-08-22.
- [C028] 大韓国外交部 海外安全旅行. ウズベキスタン国別安全情報. 発行日: 随時更新資料. URL: <https://0404.go.kr/ntnSafetyInfo/168/detail> 確認日: 2026-08-22.
- [C029] 駐ウズベキスタン大韓民国大使館. 大使館連絡先と事件・事故緊急電話. 発行日: 随時更新資料. URL: https://overseas.mofa.go.kr/uz-ko/wpge/m_24310/index.do?textMode=Y 確認日: 2026-08-22.
- [C030] ウズベキスタン共和国統合政府ポータル my.gov.uz. Uzbekistan for Foreigners. 発行日: 随時更新資料. URL: <https://my.gov.uz/uz/for-foreigners> 確認日: 2026-08-22.
- [C031] UNESCO Intangible Cultural Heritage. Palov Culture and Tradition. 発行日: 2016. URL: <https://ich.unesco.org/en/RL/palov-culture-and-tradition-01166> 確認日: 2026-08-22.
- [C032] Uzbekistan Travel. Secrets of the Uzbek Tea Ceremony. 発行日: 2022-09-15. URL: <https://uzbekistan.travel/en/o/secrets-of-the-uzbek-tea-ceremony/> 確認日: 2026-08-22.
- [C033] Uzbekistan Travel. Travel Guideline. 発行日: 未表示. URL: <https://uzbekistan.travel/en/travel-guideline/> 確認日: 2026-08-22.
- [C034] Foreign, Commonwealth and Development Office. Uzbekistan Health. 発行日: 随時更新資料. URL: <https://www.gov.uk/foreign-travel-advice/uzbekistan/health> 確認日: 2026-08-22.
- [C035] U.S. Department of State. Uzbekistan Travel Advisory, Level 1: Exercise Normal Precautions. 発行日: 2026-01-26. URL: <https://travel.state.gov/en/international-travel/travel-advisories/destination.uzb.html> 確認日: 2026-08-22.
- [C036] Uzbekistan Railways. Electronic Ticket Home and Station Search. 発行日: リアルタイム更新資料. URL: <https://eticket.railway.uz/en/home> 確認日: 2026-08-22.

[C037] Embassy of the Republic of Uzbekistan in the Republic of Korea. Visa-Free Entry for Citizens of the Republic of Korea. 発行日: 未表示. URL: <https://korea.mfa.uz/page/1185> 確認日: 2026-08-22.

[C038] Foreign, Commonwealth and Development Office. Uzbekistan Getting Help. 発行日: 随時更新資料. URL: <https://www.gov.uk/foreign-travel-advice/uzbekistan/getting-help> 確認日: 2026-08-22.

[C039] UNESCO Intangible Cultural Heritage. Khorazm Dance, Lazgi. 発行日: 2019. URL: <https://ich.unesco.org/en/RL/khorazm-dance-lazgi-01364> 確認日: 2026-08-22.

[C040] Foreign, Commonwealth and Development Office. Uzbekistan Entry Requirements. 発行日: 随時更新資料. URL: <https://www.gov.uk/foreign-travel-advice/uzbekistan/entry-requirements> 確認日: 2026-08-22.

[C041] Ucell. Tourist Tariff Line. 発行日: 未表示. URL: https://ucell.uz/en/tariffs/tariffs_archive-list/turist_/80/1 確認日: 2026-08-22.

[C042] Uzbekistan Travel. Ferghana. 発行日: 未表示. URL: <https://uzbekistan.travel/en/i/ferghana/> 確認日: 2026-08-22.

青いドームの向こうのウズベキスタン

金京鎮 弁護士

© 2026 Kim Kyung-jin. All rights reserved.

無断転載・複製・再配布を禁じます。

kimkj.com

AI書庫の本を支援する



この本が役立ったと感じられたら、今後の翻訳、公開版、オープンなAI知識プロジェクトをPayPalで支援していただけます。

QRコードを読み取るか、PayPalリンクを開いてください。

<https://paypal.me/kimkjj>